
十一、四 (BLEACH)

南条武都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十一、四（BLEACH）

【作者名】

南条武都

N7565F

【あらすじ】

遠くなつた記憶は、不意に蘇る。恐怖と、感謝を伴つて。BLEACH一角と四番隊オリキヤラ連作。（自サイト掲載）

愛しや、世界 前編

遠くなつた記憶は、不意に蘇る。恐怖と、感謝を伴つて。

次の瞬間目の前には、めぢやくひやに破壊された町並みと、死体の山が広がつていた。萎えた体は動かす事も叶わず、否応なしにその光景を網膜に焼き付ける。

死体の山。ちぎれた手足、溢れ出す血、何も語らない虚ろな目。先ほどまで確かに生きていたそれらは皆動かない、ただの肉塊に変じていた。

「…………あ…………」

声にならない声が、口からこぼれた。同時に吐き氣がこみ上げてきて、体を折つて地面にはいつくばると、何もない腹の中から苦いものがせりあげ、黄色い液体があふれ出す。体をひくひくさせながら何度も吐いて、よつやかにおあつた頃、ふらつとよろけて地面に倒れた。

指一本、動かせない。頭がぼつりとして、耳鳴りがする。吐しゃ物のすっぱい臭いが鼻をふさぐ。

死。

その言葉は知らなかつたが、今日の前に、生死の境があるのは本能的にわかつっていた。恐ろしさは無かつた。もつ、苦しまなくてよいのだと思つと、かすかな喜びが心を掠めた。

今度こそ、死が訪れる。

「…………ああ…………」

僅かにもがいて、目を閉じた。闇の中は不思議な安らぎに満ちていて、暖かいように思えた。

しかし、闇はそう長く続かなかつた。

「…………なかり…………」

鈴を震わすような、やわらかい声が降つてくる。あたかもその声が、温もりをもたらしてくれるかのようだつた。冷え切つた体にじんわりと温みが染み、徐々に意識を引き上げられていく。

「……聞こえ……か？……私の声が、わかりますか？」

「……っ……」

ほんやり、と目を開く。ぶれた視界に影が映つた。暖かさが全身を覆い、何度か瞬きを繰り返していたら、影が人のそれだということがわかつてきた。大人。大人の女。黒髪を長く伸ばした、穏やかな表情の、女。

「しつかりなさい。もう、大丈夫ですよ。」

女は、光を纏つていた。やさしい微笑みは白い輝きを帯び、目がつぶれそうなほど美しく見えた。

「……あつ……」

たじろいで、逃げようと動きかけたが、女がそれを止めた。手を伸ばしてこちらの体を抱き上げ、腕の中に抱える。

「大丈夫。怖い事はもうありませんよ。今は、お休みなさい。」

先ほどとはまた違う、温もり。体を包み込む柔らかい感触は、なぜだかひどく安心させられる。息を吐いて、目を閉じた。再び闇に覆われたが、今度のそれはどこか冷たく、よそよそしかつた。

* * *

暖かい。寒くないし、痛くもない。くさい臭いもしない。むしろ、甘い匂いがする。

目を開くと、天井が目に入つた。整然と格子状に並んだ天井は見た事が無くて、何度も瞬きをする。

(どこ？)

起きあがろうと身じろぎしたが、体が重くて動かない。と、枕元で水の音がした。

「目が覚めましたか」

視線を向けると、そこには大人の女が居た。長い黒髪を編み、黒い着物に白い羽織を着たその人は、目を細めてにっこり微笑む。「気分はどうですか？ 熱は下がったようですが、どこか痛むところはありますか？」

穏やかなその声が自分に向かはれてると知つて、居心地が悪くなる。こんな風に優しく声をかけてくれる大人には今まで出会つた事がなかつたから、どう答えていいのか分からぬ。

驚くほど柔らかい布団の中でもぞもぞ動きながら、首を振ると、

女はそうですか、と言つて、こちらの額に濡れた布を置いた。「無理をしてはいけませんよ。あなたは、一週間も眠り続けていたのですから。少し、食べられますか？」

傷一つ無い白い手が、頬に触れた。しつとりした感触に驚くも、食べる、という言葉のほうに意識がいった。食べる、食べられるの？ 目で訴えると、女はまた笑みを浮かべて、

「良かつた、食欲はあるのですね。今、おかゆを持つてきますから、少しお待ちなさい」

す、と静かな所作で立ち上がり、部屋を出て行つた。その後ろ姿をぎょり、と動かした目だけで見送り、もう一度天井を見る。

（どこ。だれ）

少なくとも、自分が今まで暮らしてきた場所でない事は、確かだ。あそこはこれほど静かでも、綺麗でもなかつた。何故、自分はここに居るのだろう。記憶を辿りひとしたら、頭にずき、と強い痛みが走つて、思わず身が縮こまる。

（わかんない）

痛みに顔をしかめて、目を閉じる。する、と睡魔が忍び寄つてきて、すぐに何もかも感じなくなつた。

目が覚めたのは、食欲をそそる暖かい匂いがしたからだつた。ぱ、と目を開いて顔を動かすと、さつきの女が皿と水差しを枕元に置いたところだつた。

「あら、起きたのですね。よく眠っていたと思つたのだけれど」

女の言葉は、耳に入つてすぐに抜ける。今は、皿に目が釘付けだつた。ほかほかと白い湯気をたてるそれには、白い飯がつやつやと光輝いて盛られている。ぐう、と腹が鳴つた。盛大なその音に、女は皿を丸くした後、小さく笑つた。

「ふふ。では、食べましようか」

さじで飯をすくつて、ふー、ふー、と息を吹きかけて、じちらの口に添えてくる。白い飯はするり、と口の中に入ってきた。ほとんど瞬まことに飲むと、暖かく甘い味がじんわり、喉を通りしていくのが分かる。

「……」

もつと食べたい。そう思つてさじに噛み付いたら、女は「慌てないで。急いで食べる」と、お腹がびっくりしてしまいますよ」と、口に運んでくれた。少しづつだったので物足りなく感じたが、皿が空になる頃には、腹もくちくなつた。

「これをお飲みなさい。お薬ですから、楽になりますよ」

女は水差しをこぢらの口にくわえさせた。何日かぶりに飲む水は、しかしあの街で飲んでいたそれとは違い、冷たく、甘く、少し苦い、不思議な味がする。

「こくこく」と飲み干すと、体全体がぽかぽか暖かくなつて、先ほどの急速な睡魔とは違う、緩慢な眠りが忍び寄つてくるのが分かる。

「……ゆつくり、お眠りなさい。次に目が覚めた時には、もつと良くなつていますよ」

女は水差しを置いて、頭を撫でてきた。素直に頷いて皿を閉じると、これまで感じた事がないほど優しい眠りが、押し寄せてきた。

女の言つ通り、眠りから覚めるたびに、体の具合はどんどん良くなつていった。目覚めてから一週間後には起きあがれるようになり、食事も普通に取れるようになった。

女は、卯ノ花 烈と言つた。ここがあの街ではなく、瀬靈廷とい

「うどいにある部屋だ、という事も教えてもらつた。

「あなたの名前は、何というのですか？」

「そう尋ねられて、ゆきね、と答える。

誰がつけたのか知らない、記憶の片隅に残っていた、自分の名前。あの街では、おい、とか、こひ、とか、そこの、とか、そんな風にしか呼ばれなかつたから、名前なんて忘れていた。意味があるとも思つていなかつた。

けれど、烈と呼んで欲しいと言つた女は、にっこり笑つて、

「そう。雪音、ですか。良い名前ですね。あなたは、雪を見た事がありますか？」

……無いのですね。それならば、今度見せてあげましょ。雪は空から降り注いで、広い大地を一面、純白に染め上げて、それは美しいものです。あなたの名前は、とても綺麗な名前なのですよ」そういつて頭を撫でてくれた。綺麗、なんて言われた事がなかつたから、雪音は俯いた。どうしたのですか、と聞かれ、

「……わかんない。」とば、いえない

拙い口調で言つ。話をしている内に、雪音のきこひなに言葉の意味をくみ取るようになつていた烈は、顔をのぞき込んできた。

「ほめられた時、どういつて良いか、分からぬといつ事ですか？」

「う」

頷く。

「そのよつな時は、いつ聞えれば良いのですよ。」 ありがと、と

「あ……あり? ……」

「ありがと。相手の気持ちを受け入れ、感謝する言葉です。言つてご覧なさい」

「あ……ありが、と?」

「そう。良く出来ましたね」

烈は嬉しそうに顔をほこりませせて、雪音の顔を手で包み込んだ。弾けられた綿の服のよつに滑らかな手は、とまどつを覚えるほどに温かかった。

総隊長の執務室に、墨の匂いが漂つ。書類にわざりと筆を滑らせながら、山本元柳斎重國はそれで、と問うた。

「あの子供の様子はどうじや、卯ノ花」

報告を終えた卯ノ花は、わずかに目線を下げた。

「酷く衰弱しています。まだ幼いものですから、あの場で何が起きたか聞き出さには、時間が必要となりましよう」

死に満ちた街の中で唯一見つけた、あの子供。発見した際、血にまみれ怯えきった様子から、いとけない瞳でさぞ恐ろしいものを目撃したに違いない。そう思つと、哀れで胸がしめつけられるような思いがする。

「出来うるのならば」

これが許されるのがどうか、分からぬ。だが言わなければ後悔するだらう。卯ノ花は山本と視線を合わせ、穏やかに言った。

「出来うるのならば、わたくしは、あの子を預かりたいと思つています。少なくとも、日常生活を送れるようになるまでは」

「ふむ」

山本は顎鬚をじりじりと噛つた。考え込む様子でしばらく黙り込んだ後、よからう、と頷ぐ。

「世話はおぬしに任せせる。時間がかかるてもかまわん。今回の事態について、少しでも聞き出すように。向しる、あの子供は唯一の田撃者じやからの」

「……はい」

卯ノ花は静かに頭を垂れた。その時が、まだ先である事に少しほつとして。

* * *

子供の名は、雪音と言った。

言葉がたどたどしく、大人を見るといつも怯えた目をして逃げようとするから、あの街ではよほど酷い暮らしをしていたのだろう。やせこけ、あちこちに暴力の跡を残した体も哀れで、治療に当たっている間、卯ノ花は涙がこぼれるのを禁じ得なかつた。そしてつきつきで看病しようと決意し、隊舎にある卯ノ花の自室で起臥させ、隊長職の傍ら、根気よく世話を続けた。

その献身的な介護のためか、最初の内は目を合わせる事無く、ただひたすら怯えていた雪音は、徐々に緊張を解していった。身体がすっかり回復した頃には、卯ノ花の後をどこへでもついて行くようになるほどに、なついた。

一度部屋の外に出ると雪音は、その目に映るもの全てが物珍しいのか、瞳を大きく開いて、きょろきょろと落ちつきなく辺りを見、興味のあるものには躊躇いなく手を伸ばした。

しかし誰かに話しかけられると、さつと卯ノ花の後ろに隠れてしまう。

卯ノ花はそんな雪音へ常に優しく暖かい言葉をかけ、その手をとつて導き、夜は添い寝をして寝付くまで子守歌を歌つた。

卯ノ花は子供を持つた事は無い。だが、もし自分の子がいれば、こんな風なのだろうと思えたから、自然、愛着がわいた。

だから雪音を預かり、一年が経過した頃、そろそろ事の真相を聞きたいと総隊長から催促された際には、胸がつぶれそうな思いで、彼女を伴い、執務室を訪れた。

「おつおつ、雪音よ。この間よりもまた、美人になったの」

雪音を前にした山本は、護廷十三隊の総隊長というよりは、孫を可愛がる祖父のようだつた。田尻をさげて微笑み、あめ玉を雪音の手に握らせる。

「ありがとう、山本おじいちゃん。これ、好き。甘くておいしい」

雪音は恥ずかしそうに、しかしあはつきりした口調で答えた。その

可愛らしい様子に、山本はますます笑み崩れた。

しかし、来賓室へ卯ノ花と共に招き入れ、給仕が茶と菓子を差し出して下がつてから、山本はすぐに本題を切り出した。

「それでどうじゅ、卯ノ花。雪音はあの時の事をなんぞ、語つたかの？ 以前は話そつとすると、頭が痛くなる、といつておつたが」

卯ノ花は顔を曇らせた。

「いいえ。ですが時折、夢を見てこるので、うなされて跳ね起きる事があります。言葉に出して言はしませんが、おそらく、少しずつは思い出しているのでしょうか？」

「そうか」

山本は、無心にあめ玉をしゃぶる雪音を見て、目を細めた。少し間を置いたのは、山本もまた、あの時の惨事をこの幼子の胸に蘇らせる事が哀れと思ったからだ。

しかし総隊長は雪音の顔をのぞき込むと、穏やかな、それでいて拒絶することを許さない強さで語りかけた。

「雪音。一つお主に聞きたい事があるんじゅ」

「？」

真剣な様子に何事かと、顔をあげる雪音。

「お主が生まれ育つた、あの街 むへいがじ骸鴉の事を、聞きたい」

「…」

雪音の顔がこわばる。問いを拒むように、小さな手が卯ノ花の羽織を握りしめた。山本はそれを見て、穏和に微笑む。

「うむ、思い出すのは怖からう。辛からう。じゅが、わしらはあの街で、いつたい何が起きたのかを知らねばならぬ。なぜあのような惨状となつたのか、知らねばならぬ。それを知つておるのは、雪音、お主だけじゅ」

雪音の華奢な身体が震え始める。

「ほんの少しでも良い。お主があの時何を見たか 語つてはくれぬか。お主の言葉だけが、唯一の手がかりなのじゅ」

「……」

「雪音」

言葉を失つたかのよつに、雪音の脣だけが動く。卯ノ花はその背をそつと撫でて、名を呼んだ。雪音は卯ノ花の顔を見上げ、泣きそうな表情でしがみついてきた。

「……て」

肩に手を回した卯ノ花に、鼓動の音が伝わつてくるほど動搖しながら、雪音が小さく呟く。身を乗り出して耳を傾ける山本の目を、怯える小動物のように落ちつきない瞳で見つめ返しながら、

「手が、ぶつた」

震える言葉を、紡ぎ出した。

手が、ぶつた。壺、落ちた。地面、濡れた。手、ぶつた。何度も、ぶつた。白。黒。気持ちわるい。お腹、けられた。吐いた。頭、ふまた。赤い。痛い。

耳がきーんとなつた。音。たくさん、音。さつきより、いたい。すごくいたい。頭われる。耳いたい。じめん、ゆれる。

あつい。お湯みたいにあつい。音。どくどく。耳こわれる。かわく。見えない。白とくる。たくさん、ひと。おなじひと、なんにんも。こえ。こえ。知らないこえ。ゆれる。ぜんぶゆれる。じめん、われた。

じめん、われた。ゆれた。こえ。おおきこえ。おとな、さけんだ。しる。ひかり。くる。ぜんぶみえない。きこえない。まつしる。ぜんぶまつしる。ぜんぶ。ぜんぶ、ぜんぶ……

「……雪音！」

不意に雪音の身体が痙攣したかと思うと、床に落ちた。がくがく震える身体がど、と大きくのけぞる。驚いて伸びた卯ノ花の手が、雪音の身体に触れるより前に、

「バシッ！」

大きな破裂音をたてて弾かれる。

「！」

卯ノ花は目を見張った。

白田を向き、えびぞりになりながら痙攣する少女は、不意に喉の奥から笑い声をしぶりだした。気が触れたように明るいその笑いと共に、目に見えるほど濃密な靈圧がど、と噴き出した。

靈圧は一度もがくように小さくなつた後、渦を巻いて部屋の中に吹き荒れた。烈風を伴つた靈圧で卓や椅子が弾き飛ばされ、窓ガラスが粉々に砕け散る。

「総隊長！」

吹き付ける靈圧に押されながら卯ノ花が叫んだ時には、山本はすでに行動していた。

「縛道の三十一、過墮天！」

裂帛の氣合いと共に紡ぎ出された白色の巨大な光が、吹き荒れる靈圧の上にのしかかつた。一時、光と靈圧の力は拮抗してきしみ、耳障りな甲高い音を奏でたが、しかしその瞬間光が靈圧を飲み込み、破裂し、降り注いだ。

「雪音……！」

まぶしさに目を半ば閉じながら、卯ノ花は名を呼ぶ。

光の雨の中、体を丸めた少女は、床の上でひくひく蠢く。卯ノ花はとつさに駆け寄つて、脈をとり、口元に手をあて、まぶたをめくつた。

「卯ノ花、どうじや。加減はしたが」

山本もそのそばに膝をついて、雪音をのぞき込む。卯ノ花は、ほとと息をついた。手をかざして治癒の光を注ぎながら、

「大丈夫。気絶しているだけです」

「そうか」

山本も音の無いため息を吐いて、それから部屋の中を見渡した。

整然と片付けられていた部屋はいまや見る影もなかつた。卓や椅子は半ばひしやげてひっくり返り、壺は碎けて飛び散り、ずたずたに裂けた壁掛けがぶらんとぶら下がり、書類は散らばつて、枠の弾

けとんだ窓からひらひら飛んでいく。

「コレクションの和食器が」とくひび割れているのを見て、山本がむう、と思わず肩を落とした時、

「総隊長、これは……何事ですか？！」

騒ぎを聞きつけた副隊長の雀部長次郎が、貴賓室に飛び込んできた。惨状に驚いて足を止めるのに山本が向き直り、

「不測の事態じゃ、騒ぎにするな。急ぎにこを片付けい」

ぴしゃり、と疑問を受け付けずに言い放つたので、雀部は背筋を伸ばして「はっ」と応えた。そして、使用人を呼ぶため、足早に去る。それを見送った山本は、卯ノ花の腕に抱かれた雪音を見下ろした。先ほどまでりんごのように頬を赤らめ、嬉しそうに飴をしゃぶっていた幼子は、紙のように真っ白な顔色で、目を閉じたまま、ぶるぶる震えている。

「卯ノ花」

呼びかけに顔を上げた卯ノ花の表情は固い。

「雪音の力、お主は知つておつたか」

「……いいえ。多少の靈力を持ち合わせているのは承知しておりますが、まさかこのような……」

「わしも気づかなんだ。先の力、自身の魂魄さえ壊しかねぬほどの大きさ。しかも、まだ靈圧は上がるぞ見た」

「…………はい」

卯ノ花はぎゅ、と雪音を抱きしめる。珍しく恐れを含んだその表情は、おそれく山本と同じ可能性を考えてるのだろうと思つ。山本は、しゅ、と髭をしごいた。うつすらと目を開き、

「卯ノ花、空軋の件。かくくへい技術開発局と協力して、至急調査を進めよ。

……極秘にの」

優しく聞こえるほど穏やかな声で言つと、卯ノ花はハツと顔をあげ、それから頷いた。雪音を抱く手に、震えるほどの力を込めて。

愛しあ、世界 後編（後書き）

「」までもお読みいただいて有り難い「」ました！作者の南条です。これはBLEACHの十一番隊三席・斑目一角と、四番隊のオリジナルキャラ・鑑原雪音を主人公にしたラブコメ＆シリアルなお話です。

一話完結の長編連作ですので、基本的にどこから読んでも楽しめると思いますが、ぜひこのお話から順に、二人がどう出会い、どう関わっていくのかを見ていただきたいと思います。（この二人以外の死神も頻繁に顔を出します）

元のお話は自サイト「南通つ」(<http://member.s2.jcocom.home.ne.jp/south45/>)にて連載中です。

まだ完結しておらず、間の話が抜けている部分もありますが、先が気になる方はそちらを「」覗ください。ちなみに現在掲載中の作品の内、後半のほうは甘かゆい感じの展開です（笑）

では、今後もよろしくおつきあこべださこませ。

田の前に紙と筆、硯が並んだ卓を置かれ、雪音は田を瞬いた。おず、と顔を上げて卯ノ花を見ると、彼女は普段通り穏やかな表情で、「今日からお勉強を始めましょう、雪音」

そう宣言する。聞きなれない単語に、雪音は顔をしかめた。「べん、きょう？」

「ええ。あなたの知らない事を知るためにね」

「知らない事を、知る」

「そうです。さ、その本を開いて御覧なさい」

言われるまま、恐る恐る冊子をめくつてみると、そこには大きな文字と小さな文字が様々に書かれている。

「それは練習用の教本です。挿し当たつては、まず文字の勉強から始めましょう」

「もじ……」

雪音はまじまじ、と本を見つめる。文字、というものがある」と、人がそれを使って物事を表現することは知っていたが、一見不規則な記号の羅列は、雪音には到底理解できなかつた。誰も教えてくれなかつたからだ。

「もじ……べんきょう、したら、読める?」

問いかけると、卯ノ花はいつものようにこつこつ微笑んで、頷いた。

「利発なあなたなら、きっとすぐ読めるようになりますよ。そうすればきっと、新しい世界が開けるでしょう」

そうして始まった勉強は、時に卯ノ花、時に四番隊の死神、時に卯ノ花家の使用者と相手を変えながら進められていった。

最初は紙を全て墨だけにして、文字とも絵ともつかないものを書いていた雪音だったが、しかしあがて手本と見まじうばかりの文

字を書くよつになり、それに伴い話す言葉からもぞわいちなさが取れていった。

かな全てを読み書きできるよつになった後は、漢字の読み書きと並行して本の読み取りが行われ、雪音の識字教育は順調に進行していった。

これまで知り得なかつた世界に踏み込んだ雪音は、周囲が驚くほどの熱意を持つて、読書にのめりこんだ。外見の年齢が十を過ぎる頃には、書庫にこもつて一日本を読みふけるほどになつた。

そんなある日、教本の中で意味が分からぬところを質問しようとして、卯ノ花の執務室を訪れた雪音は、部屋の主が居ないと知つて、がっかり肩を落とした。

(烈、どこにいるのかな。隊舎にいないのかな)

分からぬことはそのままにしないよつに、と教え込まれていたから、雪音は四番隊隊舎の中を歩き回つて探した。しかしここを探しても、卯ノ花は居ない。

(どうしよう。胡蝶も居ないし)

四番隊の死神で、勉強を教えてくれる女性も姿が見えないから、雪音は途方に暮れた。そこいらにいる人を捕まえて、卯ノ花や胡蝶の居所を聞くか、いつそその人に意味を尋ねてみるか、と考えたところで、

「卯ノ花隊長！」

わ、という叫び声が外から窓を通りて飛び込んできた。

「！？」

驚いて窓枠に飛びつくと、下に妙な生き物が地面に寝そべつているのが見えた。

いや、寝そべつているのではない、からだがひらべつたぐ、尾をひょろりと伸ばしたそれは、図鑑で見たエイにそっくりだつた。エイは「ふり、と喉？を膨らませると、口の中から唾液と一緒に人間を吐き出した。

「あ……胡蝶！」

中から出てきたのは胡蝶だった。真っ白な顔色で、服にはべつたりと重たい赤がにじんでいる。きつく目を閉じている様を見て、雪音は昔見た死体の山を思い出した。

「……っ」

足元から震え上がるような冷気が昇つてくる錯覚を覚えたが、その時胡蝶が目を開いて、大きく咳き込んだ。

「大丈夫ですか？」胡蝶

その胡蝶の脇に、卯ノ花がしゃがみこんで声をかける。

胡蝶が何と答えたのかまでは聞こえなかつたが、多分大丈夫とか何とか、そういう事を言つたのだろう。卯ノ花はそうですか、と頷いて、エイの方にす、と鞄を差し出した。

と、エイは不意にぐにゅりと形をゆがませ、餅のように柔らかく変じながら、鞄の中へと吸い込まれてしまう。その巨体がすべて収まつた時には、鞄の先には刀の柄が現れていた。

「解毒と治療はしましたが、貧血が酷いようです。すぐに病室へ運びなさい」

卯ノ花は鞄についた紐を肩にかけると、集まつてきた隊員にきびきびと指示を飛ばす。雪音はハツとして窓から離れると、玄関へと駆けた。

ばたばたと慌しく足音を立てて、卯ノ花の元にたどり着く。厳しい表情で死神達と言葉を交わしていた卯ノ花は、雪音に気がつくと、軽く眉根を寄せた。

「雪音、そんなに騒々しくしてはいけませんよ。廊下は静かに」

「う、うん、ごめんなさい。あの、胡蝶、胡蝶はどうしたの？」

謝りながら問いかけたら、卯ノ花はふつと表情を和らげて、

「胡蝶は任務の最中に、傷を負つたのです。命に大事ありませんから、心配はいりませんよ」

安心させるように言つた。そしてすぐまた表情を改め、指示を待つている隊員に顔を向ける。

「私はこれから報告に行かねばなりませんから、後は任せましたよ

「はっ！ 行つてらっしゃいませ！」

「雪音、皆の邪魔にならないようにね」

一言残して、卯ノ花は羽織を翻し、颯爽と歩いていく。頭を下げてそれを送った隊員は、

「……卯ノ花隊長はやつぱりすこいなあ」

独り言のように言いながら、体を起こす。

「え？ 何が？」

やや呆気に取られたまま問いかけると、隊員は胡蝶を指で示した。「いや、彼女は虚の毒にやられてね。少しの傷でも命取りになる猛毒で、これまで何人もの隊員がそれにやられてしまったんだが、卯ノ花隊長のおかげで助かったんだ。もし隊長が同行されてなかつたら、俺達の小隊は全滅してたよ」

「全滅……」

「本当に今回は、命拾いしたな。あの方がいらっしゃるからこそ、俺達も安心して前線に立てるつてもんだよ」

「そ、なんだ……」

心底感服した様子の隊員から、担架に乗せられて運ばれていく胡蝶へ視線を移す。横たわった胡蝶の顔は相変わらず白いが、しかし傷一つなくしつかりした呼吸を繰り返している。

「……」

雪音はぎゅ、と本を抱きしめた。道の先を行く卯ノ花の姿はもう見えなくなっている。

* * *

「烈……様」

「はい？」

夜。膳を前に食事をしていた時、不意に雪音が呟いたので、烈は目を上げた。視線が合つと、雪音は、はにかむよつて唇を噛んで、「へ、変？ 烈様、つていうの

「いいえ、変ではありませんけれど、急にどうしたのですか？」

雪音はこれまでずっと卯ノ花を烈、と呼び捨てにしてきた。それは卯ノ花を軽んじているのではなく、敬称を知らぬ故で、身内同然なのだからよからうと、卯ノ花も注意せずにいた。

それが突然様付けをされれば、何があつたのかと気になるのは当然だ。雪音はもじもじ、と煮物を箸でいじつて、

「今日、胡蝶が死にそうになつたところを、烈……様が助けたって聞いたの。

あそこにいた人が命拾いしたつて言つてて、有り難う……感謝、してて。

それつて、人を死ななく出来るのつて、凄いなつて雪音も思つた。だから、凄い人にはけーい、敬意をはらわなきやいけないって本にも書いてあつたから、烈様、なの

「……そうですか」

一生懸命に己の心の動きを語る雪音の姿はいじましくて、しかし、「人を死ななく出来る」という不自然な表現が気にかかつて、卯ノ花は曇つた微笑を浮かべた。

無惨に滅びた街から救い出してから、数年。

保護した当初は虚ろな表情しか見せなかつた雪音は今、普通の子供と同じように、くるくる表情を変えながら、自分の言葉で好きな事を語れるようになつた。

しかし言葉を交わしていると時折、あの街にあつた死の濶が、まだ雪音の底に残つてゐる事を感じるときがある。今の言葉とてそうだ。

雪音にとつて、人とは生きているか、死んでいるかではない。

死んでいるか、いないか、その一つのみしかないのだ。

まだこれほど幼いのに、少女の瞳は常に死へ向いている。その心から死の影を払い、心底から明るく笑えるようになるには、どれだけの時間が必要となるのだろう。その事が哀れで、悲しい気持ちにさせられて、卯ノ花はそつと目を伏せる。その時、

「……烈様、雪音もしたいな」

「……と雪音が呟いた。自分の考えに没頭していた卯ノ花が、え、と顔を上げると、雪音はおずおずとした上田遣いでこちらを見ている。

「雪音も烈様みたいに、人を死ななく出来るように、したいな。どうすれば出来るの？ あの、でつかいエイみたいのがあればいいの？ 烈様、どうやってあのエイ捕まえたの？」

遠慮がちだが、十分好奇心に満ちた声で問い合わせられ、卯ノ花はくすりと笑った。

「いいえ、捕まえたのではありませんよ。あれは私の斬魄刀が形を変えたもので、人を癒す能力があります」

「ざんぱくど、……それって、死神のみんなが持ってる刀、だよね」

「ええ、そうです」

「なら雪音、死神になる」

「……え？ 何ですって？」

不意の宣言に、卯ノ花は面食らった。冗談かその場の勢いか、と思つたが、雪音はぎゅ、と拳を握りしめて、

「雪音、烈様みたいになりたい。烈様は死神だから、死神になつたら、雪音も人死ななく出来るようになるよね」

「それは……いえ、雪音、それは向き不向きというものがありますし、そもそも死神とはどういったものか、分かっているのですか？」

「知ってるよ。死神はソウル・ソサエティと現世にある魂魄の量を、均等に保つ調整者で、現世に行って整の靈をこっちに送つたり、虚を倒したりするんでしょ」

「そう、ですけれど」

教本をそつくり暗唱したような、いや、實際暗唱しているのどう、正しい死神の定義をすらすら述べられて、卯ノ花はますます困惑する。

雪音を死神にしよう、等という事は考えた事も無かつた。

何はともあれ、雪音をまず落ち着いた生活になじませる事が第一

だつたし、死神の仕事は大小の差こそあれ、危険を伴つ。このか弱い少女には、到底合わない仕事だらう。

しかし、言葉にした事で余計に意志堅固となつたのか、雪音は大きな瞳を更に大きくして、

「雪音、死神になる。それでね、今日みたいに胡蝶が怪我したら、雪音が死ななくしてあげる。そうしたらきっと、胡蝶はありがとうつて言つてくれるの。死なないでいてくれるの。

だから烈様、いいよね？ 雪音、死神になつてもいいよね？」

「雪音……」

きらきら輝くような笑顔でそう問いかけてきたので、卯ノ花は言葉を失つた。

雪音はこれまで見た事が無いほど楽しそうに、死神になつたらどんな事をするか、夢中になつて話している。

叶うかどうかも分からぬ将来の夢を語る様は、しかし普通の子供と寸分違わぬ無邪氣さで、見ているとぽつ、と胸が温かくなるような気がしてきた。

「……そうですね」

箸を置いた卯ノ花は、まっすぐにこちらを見上げるつぶらな瞳を見つめ返し、思う。

叶う、叶わないは問題ではない。この子が願いを持ち、それがこの子の生きる糧となるのなら。

「良いでしょ、雪音。死神になりたいと言つのであれば、今日からもつともつと、たくさんのお勉強をしましょ。死神になるために知らなければならぬ事は、たくさんありますからね」

卯ノ花はにっこり微笑んで、そう言つた。すると雪音はぱっと顔を輝かせて、うん、と頷く。

「雪音、絶対、烈様みたいな死神になるの。絶対、絶対に！」

世界へ、一歩（後書き）

「じこまでお読みいただいて、有り難うございました」作者の南条です。

物を知らない雪音がなぜ死神にならひつと迷つたのか、その理由のお話です。

まだ子供っぽく控えめではありますが、世界を知る手段を得て、引っ越し込み思案だつた少女はかわり始めました。

最新作は自サイト「南通り」(<http://member.s2.jcmm.ne.jp/south45/>)にて連載中です

輝くもの

「烈様。折り入つて、ご相談があります」

「まあ、何かしら。そんなに畏まつて」

背筋を伸ばして正座し、改まつた様子で口火を切つた雪音に、生け花を楽しんでいた卯ノ花は視線を向けた。

真央靈術院入学を目指し、日々勉学に励む雪音は、年頃の少女の面差しながら、最近とみに大人びた振る舞いをするようになつてきた。

それは護廷十三隊の隊長を務める卯ノ花への尊敬から発するものではあつたが、幼い頃から彼女を育ててきた卯ノ花にとつて、雪音の成長は嬉しくもあり、またこそばゆくも感じられて、つい微笑んでしまう。

その微笑につられたのか、少し肩の力を落とした雪音は、先ほどよりは少し柔らかい口調で言う。

「私に靈圧のコントロール方法と、靈圧を抑圧する鬼道を教えてもらえませんか」

「あら」

卯ノ花は、微かに眉根を寄せた。

「そういう事はまだ早いのではありませんか？ 鬼道は今理論を勉強しているところでしょう。靈圧を操作する鬼道は、今のあなたには難しいと思います。それに学院に入れば、きちんと授業で学べますよ」

諭すように言つたが、雪音は首を振る。

「勿論それは承知しています。ですが烈様もご存知の通り、私の靈圧はきわめて不安定で、烈様に縛道をかけてもらわなければ、暴走してしまいます。これでは、いつ靈圧が制御不能になるかと不安です。

今までは、いつまでも烈様のお手を煩わせる事になりますし、

ましてや死神になる事など叶わないでしょう」「

雪音は手をついて、頭を下げた。

「ですから、私は自分で、靈圧の制御が出来るようになりたいのです。お忙しいのは承知しております、ですがどうか、ご教授下さい、烈様」

「……困りましたね」

剣山に花を挿して、卯ノ花はため息をもらした。

雪音が、自身の靈圧を制御したいと思う気持ちは分かる。しかしだからといって、卯ノ花自ら、コントロール方法や縛道を教える時間がない。

このとこ大型虚の出現が相次ぎ、戦闘で出た負傷者がひつきりなしに救護詰所にやつてくる。今日は久しぶりの休暇を取つて家政を仕切つたが、明日からまた詰所にこもらなければならない。とても、雪音の勉強を手伝つてやる暇は無い。どうすべきか。

すつと身を後ろに引いて、生け花の全体のバランスを見ながら考えていた卯ノ花は、そうですね、と静かに言葉を紡いだ。

「では、技術開発局の局長にご相談してみてはどうでしょう」

「局長に？ 何故ですか？」

思いがけない人物に、顔を上げた雪音は目を丸くする。挿した杜若を引き抜き、茎を少し切りながら、卯ノ花は答えた。

「あなたの靈圧は、あなた自身の意思一つでは、制御できない性質のもののように私には思えます。

それを自身の思う通りにしたいと望むのであれば、まず、あなたの靈圧をコントロールするための助けとなるものが必要なものではないのでしょうか」

「それは、どういったもので……」

「私には分かりません。しかし局長は以前より魂魄の研究を熱心になさっていますから、おそらくソウル・ソサエティで最も私達の構造 霊力、靈圧の何たるかをご存知だと思うのです。

靈圧制御の一助となるものは、あるかもしれませんし、無いかも

しれません。どちらにしてもやついた事は、私などよつも局長の方がお詳しいはずです。

ですから、局長のところへ行つて御覧なさい。何かしら、手がかりが見つかるかもしれませんよ

「……」

しばらく考へ込むように黙つた後、雪音はハイ、と答えて、再度平伏した。

「ではこれから、技術開発局の浦原局長のところへ参ります。ご休憩中のところ、お邪魔して申し訳ありませんでした」

「いいのよ、雪音。あまり恐まらないで頂戴。よそよそしくされる」と、寂しくなつてしまふわ

あくまでも堅苦しい様子にそつ言つと、雪音は体を起こした。

「だつて、もう子供ではないのだから、けじめはつけないといけないでしょ? 今までたし、本当に失礼な事ばかりしていただから。きちんとしなきゃ、と思って」

卯ノ花はふ、と手を細めて笑つた。

「あなたは良い子ですよ。だから一人でいる時くらいは、気を楽にして頂戴な。そうでなければとても寛げないわ」

「……はい。有難うござります」「ひひ」

頼んだ先から言葉が改まったので、卯ノ花が叱責するふつをする

と、雪音は恥ずかしそうに肩をすくめて、

「ありがとう、烈様」

そう言い直して、微笑んだ。

* * *

「おや、雪音さん、いらっしゃい。どちらがいらっしゃる。今お茶出しま

すよ

「はあ、お構いなく」

すんなり隊長室の中へ招き入れられ、雪音は恐縮しながら座布団に腰を下ろした。

技術開発局局長、および十一番隊隊長という立場にありながら、浦原喜助という男はいつも腰が低く、卯ノ花の養い子でしかない雪音を自ら歓待してくれる。

ちやぶ台の上に湯飲みと茶菓子を並べ、よつよじしょ、と腰を下ろした浦原は、

「それで、今日はボクに何の御用ですか？ わざわざ隊舎に訪ねてくれるなんて、珍しいですね」

「ずずーっと茶をすすりながら尋ねてくる。

「あの……」

雪音は少し躊躇つた。浦原は自分の事情をとうに知つていて、これまでも卯ノ花と共に雪音の面倒をあれこれ見てくれたのだが、面と向かつて話す機会はなかなか無かつた。

相手は何もかも知つているとは言え、さほど親しいわけでもない浦原に話すには、気が進まない。

「口もつていると、浦原はとんでもない事を言い出した。
「もしかして好きな口でも出来ました？」

「は？」

顔をあげたら、浦原はバンッと扇子を開いて、ビロから出したのが紙吹雪を舞い散らせ、

「そういう事ならボクに任せて下せりよ。何が入用ですか、睡眠薬・媚薬・疲労薬、じ要望にお答えして何でも作りますよ」

「ち、違いますよ！ 何言つてるんですか、浦原局長！」

焦つて否定すると、浦原は扇子を閉じ、

「やだなあ、冗談つスよ冗談

「……局長……」

バチーン、とわざとらしくウインクをしてきたので、雪音は脱力してしまつ。相変わらず、何が本氣で何が冗談なのか分からぬだ。

「そうじゃなくて、今日伺ったのは、あたしの靈圧のことなんです」「氣を取り直して、雪音は自分の用件を語った。はいはい、と相槌をうつて話を聞いた浦原は、つむりとした顎を撫でて視線を上向かせる。

「ふむ、靈圧を安定させるものつスか。そりやあ、ある事はあるつスよ」

「えつ、本当ですか！？」

つい身を乗り出してしまう。

「ボクも色々研究してますからね、靈圧を制限する装置つてのは、試作段階ですけど、あります」

「じゃあ、その装置を」

浦原は宥めるように手で制して、

「まあ、そう急がないで。ただね、雪音さんには、それを使えないんじやないかと思うんですよ」

「ど、どうしてですか？」

「雪音さんの場合、一度籠が外れると一気に靈圧が跳ね上がって、一緒に意識が飛んじゃうでしょ？」

制御装置つて言つても、ある程度は靈圧を同調してもらわなきゃなりませんから。使う本人が自我喪失状態じや、役に立ちませんよ」「そつ……なんですか……」

希望が見えたと思ったのに、あつさつ打ち碎かれて、雪音はがつくりした。しかし浦原は大丈夫、とぱたぱた手で仰いでみせた。

「卯ノ花さんはいい所ついてますよ。要素つていうのはすなわち、雪音さんの靈圧と波長の合つものを見つければ良いって事なんですよ」「波長の合つもの？」

「そーつス。靈圧には人それぞれ固有の波長があつて、それと同様の波長を持つものなら共鳴して、靈圧を何倍にも高めたり、逆に抑圧したりする、要するに靈圧をコントロールする事が出来るんス。さつき行つた制御装置も、基本はこれと同じです。もっと汎用的に使えるように、改良はしてるんスけどね」

「はあ……」

「難しいことは良く分からぬが、要するにそれさえあれば、問題は解決らしい。」

「じゃあ、あたしの靈圧と波長が合つものって、何ですか？」

尋ねてみると、浦原はパチン、と手を合わせた。

「それは試してみなきやあ分からぬいつス。もしこれから雪音さんに時間があるなら、ちょっとボクと実験室に行きませんか？」

* * *

職務を終えた卯ノ花は、まっすぐ技術開発局へ足を向けた。そこで雪音と浦原が、靈圧を制御する要素を探す実験をしている、と連絡を受けていたからだ。

「失礼します」

「いらっしゃい、卯ノ花隊長。お早いお着きで」ところ狭いと物が並ぶ実験室へ足を踏み入れると、椅子に座つて足を組んだ浦原が穏やかに声をあげた。

「お世話になります、浦原隊長。雪音は……」

「あつちつスよ。今良いところつス」

頭を軽く下げながら問つと、浦原は手で奥を示した。そちらへ顔を向け、卯ノ花は驚きに目を見張る。

複雑な線で構成された陣の中央に、雪音は居た。外界と隔絶された円の中、靈圧が結界の壁を撫でて青白い放電光と破裂音を立てながらのたうつているが、それは以前暴走した時と比べて、格段に弱いものになつていて。

「何か、見つかったのですか？」

膝をつき、脂汗を浮かべる雪音を見つめながら問つと、そーつスね、と浦原はのんきに言つた。

「色々試してはみたんですけどね、雪音さんと一番相性良い要素はどうやら銀みたいつス

「銀？」

言われてみれば、雪音は細い棒のよつたものを握り締めている。「金属つてのは、元々靈圧との共鳴率が高い物質なんですよ。液体から固体まで、あれこれしましたけど、あそこまで雪音さんの靈圧に共鳴できたのは、銀だけっス」

雪音が棒を両手で掴み、ぐ、と力を入れると、雪音の外に放出される靈圧が更に弱まった。

チリチリチリチリ、と空気をくすぐるような細かな音が響き、光り輝く棒が振動し始める。

浦原は背もたれから身を起こし、雪音に声をかけた。

「雪音さん、そこまで行つたのなら上等ですよ。ためしに、鬼道かけてみます?」

「え……どう……?」

集中しているせいか、雪音は言葉を切れ切れに発した。僅かにこちらを向いたその視線を受け止め、卯ノ花は一步前に出て、

「私の言葉を復唱なさい、雪音」

す、と手を差し伸べる。雪音はぎこちなく頷いて、卯ノ花の声に続いて鬼道の言葉を紡いだ。

「戒、搖るがす世界を掌握し、押しつぶし、新たなる一を爆ぜろ……縛道の三十一、過墜天！」

「バシッ!!」

「うつ!!」

一際大きな音を立てて、結界が揺らめく。白光に目を焼かれそうになつて、手をかざし光を避けた卯ノ花が、次にまぶたを上げた時、雪音は床に倒れていた。

「雪音!!」

ひく、と痙攣する様に、あの時の光景が蘇つた。浦原が結界を解くのももどかしく、卯ノ花は雪音のもとに駆け寄り、抱き起こす。雪音は額にびつしょり汗をかき、青ざめた顔で激しく息を継いだ。

「雪音、大丈夫ですか?」

冷たい体にぞつとして、癒しの力を注ぎうと手をかざしかけた卯ノ花だったが、しかし雪音は大丈夫です、と首を振った。乱れた息を整えようと、大きく深呼吸を繰り返す。

「どうつスか、雪音さん。気分のほうは」

その前にしゃがんだ浦原が顔を覗き込むと、雪音は力なく顎をあげ、

「……いい、です。これ、今、あたしが、鬼道で、靈圧、おさえてるんです、よね」

「そーつスよ。いや大したもんスねー、卯ノ花さんの支援があつたとはいえ、三十一番の縛道を使えるとは、鬼道の才能あるつスよ、

雪音さん」

「あ、りが……と……」

褒められた雪音は弱々しく微笑むと、そのまますつと意識を失つた。

雪音の靈圧は今、低い状態で制御され、安定した状態にある。それを感じ取った卯ノ花はその体を抱えなおし、ほう、と息を吐いた。浦原に頭を下げる。

「ご助力有難うございます、浦原隊長。これでこの子も少しは安心して、生活する事が出来るでしょう」

浦原はいーつスよ、と軽く言つた。目じりが下がった瞳をすう、と細めて、

「死神になりたいなら、こんなとこりでへたばつてちや話にならないつスからね。大変なのはこれからつスよ」

口を横に引いてにつ、と笑う。卯ノ花は呼吸が安らいだ雪音を見下ろし、

「そうですね。……その通りです」

穏やかに咳いて、雪音の額に張り付いた髪を払つてやつた。

輝くもの（後書き）

はじめでお読みいただいて、有り難うございましたー作者の南条です。

今回は靈圧絡みで浦原隊長が登場です。最初に書いた時点では、現世のテンションそのままの浦原さんだったのですが、過去話を参考に抑え気味になりました。扇子はその名残です。

靈圧の相性云々は適当にゴテツチあげたので、あまりつっこまないであげてください。浦原さんが開発中の靈圧を制限する装置は、隊長格に使用する限定靈印の装置です。

最新作は自サイト「南通つ」(<http://member.s2.jcом.home.ne.jp/south45/>)にて連載中です

繋がり、結び

時を経て、春。一度の不合格の後、雪音は真央靈術院に入学した。そこでこれまで自身が知らなかつた事を学ぶ楽しみ、また、得た知識を実際に活用することの喜びは例えようのない幸福で、雪音は寝る間も惜しむほど熱心に、勉学に勤しむ日々を送つていた。

* * *

「……では、今日はここまで。次回レポート提出を忘れないように」
鐘と同時に講師が教本を伏せると、それまで静まりかえっていた教室が、わあ、と息を吹き返す。生徒達がばらばら出て行く中、最前列に座つて、黒板の内容を写していた雪音は、

「……よし、つと」

ノートを閉じて立ち上がつた。次の講義は隣の棟の教室だから、早く移動しなければならない。急ぎ鞄に本を詰めて立ち上がり、教室を出て歩き出す。が、

「……あつ」

びくつと立ち止まつた。廊下の向こうからやつてきた三人の少年達が、雪音の姿を見て顔をしかめ、ついて、冷ややかに笑つてみせたのだ。

彼らは雪音に近づいてくると、進路を阻むように取り囲んだ。顔をのぞき込んで侮蔑に満ちた口調で、

「何だ、まだ居たのか、お前」

「とつぐの昔に退学したと思つたのに。さすが流魂街の奴は、しぶといよな。神経が図太いつていうか」

「おいおい、そう言うなよ。何しろこいつは卯ノ花様に拾われたんだから、れっきとした貴族様なんだぜ。俺たちと同じ、な」

「……」

鞄を抱えて、雪音は身を引いた。

真央靈術院に入学してから知った事だが、この学院は貴族出身の子弟が圧倒的に多い。

学院の門戸は広く開かれていて、靈力の素養があつて入学試験に合格すれば、出自を問わず入学することが出来る。

しかし建前はどうあれ、貴族と平民の間には歴然とした溝が存在し、流魂街出身者はそれと知られると、影でいじめを受けることがある。

「そうだったな。うまくやったよな、卯ノ花様にどうやって取り入ったんだか」

「そりゃあれだろ、土下座して飯食わせてくれつて泣きついたんだろ」

「卯ノ花様はお優しいからなあ、野良犬でも放つておけなかつたんだな」

同期生のこの三人は、雪音ことつてそういう相手だった。

何故か知らないが、こちらの素性をある程度知っているらしく、顔を合わせるたびに雪音をこき下ろし、実習などで組む時があれば、わざと雪音に失敗させるなどの嫌がらせをしてくるのだ。

雪音はぐ、と唇をかみしめて俯いた。

面罵されるのは、慣れている。じつとこらえていれば、いつかそれが過ぎ去つていく事は分かつていた。しかしそれを反抗と受け取つたのか、少年の一人が雪音に近づいてきて、どん、と肩を押した。

「何シカトこいてんだよ、お前。何とか言えよ」

「あつ……」

押されたせいで鞄が手から滑り、床に落ちた。口をきちんと締めていなかつたので、どしゃ、と中身が散らばる。慌てて拾おうとしたが、

「どんくさいな、何やつてんだよ。床が汚れるじゃないか」

少年が邪魔をするように、荷物をぐちゃぐちゃとかき回した。その手が紙をひょいと拾い上げ、

「あん？ 進路希望書じやないか」

「あつ！」

取り戻そうとしても、少年は立ち上がり、雪音の手に届かない高さまで持つていいてしまつ。

「か、返してつ……」

「へーえ、護廷十三隊……ああ？ おい、見てみるよ、これ

「どれどれ」

「……おこおい、四番隊希望つてー マジかよー！」

紙を覗き込んだ少年達の間で、ビツ、と笑いが上がる。

「？」

あからざまな嘲笑に、雪音は困惑つて眉根を寄せた。紙を持った少年は顔を歪めて、冷ややかに笑つた。

「四番隊をわざわざ希望する奴なんて、普通いないぜ」

「ど、して」

「どうして？ 何だよ、知らないのかよお前。四番隊はな、護廷十三隊で一番弱い連中がいくところなんだぜ。靈力がない、虚一匹殺せない、雑用しか脳のないおちこぼればっかりだもんな」

「な……」

違う。

否定の言葉を口にしようとして、しかし息が喉に詰まつた。

四番隊の力がどれだけ、人々の救いになつてているかも知らないのか。蝴蝶や烈の顔が頭をよぎり、カツと体が熱くなる。

「ま、でもそうだよな。卯ノ花様の引きがなきやお前なんか、護廷十三隊にも入れやしないだる」

違う。

烈のひいきなど無い。

「入隊しても四番隊しか入るといろしか無いよな。流魂街のおちこぼれはひ」

腹の底から沸き起つる熱いものが何なのか分からぬまま、拳を固める。

「……そつ。それにお前、めぢやくぢや靈圧低いしな。能無しの吹き溜まりがお似合いだよ」

……違うー

「……あ、あ、あああああああー！」

次の瞬間、雪音は少年に飛びかかっていた。

* * *

「……や、やめなさいー！」

不意に後ろから衝撃が来た。背中から腕が回つて身体を拘束し、ぐん、と引っ張られる。

「つ

雪音は反射的に暴れたが、足が床を離れたので、我に返つた。後ろから羽交い絞めにされ、しかも空中に浮かんでいる。ぎょっとして振り返ると、見知らぬ少女が、困った顔をしながら雪音を抱え込んでいた。

「はなつ、離して……」

「だ、駄目、喧嘩なんて駄目よあなた、落ち着いてつ

じたばたしたが、この少女は雪音よりもずっと背が高くて、力も強かつた。拘束から抜け出そうともがきながら、雪音は廊下を見下ろす。そこには鼻から血を流した少年が座り込んでいた。

ペ、と口から血を吐き出し、怒りの形相で少年がよろりと立ち上がりつた。仲間がもうやめろよ、と止める手を振り払つて、

「てつ……めえ、野良犬のくせに、何しやがる……ー」

「あつ、駄目ー！」

少女の制止も聞かず、少年は羽交い締めにされた雪音の胸ぐらを掴み、拳を振り上げる。が、

「そこまでになさい」

「ー？」

凛、とした声が、その動きを縫い止めた。いつの間にか、少年の拳に細い手が重なり、ゆっくりと下に下ろされる。

「誰だ！」

殺氣だつた少年が振り返った先には、女性が立っていた。黒髪を頭の後ろでまとめ、整然とした空気を身に纏つたその女性は、端正な顔に厳しい表情を浮かべて、少年を抑えている。

「あつ……都先輩」

雪音を押さえていた少女が呟くのが聞こえた。都と呼ばれた女性はちらりとこちらへ視線を向け、

「虎徹さん、その子を下ろしてあげなさい」

穏やかな口調で促すのに従つて、少女は雪音を地面に下ろした。その手が離れた途端、

「つ」

雪音は足から崩れ落ちるようにして廊下に膝をつく。雪音もまた、少年にあちこち殴られたらしい。重たい痛みがどつと襲い掛かってきて、萎えた足は体を支える事が出来ず、細かに震えて少しもいう事を聞かない。拳はあまりにも強く握りしめたせいか、固く結んだまま聞く事が出来ず、あちこちすりむけてじんじん痛んだ。

「……廊下で喧嘩なんて、何事かしら。原因は？」

都は両者を見比べた。しかし雪音は答えるどころではなく、自分の体を抱きしめてうずくまるだけだった。弱つたその様子にかえつて勢いづいたのか、少年は鼻血をぬぐいながら、

「俺は何もしてないのに、こいつが突然殴りかかってきたんです！」

悪いのはそいつだ！」

声を裏返して叫び、雪音に指をつきつける。頭に響くその声に、雪音は違うと言い返したかったが、全身をかけめぐる痛みで声が出ない。都は雪音を見下ろし、

「……」

思案するように眉根を寄せた。と、

「あの……都先輩。それ、違うと思います」

おずおず、とした声が割り込んできた。

(え?)

不意の言葉に驚いて、雪音が顔を上げると、先ほど雪音を押さえつけていた少女が広い肩をすばめて、「私、そこでたまたま見ていたんですけど……この人たちが一方的に、この子を悪く言つたから、それでこの子が怒っちゃって、こんな喧嘩になっちゃつたんです」

訥々と主張する。思ひがけない非難に、顔を腫らした少年は息を飲み、

「な、何言つてんだお前！ こんな野良犬に味方する氣かよ… こいつが悪いんだ、俺にこんな怪我させたんだ、とつとつ退学処分にすればいいんだ！」

逆上して、廊下の端にまで聞こえそうなほど絶叫し始める。何事か、と周囲に人が集まり始めたので、都は顔をしかめて、「分かつたわ。確かに取つ組み合いの喧嘩を始めたのは、彼女が先だつたよね。でも、それはあなた達にも十分非があるのでないかしら」

少年の腕を取り、他の二人へも視線を送つた。

「ひとまず保健室へ行きましょう。話は治療が終わつてから聞いてあげますから。

……皆さん、早く次の授業へ向かいなさい。見世物ではありませんよ」

都は人垣に向かつて手を振つて解散を命じ、雪音の方を振り返つた。田が合つと、労わるような優しい表情で微笑み、

「虎徹さん。彼女を連れてきてあげて下さい」

雪音の脇に立つ背の高い少女へ言つ。

「は、はいっ！ 分かりました！」

少女はハツと背筋を伸ばして返事をし、少年を連れて歩き出した

都を見送つた後、雪音のそばに膝をついた。

「大丈夫？ あなた」

「……っ」

辛うじて頷いたが、立ち上がる事も出来ないのが分かつたのか、「無理しないでいいわよ。鞄は私が持つから、ほら、肩貸して？」

少女は高い背を折って、雪音の体を支えて立たせてくれた。見知らぬ人に触れられるのは苦手なので、雪音は体を強張らせて「いいっ……」と断ろうとしたが、か細い声だったので聞こえなかつたらしい、少女はそのまま歩き出してしまつ。

「酷かつたわね、さつきの。の人たち、何であんな事言つのかしら。あなたは何もしてないのに」

「……」

そんな事は知らない。だが、もし理由があるとすれば、多分自分にあるのだろうと思つ。

彼らのいう事はまちがつていなかつた。自分は確かに汚泥のよくな街で育つた野良犬で、烈が同情で手を差し伸べてくれなければ、こんなに明るく綺麗な場所にいられるはずがなかつたのだから。

しかし少女はそんな雪音の気持ちなど気づく事なく、

「もしかしたら、あれかしら。あなたをやっかんでるのかもしけないわね」

ふと思いついたように言つた。

「……やっかん……？」

やっかんで。嫉妬、という意味だつたか。言葉を頭の中で変換して、雪音は首をかしげた。何故、彼らが自分に嫉妬する必要があるのだろう。

少女は雪音が首を傾げるのを見て、ふふ、と息を漏らした。

「だつてこの間の試験、あなた一番取つたでしよう？ それも一番と圧倒的に差をつけてたもの、頭が良くて羨ましいと思う人がいてもおかしくないわよ」

「……そ、なんだ」

授業は楽しいし、良い点を取ると、烈がいつも言葉を尽くして褒めてくれる。それが嬉しい、期待に応えようと一生懸命勉強して

いたのだが、それで人に嫉妬されるなんて、考えもしなかった。

そういえば、彼らがいつも増して絡んでくるのは、試験の後だつた気がする、と思い起こしてみると、少女が「ひかりの顔を覗き込んできた。

「な、……なに？」

突然近くに顔が来たのにびっくりして、雪音は顔をひいた。少女は「あつ、『』、ごめんね」と謝つて、

「あのね、知らないかもしれないけど私、結構あなたと同じ講義を取つてゐる。先生に指された時もすらすら答えるから、すごいなあつていつも思つてて」

ばつが悪そうに顔をしかめる。

「それで、『ひめんね、聞くつもりなかつたんだけど、さつき進路希望の話聞こえてきちゃつて。四番隊、入りたいのね』

「……う、うん」

自分ではそんな事考えもしなかつたが、周囲の目から見た四番隊はおちこぼれ集団なのかと思うと、胸の奥が痛くなる。眉間にしわを寄せた雪音に、少女はにこりと笑つた。

「あのね、実は私も四番隊の入隊を希望してゐる」

「……え？」

「私は先頭切つて戦う事より、人の手助けのほうが性に合つてて、能力的にも、治癒の方が向いてるみたいだから。

でも四番隊つて、さつきの人たちが言つてたみたいに、護廷十三隊の中で最弱だつて陰口叩かれてるらしくて……でも、だからあなたも四番隊を目指してゐるつて聞いて、嬉しかつたの。

四番隊に入りたいのは、私だけじゃないんだつて思つて。それで

「……」

そこまで話して、少女はあ、と口を手で覆つた。顔を赤くする。

「『』、ごめんなさい、勝手にべらべら喋つちゃつて。私の志望動機なんて、どうでもいいわよね」

「……ううん」

雪音は小さく首を振った。四番隊をけなされたショックは未だ大きかつたが、自分以外にも四番隊を志望している人がいるという事は嬉しかった。自然、顔がほころぶ。すると少女はこちらの顔を窺うように、

「あの、もしよかつたら……友達に、なつてもらえないかな？ 私、知り合いも居なくて、ちょっと心細かつたの。あなたと一緒に勉強出来たら、嬉しいんだけど……」

遠慮がちに申し出てくる。

友達。

その言葉に、今度は雪音が赤くなつた。今まで大人の中にはかりいて、同じ年頃の友達など、いたことが無かつた。こんなに優しそうな少女なら、出自の卑しい自分でも構つてもらえるかもしれない。そばにいる事を、許してくれるかもしれない。

「う……うん、有り難う。友達、嬉しい」

じきじきしているせいできこちない片言で了承すると、少女はぱあっと顔一杯に笑みを浮かべた。

「良かつた！ ジヤあ改めて、私は虎徹勇音よ」

「あたしは……卯ノ花。卯ノ花雪音。えつと……宜しくお願ひします……いたつ！」

「ペこ」と頭を下げたら、肩に痛みが走つた。

「きやつ、大丈夫？！」「めんね、保健室すぐそこだから、頑張つてね」

勇音は励ましの言葉をかけながら、雪音を抱え直した。しつかりと自分の身体を支えてくれる少女の腕の温もりを感じながら、雪音はうん、と小さく頷いた。

初めて出来た、友達。

その言葉が、痛む身体さえ癒してくれるように思えて、不思議と心が和んだ。

繋がり、結び（後書き）

「」までお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

今回のお友達ができた！というお話です。周囲が大人ばかりの環境で育つってきたので、初めての同年代の友達が出来たので、相当嬉しかったようです。また、あこがれの人になる都さんも出てきています。この方、海燕さんと結婚する前の旧姓が分からないので、名前を呼ぶ時は気を遣います（笑）

男子に突っかかるつていくあたりは、後年出てくる勝ち気さが若干顔を出しています……

最新作は自サイト「南通り」（<http://member.s2.jc.com.home.ne.jp/south45/>）にて連載中です

着物を胸に抱いて走る。田指すは、あの人とのこと。

「み、や、い、さーん！……！」

天にも届けどばかりに名を呼ぶと、彼女は足を止めて、じりじりを振り返つた。ああ、と顔が柔らかくゆるむ。

「雪音。どうしたの、そんなに慌てて」

「あのひ……あのー」

雪音は、や、と都の前で足を止めて、弾む息を整える。そして、ば、と着物を前につきだした。

「護廷十三隊、入隊試験受かりました！ 明日から、都さんと同僚ですっ！」

「あら」

都は雪音の勢いに目を丸くした後、

「そう、とうとう受けたのね。おめでとう、雪音」

ふわりと笑う。しかし、

「いつになつたら通るのかと思つていたけれどね。鬼道実技、すれすれだつたんですつて？」

にこにこしながらつゝこまれ、雪音は思わず、う、と舌葉に詰まつた。

「だ、だつて苦手なんですもん、鬼道……。でも、ちやーんと受けましたよー！」

「そうね、良く頑張りました」

そう言つながら、雪音の頭をよしよし、と撫でてくれる。雪音は喜びで胸がはち切れそうになつて、真新しい死霸装を抱えてにやついていると、

「何だ、誰かと思えば雪音じやねえか」

ひょい、とぼさぼさ頭の男が話に入ってきた。

「志波さん。居たんですか？」

「ああ？ 何だオメー、その言いぐせは」

まるで田に入らなかつたので率直に言つたら、相手は不機嫌そうに口を尖らせた。

「つーか、その志波さんつてのやめろよ。俺といこいつ、びつち呼んでるんだか、わかりやしねえ。海燕でいい」

そう言つて都と自分を指さすので、今度は雪音が口を尖らせる。「えー、そんな事ないですよ、都さんは都さん、つて呼ぶし。つていうか都さん、何でこんなと結婚したんですかー？ 都さんなら、もつと素敵な人といったたたた！……」

話をしている最中に頭を掴まれ、つい悲鳴をあげた。海燕は据わった目で睨み付けてきて、

「こんなのとは何だ、ええじら？ オメーな、うちの隊に配属されたら覚悟しやがれ。上官に対する口の利き方つーもんを、徹底的に仕込んでやるからな」

ぎりぎり、と締め上げられる。

「痛い痛い痛い！ 都さんつ、助けて！ 暴力男に殺される！」

雪音が助けを求めるが、都はくすくす笑つて、海燕の手に触れた。「それくらいにしてあげなさいな。悪気は無いんだから」

「お前な、都、こいつに甘すきるんだよ。後輩なら、もつときつちりがつちり教育しどけよ」

雪音は手が離れた頭を押さえて、べ、と舌を出す。

「ふーんだ、志波さんと違つて、都さんは優しいんですよ。それにあたしは十三番隊じゃなくて、四番隊に配属なんですよ。志波さんなんかの下で働いたりしませーん」

「なつまいきな奴だな……」

苦虫をかみつぶしたような顔の海燕。都はまた笑う。

「念願の四番隊に入れたのね」

言われて、雪音は満面の笑みで大きく頷く。

「烈様つて優しそうに見えて厳しいから、能力が無ければうちの隊

には入れませんよ、って仰ってたんですよ。でもあたし、絶対四番隊いくつて決めてたから、入隊出来てすっごく嬉しいです！ 都さんと同じ隊になれないのは残念だけど

「ふふ。希望が叶って、良かつたわね」

都是雪音の顔をのぞき込んで、笑った。

「では、明日から頑張ってね、卯ノ花隊員。あなたの活躍を楽しみにしているわよ」

海燕は雪音の頭をくしゃくしゃ、と撫でて、笑った。

「あんまりはしゃいで、ドジるんじゃねーぞ？ 怪我したら診かせてやるからよ」

穏やかな笑みと、陽気な笑み。一人の性格は全く違うのに、どこの似通つたその微笑みが向けられている事が嬉しくて、

「はー！」

雪音は死霸装を抱きしめて、笑った。

歓喜の日（後書き）

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

憧れの二人に入隊の日報告。短いですが、三人の関係性を書き出す事が出来たので満足です。

最新作は自サイト「南通り」(<http://members2.jcом.home.ne.jp/south45/>)にて連載中です

出会いは人生を変える。

出会いによって、あたしは生きる意味を教えられた。

出会いによって、あたしは暖かく優しい思いやりを教えられた。出会いによって、あたしは闇ではなく、光に目を向けられるようになつた。

そして、あの日。

あたしは、全てを変える、運命の出会いを果たす。

* * *

風が吹いて、窓の外に干した敷布をはたはたとなびかせる。今日は良い天氣だ。これならたまっていた洗い物も、すぐ乾くだらう。

「そこの山、持つててくれる？ 全部洗っちゃうから」

包帯を消毒液につけて洗いながらあたしが言つと、

「は、はいっ。これですね」

後輩の友実君は、つみあがつた包帯の籠をよいしょと持ち上げた。そのままこっちに来ようとして、前が見えないものだからよたよたと頼りなく左右に揺れてしまつ。

「ちょっと、それ床にぶちまけないでね」

今にも転びそうでひやひやしながら声をかけた時、廊下の向こうから慌しい足音が聞こえてきた。

「？」

「すいぶん急いでる、何だうと入口に手をやつたら、十二班の沖若君がどたどたと走りすぎ、すぐに止まって引き返してきた。

「か、鑑原さん、いらっしゃでしたか！ すみません、ちょっと来ていただけませんか！？」

「え、何？ 急患？ 班長はどうしたの？」

息せき切つた様子に驚いて、問う。

今の時間なら、救護担当は十一班が詰めているので、一度によほどの人数が運び込まれない限り、手は足りていいはずだ。もし下位隊員に手が終えないほどの重症なら、十一班の班長席官が呼ばれる。わざわざ担当時間外のあたしを探しに来る必要なんて、無いはずなのに。

そう思つたのに、彼は妙に慌てた様子で、

「今つ、急患で運び込まれてきた患者がつ、受付で暴れていて、班長殴られて氣絶しちやつて……僕達だけじゃ、とても抑えられないんですつ。鑑原さんに来ていただきないと、怪我人増えますつ」

「あ、暴れる!/? だつて、その人急患なんですね?」

友実君がぎよつとする。急患で運ばれてくるような怪我人や病人が、詰所で暴れるなんてこと、普通は考えられないから、そりや驚くだらう。

だけどそういう事がままあるのが、護廷十三隊の救護詰所で、そういう事によく引っ張り出されるのも、なぜかあたしなのだ。

「ああ、そう……」

他に男手もあるつてのに、何であたしが。思いつきりげんなりしながら、あたしは仕方なく立ち上がつた。

「分かつた、今行くわ」

急かす十一班の子を案内に部屋を出て行こうとして、後ろを振り返る。友実君が、あたしの後をついてこうとしていたので、手で止めた。

「友実君はそのまま、包帯洗つて、干しておいて。あたしは、あっちの手伝い行くから

「え、あつ、は、はい!」

沖若君の後を、というより途中で追い抜かして、廊下を走る。その先の受付へと近づくほど大きくなつていくとよめき、悲鳴、怒声。ああああ、何かよっぽどの大事になつてゐるっぽい。

あたしはだんつ、と部屋に踏み込んだ。そして、

「…………何これ…………」

踏み込んだ途端、田の前に広がる光景にめまいを覚えた。部屋の中央に、ぼろぼろの着物をまとい、全身血まみれになつて暴れてる男がいた。

「お、落ち着いてくださいー！ これから処置を、処置をしますからー！」

その動きを止めようとしがみつく連中をひきつては投げ、ひきつては投げて、周囲に四番隊隊員の屍（氣絶中）を積み上げ、「離せ、馬鹿野郎！ 僕あ、まだ負けてねえんだ！」

腹の底に響くような怒声で、男が吼えた。その声と同時に靈圧が衝撃となつて噴き出し、あたしの隣で息を切らしていた沖若君がヒツ、と悲鳴をあげる。

見るからに重傷を負つてはいるのに、刃物みたいな鋭い靈圧。なるほど、これじゃあ、靈圧の低い下位隊員が圧倒されてしまうのも仕方ない。

「あれ、何番隊の誰？」

びり、とこめかみの辺りに感じた震えに顔をしかめながらあたしが聞くと、ぶるぶる震える沖若君が「じゅ、十一番隊の、斑目さんです」と答える。

その答えに、ひき、と更に顔がひきつった。ああもう、十一番隊つて、ほんとにあほばっかりなんだから！ 何でこいつ、面倒ばかり引き起こすか！

あたしは怒りを抑えようと努力しながら、ずんずん男に近づいていった。

「一角、駄目だよ暴れちゃ！」

斑目の腕を掴んで宥めているのは、こっちも見覚えの無い男だつた。優男然としてるけど、暴れて外に出て行こうとする斑目が動けないのは、彼が抑えているためらしい。あたしは立ちふさがるみたいに、ずん、と男の前に立つた。

「何だつ、てめえつ」

髪をいつぺんも残さずそりあげた頭からだらだら血を流し、肩で息をしながら、斑目があたしを睨み付けて来た。

野生の獣を思わせる、殺氣に満ちた視線と靈圧が一瞬あたしの感覚を揺らしたけど、すぐにやり過ごせた。すばやく全身に視線を投げたら、立っているのが不思議なくらいの重体なのが分かつて、（くそつ、馬鹿男が！）

強い苛立ちがこみあげてくる。こんな怪我してるくせに、何が負けてねえ、だ！ あたしは相手をさらりと睨みつけて、

「何だじやないわよ、このハゲ」

「ああっ！？」

吐き捨てるように言つたら、額に青筋を浮かべて斑目がガンつけてくる。けど、血噴き出してふらふらの状態で凄まれたって、怖くないわよ。

「あんた自分の今の状態、分かってんの？ そんな体でここを飛び出したところで、途中で倒れてのたれ死ぬのが関の山よ。大人しく治療を受けなさいよ」

「つるせえ、てめえに関係ねえ！ 僕は、あの虚と決着をつけなきゃならねえんだ！」

かみつくような勢いで言われ、怒りをそのまま現したみたいに、靈圧がはじけ飛ぶ。周囲の隊員がその圧力に怯えて身を引いたけど、あたしはハツ、と鼻で笑つてしまつた。

「その頭は髪だけじゃなくて、中身まで無いわけ？ そんだけずたぼろになつて、それでもそいつを倒せなかつたんなら、何度もやつたつて同じよ。」

また負けてここに転がり込んできて、あたし達の手を煩わせるつてんなら、今飛び出していつて、とつとと死んできなさいよ。こつちだつて、そのほうが面倒がなくていいわよ！」

「おい、それは言いすぎだろ！ あんた四番隊の人間じゃないのか！」

あたしの言葉に、斑目を抑えていた男が咎めの声を上げた。その

せいで力が緩んだのか、斑目は男の腕を払いのけ、ガツ！とあたしの襟首を掴んできた。あたしはすごい勢いで、体ごと引きずられるように持ち上げられてしまう。

「てめえ……死にてえのか

斑目がぶるぶる手を震わせながら、睨み殺せそうな目であたしを見上げてくる。でも、怖くない。首が絞まつて苦しいけど、こんな死に損ないに脅されて怯むもんか。あたしは腰の後ろから竹筒を取り出して、さつと傾けた。「あ？」竹筒の中からいきなり液体が降りかかるてきてびっくりしたのか、斑目の動きが止まる。次の瞬間、「なつ、てめ、なに、……うお……」

斑目はぐりん、と白目を向き、足元から崩れるようにおん、と倒れてしまう。

「いっ……！」

床に放り出されて、したたかに背中を打つてしまう。痛い、けどへたばつてる場合じゃない。あたしは斑目のそばに膝をついて、まぶたをめぐり、脈を取った。

うん、しつかり気絶してる。よつし〇〇、さすがあたしの特製震点、効果抜群！

「第一治療室、準備して！　すぐに斑目隊員の治療を始めます！　鈴、吉峰、花菱の三名は手術補助に、沖若は隊長を掘り起こして副隊長に報告、他はここに片付けと負傷者の治療をしなさい！」

「は、はい！」

「分かりました、ただちに！」

あたしは声を張り上げて、呆気に取られた隊員達の尻をたたいてから、昏倒した斑目を運ぶため、腕を掴む。と、

「僕も手伝うよ」

さつき斑目を抑えていた男が、手を貸してくれた。斑目の腕を肩に回して引きずり起こしながら、

「君、度胸あるね。こんな状態の一角にかみつかれて、引き下がらないなんて」

感心したように言つてゐる。反対から腕を回して、あたしはけつ、
と唸つた。

「Jの四番隊で、怪我人があたし達に勝てる道理なんて、無いのよ」

「一角。気分はどう?」

田を覚ますと、寝台の脇には「親が居た。俺は何度か瞬きをして意識をはつきりさせようとしたが、霞でもかかってるみてえに、頭がぼんやりしてくらくらする。しかも身体にぐるぐる包帯を巻かれているせいで、身動きも取れない。

「弓親か。……最悪だ。ツイでねえ」

ぶすっとして言い放つが、弓親はそう? と首を傾げた。

「随分、顔色が良くなつたと思うよ。あと一、二日も寝てれば良いみたいだから、この際ゆつくり休んでおきなよ」

「一、二日だあ? 僕は田をむいて弓親を見た。

「おい、冗談だろ? こんなの大した怪我じゃねえよ、そんなに寝てたら、あの虚がどつかの誰かにやられちまうかもしねえだろ」

「一応、まだこの隊も補足出来てないみたいだから、安心しなよ」
なだめるように言って、弓親は肩をすくめた。

「それに今は、無理して動かない方がいいよ。無茶したらまた、あの女に昏倒させられるよ?」

「あの女?」

「ほら。一角がここに来た時、こいつの手を煩わせるくらくなら死ねって言つてた、あの女」

「……あのクソ女か」

顔を思い出すだけでむかつときて、俺は唸つた。あの時液体のかつた場所を「こいつ」とこすつて、ぶつぶつ文句を言つ。

「何なんだあいつは、戦いもしねえでぶるぶる震えてるだけの四番隊のくせに、あの大層な口の利き方はよ」

「面白いよね。血まみれの一角相手に真っ向から立ち向かっていくから、僕はちょっと感心しちゃったよ」

「面白くねえ! 僕はあいつが妙な薬使いやがったせいで、まだ頭

がふらふらするんだぞ！」

怒鳴つたらまためまいがして、俺はきつて田を開じた。弓親はぐくと笑つ。

「どうやらあの女、名物隊員らしによ？ 四番隊のくせに態度が大きくて、毒舌で患者を震え上がらせてるつて。うちの隊の連中が詰所で暴れたら、寒空の下にたたき出されたつて聞いたよ」

「ああ？ なんだそりや」

俺はまぶたを開けた。何の「冗談か」と弓親を見たが、表情を見ると嘘ではないらしい。弓親は、長かつたのを切り揃えた髪に指を通して、

「さつきもにこに来る前、そこの前庭で何かしてたみたいだよ。まだ居るんじゃないかな」

田で窓を指す。示されるまま、俺は起きあがつて、かまちに手をかけた。途端、

「……冗談じゃないわよー。こんな値段で買えるわけないでしょ！」

周囲の静寂を突き破るような怒声があがつた。何かと身を乗り出してみれば、弓親が言つた通り、あの女が前庭に居た。どつかの商人らしい男と品物を広げて話をしていたらしく、手に持つた紙をぱしん、とたたき、

「通常の一割増しなんて法外よ、足下見てんじやないわよ。これだけまとめて購入するんだから、むしろ割引するのが筋つてもんでしょう！？」

「しかしですねえ、実際この商品は品薄でしてねえ。お得意様のこの用命ですから、うちでも随分苦労して集めてお持ちしてるんですよ。

まあ、こう言つては何ですが、出来ればその手数料にちょっと上乗せして頂ければと。この時期にこれだけの数を揃えられるのは、

うちだけですよ？」

「ハツ、そりやそうでしょ、事前にあんたのところが需要を見越しで、大量買い付けで保管してんだから」

「うつ……何故それを、あ、いやその」

「倉庫に隠るほど在庫がある癖に、無い振りして渋つてんじやないわよ！ 死神相手にこんな阿漕あじきな商売する氣なら、今後の取引は備前屋さんに回すからね！」

「ああっ、それは『勘弁下さい』。備前屋さんに出てこられたら、うちは干上かみがつてしまします！ 分かりました、お値段のほうは勉強させて頂いて……このくらいでは？」

ぱちぱちとそろばんに指を滑らせる商人。女はそれをのぞき込み、容赦なく玉を弾いた。

「これなら良いわ」

「ひつ……」、これはちょっと……。せめてこれで

再度商人が玉の数を変えると、女は腰に手をあててフン、と鼻を鳴らした。

「しょうがないわね、それで譲歩してあげるわ。じゃあ今日はここにあるだけ納品してもらつから、残りは三日以内に持つてきちようだい。少しでも遅れたり数が足りなかつたら、その時は……」

「わ、わわわわかつておりますー！」

ほとんど悲鳴のような声で、商人は平身低頭、品物を箱に詰め込み、女と一緒に詰所に入つていった。それを見送つた俺は、うへえ、と口を曲げる。

「何だありや、ほとんど脅迫おどしじやねえか」

「商人かヤクザかつてところだね」

俺と並んで窓から眺めていた弓親が、感心した様子で頷いた。確かにあの勢いでまくしたてられたら、普通の奴は怖じ氣づくだろう。しかしそれにしたつて、うちの隊の連中も情けねえ。あの商人みてえなのならともかく、仮にも十一番隊の隊員が、たかが女一人にたたき出されるなんざ何事だ。俺はすっかり自分の事を棚に上げて憤慨した。そんなふぬけた話、更木隊の沽券に関わるぜ。

「よし、決めた。あの女、今度会つたら礼儀つてもんをたたき込んでやるぞ。虚一匹斬ねねえ奴に、デカイ顔させてられるか」

俺が決意を込めて拳を手のひらに打ち付けると、『親は再び椅子に座つて、まあ好きにしなよ、と言つた。

「面白いとは思うけど、あんなに騒々しい女は美しくないからね。ちよつとくらいい、痛い目にあわせてやつたら

「……抗生素の量はそれでいいわ。じゃ、後はよろしく
「はい、有難うございました！」

ペー、と頭を下げる友実君に手を振つて、あたしは個室を出た。

さて、次の患者は、と隣室の木札を見て、思わず顔をしかめる。

部屋の番号と患者の名前が記される木札には、十一番隊斑田一角、
と墨痕鮮やかに書かれていた。

十一番隊の連中は大概、どいつもこいつも野蛮で下品でどうしようもないけど、この斑田とかいう男は、その中でも群を抜いてあほだ。救護詰所の受付で暴れて、瀕死の重傷を負つてるくせに虚を倒しに行く、なんて息巻いてた様を思い出すだけで、頭が痛くなる。（まともに相手してたら、大喧嘩になりそう。せつせつと診察終わらせよ）

あたしは部屋の前で一つ深呼吸すると、

「斑田さん、失礼します」

出来るだけ穏やかな声をかけて、戸を開けた。途端、

「来やがったな、クソ女」

寝台の上にあぐらをかいだ斑田が、こっちを睨み付け威嚇の一聲をかけてくる。

「…………」

来たよ。うわ。

あたしはつとぞりしてため息をついた。十一番隊ならこんなふうに、初手から脅してくるだらう、と思った通りの反応だ。

おまけにまだ横になつてなきやいけないつてのに、何勝手に起きてんだ、この野郎は。怪我の程度が本気で分かつてないんじやないの、あほが。

「何だよその日は、ああ？」

あたしの気持ちがそのまま顔に出ちゃったのか、斑田は眉間にし

わを深くし、

「てめえ、よくもこの俺に妙な薬使いやがったな。おかげでこんな有様だ、これでの虚を取り逃したら、かわりにてめえを叩つ斬るぞ」

脅しめいた口調で唸るけど、いちいち相手にしてもしょうがない。あたしは部屋に入ると、ずかずかと寝台に歩み寄った。いきなり眼前にまで近づいたから、喧嘩を売られると思ったのか、「ンだコラ、やるか？」と身構える斑目。でもあたしは、包帯が巻かれた斑目の肩をがしづと掴んで、

「いっ……！」

奴が怪我の痛みにひるんだ隙をついて、突き飛ばす勢いで勢いよく、寝台に背中を叩きつけた。

「ぐはっ……！」

盛大に寝台をきしませ、激痛に硬直する斑目。それを見下ろして、あたしは腰に手をあてて、あほ、と鼻で笑う。

「そんなボロボロの状態で、あたしを斬れるもんならやつてみなさいよ。ぐだぐだ詰まらない脅しをするだけで脳の無いあほね、あんたは」

「んなつ……な、何だとてめえ！ てめえこそ治すしか脳がねえ、役立たずじやねえか！ 虚相手に刀抜く事もできねえ四番隊の腰抜けが、何抜かしやがる！」

あたしに掴まれた肩を手で覆いながら、斑目が吼える。その言葉にむかっとして、あたしはぎろ、と睨み下ろした。

「はあ？ あほじやないのあんた。四番隊はね、あんた達に出来ない治療や、物資の補給が仕事なの。

刀振り回して虚に飛びかかっていくだけで、何にも考えないで済むあんた達とは、根本的に存在理由が違うのよ

「けつ。そんなもん、戦えねえ奴らの言い訳でしかねえだろ。護廷十三隊のお荷物部隊が、何を偉そうに存在理由だ、馬鹿が」

「はっ。そのお荷物部隊に命救つてもらったのは、どこの間抜けよ。

何だから言つたつてあんたなんか、今ここから動く事だつて出来ないくせに」「

「んだと……「ひ」つ……！」

まだ毒づく気配なので、あたしは斑目の鳩尾に拳を入れた。息を詰ませてびくびく痙攣するのを冷たく見放し、棚から包帯を取り出す。さつき掴んだせいで傷口が開いたのか、斑目の肩の包帯に血が滲み始めていた。

「うだうだ無駄口叩いてないで、大人しく寝てなさいよ。怪我さえ治れば、あんたみたいな患者、こっちから願い下げなんだから」「てつ……め……や、さわんな……」

顔を青くして息を荒げながら、斑目が呻く。けど、相手をする気はないので、

「ほり、起きれるんでしょう。薬つけなおすから、体起こして」
べし、と斑目の綺麗にハゲあがつた頭を叩く。斑目はまだ青い顔色で、こっちを睨み殺せそうな目のまま、それでもむつくり起き上がつた。

あたしは手早く斑目の上体に巻かれた包帯を外し、傷の上に貼られた薬布を取替えた。そうして改めてその図体を眺めて、へえ、と密かに感心する。

斑目は確かに隊して間もないはずだけど、体だけは随分立派でがつしりしていて、筋肉の引き締まつた胸板もかなり厚い。大口叩くだけの根拠は一応、あるわけだ。

「そのまま、動くんじゃないわよ」

「……あ？ て、おい、何を」

釘を刺して、あたしは斑目に抱きつくような感じで包帯を巻き始めた。

「なつ、なんつ……！」

こういつ事は良くあるので、あたしは今更どうつてことないけど、斑目は予想外だつたらしい。びくつとして身を引きかけるので、あたしはぐるりと一周した包帯をきつく引っ張った。

「動くなつつてんでしょうが！ これ以上手間かけさせたら、薬使つわよ！」

「う、お……くつ」

怒鳴ると、斑目は戸惑つた顔で大人しくなつた。よしよし、最初からそつしてればいいのよ。

そうして包帯を巻きながら見るとはなしに見ると、斑目の体にはあちこちに傷跡があつた。

ほとんど皮膚の色と同化するくらい古いものから、まだ生々しい肉色をしたもの、小さいものから大きなものまで、本当にたくさん。見る限り、死んでもおかしくないほどの重傷を負つた事もあるみたいだ。

「……ちつ」

その痕をつづづくと観察して、あたしは思わず舌打ちしてしまつた。

十一番隊は護廷十三隊の中でも、戦闘に特化した隊だ。戦いにおいても最前線に立つことが多く、必然、怪我人や死人も他の隊より飛び抜けて多い。

だけど連中は、傷つく事を恐れない。たとえ敵が自分より強い存在としても、恐れるどころかむしろ嬉々として立ち向かい、己の体を省みることがない。

以前から喧嘩好きのチンピラ死神が集まる、と揶揄されていた隊は、しかしこのところ戦闘狂の病にでもかかつたかのように、その無謀さに拍車をかけていた。

それは、きっと。あの更木とかいう男が、隊長になつたせいだ。

「……ほんつと最悪だわ、更木隊長」

「……あ？」

ぼそつと呟いた言葉を聞きつけて、斑目が身じろぐ。

あたしは包帯の端を止め終え、寝台から離れながら、苛立つた。

その人が隊長になつたせいで、しなくともいい大怪我をして危うく死に掛ける隊員が、以前より増えた。現場の状況を聞けば聞くほ

ど、何故そこで立ち向かっていくのか、勇退して命を拾う事をしないのかと腹が立つ。

「隊員の命を預かつて指揮するのが隊長の役割でしょうに、狂犬みたに暴れるあんた達を止めるどころか、自分から率先して斬り合いで行くなんて、何考えてるの？」

更木隊長なんて、ちょっとでも強い相手と見れば誰彼構わず喧嘩を売るし、隊員が怪我しようが何しようがお構いなし、最っ低じやないの！」

死神の職務は、世界の均衡を保つ事で、戦いを楽しむ事じゃない。ううん、そんな建前より何より、命を無為に、危険に晒すことが許せない。

あたし達が、一つしかない命を救うために日々、どれだけ心を砕いているか。どれだけ力を注いでも、命を救うことが出来なくて、無力感に叩きのめされる事も、知らないで。

「更木隊長は、人が死ぬ事なんて何とも思つてないのよね。何しろ前の隊長を、あんなに楽しそうに殺したんだから」

でも、腹を立てたあたしが言葉を紡げたのは、そこまでだった。突然首にど、と重い衝撃が来て、視界がぶれた。

「ツー？」

息が詰まる。一瞬目の前が白黒に明滅する。ぎりぎりと喉に食い込む感触に辛うじて目線を下げるに、冷たいものが一瞬背筋を走った。

「…………」

斑目が、殺氣に満ちた鋭い靈圧を発し、その目にぎりぎりと怒りを滾らせて、あたしの首を掴んでいた。鞭のような指が気道を封じて、息が出来ない。以前の締め上げなんて比べものにならない力だった。空気を欲して、くは、と喘いだあたしを眼前に引き寄せた斑目は、

「隊長を貶すんじゃねえ」

地の底を這うような低い、低い声で呴喝した。

「俺の事をどう言おうが構わねえが、隊長は別だ。何も知らねえ癖に、好き勝手な事言つてんじゃねえよ、クソ女。殺すぞ」

さつき口げんかをしていた時とは全く違う、本気の脅迫。めりめりと軋む音が脳に響いた。このまま、首の骨を折られるかもしれない。きーんと耳鳴りがして、気が遠くなる。

「は……っ！」

辛うじて、締め付ける手に爪を立てる。斑目は一度きつく力を込めた後、ぶん、と振り放すようにあたしを解放した。

「うつぐ、げほつ！」

あたしは床になげだされ、空気を貪つた。そのまましばらく、激しく咳き込む。

そしてようやく呼吸を整えて首に触れる。食い込んでいた指の感触がまだはつきりとあった。これ、きっと絞められた跡がくつき残つてゐる。本当に殺されるといひだつた、と思つたら、ぐりりとめまいがした。

「くつ……」

口からこぼれたよだれを拭いて顔を上げると、斑目は寝台に上体を起こして頭の後ろで手を組み、外に視線をやつていた。こっちの事なんて知るか、とも言いたげな冷たい横顔だ。一切を拒絶するその表情を見て、あたしは自分が失言をした事によつやく気がついた。

さつき言つたのは、全部本気の事。訂正しろと言われても、する気はない。だけど、それをよりによつて、十一番隊の人間相手に言う事は無かつたろう。斑目に挑発されて、といつ理由ならともかく、自分の個人的な思い込みで更木隊長を批判したのも、まずかつた。

「んつ……」

あたしは唾を飲み込み、立ち上がつた。まだ少し乱れている呼吸を強いて抑えると、こちらを見ようともしない斑目に向かつて、

「申し訳ありませんでした、斑目さん」

頭を下げる謝る。斑目は「あ？」と不機嫌そうな声を漏らした。

「……随分、素直に謝るじゃねえか。大層な口利いても所詮四番隊だな、脅されてびびったのかよ、腑抜けが」

「違います」

あくまで四番隊を馬鹿にした口調にいらつとしたけれど、ジーはあたしが下手に出な娘や。あたしは頭を上げ、振り向いた斑目の方をまっすぐに見る。

「斑目さんは、更木隊長を尊敬しているんでしょう。尊敬する人を悪し様に言われれば、腹が立つのは当然です。

あたしには更木隊長も十一番隊も理解できませんが、少なくとも、さつきのは失言でした。だから謝るんです。……申し訳ありませんでした」

「…………」

斑目は応とも否とも言わなかつた。あたしも、まさかこんな言葉だけですぐ怒りが解けるなんて思つてなかつたので、床に散らばつた包帯や薬の瓶を無言で集めて仕舞い、もう一度頭を下げた。そして背を向けて、部屋を出て行つとした時、

「おー、待て」

不意に声がかけられる。振り返ると、寝台の上の斑目はじつとあたしを睨み付けて、でもすぐに視線を外した。

「首、冷やしとけ。悪かつた」

「え」

ぶつきらぼうな調子だったので、言葉を理解するのが一瞬遅れた。（謝られて、る？）

失言したのはこっちなのに。まだ熱い首に触れたあたしは、何となく気まずい思いで、

「いえ。どうも」

それだけ応えて、部屋を出た。戸を閉めてふう、とため息をつく。十一番隊のあほめ。関わるとやっぱり、ろくな事にならない。でも少なくとも今回は、斑目の怒りは理解出来た。

（あたしだって、烈様を貶されたらキレるもんね、マジで）

尊敬する人を馬鹿にされるのは、自分の事より腹が立つものだ。いけ好かない、十一番隊の斑田一角。だけど隊長を尊敬しているところとか、乱暴はしてきたけど最後に謝ったところとか、他の奴よりはマシ……な気がする。

でも、何にしてもあんな奴の診療するなんて嫌だ。どう考へても、相性悪い。

これ以上、面倒な患者を扱うのはごめんだし、今度当番を他の人に代わってもらおう。んで、退院するまで、閑わらなこようにじよつと。

そう決意したら少し気が楽になった。ふうっと肩の力を抜いたあたしは、ようよう廊下を歩き出した。

* * *

しかしこの後、あたしは退院までの間、斑田の治療担当に任命される羽田に陥る。気性の荒い斑田の相手が出来るのは他に居ないからと、ようにもよつて、卯ノ花隊長直々の「ご命令」で。

「何であたしが、こんなあほの面倒みなきやいけないのよ……」

「同感だクソ女、何で毎日朝晩、てめえの根性ひんまがった面、拝まなきやならねえんだ」

……誰かこいつの舌引つこ抜いてくれ、マジで！

四番隊名物③（後書き）

「」までもお読みいただいて、有り難うございましたー作者の南条です。

大変お待たせしました、ようやく一角が出てきました……一時期としては、雪音は四番隊の席官クラス、一角は入隊してしばらくたつた頃です。双方ともまだ若いので、現在よりとんがつた感じになります。

現在の一角なら、女性に手をあげるような事はしないと思うのですが、若い頃はそのあたり、まだ気を遣つていなかつたんじやないかなあ、と想像した結果です。

最新作は自サイト「南通り」(<http://member.s2-jc.com/home/rejo/south45/>)にて連載中です

隊舎の一階をつなぐ渡り廊下を歩いてくると、

「おーい、パゲー」

「ああっ！？」

失礼きわまりない呼びかけが耳に入つて、一角はぐりと振り返つた。廊下の後ろからとたとた、と松本乱菊が歩み寄つてくる。

「ちょうど良かつた、今十一番隊に行こうかと思つてたのよ」

「松本おー……てめえ、今何ていいやがつた

「ん？ 十一番隊に行こうかと」

「そこじゃねえ！ わつき俺に声かけた時だ！」

「ああ、パゲ？」

「けろつと悪びれずに言つたコルア！ 俺はハゲじゃねえ！」

何だそんな事、と乱菊は肩にかかつた髪を背中に払う。

「あんたこそ何言つてんの、見事にツルーツとした頭じやないの。遠くからでも分かるのよねー、太陽反射して」

「……大概にしねえと、女だからつて容赦しねえぞ……」

背後に炎を背負い、指の骨をならす一角。しかし松本は全くもつて斟酌せず、

「そんな事よりさ、今田の飲み会の場所決ましたのよ。

風弦洞ふうげんどうつて

知つてゐる？」

さつさと自分の話を進める。一角はこめかみにビキビキと青筋を浮かべたが、これ以上こだわつたところで、乱菊は相手にしないだろ？ 一角はため息をついて諦め、仕方なく話に付き合つた事にした。

「ああ、入つた事はねえけど知つてゐる。六時からだつけか」

「そそ。メンバーは……あつ」

乱菊は不意に通路の手すりから身を乗り出した。何事かと思ひきや、

「おーい、雪音ーー 今日の飲み、風弦洞だからねーー！」

辺りを憚らない大声で叫ぶ。ちょうど下を歩いていた死神 雪

音が、その呼びかけに足を止めて、乱菊を見上げた。

「はーい、分かつてます、さつき、京楽隊長から聞きましたからー。ちょっととせりきりになるけど、ちゃんと行きますー。じゃ、また後でー！」

手を振つて、そのまま去つていぐ。一角はひく、と顔をひきつらせた。

「おい、松本。今日もしかして、あいつも来んのか」

「ん？ そうよ。あんた雪音と一緒に飲むの、初めてだっけ？」

「……俺あいかねえぞ」

「はあ？」

乱菊は予想外、と言いたげに目を丸くした。

「何よ、いきなり。あんた雪音嫌いなの？」

「つたりめーだろ、あんな無法四番隊員！ 入院中、あいつのおかげで何度も死線を渡つたか……！」

屈辱的な日々を思い出し、思わず拳をぎゅう、と固めていたと、乱菊はからから笑つた。

「それなら尚更、今日来なさいつて。お酒飲むと雪音、すついで面白いんだから」

「あ？ 何だそりや。酔つて暴れて、暴行事件でも起しちゃのかよ」鼻で笑つたが、乱菊は意味ありげに口の端をあげて、ちちちち、と指を振つてみせた。

「そ・れ・は、来てのお楽しみ ちょっと他では見られないもの、見られるわよ？」

* * *

その夜、瀬靈廷の歓楽街、その一角に位置する居酒屋・風弦洞にて、人々が集まる。

天井につきそうなほどの大体を揺らし、店内を軽快に駆け回る店

主のかけ声が響き渡る中、死神の一行が卓を囲み、和やかな宴を開いていた。

しかし、時間ぎりぎりになつて飛び込んできた雪音は、駆けつけの一杯を干した後、

「……で、何であたしの席がここに決まつてるんですか、乱菊さん」心底不愉快そうに顔を歪めて、卓の角に座つている乱菊に尋ねた。乱菊はあつてえ、とからかうような声を漏らす。

「一角がどうしても雪音と飲みたいつていうから、特別にとつておいたのよお」

「口が裂けてもそんな事言つか！」

雪音を挟んで向こう側にいる一角が、ガアツと吠えつけた。雪音はますます眉間のしわを深く刻む。

「睡飛ばさないでよ、あんた。お酒がます――くなるでしょ」

「ああ？ そりやこつちの台詞だ、ボケが。何が悲しくて、てめえのそのブツサイクな顔見て飲まなきゃいけねえんだよ」

「ハゲよりはマシでしょ。ハゲよりは」

「ハゲじやねえよ俺は！」

「ハゲじやねえよ俺は！ 剃つてるんだつて何度言や分かるんだ！」

「十円ハゲとかあるんじやないの？ それ誤魔化すために、全部剃つてるんでしょ」

「てめえ……そんなに鬼灯丸の鎧になりてえのか……」

ちきつ、と鯉口を切る一角。しかし乱闘になる前に、一角の正面に座つた京樂春水が宥めた。

「まあまあ落ち着いて、こんなところで刃傷沙汰起こしたら、お店に迷惑かかるでしょ？ ほら二人とも、杯空いてるじゃないの」

「あ、どうも」

「頂きます、すみません」

銚子を差し向けられて、一角と雪音はそれぞれ杯を受けた。一角はゆつくり、口の中で転がすようにして含んだが、雪音のほうは、まるで水を飲むような自然でくいつと飲み干し、すぐさま京樂に返杯する。

「どうぞ、一献」

「ありがとう、雪音ちゃん。ン、可愛い女の子にお酌してもいい
ると、一段とお酒が美味しいになるねえ」

やに下がり、さりげなく雪音の手を握つた京楽だったが、いえい
えとんでもない、とこにこに笑つ雪音に思い切りつねられた。

「アイタツ！」

「伊勢さんが居ないからつて、オイタは駄目ですからね、京楽隊長」「ちえ～つ、雪音ちゃん冷たいなあ……」

「普通です！ 全く……」

京楽をいなしながらも慣れた手酌で酒をつぎ、杯を進めてくる。

そのペースの速さに、一角は半ば呆れて、

「おい、お前飲み過ぎじゃねえのか。ンな勢いで飲んで大丈夫かよ
つに口を挟むと、雪音は別に、とそつてなく応えた。

「いつもこれくらいよ、」心配なく

「そそ。雪音ねー、相当イケる口なのよ、一角」

机に頬杖をついて、乱菊がにやつと笑つた。

「この間も朝まで一緒に飲んだもんねー。どんだけ空けたつけ？」

「んーと……吟醸三本、そば焼酎一本、現世のお酒……ワイン、で

したつけ、あれを一本

「飲み過ぎだろそれ！」

どう考へても女一人で飲む量じゃない。一角は盛大にしつこんだ

が、「あ、それと麦酒五本？」平然と付け足す雪音。

「さすがに次の日は参つたわよね、酒臭くて」

「お風呂入つても、全然取れなかつたんですよねー。久しぶりに深
酒しそぎちやつた」

「しそぎちやつた、つてレベルじやないよねえ……」

これじゃ酔いつぶす事も出来ないよ、と呟いた京楽の頭に手刀を
お見舞いして、雪音は銚子を傾けた。ぽつ、としづくが杯の中に落
ちる。

「あれ、無くなつちやつた。すみませーん、鬼鳴き、お代わりー！」

「本気で酒豪なんだな、お前。オヤジかよ」

ほとんど一人で銚子を空けた雪音に呆れて、一角は杯に口をつけた。雪音はむつ、として睨み付ける。

「五月蠅いわね、あんたには関係ないでしょ？ ちびちびちびちび、男の癖にみみつちい飲み方して」

「ああ！？ 何抜かしやがる、俺はてめーみたいな馬鹿飲みはしねえんだよ…」

そういう一角も流魂街に居た頃は、手に入る安酒を片っ端から浴びるように飲んでいた。が、旨い酒の味を知るようになつてからは、じっくり味わつて飲むようになったのだ。

「てめえのこつた、どうせ酒の善し悪しもわからんねえよ的な馬鹿舌なんだろ。量入りや満足するよつた味音痴に、文句をつけられる謂われはねえよ」

吐き捨てるように言つと、何ですって、と雪音が眉をつり上げた。「ふつざけんじやないわよ、誰が馬鹿舌の味音痴ですって！？ その台詞、あんたにそつくり叩き返すわ！」のハゲ！

「ハゲは関係ねえだろ…」

「ちょっと、止めなさいよ」

「うわつ！」

「きやつ！？」

ガン、と額を付き合せせつてこると、間に弔子がばしつと挟み込まれた。乱菊があきれ顔で言つ。

「あんた達ね、酒の事で喧嘩なんて野暮するくらいなら、こつそ勝負でもしてみれば？」

「は……勝負？」

「何を」

乱菊は、一人を遮った品書きをぶんぶん、と振つてみせた。

「ほら、こいつて酒の種類、こんだけあるから。どうせなら聞き酒勝負なんてどうよ」

「聞き酒勝負……」

「そ。それなら雪音と一角のどっちが味音痴か、はっきりするでしょ？」

一角と雪音は、互いににらみ合つた。しばしの沈黙の後、同時に顔を乱菊へ向けて、

「「その勝負、乗つた！」」

声を合わせて宣言する。乱菊はさうしなくちや、と手を打ち、

「すいませーん、ちょっとお願ひがあるですけどねー」

妙に弾んだ聲音で、店頭に声をかけた。

「これ、何でしょ？」

「……黒鷺」

「じゃ、これは？」

「一氣呵成だ」

「当たり。次は……これ、どいつよ？」

「ん~……逢坂の誓い」

「うわ、これも当たり。すうい、どっちも外れなしだわ」

雪音と一角の名前を書いた紙に正否を記していた乱菊は、感嘆の声を上げた。

急遽始まった聞き酒勝負は、一角も雪音もひかぬまま、既に一人十本、一人合わせて二十本目に入つていた。綺麗に丸の並んだ表をのぞき込み、京樂もすごいねえと、ほとほと感心した様子で言う。「これだけやれば、どっちが味音痴つて事もないんじやないの？もういい加減、勝負なんてやめたら」

「いいや、こうなつたら勝ち負け決まるまで、絶対やめねえぞ！」酔いが回ってきた勢いもあって、一角は鼻息荒く怒鳴つた。杯を差し出し、

「おら、次だ次、十本目だ！ 早く出せ！」

齎すよつた勢いで酒を要求してくる。いやだなあ酔っぱらいは、と肩をすぼめながら京樂が杯を受け取り、二人から見えない位置に置いた酒瓶の群れに向かつて歩き出そうとした時、

「……うにゅーん」

不意にたらん、と緩んだ感じの声が響いた。

「あ？」

「ん？」

「お？」

一斉に疑問の声を上げた三人が、発生源へ同時に視線を向けると、そこには頬を赤らめ、目をとろんとさせた雪音がいた。雪音は杯を煽つて、至極眞うに酒を飲み干すと、そのままぐらり、と大きく身体を揺らした。

「お、おいつ、何してんだ！」

突然の事に驚き、一角はとっさに手を伸ばして、雪音の背中を抱き留める。と、雪音は夢うつつの表情で一角を見上げた後、

「わあい、ハゲ坊主だあつ！」

妙にはしゃいだ声をあげて、一角に抱きついてくる。

「ギャーッ！？」

勢いよくしがみつかれた一角は、そのまま後ろに押し倒された。

「な、何しやがる、てめえ！」

慌てて起きあがろうとするも、雪音はしつかり一角の首に手を回して、じろじろと喉を鳴らしそうな表情で、

「やーん、このハゲ胸ひろーい、おつきーい、きもちいー

などと言いながら、胸に顔をすりつけてきた。

「ば、ばばばばかっ、よせ！」

予想外の行動に、一角はぶわつ、と全身に汗を噴き出しながら雪音を引つペがす。突き放された雪音は、今度はそこにいた乱菊に、

「乱菊さん、ハゲに突き飛ばされたあつ」

などと言いながら、がばつと抱きついて、ふくよかな胸に顔を埋めた。

「ああいいなあ、僕も仲間にフ'ゴッ！」

でれ、と鼻の下を伸ばして覗き込んできた京楽に裏拳を入れた乱菊は、よしよし、と雪音の頭を撫でた。

「はいはい、酷いわねーあのハゲ。雪音は何もしてないのにねえ？」「ば、ばかやろ、何もしてないじゃねえだろ、いきなり襲いかかってきやがって！」

起きあがり、乱れた死霸装の前をかき合わせて一角が怒鳴ると、

乱菊はにや、と笑つて、

「んふふ、驚いた？ 言つたでしょ、他では見られないものが見られるつて」

なぜか得意げに胸を張つた。何の事だ、と聞き返そうとして、一角は思い出した。そういえば昼間、雪音の事で乱菊が何か言つていた気がする。

「ま、まさかこれがよ、」いつが酒飲んだら面白いつてのは「はれ、ひりやなかつたの？」

殴られた鼻を押さえて、京楽がのほほん、と言つた。

「雪音ちゃんは酔つ払つと、とっても甘えん坊になるからカーワコ イんだよねえ」

「やうやう。いつもシンケンしてる反動なんですかねー、子供みたいになつちやつて」

「乱菊さん、もつとお酒のみたあい……」

「ああ、そうね。じゃ、ここはしきり直しで……雪原ゆきはらでも飲む？」

「わーい、雪原だいすきい、飲む飲む～～」

るんるん、と歌い出しそうな上機嫌で乱菊にすり寄る雪音。その様子を、やけにほんわかした表情で見守る乱菊と京楽。一人蚊帳の外に置かれた一角は、

「…………何なんだ、あいつは一体…………」

常とは全く違う雪音の様子に、何だかものすごい疲れを感じて、ぐつたりと肩を落としてしまつた。

* * *

一
あ

۱۰۹

一角と雪姫は廊下で逢つたり会つた。昨日の有様を思い出し、
といわに雪葉が口うる一角。しかし雪音のほうは全く頓着せ
ず、

昨日は無事帰れたの？

「昨日は無事帰れたの？」何がふらつとふらしてたけど」「いつものときはきはきした口調で話しかけてきた。ふらふらしていたのは事実だが、それは酔つたせいじゃなく、あの後も散々雪音に絡まれて疲れたせいだ。

謹のせいであんなこと思ってんだ。でも元気だ。

恨みかましに顔面で喰ぐと 雪面は眉根を潜めた

「何よ、あたしのせいじゃないでしょ(?)か。たかだか十種の聞き酒で酔つたあんたが悪いんでしょ。酒弱くて勝負に負けたからって、逆ギレしてんじゃないわよ」

ああ？ 諸ガ酒弱くて 勝負は負はたで！

何す」とほけてんだ
と小憎らしく鼻で笑う。

「だつてあんた、結局十本目のお酒がわからなかつたんでしょ？」

「十本用……つて馬鹿やろ、あれはてめえが邪

負が流れちまつたんじやねえか！」

も見たんじゃないの」「

「夢つてお前、……ちよつと、待て」

更に言ことのれいとして、一角ははたと気がついた。

雪音は口が悪い女だが、こうもあからさまな嘘をつくような奴でない事は、短い付き合いの中でも何となく分かつていた。という事は、雪音がこれまでつまらなかった。

「お前……まさか、全然、覚えてねえのか」
おそれおそれ尋ねてみると、雪音は「何が?」と、まるつきり分

かつてない様子で応える。

とてもとぼけていふように見えないその表情に、一角は愕然とした。飲み過ぎて正氣を失い、次の日思い返しても何をしていたか覚えていない、とこうつ事はよくある。しかし、

(こいつ、記憶無くしてゐる事にも気がついてねえのかよ！)

雪音の場合は、もっと重症のようだ。覚えていない事さえ、自覚していない。

「何よ、その顔。人を化け物にでも見るみたいに」

驚愕して目を剥く一角に、雪音が不快感を訴える。普段ならこれに応酬して喧嘩に発展するところだが、今日ばかりはそんな気分にはなれない。

「…………お前な」

ぽん、と雪音の肩に手を置いた一角は、珍しく真面目な顔で、心からの願いを込めて言つた。

「酒は飲んでも、呑まれるな」

「…………はあ？」

しかし雪音はその言葉の意味がわからず、間の抜けた声をあげたのだった。

酒の徳（後書き）

「」お読みいただいて、有り難うございましたー作者の南条です。

酔っぱらうの世話は大変ですね、とこひお話です（笑）酔った時に甘えてくる女性は可愛いなあと思いますが、絡み上戸は困りますね。

お話の中で出てくるお酒はすべて架空のものです。それっぽい名前を探してくるのが楽しかったです。それと利き酒は同じお酒を飲んで当てなければ意味がないと思いますが、そこは気にしないでください（笑）

最新作は自サイト「南通づ」(<http://member.s2.jccon.hoge.hobby.south45/>)にて連載中です

部屋の棚にびっしり並んだ瓶を整理していたら、

「おーい、誰かいねえのか」

入り口の方から声が聞こえてきた。気づかなかつた、いつの間にか人が来てたみたい。やばい、出ないと。

「はい！ 少々お待ち下さい！」

あたしは手に持つていた瓶をひとまず棚に戻して、

「すみません、遅くなり……げ。」

出て行つて丁重に謝ろうとして、思わず唸つてしまつた。保管部屋の戸口に立つていたのがハゲ、もとい、十一番隊の一角だつたらだ。目が合つと、向こいつも、ぐえ、とても言いたげな顔で、

「またお前かよ、雪音」

いやそーーーにため息をついた。

「そこかしこに出没しやがつて、お前分身でもしてんのか。つーかそんなに暇か、四番隊つてのは、ええ？」

初っぱなから喧嘩売つてくるかこの野郎。あたしも、多分苦虫を十四くらいかみつぶしたような顔で答える。

「何いつてんのよ、じこの管理は四番隊の仕事なの。大体、じこかの隊の連中が能なしで、何の仕事もしないせいで、その分真面目で誠実なあたし達が割り食つてんのよ」

「おう待てよ、その『じこの隊の能なし連中』ってのは誰の事言つてんだ」

「そこが引っかかるなら、思い当たる節があるとこつ事ではありますか、斑目さん」

「急に敬語になるな！ 馬鹿にしてんのか、てめえはー！」

「うだうだ抜かさず御用件をどうぞ。じこへ来られたといひことは、薬のじ用立てですか」

「……むつかつくな、てめえ」

一言低い声で唸つてから、一角は氣を取り直したよつとぶんつ、と鼻を鳴らし、

「（）で一番効く血止めをよこせ」

「血止め、ですか」

上から見下ろす物言いは氣に入らなかつたものの、早いところ用事を済ませて帰つてもらつた方がお互によさうなので、あたしは後ろの棚を振り返つた。下の方から黄色の瓶を取り、差し出す。

「それなら、鬼散膏で宜しいですか？」

「あん？ もさん（）？ 何だそりや、聞いた事ねえな。効くのかよ」

何だ、その頭つから疑つてゐるよつな口調は。とにかく失礼な。あたしはむつとして、

「効くわよ。何たつてこの薬の名前は『鬼が泣くほど』の痛みも散る軟膏』って意味なんだから」

「……誰がつけたんだ、そんな子供だましの、おじぎ話みてえな名前」

「あたしよー 隊長が手を叩いて氣に入つて下せつた名前なんだから、なめんな（）」

思わずムキーッと拳を振り上げよつとしたら、一角がびっくりしたみたいな声をもらした。

「これ、お前が作った薬なのか？」

「そうよ。悪い？」

「悪いたあ言つてねえだろ。意外だつただけだ。お前、机に座つて（）り薬作る、とかやつてそうに見えねえから

「あんた、あたしの事馬鹿にしてない？」

四番隊の人間なら、だれだつて薬の一いつせーいつ、作るわよ。普通に。つーか、あたしは薬作つてゐる時間のほうがあつし。

「へえ。お前が作った薬、ねえ」

一角はやたらへえへえ言いながら（やっぱ馬鹿にしてんじゃないの）瓶の蓋を開けて、指で薬をすくこ取つた。それをびつするの

かと思つたら、

「ちよつと持つてゐる」

瓶をこつちに押しつけてきた。そして肩に担いでいた刀の鯉口を切つて、

「えー？」

刃の上に自分の手のひらを滑らせた。当然手が切れて、傷口からだらだら血が溢れ出す。

「ちよつ、何してんのあんた！」

びつくりして一角の手を摑もつとしたら、あつちも驚いた様子でぱっと避けた。

「何つて、てめえの薬を試してやるのうが」「は？」

薬を試す？ 何の事かと思つたら、一角はさつき取つた薬を、傷にぐいとなすりつけた。これも当然、薬は綺麗に傷口を塞いで、ぴたりと血を止める。へえ、と一角が嬉しそうな声を上げた。

「本当に効くじやねえか、これ。よし、貰つてへば」

「それはいいけど、ちよつと、手貸しなさいよ」

「あ？ 何でだ」

「何つて、今怪我作つたでしょ？ が。治すから」

一角は面倒そうに手を振つた。

「こんなの、怪我の内にはいらねえよ。もう血いとまつてゐるしな。お前の薬のおかげで」

……そ、そですか。まあ、確かにさう深い傷じやないから、自然にふさがるだらうけど。

なんて思つてたら、いきなり一角があたしの顔をのぞき込んできた。

「何赤くなつてんだ、お前

「は？ なつてないわよ」

ぎくつとして身を引いて、頬を手で隠す。うわ、ほんとに顔が熱い。一角はきょとん、と目を瞬いた後、おかしそうに笑つた。

「なつてるだろ、すげー真っ赤。何だよ、ちゅうとほめたぐりいで、
そんな照れんなよ」

「照れてませんっ。御用件がそれだけなら、とつととお帰り下さ
いっ！」

あたしは一角をぐいっと押して、背を向けた。ああもう、治れこの赤面性、何でこんな奴の前で赤くななきやいけないんだっ！
しかもまだ笑ってるしあのハゲ！

鬼散膏（後書き）

「じこまでお読みいただいて、有り難うございましたー作者の南条です。

一角のお相手に四番隊とくれば、これは入れておかなければならぬい、という事で出来た、血止め薬のお話です。でも、柄の中に入れておくと逆に使いにくい氣がするんですけど、どうなんでしょう…。粘度が低い薬なのかもしれませんね。

最新作は自サイト「南通り」(<http://member.s2.jcmm.home.ne.jp/south45/>)にて連載中です

「れーんーじークン。こないなとひむおひたんやね」

「え……あつ、市丸隊長!-?」

隊舎の休憩室で休んでいた阿散井恋次は、不意の呼びかけに顔をあげて慌てた。

いつ来たのか、六番隊隊長の市丸ギンが、畳の上に座っている恋次を見下ろしている。

「ああええ、バタバタせんと。虚退治で足怪我してきたんやろ?」

雑森ちゃんに聞いたから、お見舞い」

ギンは無理に動こうとする恋次を手を振つて止め、畳に投げ出された足を見る。

「わやわや、すんません。恥ずかしながら……不覚をとつました」

護廷十三隊に入つてようやく最近慣れだしたところで、こんな怪我をしてしまつた。情けないと落ち込む恋次に、ギンは気楽な笑い声を上げた。

「なにゆうひんの、怪我なれてこれからこへりでもあるんやから、今之内に慣れとき」

「は、はあ……」

そんなに軽くていいんだうづか、とギンの調子に不安を覚える恋次。そんな恋次をさらにあおるよつこ、セーや、とギンは手を打つた。

「ええ機会やし、恋次クン、じじひで一発肝試しじとか」

「は……き、肝試し? いや、俺、これから四番隊に行くつもりなんですけど……」

打ち身やかすり傷ばかりで大した怪我はないが、右足だけは歩けないくらい痛い。誰かに手を借りて、総合救護詰所へ行こうと思つていたところで、ギンの遊びに付き合つてゐる暇はない。と思つたのだが、

「せやから」

なぜだかギンは、にー、と口を真横に引いて笑つた。

「肝試しや、ゆうひんの」

「すんませそ。隊長に肩貸してもうつなんて……」

よしやく詰所へ辿り着き、恋次は恐縮して謝つた。恋次の腕を肩に回し、歩くのを手伝ってきたギンは、へらつと笑う。

「さつきからすんませんばつかりやねえ、恋次クン。ええよ、ボクも久しぶりに肝試ししたかつてん」

「あの、市丸隊長……。さつきから肝試し、肝試しつて言つてますけど……何の事ですか？」

いふかしげに尋ねると、ギンは慣れた様子で詰所の中を辿りながら、

「護廷十三隊に入つたら誰でも、いつかはここのお世話になるんよ。で、そのままやめてく奴もあるん。泣きながら」

「な、泣きながら！？」

厳しい試験をぐぐり抜けてやつと入隊できたのに、何で！？

ハテナマークを浮かべつつ蒼白になる恋次。そういうえば、四番隊の怖い噂を、一足先に入院した同期のイヅルから色々聞いていた気がする。四番隊でいつたいどんな試練が待ち受けているといつのか、なんだかだんだん怖くなってきた。

ギンはにまーっと笑つて、足を止めた。

「ほら、着いたで。いっちょ肝試してきなや」

気軽な口調で言つと、いきなり、恋次を田の前の部屋にひょいと放り込んだ。

「え、わ、ああ！？！」

「ひ、えやつ？！？」

突き飛ばされるままふらふら、と入つたといひで、人と真正面からぶつかつた。転ぶ、と反射的にひらりと足を踏ん張り、途端、

(ギヤーーーーーーー)

頭の芯まで揺るがすような激痛が突き抜け、バランスを崩す。ぶつかった人は恋次より小柄だったので、そのままなすすべもなく、どたー！ と床に転んだ。

「あ、い、て……！」

床に額をぶつけたのと、足を踏ん張ったせいで痛みがいや増し、恋次はほとんど泣きそうになつた。そこへ、

「あらら、あかんよー恋次クン。昼間つから、女の子押し倒したりしちゃあ」

ギンの至極のんびりした声が降つて來た。いつたい誰のせいだと声を上げようとした時、

「うぐ……ちょっと……重い……！」

下からぐもつた声が聞こえた。はつとして見下ろすと、そこには苦虫をかみつぶしたような顔をした女人人がいた。ぶつかつたのはこの人か、と認識すると同時に、自分が下敷きにしてる事に気がつき、

「あ、す、すんません！ 怪我無いすか」

床に手をついて、何とか上半身を持ち上げた。

女人人は恋次の下からさつと抜け出した。恋次を見、ついで後ろのギンを見て、もの凄く嫌そうにため息をつく。

「市丸隊長……怪我人の怪我増やすような真似、しないで下さいよ。連れてくるなら普通に連れてきて下さい」

言いながら、恋次の腕を掴んでぐいっと引っ張る。その手を借りて立ちかけた恋次は、そのまま後ろの寝台に突き飛ばされた。

「うわっ！」

「雪音ちゃんも大概乱暴やないの。ボクとそう変わらんと思つけどなあ」

ひょこひょこ、と中に入つてきたギンは、一人の間に立つた。

「ほな、自己紹介せなね。雪音ちゃん、こっちは藍染さんとここないだ入つた、阿散井恋次クン。

ちょーっとんがつた外見しどるナビ良こ子やから、仲良つした

つてや

「はあ……」

「恋次クン、この子は四番隊第六席の鑑原雪音ちやん。口悪いけど腕はええよ。別名、四番隊の『鬼瓦』ゆわれてんよ」

「お、おにがわら……」

「あの、そのとことん失礼な渾名はやめて下せ。呼んでるのは市丸隊長だけでしうが」

雪音はげんなりした顔のまま、恋次を見た。恋次は彼女の名を反芻して、せーと血の氣が引く音を聞いた。

(四番隊……六席……鑑原雪音……鬼隊員……！)

入院から帰ってきた吉良イヅルは、細面をさらにしげしげと見せていた。療養中の食事がそんなにまずかったのかと冗談で聞いたら、彼は真っ青になつて、

『阿散井くん、もし四番隊にいく事になつたら、鑑原六席には絶対近寄っちゃいけない！』

そう力説してきた。勢いに驚いて何でだ、と聞くと、イヅルはぶるぶる震えながら胃の辺りを押さえ、

『鑑原六席、怖いんだよ……。治療している間ずっと怒つてるわ、ちょっとでも動こうとすると、体を押さえて怒鳴りつけてくるわ……それが毎日で、ぼくはもう救護室で息が詰まるかと思ったよ。

しかも最初にいきなり、「あんな虚相手に怪我するなんて、才能ないんじゃないの」って言われたんだよ！ 真央靈術院主席のこのぼくが！』

最後は関係ないのでは、と思いつつ、入院して毎日それじやきついな、と言つた。そしたら、田に涙までためたイヅルがきっと顔を上げて宣言した。

『ぼくはもう金輪際、救護詰所には入院しないと誓うよ。あの人の世話になるくらいなら、死ぬ氣で虚に立ち向かつていつた方がマシだ』

そのあまりにもきつぱりした様子に、それは無理じゃないか、とう突つ込みが入れられなくて、じゃあ怪我しないように頑張れ、と気楽に返したのだった、が。

「…………」

怖い。鑑原六席の周囲に漂うぴりぴりした空気が、怖い。寝台の上に足を伸ばして座つた状態で、イヅルの話を思い出し、恋次は早くも青ざめていた。

あの時は、気弱なイヅルが大げさに言つてゐるだけだ、と軽く流していたが、いざ自分が怪我をして動けない状態で対峙すると、六席は、確かに怖い。

眉間に深くしわを刻み、この上なく不機嫌な顔で恋次の怪我の具合を調べ、時々乱暴とも思える手つきで体の向きを変えさせてくる。所作一つ一つがどことなく攻撃的で、しかも一言も口を利かない。だから余計に怖い。まないたの上の鯉はこんな心境なのだろうか、これから何をされるのか、ものすごく不安になつてしまふ。恋次はほとんど硬直状態で、雪音の触診を受け続けた。

「雪音ちゃん、恋次くんの怪我、どない？」

それを見物するように、腕を組み、救護室の壁にもたれたギンが雪音に尋ねてきた。雪音はちらりとそちらを見、

「打撲と擦過傷、それから右脛骨けいこつの骨折です。入院の必要はありますせん」

「へえー、そう。アッシュドワイヤー相手にそれくらいで済んだのやつたら、大したものやね、恋次くん」

「は、はあ」

「そうですか？ アッシュドワイヤー程度なら、こんな怪我をせず、もつとスマートに倒せていいと思いますけど」

(ぐつ)

自分でも手際が悪かつたと思っていたので、雪音の言葉はきいた。

恋次は思わず歯を食いしばり、雪音を見た。苛立ちを含んだ顔は、我ながら人相が悪かつたろうと思う、雪音が何か言いたいのかと鋭い視線を返してくる。あわや喧嘩が始まるとこで、

「まあまあ、恋次くんはまだ入つたばかりやし、長い目で見たつてや。才能あるよつて、将来の席官候補やで、藍染さんも言つてたよ」

ギンがとりなすように言つたので、険悪な空気が和らいだ。というより、思いもかけない言葉に、恋次が照れて動搖した。

護廷十三隊に入るのなぜひ五番隊に、と誘つてくれた藍染隊長

は、穏やかな容貌と性格ゆえに、およそ戦闘に向かなくとも見えるが、その実力は隊長の役に相応しい。

いつかあんな風になれたら、と憧れてしまつような人だから、その人に認められるのは、嬉しかつた。

「そ、そうですか……」

「この調子では席官はまだ、遠いですね」

しかし雪音は水を差すように言つて、袴をまくつた恋次の足に添え木を当てた。それをしつかり固定したところで治癒術をかける。雪音の手から光が降り注いだ、と思った時にはもう痛みがすう、と引いたので、恋次は驚いた。ものの数十秒で雪音が治癒をやめ、添え木を外した時には、

「すげえ……もう治つてる」

骨折していたのが嘘じやないか、と思つほど、足が普通に動かせるようになつていて。ギンがぱちぱち、と手をたたく。

「さすが雪音ちゃん、仕事速いわあー。すぐ治つて良かつたね、恋 次クン」

「は、はい！ ありがとうござります、鑑原六席」

まさかこんなに早く怪我が治るとは思わなかつた。感動して勢いよく頭を下げ、また上げる。と、雪音は驚いたように目を丸くしていた。視線が合うと、すう、と頬に赤みが差す。

「礼を言われるほどじやないわよ。仕事だし」

ふい、と目をそらして言つた台詞は相変わらず刺々しいが、表情がさつきより柔らかくなつたような気がする。

（なんだ。いい人じやねえか、鑑原六席つて）

イヅルが散々脅したから無闇に怯えてしまつたが、そんな必要は無かつたのかもしれない。鑑原の言葉や態度は確かにきついが、治療が手早くて、少しも辛くなかった。

ほつとして、肩の力を抜きかけた恋次だつたが、

「じゃ、次。上脱いで」

再び仕事の顔に戻つた雪音の言葉に、再度硬直した。

「は、ぬ、ぬぐ！？ も、もう治療終わつたんですね？」

慌てて問うと、雪音はしかめつ面になつて、

「終わつてないわよ、まだ上半身に打撲とか色々あるでしょ。一応

他の怪我が無いかちゃんと看たいから、脱いで」

「い、や、あの、他のは大した事ないつスから。わざわざ見てもらひう必要は無いつス！」

思わず胸元をかき合わせ、壁際にぎりり、と逃げてしまつ恋次。一瞬呆気に取られた様子でぽかん、と口を開いた雪音は、あほか、と一言言ひ捨てる、

「良いから大人しくしろ！」

がんつと寝台に乗つて恋次に迫り、

「わ、わーーー！」

暴れるのをじりやつてか押さえ込んで、がば、と上着をはいだ。わお、とギンが楽しそうな声をあげる。

「ええねえ恋次くん、女の子に脱がしてもらひ。しかもはなから上に乗つてもらえるなんて、役得やなあ。おねーさんにええ事いっぺい教えてもらひ」

「な、何言つてんすか、市丸隊長！！ ちよ、助けてくださいよ！」ギンの言葉がどういう事を指してゐるかに気づき、体勢も体勢なので恋次は真つ赤になつたが、雪音はあのですねえ、と呆れ声を出した。

「市丸隊長、あほな事言つてないで、職務にお戻り下さー。さつき副隊長が探しておいででしたよ」

「ええー、いやや。今戻たら、書類仕事せなあかん。そんなんより、ここで恋次くんと雪音ちゃん見てるほつが、面白いわ。

あ、それとも、ボクがいない方がええんかな。雪音ちゃん、恋次くんとはよー一人きりになりたい？」

「ち・が・い・ま・す。別に襲つたりしませんから、安心してひとつお引取り下さい。市丸隊長がいると、治療の邪魔です」

「つれないなあ、雪音ちゃんたら。まあええわ、いくよ。恋次くん、

後でじゃないやつたか、ボクに教えてね

「「市丸隊長！」」

雪音と恋次の相反する叫びをつけて、ギンはするりと救護室を出でいつてしまつた。

「……全く、あの人は」

ギンの気配が完全に消えた頃、雪音がため息混じりに呟いた。それから恋次を引っ張り起こし、

「ほら、座つて」

寝台の端に座らせ、自分はその前に椅子をひいて座つた。足に車のついた棚を引き寄せて、恋次の体を看始める。

途端、恋次は先ほどとは違う意味でがちがちに体を強張らせてしまつた。細い指が傷口に塗り薬を擦り付けるたびに、びくっと震えてしまつ。

（ひー、はやく終わつてくれ……）

耳まで熱くなつてきて、ほとんどパニック状態に陥りかける恋次を、ちらちら見上げながら薬を塗つていた雪音は、その作業が終わると同時に口を開いた。

「ちよつと、市丸隊長に何吹き込まれたんだか知らないけど、そつびくびくしないでくれる？ やりにくくてしょうがないわ。別にあんたを襲つたりしない、って言つてるでしょうが」

「あ、や、その、そういう事じやなくて、俺恥ずかしくて」

苛々した口調に慌ててしまい、つい口がすべる。

「恥ずかしい？」

言葉をとらえて首を傾げる雪音。しまつた言ひんじやなかつた、と思つても、もう遅い。カーッ、と顔中赤くして小さくなる恋次の様子に、理由を理解したのか、

「ああ」

雪音は塗り薬を棚の箱に戻し、湿布を取つた。

「無理やり脱がしたのは悪かつたわよ。でも、いっちはあくまで患

者として扱つてゐるだけなんだから、そう意識しないの。恥ずかしがるだけ、無駄に手間隙かかるだけじよ」

至極冷静に説明してくる。

なるほど、常日頃、男女問わず怪我人に接している四番隊の人間なら、確かに裸は見慣れたものなのかもしれない。

しかしそう言われたところで、こつちは女性の前で服を脱ぐ事に慣れていないのだ、照れたつて仕方ないだろうとも思つ。そういうおうと思つたら、湿布をべとり、と胸の打ち身に貼られた。

「おうわっ！」

突然の冷たさに思わずのけぞる。その反応に驚いて身を引いた雪音は、きょとんとした後、吹き出した。

「何つー声出してんのよ、あんた。ほら、これで終わり。服着ていわよ」

「え、あ、ああ。はい」

（わ、笑つた……）

それまでずっと不機嫌顔だつた雪音が笑つた事に驚いて、恋次は間延びした返事をした。「そそ」そ服を着なおして、立ち上がつた。右足でとんとん、と地面を蹴つてみるが、痛みは全く無い。

「特に心配いらないと思つけど、どこか調子悪いところがあつたら、また来て頂戴。あたしが居なくても、こここの誰かに言えばいいから」「は、はい。あの、鑑原六席、本当にありがとうございました。おかげで楽、に？」

頭を下げようとしたら、手で額を止められた。びっくりして雪音を見ると、彼女はにやつと笑つて、

「お礼はもう良いから、稽古の一つでもしてきなさいよ、新人君。今みたいに弱つちいままだと、そのうち本当に押し倒されるわよ。護廷十三隊の女は、強いんだから」

「いいわー！」

ぺんつ、と恋次の額を叩いたのだった。

「なんか……意外と、普通の人だつた、な」

叩かれた額を撫でながら、恋次は隊舎への道をてくてく歩いていく。

イヅルから聞かされていた話から想像していたほど、恐ろしげな人ではなかつた。確かに口は悪かつたし、少々怯えさせられたけども、最後に笑つた顔は、結構人なつっこかつたと思つ。

「怯えただけ損だつたか」

やれやれと開放的な気分でのびをした恋次は、ふとある事に気づく。そういうえば四番隊舎へ行く前、ギンが言つていた事

「……もしかして肝試しつて、鑑原六席の診察の事か……？」

確かにある種の肝試しではあつたが……しかし。鬼瓦なんていう恐ろしげな渾名をつけたり、肝試しと称したり、ギンは雪音の事が嫌いなのだろうか。それとも、気に入っているからこそそのちよつかいなのだろうか。

（とりあえず、今度会う時があつても、六席には言わない方が良いんだろうな）

告げ口した時の事を考えると、双方からとんでもない事をされそうで怖い。恋次は自分の腕を抱えてぶるつと震えると、逃げるように足を速めた。

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

恋次・市丸の二人が出てきました。恋次も好きなキャラなので、書いていて楽しかったです。何となく年上の女性に弱い印象があります。

最新作は自サイト「南通り」(<http://member.s2.jcom.home.ne.jp/south45/>)にて連載中です

シャル ウイ ドリンク

「雪音、まだ終わんねえのか」

「んー……」

後ろからの声に、はしごの上で大判の本をめくっていた雪音は、曖昧な返事を返した。それから、ん? と顔をあげ、振り返る。

「なつ……一角! あんた、どつから入つてきたの!-?」

「そこの戸口からに決まつてるだろ」

「あ、あほか!」

雪音は本を抱えて梯子を下つると、棚の上に座つて足を組んでいる一角に詰め寄つた。

「ここには関係者以外、立ち入り禁止だつての! 出でけ!」

「ああん? いいじゃねえか、別に。お前今まで氣づかなかつたんだし」

「いいわけあるか! ここは機密情報満載なの! あんたが勝手に入つてきたりしたら、あたしの責任問題になるの!-」

「何だよ、そんなヤバイ情報保管してんのか、四番隊は」

興味を持ったのか、近くの棚に手を伸ばす一角。雪音はその腕を本でバシッとたたき落とした。

「いてつ!」

「手え出すな! 患者の個人情報とか、薬の調合方法とか、外に漏れたらまずいものが山のよつにあるのよ!」

「ンなら口で言やいいだろ! 叩くな!-」

「口で言つても聞かないからでしょ!-? つーかあんた、何しにきたのよマジで!-」

指を突きつけると、棚を降りた一角はけつ、と歯をむいた。

「これから飲み会やるから、わざわざ誘いに来てやつたんじゃねえか!」

「飲み会? 無理です」

即答され、カク、とこける一角。

「はええ！ 何だよ、考えもしねえのかよ、あんだけ酒好きのくせに」

「しょーがないでしょ。まだ時間かかりそんなんだもん」「ンなの、適当に終わらせとけよ。明日でもいいじゃねえか」
ひよい、と本を取り上げられ、雪音はちよつと、と眉間にしわを寄せた。取り返そうとするも、頭上遙か高く持ち上げられてしまった。跳ねても届かない。

「何してんのよ、返せッ！」

「ばーか、取れるもんなら取つてみな」

必死の様子がおかしくて、一角は鼻で笑つた。びき、と青筋を浮かべた雪音は、迷いもなく一角の股間を蹴り上げる。ガギツッ！

「…………！」

鈍い音がして、一瞬硬直した一角がその場に崩れ落ち、無言で悶絶した。雪音は落ちてきた本を受け止めると、「まだ調べ物するんだから、邪魔すんなりやと帰んなさこよ、このハゲ」

ふん、と鼻を鳴らして、再びはしごをのぼる。床に座り込んだ一角は、涙目で顔をあげ、数分間にわたつて聞くに堪えない罵詈雑言を吐き捨てた後、

「て、てめえ、なんか、もう一度と、させわねー、からなー、このクソ女！ 死ね！」

ようよう立ち上がり、外に出て行つた。

「別に誘つてなんて言つてないでしょうが」

雪音は冷たい眼差しでそれを見送つた後、すぐ手元の本に手を落とした。すつ、と意識がそちらへ集中し、周囲の音が遠くなる。

それから後、ふ、と視線を上げた雪音は、壁にかかつた時計を見て、すでに十一時をすぎている事に気づいた。

「あ、やば……やりますきた

身体を動かすと、あちこち固まつていたらしく、ぱきぱき、と派手な音が鳴つて痛みが走る。

「う……うーいたたた……。今日は、この辺にしどくが……本を閉じて棚に戻し、こわばる身体で慎重に降りていく。部屋の片づけをして、伸びをしながら戸口に向かつたところで、ふと棚の上の紙切れに気づいた。

「ん?」

何気なく手に取つて見る。飲み屋の名刺だ。この間新しく出来た店で、古今東西の酒がそろつていて、食事も面と評判になつていて、ところだつた気がする。ひっくり返して裏を見てみると、店の地図の上に、汚い字で、

『来ねえと 店中の酒 先に飲み干す 仕事ばつかしてんじやねー よ バカ』
などと書いてある。

「……一角?」

こんな事を言つて、こんな奴も、この場所に名刺を置いて、いそな奴も、他に思い至らない。雪音はまじまじと名刺を見つめた。それから、不意にくすり、と笑つ。

「分かったわよ。そんなに来て欲しいなら、行つたげるわよ」
さつきの謝罪に、酒の一杯もおじつてやりたいし。雪音はそう思ひながら名刺を懷にしまつと、火を消し、外へ出て行つた。

シャル ウィ ドリンク（後書き）

「」までもお読みいただいて、有り難うございましたー作者の南条です。

酒飲みの交流が続いています、といつことで（笑）雪音は仕事の邪魔をされると不機嫌になります。が、ひどい仕打ちですね（笑）

最新作は自サイト「南通り」(<http://member2.jcом.home.ne.jp/south45/>)にて連載中です

超えて

「……はい、いひは終了。じゃあ次は背中ね。後ろ向いて」

「うス」

雪音の言葉に、恋次は背中を向けた。背中の傷は擦過傷で、範囲は広いが深くはない。これなら塗り薬で十分だな、と手当を始めた雪音は、ふと思いついたことを口にした。

「そういう阿散井君つて、朽木さんと仲良いの？」

「ハ！？」

「うわ！」

いきなり勢いよく振り返つてきので、恋次の手で薬ビンをはじかれそうになる。間一髪持ち直して、雪音は恋次の頭を引っぱたいた。

「ちょっと、何してんのあんたは！ 動くな！」

「す、すんません」

慌てて謝つて、恋次は再び元の体勢に戻る。もう、と口を尖らせて、傷の無いところに飛んでしまった消毒液を拭いていると、

「あの、朽木……さんって、誰ですか。まさか、朽木隊長の事スか？」

探るように恋次が尋ねてきた。雪音は、妙に慎重な口調だな、と思いつながら答える。

「そうじゃなくて、ほら、十三番隊の。朽木隊長が引き取った子。ルキアちゃん、だつけ」

「……」

沈黙が落ちて、恋次が体を強張らせた。素肌に触れていたから、はつきり変化がわかる。

「ごめん、何かまずい事聞いた？」

「あ。いや。そんな事ないです」

恋次は硬直を解いて、息をついた。

「あいつは幼馴染、だつたんです。ガキの頃の」

なんでもない風を装いながら、この男にしては歯切れの悪い返事を返して来る。雪音はまずつたな、と眉を寄せた。理由は分からないが、あまり触れてほしくなさそうだ。

「ああ、そうなんだ」

それで話を終わらせるつもりが、

「何で急に、そんな事が気になつたんすか？」

恋次の方から話を振つてきてしまつた。雪音は一瞬言葉を選んで黙り、しかし変に気を遣つと逆に迷惑かも、と思いなおして、普通に返す事にした。

「この間、海燕さんと都さんと立ち話してたんだけね。

その時、遠くから見てる、つていうか、こつ、用事があるけど近づいていいものか、みたいに迷つてる感じの子がいて。

顔は知つてたけど、名前知らなかつたからさ。都さんに聞いたら、朽木ルキアだつて教えてくれたの。

で、そういうえば前、阿散井君がその名前言つてたことがあつたなあと

「えつ、俺が！？」いつですか」

「えーつと、ふたつき一月くらい前。ちょっとだけ入院してたでしょ。その時、寝言で」

「…………まじっすか」

「まじっす」

恋次はまた黙つた。ふと見上げると、恋次の耳がみるみる赤くなつていく。あらま、と雪音は思わず一やついた。

「何、もしかして朽木さんつて、阿散井君の初恋とか？」

「なつ！」

「動くなつつてんでしょ。殴るよ」

またバタバタ暴れそだつたので、釘を刺すと、恋次は大人しくなつた。が、今度は首まで赤くなり始めたので、おかしくなつてしまふ。

「へー そうなんだ。あの子、阿散井君のねー。もしかして、まだ初恋継続中? 道理で、誰に言い寄られても付き合わないわけだ」

「ちつ、違います。そんなじや無いっスよ」

「えー なんですよ。話したことないけど、朽木さん可愛いじゃない。ちつちやくてきゅんって感じ。きゅーしたい」

「…………。いや、鑑原さんが知らないだけで、あいつチビのくせに、殴る蹴る偉そうな口は利く、すっげー生意氣なんすよ」

「ぶつぶつと、だが親しみのこもった口調で言つから、恋次にとつて心許せる相手なんだな、と思つ。そして、自分には幼馴染という存在がないから、羨ましいとも思う。」

「いいじやない、気心知れた相手って感じで。幼馴染みの恋人があ、いいなー」

「だから、違いますって。あいつは家族みたいなもんで……。つかそんな事、あるわけないじやないすか」

「何で?」

「……」

再度、恋次の体が硬直する。短い沈黙の後に出た声は、生硬だった。

「あいつは、もう朽木家の人間だから。俺みたいなチンピラとは、いつまでも一緒にいられないっス」

「……」

今度は、気軽に何で、とはいえなかつた。

雪音自身、流魂街の出だ。護廷十三隊に入るまで、卯ノ花家で世話になつていたからこそ余計に、貴族と平民の、厳然たる身分差と軋轢は理解している。

例え、護廷十三隊に入り、席官となり、表面上は貴族と対等の立場と言わっても、両者の間には越えられない溝があるので。

「そつか

何と言つていいか分からなくて、雪音は短く呟いた。しかしすぐ

思い直して、余計なお世話をやく。

「ルキアちゃんが朽木の家に入つてから、会いに行つた事あるの？」

恋次は緊張したように肩を持ち上げた後、深々と息を吐き出した。

返事が返つて来ない。

（会わないつて決めてるんだな、多分）

雪音はやれやれ、とわざとらしくため息をもらす。

「阿散井君つて馬鹿正直だね。つていうか馬鹿だね。大馬鹿」

「……断言しないでくださいよ」

恋次が苦笑する。雪音は、だつて馬鹿じゃない、と繰り返して、話を打ち切つた。それ以上口を挟めないと思ったので。

超えて（後書き）

はじめでお読みいただいて、有り難うございましたー作者の南条です。

今回は恋次のお話。ルキアと恋次の関係は好きです。恋次の感情は恋愛といつより家族愛に近いとは思いますが。

最新作は自サイト「南通り」(<http://members2.jcmonthome.ne.jp/south45/>)にて連載中です

「十一番隊つて、何でアホばっかなんですか」

「あ？」

手当を終えたところでかけられた質問に、剣八はじろりと相手を見た。剣八ほど大柄な男に上から見下ろされれば、普通威圧的に感じるものだが、彼の前で包帯を片づけた四番隊の女は全く動じなかつた。

「だから、何でアホばっかなんですか、十一番隊の連中つて。どいつもこいつも、敵に猪みたいに突つかかっていつて、ずたぼろになつて私たちの手を煩わせて。

あなた達が居なければ、私たちの仕事がずいぶん減るんです。はつきりいって、大・迷・惑・なんです」

護廷十三隊中最強と名高い十一番隊は、血氣盛んな男達で構成されているから、救護・補給部隊であり、最弱と揶揄される四番隊とはすこぶる相性が悪い。

その構図は、十一番隊の面々が四番隊を怯えさせ従わせるというのが普通なので、こうまであからさまに面罵する四番隊隊員は珍しい。しかも、文句を言つている相手は、十一番隊隊長の更木剣八なのだ。

「いい度胸してやがるな、お前」

あまりにも堂々と文句を言われ、剣八は怒るより感心してしまつ。女は肩をくませた。

「折角隊長がいらっしゃつたので、これを機会に上申させて頂こうと思いました。隊長殿から隊員の皆さんに注意してもらえませんか」「無理だな」

手当された腕を動かして、剣八はあつさり応える。女が不満げに眉をつり上げるのを見て、にい、と笑つた。

「喧嘩は楽しむ事が第一だろ。戦いの真つ最中に、てめえの体を傷

つけないよつになんて、そんなつまらねえ事気にしてやつてられるかよ。

大体、この俺にできねえ事を、あいつらに言つて聞くわきやねえ

な

「……」

女はうろんげなまなざしで剣八を見上げた後、首を振つて立ち上がつた。

「アホにつける薬は無いって事ですね。よおく分かりました。失礼致します」

「ちょっと待て」

そのまま背を向けて行つてしまいそうだったので、剣八は女の腕を掴んだ。怪我をした手で掴んだので、さほど力を入れたつもりではなかつたが、引っ張られて女は後ろにこけかける。

「何するんですかっ！」

「お前、名は

「は？」

「てめえの名前だよ。教えろ」

「……話の脈絡がつかめませんけど……。鑑原です。四番隊第五席、

鑑原雪音

「雪音か

「え、何でいきなり名前呼び？」

名前呼びが思い切り予想外だったのか、女、雪音は一瞬素に戻つて、ため口で問い合わせてきた。

* * *

「あっ、鑑原さん。お疲れ様です」

眉間にしわを寄せた雪音が扉を開けると、補給品の整理をしていた花太郎が顔を上げた。雪音はおざなりに唸つて彼のそばに座る。

「花君、おつかれ」

大きなため息をはき出した彼女に、花太郎は気遣わしげな笑顔を向けた。

「さつき、十一番隊の更木隊長がいらしてたんですね」

「うん、そーね」

「話し声聞こえてきましたけど、鑑原さん、更木隊長相手によくあそこまで言いましたね……。ぼく、ひやひやしましたよ」

剣八が無意識に発する靈圧だけで、周囲を圧する。隣の部屋にいた花太郎でさえ、冷や汗をかいてしまうほどだつたのだから、相対していた雪音が感じていた圧はどれほどのものだつたろう。

その中で、何らたじろぐ事なく悪態をつくなど、もはや勇氣とうより、無謀というか、命を捨てに行つているとしか思えない。

雪音は肩をすくませた。

「隊長相手だからこそ、あそこまで言えたのよ。あの程度で怒り心頭になるような奴が隊長だつたら、器が小さすぎるつて」

「そ、そりですかねえ……」

一番隊の碎蜂隊長あたりは激怒しそうだが。そう思いながら薬瓶を箱に入れると、脇から手を伸ばして、雪音が手伝いだした。顔はまだ不機嫌なままだ。

「ほんと、十一番隊つて意味わかんないわね。喧嘩が楽しいから怪我しても全然気にしないつて、何なのよ。

隊員がアホなのかと思つたら、隊長もアホだつたなんて、最悪。むかつくわー」

「か、鑑原さん、言い過ぎじゃないかと……。十一番隊、嫌いなんですか？」

四番隊は十一番隊からさげすまれてるので、その扱いに愚痴を言つ四番隊員は多い。が、雪音は歯に衣着せなさすぎだ。

もう更木隊長は居ないだろうが、びくびくしながら花太郎が言つと、彼女は口を尖らせて、震点の蓋をきつく閉める。

「怪我する奴は、嫌いよ。誰と限らずね」

「え、じゃあ何で、いつも怪我人ばかりの四番隊に居るんで……」

いや、何でもないです」

雪音は自分が言いたくないことを聞かれると、途端に機嫌が悪くなるのだ。じろ、と睨み付けられて、花太郎は小さくなるしかなかつた。

ここまでお読みいただいて、有り難うございました！作者の南条です。

剣八と花太郎君登場です。

最初に走り書きしたのが剣八の話で、初期の段階では彼と雪音のお話になるはずでしたが……剣八が動かなかつたので無理でした（笑）

こういう勝ち気な女性、好きそうな気はするんですが。

花太郎君は雪音に厳しい事を言われながらも可愛がられている後輩です。時々地雷を踏みます（笑）

最新作は自サイト「南通つ」(<http://member.s2.jc.com.home.ne.jp/south45/>)にて連載中です

「はい、これで今日は終わり」

そういうつて雪音が包帯の端を止めて手を離すと、一角はさつやへく足を動かした。

「おーすげー、もう痛くねえや」

この間まで、何ヵ所も骨が折れて身じろぎも出来ない状態だったのが、膝を曲げて足の指一本一本を動かせるようになつていて。背骨に縦に沿つて長い釘を打ち込んでこるような激痛もだが、何より自由に動けない事が苦痛だった一角なので、こつして元通り足が動くようになったのはとても嬉しい。

「さつすが雪音だな。薬の効きがすげえいいわ、大したもんだぜ」

嬉しくて、手放しのほめ言葉を口にする。と、雪音は虚を突かれたように田を瞬かせた後、「……良いから、おとなしくしてなさいよ」

つづくらほおを赤らめてそっぽを向いた。普段なら上から押さえつけるような居丈高な口調なのに、今は違つ。

へつへつ、と笑つて、一角は寝台の上で体をひねり、床に足をあらした。

「可愛いねえ、照れてんのかよ、雪音ちゃん」

からかうと、きつい視線が向けられる。

「あんたぶつ飛ばすわよ。っていうか、まだ立つちや黙目だつての。どこ行こうとしてんのよ」

「隊舎にもどんだよ。もつー田も横になつぱなしだつたから、体がなまつちました」

雪音が眉間にぎゅっとしわを寄せ、診療記録の紙を挟んだ板で、いきなり一角の頭をひつぱたいた。

「いてつ！ 何しやがる」

「あんたあほか！ 全治一週間だつてさつを言つたでしょ、人の話

聞いてんのー？

しばらくは稽古も討伐任務も厳禁だつてのよ」のハゲ！

「ほんな怪我で一週間もつだうだしてられつかよ、あとハゲじやねえよ馬鹿雪音！」

「骨くつつけで傷口塞いだだけなんだから、詰所出るまでに血まみれで床はいすりまわる事になるわよ。

つていうかそれで良いつて言つんなら、今こいであたしが体かつさばいてやるからそこになあれ」

「てめえ、腐つても四番隊の隊員が、怪我人の怪我増やしてびひすんだよ！ そのメスしまえ！」

取つ組み合つてにらみ合つていると、入り口の布をよけて、綾瀬川の親が部屋に入ってきた。

「つるさいなあ。何してるのさ、一角、雪音ちゃん」

「だつてこいつが！」

同じタイミングでお互いを指さす一人を見て、だいたい状況が分かつたらしい。

「はいはい、いちいち喧嘩しないでよ

べり、と一人を引きはがす。

「離せ！」親！ こうなつたら、今日このきつちり決着つけてやる…」じたばた暴れる一角の頭を、親はぺちんと弾いた。

「どうせまた一角が馬鹿な事言つて、雪音ちゃんがキレたんだろう？ そんな事どうでもいいんだよ」

「どうでもいい！？」

「いいの。それより雪音ちゃん、頼んでたもの出来た？」

一角をあつさり無理して、親は雪音に向き直る。親に押されつけられた額をさすつていた雪音は、

「え？ あ、うん、今日ちょっと渡しに行つてた。えつと

……あつた、はい」

背に負つた鞄をこそそこ探つて、小さな瓶を取り出した。淡い青がグラデーションで入っているガラス瓶は、光に反射してきらりと

光る。中にはとろりとした液体が入っているようだ。

「親がぱつと顔を輝かせてそれを受け取つた。

「ありがとう！ よかつたー、もう少しで、きれるといひだつたんだよね」

「何だ、それ」

ひとまず糸を収めた一角が尋ねると、弓親はやたらくねくなした動きで、

「椿油だよ。色々試してみたけど、雪音ちゃんが作ってくれるのが一番、僕の髪を美しくつやつやにしてくれるんだー」

「へーそうかよ」

「親の動きが気持ち悪いと思ひながら、平坦な返事を返した一角に、雪音はにやりと笑つて言つた。

「何ならあんたにも作つてあげようか。育毛剤」

「いらねえよ！ ハゲじゃねえつつつてんだらうがー！」

「それにしても、十一番隊つて毎日毎日、あたし達に手間暇かけさせるから、ほんと鬱陶しいわー。何で、たかが虚討伐でこんなはずたぼりになるのかしら。無能？」

三人分の茶を入れた雪音は、椅子に腰掛けて、実にしみじみとした口調でいった。

「喧嘩売つてんなら、買つつつてんだらうが」

ひとまず大人しく寝台に横たわった一角が額に青筋を浮かべ、ドスのきいた声で唸る。が、雪音は聞き流した。あらぬ方向を見ながら、はあ、とため息をつく。

「どうせ十一番隊の人が来るなら、草鹿副隊長だけ毎日いらっしゃればいいのに。あ、弓親はいつもオツケーだから」

「当然だね」

「何でこいつだけ」

「だつて弓親、全然怪我しないもん」

「僕の美しい肌に、醜い傷跡なんてつけたくないからね」

「怪我しない人なら、いつ遊びにきても大歓迎よ」

「四番隊のくせに、怪我人嫌がるなよ……。んじゃ、副隊長は何で来て欲しいんだ?」

「可愛いから」

「即答だよこいつ」

突つ込むと、雪音はだつて! とこぶしをぎゅっと固める。

「だつて草鹿副隊長、超超超可愛いじゃないの! プリティージやないの! ちつちやくて、ちょこちょこしてて、お人形さんみたいで、ああもう可愛い。更木隊長みたいに、背中にのつけたい。部屋に飾りたいつ。一回でいいから、ぎゅーつて抱きしめたいつ!」

頬を赤らめ、いつになくきらきらと田を輝かせる雪音は、猛烈に別人ぽい。

「……変態じやねえか、それじや」

引き気味に眩く一角に、弓親はずずー、と茶をすすつた。

「ただ可愛いものが好きなだけでしょ。雪音ちゃん、小さいものに目が無いし。こうこうとこらは、女の子らしくよね」

「ほー。こいつ女だったのか」

ゴッ。

言葉が終わるか終わらないか、雪音の肘が一角のみぞおちに勢いよく落ちた。

四番隊常連客（後書き）

はじめでお読みいただき、有り難うございましたー作者の南条です。

犬猿の仲がいつの間にか仲良し?になりました。

最新作は自サイト「南通り」(<http://members2.jcom.home.ne.jp/south45/>)にて連載中です

バレンタインティ 1

「バレンタイン？ ああ、そういうえば、そういう時期ですね」書類棚の整理をしながら雪音に、乱菊がブー、と口を尖らせた。

「なあに、その気のない返事。若い娘らしく、もうちょっとしゃべ、キヤツ 張り切らなきや みたいな反応ないの？」

「……何期待してんだか知りませんが、ありません。

つていうか、あたしとそう年かわんないでしょ、乱菊さん」雪音は口を曲げて、棚に視線を戻す。乱菊がこういう事を言い出す時は、大抵人で遊ぼうとする時だ。相手にしない方が良いのは、これまでの経験で良く分かっている。

「でもさー、あの人にあげたいとか、そういうの無いの？」

「無いです」

「全然？ 一角とかは？」

「は？」

思いもかけない名前に、思わず振り返る。乱菊はにやー、と笑つた。

「ほら、ちゃんと居るんじゃないの。チヨ口は手作り？ それとも現世に買ひにいく？」

「いや、何でそこで一角が出てくるんですか」

「だって、付き合つてんじゃないの？」

「誰が」

「あなたが」

「……誰と」

「一角と」

「ばさばさばさ」、と手からファイルの山が落ちる。雪音は心底嫌そな顔で乱菊を見、深々、とため息をついた。

「……松本副隊長。仕事さぼってないで、もう戻つたりびりですか。

あほな事を考えすぎです

「何よ、違うの？ あんだけ仲良いくせに」

「何いつてんですか、全く」

確かに仲は良いが、付き合つた覚えはない。どうせまた、乱菊が好き勝手な妄想を働かせるだけだろう。雪音は、もう本当に相手をするのはやめようと心に決めた。落としたファイルを集めながら、ふと思い出す。

「ああ、でもバレンタインにいつもあげてる人なら、いますね」

「えつ！ 誰！？」

「山本総隊長」

「はあ！？ あんた、じじいコンだつたの」

「違う！」

相手にしないと決めたのに、あんまりな言い様に思わずつっこんでしまう。

大体、護廷十三隊総隊長を、仮にも副隊長がじじい呼ばわりとは何事か。そのところをこんこんと説教しようとしたら、乱菊はこっちの話など全く聞く耳持たず、

「じゃあ何で？」

あつさり話の腰を折つて尋ねてくる。本当に自分勝手な人だな、とげんなりため息をつきながら、雪音は答えた。

「何でつて、総隊長にはいつもお世話になつてゐるから、せめてものお礼です。

「そうだ、富貴屋の芋羊羹、買って来なきゃ」

人気だからすぐ売り切れちゃうんだよね、と咳く雪音に、乱菊は再びブー、と声を上げた。

「何それー、雪音が一角に何あげるか、皆で賭けてたのにー」「何してんですかあんたはー！」

人のいないところで、何遊んでるんだこの人は！

バレンタインティ 2

「弓親、いるー？」

乱菊が声をかけながら弓を開けると、弓親が顔を上げた。毎日中から酒盛りをしていたらしい、手に杯を持っている。

「あらっ、飲んでるの？ あたしも入れてー」

うきうき声を弾ませて座に加わった乱菊に、弓親と対面して座っていた一角が嫌そうな声を漏らした。

「何だよ、またサボリに来たのかよ、松本」

「あ、一角居たんだ」

「居たんだ、じゃねえだろ。ここは十一番隊だぞ。お前が居る方が、おかしいだろ？ が

文句を言つも、乱菊はまあいいじゃない、とあつさり流して、勝手につまみ始める。差し出された杯に、弓親が仕方なく酒を注ぎながら、

「で、何？ 僕に用があつたんじゃないの、乱菊さん」

尋ねると、乱菊は酒を煽つてから「そうそう」と口火を切る。
「雪音のことだけども、一角に何もあげるつもりないんだって」
「へえ、そうなんだ。じゃあ、この賭けはお流れかな

「ブツ！」

いきなり名前が出てきたので、一角は酒を吹いた。汚いなあ、と顔をしかめる弓親に食いつく。

「ちょっと待て！ 賭けつて何の話だ！」

弓親は僕が言い出したんじゃないよ、と言い訳しつつ答えた。

「今度のバレンタインの時、雪音ちゃんが一角に何あげるか、皆で賭けてたんだよ。僕はお酒関係と踏んでたんだけどな

「あたしは超可愛いチヨコと、雪音本人」

「本人、って……おまつ、お前ら、何勝手にやつてんだ！ まさか

それ、雪音に話したのかー？」

「うん。だつて結果が分からないと、賭けにならないし、「なに『聞くの当たり前じゃない』みたいな顔してんだ、お前はつ！」

しつれと舌吐する乱菊に、一角は思わず拳を固めた。

「そんな馬鹿な事してんじゃねえ！ つーか大体、あいつがそんな気の利いた事するわけねえだろ！ 僕はこれまでだつて、一度も貰つた事ねえよ…」

「あー、そりなんだ。寂しいわね」

「るつせえ…」

少なからず氣にしていたのでちよっぴり傷ついて、思わず怒鳴る一角。弓親は魚をつつきつつ、言ひ。

「そういう雪音ちゃんつて、イベント事にはあまり興味ないみたいだね。僕も貰つた事ないな」

乱菊は詰まらなさそうに、酒を口に運んだ。

「でもさあ、最近一角と『キタつぽいから、そういうのもあります』と思つたんだけだなー」

「何だよ、その『キタつてのは』

一角は、また何を言い出すかと顔を引きつらせる。だから、と乱菊は人差し指を立てて、振つてみせた。

「雪音と一角が付き合つてゐるみたいーーつて噂があるから」「付き合つてねえよ。どうから出た噂だ、そいつあ

「あたしの名推理」

「お前かよ！ 変な妄想してんじゃねえよー。」

「えー、だつて二人で『ご飯とか良く行つてるでしょ』

「ダチでも行くだろ、それくらい」

「飲み会終わつたときだつて、つぶれた雪音をお持ち帰つしてゐじゃない」

「部屋に送つてゐるだけで、何もしてねえー。」

「何だ、そりなの。意氣地なし」

「……」

「一角、食事中に乱闘はやめてよ」

「めかみに青筋を浮かべた一角が、刀を抜こうとする前に止めて、
『親は猪口をくい、とあおつた。満足げなため息をもらして、
『ま、付き合つてないにしても、雪音ちゃんと一角、仲はいいから
ね。今年こそは何かしらあるかな、と思つたんだけど、やつぱり駄
目だつたか』

「そつみたいねー。雪音も『ありえない』くらいの勢いで否定して
たし。もうね、天地がひっくり返つても無いつて感じだつた」

「……だあら、そうだつて言つてんだろ？が」

雪音を女として見ていないが、そう断言されてしまうのも、何と
なく気に障る。一角はむすつとして、そっぽを向いた。が、
「でも、バレンタインに毎年あげてる人はいるつてよ」

「は？」

乱菊の言葉に、思わず顔の向きを戻してしまつ。

「へえ、雪音ちゃんにそういう人が居たなんて、初耳だな。もしか
して、長年の思い人が居るとか？」

『親も興味を持つて、身を乗り出した。男つけが欠片もない雪音
に、そういう相手がいたとは。一体誰のことかと思ひきや、
「山本総隊長、だつて」

「はあ！？」

「……ずいぶんど、渋好みなんだね。雪音ちゃんつて」

意外な名前に、一角も『親も田を丸くしてしまつ。そりよねえ、
と乱菊は髪をかきあげた。

「雪音曰く、いつもお世話になつてゐるから、そのお礼つてことらし
いんだけどさ。なあんでよりによつて、バレンタインに山本のじい
さんなんだか、よくわかんないわ」

「でも、確かに山本総隊長に可愛がられてるつぽいよね、雪音ちゃん。お爺ちゃんと孫みたい、といふか」

「富貴屋の芋羊羹、あげるみたいよ」

「ああ、あそこのが好物なんだつけ、総隊長」

ペちゅくひゅとお喋りをする一人を斜めに見やつて、一角はハ、と息を吐き出した。

「別にどうでもいいじゃねえか、そんなの。あいつはそういう色気のない奴なんだから」

話をそれで打ち切るつもりで、投げやりに言い捨てる。が、「なーによ一角、貰えないからって、拗ねる事ないじゃない。もしかしたら気が変わつて、ラブラブなのくれるかもよ?」

慰めるつもりが煽るつもりか、乱菊がそんな事を言い出したので、一角は思わずガツと吼えた。

「そんなのある訳ねえだろうが、馬鹿野郎!」

(賭けのネタにされたなんて聞いたら、あいつあ意地でも持つてこねえよ! 雪音はそういう奴だ、畜生!)

断言しつつ、しかしそれもちょっとぴり寂しい気がする一角だった。

バレンタインパーティ 3

終業時間後も仕事に追われ、あちこちの隊舎を回っていた雪音は、十番隊隊舎で、妙に甘い香りと、焦げ臭い臭いが混じって漂つてゐる事に気づいた。

「ん……何これ？」

何気なく匂いの元を追つていったら、炊事場のところにたどり着いたので、覗いてみる。そこには何故か八番隊の伊勢七緒、五番隊の雑森桃が、十番隊の乱菊と一緒にいた。

「伊勢さんに、桃ちゃん？ こんなところで、何してるの？」

「あ、鑑原さん！ 今、ケーキ作ってるんですよ」

言いながら振り返った雑森は、手の中にホイップクリームのボウルを抱えている。ココアパウダーの量を計りながら、乱菊が「こやかに言つた。

「バレンタインの準備中なの。良かつたら、雪音も参加してくれ？」
「結構です。遠慮します」

ついこないだ、乱菊が自分をネタに妙な賭けをしていた事が発覚したのだ。ここで参加したら、どんな遊びに使われるか、分かつたものではない。

雪音が冷たく即答すると、乱菊はそう？ と呟いて、再び作業に戻つた。途端、悲鳴を上げる。

「うわ、七緒！ 何で塩なんか入れてんの？！」

「え、あ、隠し味になるかと……」

「ならない！ ならないからそれ！」

「あつ、じつちのチョコレート煙出でます！」

「わ、火強すぎー。焦げてる焦げてる！」

「きやー、ちよつと、待つてくださいー！」

乱菊や七緒がどたばたと走り回る炊事場は、まるで戦場のようだ。

「……えーと。頑張ってください」

周囲に漂つ何とも言いがたい匂いに、雪音は一いつと遠ざかって、その場をこつそり逃げ出した。

「皆、一生懸命ねー」

隊舎の外に出た雪音は、遠くなつてもまだ聞こえる騒動に、独り言を呟いた。と、

「何がつスか？」

「うひやあつ！」

不意に後ろから声が降つてきて、思わずびくつとする。振り返ると、そこには恋次が立っていた。仕事帰らしく、鞄を背負つている。

「あ、阿散井君、いきなり声かけないでくれる?.. びくつするじゃないの?」

「すんません。そんな驚かれるとは思つてなかつたんで」

怒られて、ばつが悪そうに謝る恋次。雪音が、まあいいけど、と胸をなでおろすのを見て、

「で、何が一生懸命なんすか?」

あらためて質問してきた。雪音は十番隊隊舎を指で示して、
「炊事場で、乱菊さん達がバレンタインのお菓子を作つてたから。皆一生懸命やつてんだなーと思つて」

「ああ」

恋次はへら、と顔を緩めた。

「さつきから良い匂いすると思つたら、チョコだつたんスね。そうか、もうすぐバレンタインかー」

「嬉しそうね、阿散井君。チョコくれるような彼女が出来たの? あ、もしかして、朽木さんからもらえたとか」

何気なく言つたら、恋次の笑みが、苦笑に変わつた。

「いや、そういう訳じゃないんですけど、俺甘いもの好きなんで。バレンタインになると、現世から色んなチョコとか和菓子とか入つくるんで、色々食べられて嬉しいんス。」

つか、ルキアはそつこつといふ氣が回るよつた奴じやないし」

「ああ、そうなんだ」

また軽く地雷を踏んでしまつたか、と雪音は頭をかいた。すると

恋次が、

「雪音さんは、誰かにチラ口あげるんスか？」

なんて尋ねてきたので、雪音の眉間にぎり、としわが寄つた。

「……まさか阿散井君、あんたもあの賭けに参加してたんじやないでしょうね」

「は？ 賭け？ つて、何すか？」

きよとん、と田を瞬くところを見ると、全く知らないらしい。「

ああ、いこや。知らないなら気にしないで」と手を振つて、雪音は肩をすくめる。

「あたしはそつこつ、興味ないから。総隊長に芋羊羹を差し上げるべりこよ」

「あ、もしかして富貴屋の奴ですか？ あそこの芋羊羹、総隊長ご贔屓なんすよねー、俺も好きつすよ。高いから、たまにしか食えないけど」

味を思い出すように、田を閉じて口を動かす恋次を見て、雪音はくすっと笑つてしまつた。

「そんに好きなら、阿散井君にもあげようか？」

何氣なく言つと、恋次は「え！」と背筋をピンと伸ばして、田を丸くした。

「マジっすか！？ 良いんですか、俺なんかが貰つちやつて」「

「良いわよ。ついでだし」

「うわ、ほんとですか！ すげー嬉しい、ありがとつ雪音さん！ 後でちゃんとお返ししますよー」

恋次は心底嬉しそうに笑つて、雪音の手を握つてぶんぶん上下に振つた。雪音は、そのあまりの喜びよつに押されながら、

「ど、どうこたしまして」と答えたのだった。

バレンタインティ 4

「一月十四日、バレンタインティ。

男も女も何となく落ち着きが無く、瀧靈廷内に浮ついた空気が漂うその日、仕事を終えた雪音は、総隊長の私室を訪れていた。

「粗末なものです、どうぞ」

畳の上に菓子の包みを差し出し、頭を下げる雪音。その前に座った山本は、ほうほう、と軽い笑い声をあげた。

「ありがたく頂戴するぞ。毎年気を遣わせてすまんのう、雪音」

「そんな、とんでもないことです」

顔を上げて、雪音はにこっと笑った。実の祖父のように慕つてゐる山本に、じうじて礼を言われるのは、嬉しい。

「山本お爺様には、いつも大変お世話になつていますから。こんなものでは、感謝の気持ちを表しきれません」

素直に言ひつと、山本はまた笑つた。

「何を言ひつておる。お主が元気に笑つていてくれる事こそ、最上の孝行じや。」これで後は、結婚でもして落ち着いてくれれば、言ひ事はないんじやがの」

「…………えーっと、それはまあ、おいおい」

やばい、話が長くなる。そう思つて言葉を濁した雪音の顔を見て、

山本はんん？ と白い眉毛をあげた。

「なんじや、おぬしにもそろそろ良い男が出来たのかの。」その後、誰ぞかにちょこれいとを渡しにいくのか？」

妙な勘違いをされて、雪音は手を振つた。

「いえいえ、居ませんよ、そんな相手。あたしはまだまだ半人前ですから、結婚だの何だの、考える余裕なくて」

「ふうむ、ならばわしが一つ一つ、見繕つてやるうかの？ 折りよく、縁談話を持つてきたのが、確かここに……」

山本がそういうて棚に手を伸ばすのを見て、雪音は慌てた。

「それでは、職務がありますのでこれで失礼致します、総隊長！」

がばつと平伏し、相手に何か言つ隙をとえずにはばやく退出する。写真を手にしていた山本は、雪音の足音が遠ざかっていくのを聞いて、残念そうにそれを棚に戻した。そして、

「……梅」

小さく咳く。と、どにからりともなく黒須くめの男が、山本の背後に現れた。

「はつ、ほほ」

「雪音が誰ぞかにちょこれいとを渡すよつなせ、ぶりは、あつたかの？」

「いえ。ですが、十一番隊第八席の阿散井恋次が、富貴屋の芋羊羹を雪音様より頂く約束をしているようです」

山本の細い目が、きらつと開いた。瘦躯からゆうりつ、と靈圧が立ち上り、梅と呼ばれた男が萎縮して身を縮める。

「ほほう……十一番隊の小僧がの……」

山本は煙管を手に取つて、火皿に刻み煙草を詰めながら、淡々とした口調で言つた。

「梅。この後も雪音を見張り、もし小僧が雪音に何ぞ無理強いするような事があれば、斬れ。わしが許す」

「はつ」

答えた梅は、すぐさまその場から消え去つた。

火をつけた煙管をくわえた山本は、雪音が置いていった包みを開くと、しわだらけの顔を緩めて笑う。

「……さて、わしは芋羊羹を頂くかの。これ、誰か。茶を持って」

（あー、危なかつた。また縁談話につかまるところだつた……）

滝靈廷の中を走りながら、雪音はふーっとため息をついた。こんな自分に目をかけてくれる山本には、感謝しきれないほど感謝している。が、雪音は結婚なんて、まだ興味がない。勧められても困る

だけだ。

大体、貴族のようく血脉を作る必要のない一般人にとつて、結婚は、現世のそれほど重要なものではない。護廷十三隊でも、結婚している、もしくはしていた者の方が少数なのだから、無理に縁談をする必要だつてないはずだ。

(まあ、お爺様のあれば、ありがたい親心つてものなんだろうけど)一人ごしながら、目的地が近くなつたので、足を緩める。走つたせいで乱れた髪を手櫛で直しながら歩いていたら、前から、五番隊隊長の藍染惣右介がやつてくるのが見えた。

「あつ、藍染隊長」

ぴつと背筋を伸ばして挨拶をすると、藍染もひきしに気がついて、ふわっと笑つた。

「やあ、雪音君。もう仕事は終わりかい?」

「は、はい。藍染隊長……は、それは、チョコレートですよね」

藍染は両手に紙袋を持っていた。その中にはぎつしり、色とりどりの包装がなされたチョコレートが詰まつている。藍染は少し困つたように苦笑を浮かべた。

「ああ、そなんだ。ちょっと外を歩いていたら、次々と渡されてしまつてね。気持ちは嬉しいんだが、これでは身動きが取れないから、一度隊舎に戻らうと思つんだ」

「慕われてらつしやるんですね。さすが、藍染隊長」

緊張しながら早口に言つと、藍染は目を細めて、苦笑をまた優しい笑みに変えた。

「雪音君は、どうなのかな?」

「は?」

「君からチョコレートを貰えたら、僕はとても嬉しいんだが。一つ、頂けないかな?」

「……え、ええつー?」

雪音はぎょっとして、思わず大声を上げてしまった。

藍染は溫和で優しく、身分が低い者にもわけ隔てなく、気さくに

接してくれる。また、穏やかな外見とは似つかわしくなく、戦闘においても自ら前線に立つて、その圧倒的な靈圧で鮮やかに戦う事の出来る人物なので、非常に多くの隊員に好かれていた。

だがその高潔さ故か、あるいは清澄な靈圧のせいか、雪音は藍染と対峙するたび、妙に緊張してしまったのだ。藍染は好悪を云々できるような相手ではなく、ましてやチョコレートを渡すなんて、軽々しいことが出来るわけがない。

そんな思いがつい声に出してしまったのだが、

「あつ、し、失礼しました！」

「冗談だよ。まさか脅し取るうなんて、思ってやしないせ」

焦つて謝る雪音に、藍染はくすくす笑つて済ましてくれた。

「それじゃ、僕は戻るから。雪音君も頑張りなさい」

そういうて、爽やかに手を振つて、五番隊隊舎に向かって歩いていく。

「は、はい！ お疲れ様でした！」

雪音はその背中にぺこっと頭を下げた。十分遠くなつたか、と思う頃に頭を上げて、胸をなでおろす。

「ああ……びっくりした。藍染隊長もあんな冗談言つのね……」

あの雛森が尊敬して止まない人だから、もつとまじめな感じかと思つていたのだが。まあ、実直なだけでは、あれほど慕われる事もないのだろうけれど。

「……っと、早く行かないと」

ふう、と息を吐いた雪音は、氣を取り直して再び歩き始めた。すでに口が傾きはじめている。

よつやく十一番隊隊舎についた。雪音は、一度立ち止まってふつ、と息を吐き出す。四番隊から一番隊、そして十一番隊と隊舎を移動してきたので、結構な距離だ。

(遅くなつちやつた)

予定より遅れたが、恋次はまだ隊舎にいるはずだ。ヤード中をのぞき、すみませーん、と声を出したといいで、

「あつ、雪音さん！ 待つてましたよつ！」

じすゞす床を踏みしめながら、恋次が出迎えに走ってきた。雪音は顔の前に手を立てて、「じめん、待たせて！」謝る。

「いやいこつすよ。むしろ、わざわざ来てもうつちやつてすんません。俺の方から出向くのが筋なの」

「そんな事良いわよ、気にしなくて。……じや、はい、これ。約束のもの」

そうこつて、雪音は抱えていた包みを差し出した。恋次がぱつと顔を輝かせて、それを受け取る。

「ありがとうございます！ すげー嬉しいッス！ つわー、富貴屋の羊羹、食つのこつふりだな。この重さがまたいいんスよねー、食べ応えあつて」

今にも包みを破いてかぶりつきそうになはしゃがれ、雪音は思わず笑つてしまつた。

「あはは、そんなに喜んでもらえるなら、あげた甲斐があるわ。味わつて食べてね」

「はー、頂きますー。あ、じつせなー、雪音さんも一緒に食べませんか？」

「え？」

思ひがけない言葉に、きょとん、と田を瞬く。恋次は隊舎の敷地にある食堂棟のまつを示して、

「今なら夕飯前で食堂空いてるし、こないだ阿虎で玉露買つておいたんスよ。皿いつすよー」

「良いの？ あたしも貰つちやつて」

それだけ好きなら、最初から最後まで、自分で味わいたいのではなかろうか。そう思つて聞いたが、恋次は氣さくに笑う。

「当然つすよ、雪音さんがくれたもんなんスから。時間があるなら、一つじうつすか？」

「ほんとに呪いの？」

「勿論」

雪音はんー、と考える間を置いた。

「」の後はどうせ部屋に戻るだけだし、あの芋羊羹は人にあげるばかりで、自分は久しく食べていない。夕飯前で小腹も空いているし、恋次が「」つまで言つてくれるのなら、それに甘えていいかもしねない。

「うーん、じゃあ、ちょっとだけ頂こつかな」

やう答へると、恋次は早くも歩き出して、「じゃ、こつち来て下れー」「わざわざ弾んだ声で、雪音を誘つた。

がらり、と食堂の扉を開いた恋次は、そこに一角と「親の姿を認めて、あれつと声を上げた。

「一角さん、弓親さん、お疲れ様つす。もう飯つすか？」

「おう、恋次。飯前に、ちょっと一杯な」

「お疲れ様。……あれ？ 雪音ちゃん」

「」親が恋次の後ろになかば隠れている雪音に皿ぞびとく氣がつき、声をかける。雪音は恋次に続いて中に入りながら、や、と手をあげる。

「ちょっとお邪魔するわよ」

「珍しいね、雪音ちゃんが「」顔出すなんて。何か用？ あ、もしかして一角にチヨコあげにきたとか」

「なつ」

こちなり話題に出でさせよつとする一角と、「はあ？」と顔をあげる雪音。

「何でそつなるのよ。違つわよ」

「何だ、違つんだ。残念だつたね、一角」

「あ、あんなあ！　俺は別に、こんな奴からチ^コロ貰いたいとか言ってねえだろ！」

「指差すなハゲ」

唐突にこんな奴呼ばわりされて、雪音は軽くキレかかつた。しかし、事情が分からぬながらも、不穏な空氣を察した恋次がまあまあ、と場をとりなす。

「良かつたら一角さん達も、羊羹食べませんか。雪音さんから貰つたんすけど」

が、その言葉で「親の田^たがきらん、と光つた。すばやく立ち上がり、恋次の手元を覗き込み、

「富貴屋の芋羊羹だ。そつか、雪音ちゃんの本命つて恋次だつたんだ」

不穏な台詞を吐いたものだから、

「「「はあつ！？」」」

その場の三人がいっせいに、素つ頓狂な声を上げてしまった。

「恋次、お前いつの間に、ンな事になつてんだ！――」

一角に鋭く問われて、恋次は少し赤くなつて、イヤイヤイヤ！と勢い良く手を振つた。

「し、知らないつすよ俺！　何で羊羹でそんな話になるんすか！」

「だつて、雪音ちゃんがバレンタインに、総隊長以外の男に贈り物するなんて、これまで無かつたんだよね？　それなのにわざわざ、恋次の好みに合ひそうなものを寄越すなんて、これはもう本命以外の何者でもないじゃないか

「え……え、ええ――？」

予想外の指摘に、耳まで赤くなつて狼狽する恋次。その様子に思わず顔を引きつらせながら、

（落ち着け、落ち着け俺……本命が居るんなら、義理チョコでも俺によこさねえのは当然だろ、当然……）

懸命に自己暗示をかけて、理性を保とつと努力する一角。その一人と雪音を見比べて、何やら楽しそうな笑みを浮かべる弓親。

しかし、話題の渦中にあつて雪音は、ないない、と冷静に手を振つて否定した。

「これは、総隊長に芋羊羹差し上げるつて話をしてたら、阿散井君も好きだつていうから、つこでに買つてきただけよ。金みはありますせん」

「何だ、そりなんだ。つまらないな……」

「……弓親、あんた乱菊さんの影響受けすぎじゃないの……？」

いや、そもそも似ているから意気投合しているのかもしれない。雪音は呆れながら、恋次の袖を軽く引いた。

「ほら阿散井君、いつまでもぼーつとしてないで。階で食べるんでしょう？ お皿と湯飲み、どこにあるの」

「え、あ、ああ、はい、すんません。」弓親です。

まだ赤面したまま、炊事場に入る恋次と雪音。一人を見送つた弓親は座りなおして、一角を見た。にや、と笑つ。

「一角、顔緩んでるよ」

「……あ！？ ベ、別に揺るんじやいねえよ！」

言われて、ぴしゃりと頬をたたく一角。確かに、緩んでいる。「はいはい、良かつたね、恋次が雪音ちゃんの本命じやなくて」軽くいなされて、一角はびき、と眉間にしわを寄せた。

「あ、あんなあ弓親、お前なんか勘違いしてねえか？ 僕はあいつの事、女だなんて思つちゃいねえんだ。あいつが誰に惚れてようが、関係ねえよ」

「うん、やうなんだね」

「あ？」

あつさつ肯定されて拍子抜けしていると、

「でもチョコは欲しいんでしょ？」

「うわっ」と言われて、思わず言葉に詰まってしまった。「な、ち、ちげえ……」慌てて否定の言葉を口にしようとしたところで、

「大体、何でそんなにチョコが欲しいわけ？」

「うわっ！？」

いきなり後ろから雪音が話に加わってきたので、一角はびくっと肩を震わせてしまった。

「おまつ、こいつのまに戻つてきやがつた！ つか、どこから話聞いて……」

「あ？ のあたりからつス」

盆を手に戻つてきた恋次が答えて、各自に切り分けた羊羹を配り、弓親の隣に腰を落ち着ける。雪音は持つてきた急須で茶を入れ、湯飲みを皆の前に置いて、一角の隣に座つた。

「だからさ、バレンタインになると、チョコチョココつて皆騒ぐけど、あれつて何なわけ？ そりや、片思いの子とか、恋人同士とかで盛り上がるなら分かるけどさ、あんたみたいに全然関係なさそうな奴らも、ものほしそうな顔してるじゃない」

「……悪かったな、関係なくて」

思い切り急所をつかれ、一角はむすつと頬杖をついた。まあしうがないわよね、と追い討ちをかける雪音。

「十一番隊の男なんて、皆むさくるしくて乱暴なあほばっかだもん。可愛い女の子からチョコ貰うなんて、無いわよねー。さつき藍染隊長に会つたけど、両手の紙袋一杯持つてたわよ。欲しいなら、一個貰つてきたら？」

「馬鹿か！ いらねえよ、そんなもん！」

「ま、だからこそ欲しいって事なんだと思つけどね。バレンタインのチョコつて、女の子にもてる度合いを測るつて面もあるから、男としては、一つくらいは貰いたいのが心情なんだよ」

「ずずー、と茶を飲みながら、他人事のように弓親が言つた。「そつなの？」と雪音に話を振られて、一角は頑として答えまい、とそつぽを向いた。

「何だ、要するに面子の問題ってわけか」

雪音は羊羹を菓子切りで切つて、口に運んだ。ん~美味しい、と

幸せそうに味わつてから、

「馬鹿みたい。本命で貰えるんならともかく、お義理でもらつたつてしょうがないじゃないの。ねえ、全然心こもつてなくとも、それでも欲しいもんなの?」

ばつさり切り捨てて、かくつと肩を落とした一角を肘でこづいた。一角は、きるつと鋭く雪音をにらみ付けると、

「うつせえ! てめえのなんか、死んでもいらねえよ!」

ガツと怒鳴りつけて、羊羹をつかみ、そのまま口に放り込んだ。

むしむし、と味わう事も無く食らう一角に、

「あつや。あげるなんて、こつちも言つてないし」

雪音は湯飲みを持ち上げて、茶をゆっくり飲む。

その一人を前にした²親と恋次はそつと顔を見合せると、お互

い小さく肩をすくめてしまつた。

草木も眠る丑二つ時。ほの白い街灯の下、人気も無くなつた道を、一人の人影がふらりふらり、と歩いていく。

「おら、しつかり歩けよ、お前は」

「えへ、歩いてるよお、まっすぐまつすぐー」

「どこがだ！ ンなふらふらしてると、ビブに落ちるぞー！」

足元が頼りない雪音を見かねて、一角は腕を掴み、引きずるようにして歩き始めた。

あの後四人で流れた居酒屋で、例によつてべれけになるほど飲んだ雪音を、また例によつて一角が送る羽目になつた。

『お前のほうが部屋近いだろうが。送つてけよ』

一角はそつといつて恋次に押し付けようとしたのだが、

『一角、いいの？ 雪音ちゃん直々に芋羊羹もらつたことだし、恋次が思い余つて押し倒すかも』

『しませんよ、そんな事！！ いつまでそのネタ引きずるんすか！』

真顔の弓親の冗談に、頭まで赤くなつて噛み付いた恋次が、

『送つていつて妙な噂を流されるのは雪音さんに悪いし、俺だつて嫌です。一角さんがいつも送つてるんだから、そうすりやいいじゃないですか』

と、断固拒否したので、仕方なく一角が雪音を預かつたのだ。

「つたぐ、お前なあ、飲むなら人に迷惑かけない分だけ飲めよな。何で俺が毎度毎度……」

ぶつぶつ文句を言うと、雪音はなによ、と拳を振り上げた。

『チヨコ一つ貰えないような奴にい、そんな事言われる筋合いありませんー』

『チヨコはこの際関係ねえだろー？』

まだ言つか、と吠え掛かると、雪音は突然、両手で抱え込むように一角の腕にしがみつき、酔つて焦点の合わない目でこちらを見上

げてきた。

「な、何だよ……」

いきなり密着したので、ついぞまきしてしまひ。

「ねえ一角、ほんとにそんなにチヨコ欲しいの一？」

雪音がろれつ回らない口調で尋ねてきた。

「だつ、おま、俺はいらねえつて何度も何度も言つてんだろー。」

人の話を聞け！と怒鳴る一角だが、雪音は動じなかつた。むー、と唸つて、

「もし一角があ、阿散井君みたいに素直に喜んでくれるならあ、あげてもいいと思つたのにい」

「なつ……な、何だよ、それ」

思いがけない言葉に、一角は思わず赤くなつてしまつた。

（「こいつ酔つてんのか？ それともマジなのか？）

まさか雪音が、そんな事を言い出すとは思つてもいなかつたので、急にどきどきしてくる。

酒を飲んで熱くなつた体で、こんなにくつつかれて、チヨコをあげてもいいなんて言われると、その気が無くとも、その気になつてしまいそうで、焦つてしまつ。しかも胸が、胸が、腕に。

「ねえ、どーなのー、一角。ほんとに、チヨコ、ほしくないの？」

一角を上田遣いに見上げ、つやつやした唇を尖らせて、雪音が言う。一角は、いよいよ激しくなつてきた鼓動に狼狽しながら、

「俺は……その、俺は……」

「ぐつと唾を飲み込んで、

「ほ……ほ、欲しい」

言葉を搾り出すように、やつとのことと言つた。

しん、と沈黙が落ちる。一角は引きつった顔で、雪音は口を尖らせたままの顔で互いを見つめあつた。ど

「……ぶ、はー！ 言つた、とーとー、ほしijつて言つたー！」

不意に雪音がげらげら笑い出した。田の前で盛大に吹き出され、事態が理解できなくて田が点になつた一角は、腕を放し、腹を抱えて

笑う雪音の姿を見て、さつきとは違う意味で、耳まで赤くなつた。

「てめえ 雪音、からかいやがつたのか……！」

思わず拳を振り上げると、雪音はえー違うもん、と笑いながら手を振つた。

「ちやあんとあげるよお、明田でもいにならねー。でもやつぱ欲しいんじやーん一角う、自分に嘘つこちや駄目じやーん

「つ、ぐつ……」

つい本音を言つてしまつただけに、ぐつぐつの音も出ない一角。雪音は頼りない足取りでスキップらしきものをしながら、

「わたくしこと、十一番隊第三席の斑田一角はあ、バレンタインにチョコもらいたくつて仕方ありませーんつと

節つけて、とんでもない事を大声で言い始めたので、

「ば、ばかやろ、やめねえかつ！」

一角は走つていつて雪音を押さえつけた。雪音はきやー襲われると言いながら、またきやきやら笑い出す。その、いつそ無邪気なまでに楽しそうな顔を見て、一角はこめかみに青筋を浮かべた。
(くそつ、こんな奴に少しでもその気になつた俺が、馬鹿だつた！)
「いいからさつひと帰るぞ、この酔つ払いが！」

言つて、たつきより乱暴に腕を掴んで引っ張ると、雪音はハーハーと返事だけは良くして、歩き出す。妙に上機嫌で鼻歌まで歌いだすその能天氣さに、一角は思わずげんなり、ため息をついた。

「のネタでしづらはからかわれまくるのは、もつ田に見えている。いつそこの後にこいつの部屋で飲んで、酔い潰して記憶を消されようか、なんて事まで考え始めてしまつ。しかしそうなれば、あつとチョコは貰えなくなるだらつ。

(たかがチョコ一つに、こんなこだわつてどうすんだ、俺も)

本当はチョコなんて、どうでもいいはずだ。小さな事にこだわる自分が馬鹿馬鹿しくて、しかし諦めてしまつのも癪で、一角は苦虫を噛み潰したような顔でがしがしと道を進んでいく。

その一角に引っ張られて歩く雪音が、痛いよーだの、歩けないだ

の言つていたが、全部無視した。

そして、その次の日。

「はい、これ。約束通り持つてきたわよ」

「一日酔いの気配もなく、すつせりした顔の雪音は、一角にぽんと
包みを手渡してきた。

「お……おひ」

昨日の事を思い出し、複雑な顔でそれを見下ろす一角は、雪音が不満そうな声を漏らす。

「ちょっと、折角持つてきてあげたのに、おれの一つも無こわけ？」

「つむせえつ、分かつてるよ！ その……、あ……」

「あ？」

「…………ありがとひ、『わこまし』！」

半ばやけくそで言つ放つ。雪音は笑つて、ぱりぱり、ヒサを呑いた。

「良く出来ました。じゃ、そつこつわけで、それ開けて」

「あ？」

何でそんな事を指示されるのか、と思つたら、

「あたしも食べたいんだもん、それ。現世で有名なブランチのチキンで、すつじい美味しいんだって」

あらきら輝く皿でそんな事を言つ出す。一角はひく、と顔を歪めると、

「しめえが食つてえだけかよー」

思いつきり怒鳴り声を上げた。しかし、雪音がけろつと「やつよ。良じやない、お情けであげるんだから、それくらい」と、至極冷たいコメントを返してきたので、一角はくつ、と歯を食いしばつて、包装紙を破き始めた。

（畜生、バレンタインなんづくせへりだ……！）

それでも、今年は一つ、チョコを貰えた一角だった。

バレンタインティ 6（後書き）

「お読みいただき、ありがとうございました！」

一角は惚れてないといいつつ、無意識に意識（つて変な言い方ですが）始める感じです。そうじやなければ、一角がここまでチョコにこだわらないと思うので。

本当は剣ハも出る予定でしたが、うまくまとまらないので削りました。

あ、恋次は雪音ラブじやありません。いきなり惚れた腫れたの話になつて、びっくりしただけです（笑）『親は』のイベントではしゃぐ事がなさそう。

それと、雪音が買ったのは、『ドライバのチヨコ』です（笑）

楽しんでいただけましたでしょうか？ よろしければ感想などお聞かせいただければ嬉しいです（^ ^）

振り返れば

「うーん……」

居酒屋で一角と待ち合わせた雪音は、水を飲むように一杯田を空けた後、何やら思わしげに唸つた。

「何だよ、浮かない顔だな」

珍しいこともあるものだ、とお通しをつつきながら一角が尋ねる。雪音はうーん、と気のない返事を返してから、「そうだ、一角。ちょっとお願ひがあるんだけど」何か思いついた様子で一角を見た。

「おう、何だよ」

「あのや、あたしの事襲つてくれない?」

「ブバツ!」

とんでもない事を言われて、思わず酒を噴出した。

「うわ、汚い! 何ふいてんのよ、あんたは!」

しぶきがかかりそうになつて、身を引いた雪音が非難がましく言うが、文句を言われる筋合いはない。一角はむせながら、「お、お前が変な事言つからだろ? ! 何だよ襲えつて、お前実はそういうプレイがお好みかよ」

「ガフツ!」

今度は雪音が息を詰まらせる番だつた。

「違うわあほ、何だプレイつて! 変な想像するな! だん、と拳を卓に叩きつけ、真っ赤になつて否定してくれる。「じゃあ、何なんだよそりゃ」

一角が問つと、雪音は氣を取り直して咳払いをした。

「いや、あのね。とつきちよつと気になる事があつたのよ

それは、雪音が仕事を終えて、待ち合わせ場所の居酒屋へ向かっ

て歩いていたときの事だった。

滝靈廷の外、南流魂街十一地区にあるその店は、店主が以前、滝靈廷の貴族の家で板前をしていたという噂もある無口な老人で、そこでしか味わえない魚料理が、通の間でひそかな人気を呼んでいる。しかし、流魂街という場所柄、近辺はあまり治安が良くないため、柄の悪い連中がうろついている事もある。

雪音がそういった連中に捕まつたのは、店まであともう少しどこうところだった。

普段なら、死神の死霸装はこういったチンピラ避けに使えるので絡まる事は無いのだが、雪音を取り囲んだ男達は軒並み、酒か煙草か薬かは知らないが、正気をなくすほどに酔つていたらしい。

『こんなところを一人歩きなんざ危ねえなあ』

『嬢ちゃんみたいなカワイイ口ちやんがふらふらしてると、俺らみたいなのに絡まるるぜ？』

『なあ、ちょっと一緒に遊びまつぜ』

『……はあ。独創性のかけらもない……』

まるで台本でもあるかのように、分かりやすい絡み方をする連中で、雪音は思わずため息をついた。あきれ返つたその様子が癪に障つたのか、男達の一人が雪音の胸倉をつかんだ。

『ああん？ 何だそのシラは？ お高くとまつてんじやねえぞ、コラアー！』

頭一つ分も大きい男にぐいと引き寄せられ、足が地面を離れる。眼前で唾を飛ばして罵倒され、雪音はムカツとした。

『うつさい、息臭い！ 近づくなー！』

ドツ！

『うがつー！』

怒鳴りつけると同時に胸倉を掴む手をぱん、と弾き、空中に浮いたまま男の体を蹴り飛ばした。吹つ飛ばされた男は、『ぐいぐいぐい』勢い良く地面を転がつて壁に激突し、そのまま白目をむいて気絶する。

『て、てめえこのくそ女！』

『ぶつころせ！』

一見か弱い女に仲間が一撃で倒されて、頭に血がのぼったのだろう。それまで好色な笑みを浮かべていた男達は、怒りに顔を赤黒く染めながら襲い掛かつってきた。

しかし体格こそ男達と比べて劣っているが、死神として様々な戦闘訓練をつみ、いまや席官となつた雪音が、酔っ払い相手に後れを取るはずがない。数分の乱闘の後、雪音は『ぐるぐる倒れた男達の中で、一人悠然と着物のほこりを払つていた。

『つたく、相手を見て喧嘩売りなさいよつての』

運動にもなりやしない、とその場を立ち去りかけて、しかし雪音はふと違和感を覚えた。

『……？』

氣絶した連中を見回し、じつと見つめ、数を数えてみる。一、二、三、……六、七。

『あれ？ 七人？』

もう一度数えなおしてみると、結果は同じだつた。雪音は自分が倒した数を思い返してみたが、何度も数えても六人しかいない。途中で加勢が入つたわけではないのに、なぜ一人増えているのだろう。『んん……あ、あれ！？』

更に見直して、雪音はハツとして男の一人に駆け寄つた。仰向けに倒れたその男はひくひく痙攣していて、肩の辺りがやぶけ、じんわり、と血がにじんでいる。

「……で、診てみたらそれが、明らかに刃物の傷だつたのよ。しかも毒付だつたみたいで。まあ、ほつといても支障なさそうだつたら、そのままにしておいたけど」

「お前な……道すがらに喧嘩してくるなよ……」

あつけらかんと話す雪音に、一角はげんなりした。

いくら死神とはいえ、こんなのも一応女だ。黙つてやられると

は言わないけれど、せめて事を荒立てずに逃げるとか、そういう選択をしてほしいと思うのだが。

「だつて、鬱陶しかつたんだもん」

至極あつたり言われ、ああそうですか、と一角は呆れた声をもらした。

「まあいいや、それで？」

ひとまず話を促すと、だからね、と雪音はさすの天ぷらをつまんだ。

「とにかく、そいつらの中で、刃物を持ち出した奴なんていなかつたからや。誰かが手を貸してくれたんだと思うんだけど、あたり見ても誰もいなかつたの。

で、よくよく見てみたらその毒も、そんじょそこらで簡単に手に入るもののじやないっぽかつたんだよね

「ああん？ てえと？」

「服に紫の染みが出来てたから、意識喪失・痙攣・貧血の症状とあわせて考えたら、多分蝶鱗毒(ちょうりんじゆ)だと思う。きちんとした設備が無いと、生成できない麻痺毒だから、流魂街のチンピラが手に入れられるようなもんじやないの」

「……へー。そうかよ」

話を振つたのは自分が、毒の話を聞きながら食事をするのは何となく落ち着かない。

もうちょっと、時と場所を選んで話してほしい。しかもそんな生き生きした目をしないでほしい、と思いながら一角は平坦な返事を返して、猪口を卓に置いた。

「じゃ、何か。通りすがりの死神かなんかが、お前を助けたってわけか」

「なのがなあ、と思つんだけど。でも、何か変な感じするのよね」

テンションが下がつた一角に気づかず、雪音は小首をかしげた。

「その後まっすぐ、ここに来たんだけど、どーも……誰か、ついてきてるような気がするよつな」

「あん？ 何だ、その助つ人が後つけてきてるってか？」

一角はそれらしい人物がいるかと店内を見回してみるが、いるのは料理をつついて舌鼓を打つて、普通の客ばかりだ。妙な靈圧を放つてゐるような奴もない。

「うーん、気のせいかもしけないけど……」

「助つ人ならとつと顔出して、恩でも何でも売りやいいもんだがな」

「あんたなら売りそうよね。しかも一生」

「うるせえよ。つーか、そこまでは話分かっただけどよ、さつきの襲えつてのは、それとどう関係してくるんだよ」

「ああ、そうそう。だからね」

雪音はぽん、と手を叩いて言った。

「良い人か悪い人か知らないけど、こんなふうに後つけられるのなんて嫌だから、引っ張り出してみたいたなあと思つて。また誰かに襲われるような事があれば、また手助けが入るかもしれないじゃない？だから、一角があたしを襲うふりして、助つ人がひょっこり出てきたところを、捕まえたいと」

「ちょっと待てこら」

名案！ といわんばかりに二口二口笑う雪音に、一角はべし、と突っ込みを入れた。

「それ、下手したら俺が毒にやられるつて事じゃねえか。何勝手に人をおとりにしようとしてんだ、オイ」

「えー、大丈夫だつてえ」

雪音は無責任にひらひらと手を振つて断言する。

「一角はケダモノ、もとい獸の勘が鋭いから、刃物飛んできたらすぐ気がつくって」

「言い直しても、失敬な内容だつて事は変わりねえだろ！！」

そんなこんなで、食事を終えた一人は、とつぱり夜が暮れた流魂街をふらついた。あの後いつもの口論をした後、結局雪音にねじこ

まれて、一角はこの帰り道で彼女を襲つふつをする忍びになってしまった。

(つたぐ、何で俺がこんなことしなきゃならねえんだ)

ぶつぶつ言いながら周囲を探つてみる。先ほどの回りぶつぶつ靈圧は感じられないが、よくよく氣をつけてみると、確かに何か一角はそした気配が、感覺にひつかかる。

戦闘経験が少なく、靈圧も読めない雪音はともかく、研ぎ澄ませた一角の感覺でも、集中しなければ分からぬ程の気配だ。

(いつや、よつぱじの奴だな)

油断していると、本当に下手を打つかもしれない。しかし、こいつを引っ張り出せば、なかなか面白い戦いが出来そうだ。

一角はつどやつした気分を改め、口の端に笑みを浮かべながら、前を歩く雪音を見た。これから始まる居のためか、妙に明るい声で歌を歌い、上機嫌を裝つてこなが、何となく不自然だ。

「お前、わざとこうして、小声で言つと、雪音はこの手を振り返つてなこと、と顔を絞つて返事する。

「普段通りにしなきゃ、バレちゃひじやないの。ここからせり、早くしてよ」

「お前のわれがもつ、普段通りじやねー……。つたぐ、んじや始めるわ」

ぞ、と地面を蹴つて、一角は雪音の背後からガバッと抱きついた。雪音の体が腕の中にすっぽりおれまつて、あれこれこじんなに小さなつたつけ、と思つた一角は、

「つきやあーー。」

「つおーー？」

演技とは思えなこ雪音の甲高こ悲鳴こ、思わず驚きの声をもらつてしまつた。

「な、何すんのよ、ちよつとー。」

雪音の思ひがけない非難に、一角は面食らつ。

「何つて、お前襲うふりしてんじゃねえか！」

「正、無題、襲つてのせ斬りかかるべるとかやつてのじよ

— ! ?

「あ、そうなのかな？」

で、あんな事だと思っていて、間の抜けた返事をしてしまつ。

「ん? つて、あ」

一角は自分の手を見下ろして動きを止めた。雪音がじたばた暴れたせいで、最初腰にまわしていた手がその上にずれて、胸に。しつかりと。

「ば、馬鹿、落ち着けつて、今離すつ-----！」

慌てた一角が雪音を解放したその時、ヒュ、と風を切る音が耳に届いた。

1

バツと上体を後ろにひくと、鼻先を細い小刀が掠める。それが視界から消えるより先に、一角は飛んできた方に潜む影を見つけた。

地面をえぐる勢いで、そちらへ跳ぶ。影は身を翻して逃げ出したが、身構えていた分、一角の動きの方が早かつた。あつという間に追いつき、服の端をつかんで力任せに引き、抜いた刀を首に突きつける。

「」

「人の後こそこそつけまわしやがつて、てめえ 一體……あん？」
鋭い誰何の言葉は、途中で止まってしまった。

一角に羽交い絞めにされた男は、目元以外の全てを隠した黒装束に身を包んでいる。実際会った事はなかつたが、この格好をしている人間がどういう仕事をしているか、知識として知つていたから、

「てめえ、隠密機動の奴か？」

まさかと思いながら尋ねると、男はびくつと身じろぎして、一角の足を踵で踏みつけた。

「いてつ！」

さほど痛くはなかつたが、不意の攻撃に驚いて、一角は手の力を緩めてしまった。男は一角の腕の下からふつとすり抜け、そのまま走り去る。が、後から追いついてきた雪音に進路を阻まれた。

「雪音様、あつ！」

とつやに名前を呼んだ、といつも囁きで、男が硬直する。息を切らして足を止めた雪音は、きょととして目を見開いた。

「何、あんた誰？ 何であたしの名前を知ってるの？」

「……！」

狼狽した男は他の方角へ足を向けかけたが、しかし一角がすばやく足を払い、地面に転ばせた。

「うぐつ

「じたばたすんじやねえ、この野郎！」

背中をだんつと踏みつけて、一角は一喝する。その荒つぽせん、雪音がちよつとやりすぎ、と注意したが、こいつでもしないところの男は逃げてしまふ。うづらうづら。

「てめえ、どうやら雪音と知つてて、後つけまわしてたみてえだな。何のつもりでんな事してたのか、吐けコリカアー！」

「う、うぐぐつ……！」

「い、一角一角、それじや息できないつてばー！」

* * *

夜も遅く。常ならば早々に寝付くため、この時間にはすでに真っ暗になつてゐるはずの総隊長の私室は、時ならぬ客への訪れで、煌々と明かりをともしていた。

寝巻きに着替えた山本は、前に座した雪音の顔を見て、ひげを撫でるといふ。

「むわ。バレたか」

「どこか拗ねているよつた声で呟く。

「バレたか、じゃありません！」

対して雪音はきつと眉を吊り上げ、脇に控えて小さくなっている男を指差す。

「この人があたしの後つけまわしてたの、お爺様の命令つて聞いたんですけど！」

「梅、口を割つてしまつたのか」

「は……申し訳ございません。話わねば、碎蜂総司令官へ掛け合つと雪音様が仰られまして……そこまでの大事にしては、と」

「むつ……致し方ない。まあ、そう怒るな、雪音」

「これまでうつと、朝となく夜となく、知らない人が付きまとつてたなんて知つたら、怒るに決まつてるでしょ！ 何でそんな事命令してるんですか、あたしの監視ですか！？」

「いやいや、それは違うぞ、雪音」

山本は慌てたように手を振つて否定した。悩ましげに眉を八の字に描き、

「わしはの、おぬしの身が心配でならんのじや。前々から思つておつたが、おぬしは普段しつかりしておるが、時々周囲に対する警戒心が全く欠けてしまつやもしれぬ

んぞ間違いが起きてしまつやもしれぬ

「……そこはまあ、否定できないですけど」

痛いところをつかれて、勢いをそがれる雪音。山本はそうじやうう、と我が意を得たりとばかりに大きく頷いて、

「じゃからの、万が一にもおぬしの身に危険が及ばぬよう、そこの梅がぼでいーがーどとして、つかず離れずおぬしを守つておつたのじや。

おぬしは気づかなかつたるうが、梅が間一髪のところを助けたことは、これまで何度もあつたんぢやぞ」

「何度もつて……。……ちょっと待つてください、お爺様。もしかしてこの間、しつこくナンパしてきた男が、いきなり泡吹いて倒れたのは……」

「うむ。梅の手柄ぢやの」

「七年前、付き合つてた人との別れ話がこじれて殴られそうになつた時、謎の爆発で吹つ飛ばされたのも」

「あれはひどい男じやつたのー。誠実そうな奴と見ておつたのだが、ただの小心者で」

「…………お・じ・い・せ・まあああー！」

雪音はバンッ！と卓を叩き、怒りの形相で山本に怒鳴りつけた。
「自分の身くらいい、自分で守れます！ 日常生活でひそかに人につけまわされるなんて、絶対嫌です！ 今後一切、こんな事は止めてください！」

「し、しかしの、雪音」

「問答無用！」

言ひ募りうつするのを、指を突きつけて黙らせる。

「お爺様には色々とお世話になりましたが、それとこれとは別！ もしまだ、こんな事してあたしの生活を脅かすような事があれば、今後一切、お爺様とのお付き合いをやめさせてもらいます！」

「な、なんじやとー？ それは何か、もうおじこちゃんとなば呼んでくれぬとこー」とかー！」

「当然です！ おじこちゃんが孫の監視なんてしないでしょーが！ といふかそもそも、総隊長という責任ある立場で職権濫用するなんて最低です！ 見損ないました！」

「うつ、く……」

山本と雪音はそのままくらみ合つた。が、やがて山本ががっくりと肩を落とし、

「……分かった、おぬしの言つとおつじや。今後はこのよつたな事は

一切しない。わしの名に賭けて誓おつ「ひのち

渋々、といった様子で宣言する。雪音はなおも疑わしげに山本を見ていたが、あんまりにもしょぼんとした様子が哀れだったので、ため息をついた。

「分かりました。じゃあ、今日はこれで失礼します。夜分遅くに突然、申し訳ありませんでした」

ぐるっと背を向けて部屋を出る。かつてないほど激怒した雪音が機嫌を直してくれた事にほつとして、胸をなでおろした山本だったがしかし、

「……明日、誓約書持つてこきますからね！」

戻ってきた雪音から強い口調で放たれた言葉に、もう一度肩を落として、

「……うむ、分かった」

小ちな声で呟いたのだった。

門柱によりかかって夜空を見上げていた一角は、地面を躊躇ひながら強い足音を聞きつけ、身を起こした。

「よう、話はついたのか」

「一応ね……」

雪音はまだ怒りが去らない様子でぶっきらぼうに言ひ捨て、門をくぐつてそのまま歩き続ける。肩を怒らせた後姿に、（総隊長、こいつの逆鱗にふれちまつたみてえだなあ……）

と思ひながら、一角は声をかける。

「落ち着けよ、雪音。総隊長だって、悪氣があつてした事じやなかつたんだろ？」

「あたしに何かあつた時のために、張り付かせてたつて言つてたけど」

「ははあ、なるほどな。過保護な総隊長らしいや

「悪氣がなきや何してもいい、つてもんじやないわよ、あり得ない、信じられない」

「ま、要はお前の身を案じてだろ。やつ方はそりゃあ、まずかつたかもしけねえが、そんだけお前の事可愛がつてるつて事じゃねえか。怒るのも仕方ねえけど、あんまりとつちめてやんなよ。じいさん凹むわ」

「……」

雪音はふう、と息を吐き出して、歩調を緩めた。一角が横に並ぶと、表情はまだ不満げだったが、うつすら頬が赤くなっている。

「……分かつてるわよ、心配してもらつてるのは。あたしなんかに目にかけて、大切にしてくださるのは、本当にありがたいことだと思つてる」

だけど、と再び眉間にしわを刻んで、雪音は拳を握り締めた。

「今度のはじ一考えてもやりすぎでしょ！ あたしが知らなかつただけで、これまでやつてきた事全部、総隊長に筒抜けだつたのよ！？」昔の彼氏の話まで知つてて、あたしは顔から火が出る思いだつたわよ！」

「あー……」

これはさすがにフォローできない。言葉を濁して半笑いを浮かべた一角は、彼氏といつ言葉でふと連想するものがあつて、何も考えずに口に出した。

「そういえば、お前よ

「え？」

「意外と胸^{アキ}カイんだな

「……」

次の瞬間、様々な怒りを込めた雪音の拳が、一角の顔にめりこんだのは、言つまでもない。

振り返れば（後書き）

「お読みいただき、ありがとうございました！」
バレンタインに出てきた梅さんのお話、おじこせきひがひがれの尊い角役得です（笑）

作品は楽しんでいただき、お聞きいただければ嬉しいです（＾＾）

それは用のじとく

死体は嫌いだ。

何も語らない肉塊にすぎないから。

廊下を歩く。ひたすら歩く。行き会った人達が皆驚いた顔で道を開けたり、何か声をかけてくるけど、全て無視して歩く。煩わしかった。この目に、この手に触れるもの全てが煩わしかった。何もかも無くなってしまえ、と言ひたくなるほど、煩わしかった。

「！」

角を曲がったところで、壁にぶつかった。痛い。したたかにぶつけた鼻を押さえてうめくと、

「雪音？」

低い声が上から降つてきた。見上げたけれど、体の距離が近くで、相手の背が天を突くほど高いので、顔が見えない。無言のまま見上げているこぢらを、相手がのぞき込んできた。

「何だお前。何泣いてんだ」

「……らき……」

更木隊長だ。名を口にして、それがきつかけになつたかのようになり、と胸に熱い固まりが突きあがつてきた。堰が切れる。

「う、え」

「あ？」

「……う……あ、ああああああ！」

抑えられない叫び声が喉を突き破る。あたしは更木隊長の服にしがみついて、子供みたいに泣き出した。一度あふれた悲鳴は、止める事が出来なかつた。

「……で、何をそんなに泣いてやがんだ、お前は」

どれくらいの時間が経つたろう。泣きじゃくるあたしを廊下から適當な部屋に連れ込んで、仕方なしという感じで付き合ってくれた更木隊長が声をかけてきた。

あたしは腫れた目をこする。

「……あの……十三番隊の」

「ん？」

「十三番隊の、三席が」

「ああ。虚にやられた奴か」

「その、救護……と、言つか。隊葬の、準備をしてて」

ここに戻ってきた都さんは無惨な姿だった。胸から下を食いちぎられた姿は、その顔が生前と変わらぬ美しさを保っているだけに、趣味の悪いオブジェのようだった。

都さんは、賢く、美しく、強い人だった。いつでも明るく笑っているような人だった。尊敬していたし、大好きだった。

「そしたら、海燕副隊長も、亡くなつたつて、聞いて」
体は見なかつた。任務に同行した朽木家のルキアちゃんが、海燕副隊長の実家の志波家へ渡しにいつたと聞いた。

浮竹隊長から聞き出した死に様は、都さんのそれと同じように悲惨だつた。虚に斬魄刀の能力を無効化され、体を乗つ取られ。

最後は、斬つた、と。淡々と語られたからこそ、余計に、浮竹隊長の無念さが伝わってきた。でも浮竹隊長から漂う死臭にどうしようもなくなつて、あたしはその場から逃げ出した。

「なんで」

なんで、あんな死に方をしなければならなかつたのだろう。海燕副隊長も、都さんも、これからずっと十三番隊にいると思つてた。どんな事があつても、いつでも笑つてそこに居てくれると思つてた。

「なん、で」

そう思つたら、枯れたと思つた涙がまた溢れてきた。涙をぬぐう氣力もなくて、畳にへたり込んだあたしを、

「そりや弱えからだろ」

更木隊長が突き放した。言葉の鋭さをさくらんとして顔を上げると、更木隊長は詰まらなさやうな顔でこいつを見下ろしている。

「あいつらが死んだのは、糞虚より弱かつたからだろ。運が無かつたつてこいつた、諦める」

「よわ、弱い？」

「この人は、誰の事を言つているんだろう。一瞬本気でそう思つた。海燕副隊長と都さん、どちらも尋常ならざる靈圧の持ち主で、虚なんか曰じやなくて。

「弱えから死んだ。ただそれだけの事じやねえか。それだけの事で、何でお前が、目玉が溶けそうなほど泣くのか、わからねえな。お前、十三番隊でもねえだらうが

「……」

あ、く、と口が動く。更木隊長を非難しようとして、罵るうとして、でも声が出ない。

急所をつかれた。そう思つた。そうだ、あたしは十三番隊じやない。でも海燕副隊長と都さん、一人と仲良くなせてもらつたからその死は、悲しい。

だけど、そうじやない。今あたしが悲しいのは、苦しいのは、そのせいじやない。

「だつて」

体を食いちぎられて横たわる都さんの顔を見て。

浮竹隊長から海燕副隊長の死に様を聞いて。

「だつて、あたしにはもう、何も出来ないから」

どれだけ治癒術を施そうと、どれだけ良薬を作つてその口に含ませようと、もう彼らは生き返らない。

自分には何も出来ない。力がない。それが、

「へやし、へて」

そこからはもう言葉にならなかつた。泣いて、叫んで、暴れて、

やがて疲れて眠りに落ちた。

起きた時には自分の部屋に戻されていた。誰かが運んでくれたのだろう。ふと思い出す、眠る直前、大きな手がぐしゃぐしゃ、とあたしの頭を撫でたような気がした。

更木隊長が？ そう思つて、まさか、と首を振る。

あたしが泣いていた間、更木隊長がどうしていたかは分からぬ。途中で嫌になつて逃げたのかもしれない、覚えていない。

あたしは枕元の鎮静剤を飲んで、目を閉じた。夢の無い眠りに落ちて、もう一度と起きたくなかった。

⋮ チ リ ッ

それは元の「JET」（後書き）

「JET」までお読みいただき、ありがとうございました！

更木隊長って結構優しいところがあると想つたです。とこいつ夢です
(笑)

浮竹隊長はルキアの事を考えて、斬った人の名を伏せています。

見舞い

アハ

ク クフ

フフフ

形の良い唇が笑う。軽やかな笑い声を漏らす。なのに、なぜこいつ
もざらざらとして聞こえるのだろう。

アハ

ク クフ

フフフ

白い手が頬に触れる。しゅ、と動いて、口の上に被さつてくる。
氷のように冷たい。あまりの冷たさに、唇が動かせない。

アハ

ク クフ

フフフ

影が被さつてくる。動けない。息が出来ない。苦しい。助けて。

誰か。

「ネエ」

甘い声が耳元で囁く。

「ココカラ ダシテ」

嫌だ！叫ぼうとする。

「主の時ではない」

低い声が耳元で囁く。

アハ……

ク……クフ……

フフフ……

「イマハ」

手が外された。影が遠ざかる。ふわり、と暖かいものが顔に触れた。

「寝よ。未だ、早い」

低い声に引きずりれるよつて、意識が闇の中へ落ちていく。

部屋の中をのぞき込むと、雪音は寝台の上で身を起こしていた。黒い死霸装ではなく、白い寝間着に身を包んだ雪音は、いつもよりも体が小さく見える。

「……」

入り口から見える雪音の横顔は、霸気が無い。ぽりぽり、と頬をかいて、ちょっと迷う。

だが、そのまま回れ右をしたといひで、今更戻れる訳がない。んー、と口を曲げて、ようよう足を踏み入れる。

「よー雪音ー、元気か?」

「……一角」

つとめて明るい声で言つと、雪音はゆるり、とこちらを向いた。頬のこけたその顔はまるで別人のようだ、きょととする。

きょとしながら、俺はすぐに表情を戻した。どかっ、と乱暴に椅子に座り、

「何だよ、寝込んでるつて話だから来てみりや、存外元気そひじゅ

ねえか。もしかしてお前、ずる休みでもしてんのか？せつかく俺が、見舞いの品まで持つてきてやつたつてのによ」

ぱいっとばかりに、菓子の包みを雪音に渡す。

受け取った雪音は、えらくゆっくりした動作で見下ろして、それから俺を見た。ゆる、という感じで、気の抜けた笑みを浮かべる。

「わざわざありがとう。後で頂くわ」

「……おう」

毒氣がないどころか、生氣さえ感じられない。俺は思わず眉根を寄せた。

雪音がこうなった原因は聞いている。

十三番隊の副隊長と三席が虚にやられた。こいつはその一人に懷いていたから、無残な最期を見聞きして、すっかり落ち込んだらしい。倒れて寝込んだ。一時は、命の危険すらあつたと聞いた。

卯ノ花隊長がつきつきりで看病したお陰で、今はこうして起き上がりれるようになつたが、それでもまだ食が細く、人を寄せ付けようとしない。

こうして近くにいても、雪音の意識はどこか遠くいようだった。変な感じだつた。俺の知つてゐる雪音は、酒飲んでからから笑つて人に絡みまくる迷惑な奴で、憎んでるじやなかろうかと思えるほどの悪口を叩きながら、手際よく、そんでもつて意外と優しく手当てをするような奴だつた。

こんな空ろな目をした雪音は、よく似た別人のようになつて、落ち着かなかつた。

「あー、つと。そうだ、雪音。俺以外にもさ、見舞いに来てくれた人がいるんだよ」

自分でもわざとらしい「まかし方だと思える口調で、俺は言った。雪音がふ、と首を傾げて「誰？」静かな、無関心な声で問い合わせる。

居たたまなくなつて目をそらし、俺は入り口に向かつて声をかけた。

「隊長！ 入ってきてくださいよ」

「おう」

俺の言葉を待つてましたとばかりに、入り口からぬ、と更木隊長が顔を出した。雪音の、驚いたよつて息を飲む音。それが次の瞬間にには、

「……えつ。更木隊長……く、草鹿ふくたいちょうっ！」

驚きの声に変わった。

「つたく、何で俺が見舞いになんか行かなきやならねえんだ、おい」
ぼりぼりと胸元をかきながら、更木隊長が言つた。その後に随伴する俺は、平身低頭する。

「すんません、わざわざ」

「あいつのせいで、俺あいらぬ疑いをかけられたんだぞ。俺が泣かしたんじゃねえってのによ」

「……ですね」

頷いて、俺はため息をつく。

雪音が寝込むよくなつたきつかけを作つたのはこの人だつた。後でその事情を聞いてみたら、隊長が廊下で行き会つたところで、雪音が隊長の服を掴んでいきなりわんわん泣き出して、どうしようもないから部屋に連れ込んで泣き止むのを待つた……という事だつた。

が、状況だけ見れば、どう見ても更木隊長が雪音に悪さして泣かしたとしか取れない。

元々、気の強い雪音が泣き崩れるなんていう、普段からは想像できないような状況のせいもあつたんだろうが、外から見た隊長の評判自体が芳しくないので、噂はまことしやかに広まつた。

そこに隊長への悪意も手伝つて、噂はしまいには「更木剣八が、四番隊隊員を犯して殺そつとした」なんてとんでもねえ内容にまでなつて、総隊長まで出てくる羽田になつちました。

幸い、雪音を診た卯ノ花隊長の進言で、疑いは晴れたが、こんな

騒動になつた原因に、隊長が近づきたくないと思つても尤もだらう。俺だつて、雪音がこいつ何日も寝込んだりしなきや、見舞いなんて行く気にはならなかつた。

「親と一緒に、噂の収束に奔走せられて、稽古も出られなかつたんだからな。」

「つたく、そもそも、見舞いならやちるだけで良かったじゃねえか。雪音の奴、やちるときやーきやー騒いでるしよ」

「あー、いや、まあ……あいつ、可愛いものとかかわいいものとか、好きらしいんで。隊長にもきちんと謝りたかったって言つてたじやないスか」

隊長に迷惑かけた事を思い出した雪音が、慌てて謝つてくれたから、助かつた。

隊長本人に、副隊長が隊長から離れないもんだから、一緒に来てもらつたとはいえなかつたしな。

ついでに、隊長の靈圧にあてられたら、雪音の具合がもつと悪くなるだろ?から、早々に退室してもらつた、なんて事はもつといえない。

「む、」もじ口もる俺をちらりと見た隊長は、

「お前、雪音に惚れんのか?」

「ハア?」

予想外の質問に、思わず声が裏返る。何の冗談かと見上げるが、隊長は至極真面目な顔をしている。つーか、この人は、喧嘩が絡まない日常会話ではあんまり笑わねえんだよな。

「何でいきなり、そんな事になるンすか」

「妙に奴を気にかけてやがるし、さつきからやけに口が重いからよ。雪音の前で、しどろもどろだつたじやねえか」

「それは……いや、隊長、普段のあいつ知つてます? あいつ、いつもだつたら、こいつの神経逆なでするような事をポンポン言つ奴なんスよ。」

時々叩つ殺してやる?かと思つべからなのに、それがああもボケ

一つとされぢや、調子も狂いますよ

「ま、確かに」

「ま、確かに」

隊長も雪音の毒舌を知ってるらしい。納得して頷いた後、けどなと話を続ける。

「なんにしても、あの女はやめとけ。深入りすると、ろくな事にならねえぞ」

「……何ですか？」

隊長が、女の事をこうも言うのは珍しい。好奇心半分で聞き返す。隊長は「さき」と首を鳴らした。

「あの女、こっちが怪我一つするだけで大騒ぎするだら。どつかに行つて戻つてくるたんびに、ああもぎやんぎやん泣き喚かれてみろ。こっちの身がもたねえよ」

そこで一皿言葉を切つた後、隊長はつけたした。

「もし男が死んだら、あいつも死んじまうだろ。俺だったら、そんな女はいらねえ。自分で生きられねえ奴の面倒なんぞ、見てられるかよ」

「……そうつスね」

俺は廊下に視線を落として、言つた。

親しく付き合つてた十三番隊隊員の死に接して、雪音は打ち倒された。自分の命さえ無くしちまいそうなほど、憔悴しちまつた。それは多分、親しみを感じていただけ、より大きな衝撃で。

俺は、思わず足を止めて立ち尽くした。

部屋を出る直前、一角、と雪音が俺を呼んだ。振り返ると、副隊長を膝の上に乗せて頭を撫でていた雪音が、俺が来たばかりの時とは全く違う顔で笑つた。

「ありがと、一角。元気出た」

ぱ、と光が咲いたみたいな綺麗な笑みだつた。

俺は一瞬言葉を失つた。慌てて、

「次はお前が見舞いしろよ。また、世話になりに来るからな

「まかあやつていつと、雪音まつさん、と嬉しそうに答えた。

「どうした、一角」

俺は瞬きをした。雪音の顔が搔き消え、少し先に行つたところで立ち止まつた隊長が、いぶかしげにこつちを振り返つてゐる。

「あ、すんません！」

急いで駆け寄りながら、俺は自分の魄動が妙に早く鼓動してゐる音を聞いた。

手を、伸ばしてはいけないのかもしれない。頭の片隅で漠然とそつ思つて、そんな事俺には関係ねえだろとすぐに打ち消した。

違う人

「鑑原さん、失礼します」

花太郎が声をかけながら中に入ると、雪音は窓を開けて、框に頬杖をついていた。

彼女は花太郎の声など聞こえなかつたようで、風に吹かれるまゝほんやりと、自分の右手を眺めている。

陽炎のように儂げな雰囲気は消えたものの、それは普段とは程遠い生氣のない表情で、見るものをぎくつじさせた。

「……鑑原さん？」

花太郎はもう一度、おそるおそる声をかける。雪音がハッとわれに返つた。

「ああ、花君来てたんだ。何？」

「いえ……あの、大丈夫ですか？『ご飯食べました？』

まだ本調子じゃないのか、気にかかつて尋ねたが、返事代わりに米粒ひとつ残さず綺麗に平らげられた膳がずい、と差し出される。

「この通り、もう大丈夫よ。ごめんね、花君にまで世話かけちゃつて」

しゃきしゃきとした語り口は、以前のそれと同じだ。膳を受け取つた花太郎は安心して、思わずほ、と息を吐き出した。

「そんな事良いですよ。この調子なら、もうそろそろ復帰ですか？」

「うん、明日から。今日の午後には、隊長にご挨拶してくるわ」

「そうですか、良かつた。鑑原さんが居ないと、皆落ち着かないんですよ。十一番隊の人達も、一日に何回も雪音さん的事聞いてくるし」

世辞でなく正直に言つたのに、雪音は顔をしかめた。

「それ、復帰しないでほしいと思つてるからじゃないの？　あたしが出ると、大概喧嘩になるし」

「あはは……」

十一番隊の隊員がどう思つてゐるかは分からぬが、雪音が担当すると喧嘩になるのは事実なので、花太郎は引きついた笑いをあげた。膳を棚の上に置き、薬の袋を取つて残量を確認する。復帰後もしばらくは薬を服用するかもしれない、もう少し補充しておこうと鞄に手を入れた時、

「ねえ、花君」

ふ、と息を吐いて、雪音が花太郎を見た。思いがけず真剣な眼差しに、

「な、何でしょ？」

どきつとして姿勢を正す。雪音は何度か小さく口を開き、躊躇つよう閉じた後、首を振つた。

「いや、何でもない。……ああ、悪いんだけど、ちょっとあたしの部屋に行つて、死霸装取つてきてもらえるかな」

「え、あ、はい」

身構えていたのにはぐらかされて、花太郎はびきまぎと返事をした。薬を補充し、膳を持ち、慌しく部屋を出て行く。

だが、出て行く直前に振り返つた時、雪音は寝台に腰掛け、また自分の手をじつと見つめていた。

その顔は真剣で、人を寄せ付けない冷たさを感じさせて、花太郎は慌てて目をそらした。なんだか、違う人のように見えて、少し怖かつた。

「明日より、職務に復帰します。」のたびは隊長や隊員の皆様に「迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」

死霸装に身を包み、畳に深々と頭を下げる雪音に、烈は穏やかな微笑を浮かべた。

「構いませんよ。体のほうは、もう大事ありませんね？」

確認をかねて問う。雪音は顔を上げ、肅々とした表情で頷いた。

「おかげさまで、元通りです。休んでしまった分だけ、精一杯働かせていただきます」

「そうね」

烈はゆるりと言葉を返し、一呼吸置いた。雪音の目を見つめて、それで、と言葉を継ぐ。

「それで、答えは出ましたか？」

「……」

雪音は口元に力を入れた。それまでまっすぐ烈を見つめていた視線がぶれ、落ち着きなくさ迷い、畳の上に落ちる。

「……いいえ」

沈黙を落とした後の声は低かった。

「療養中、ずっと考えました。今も考えています。問いは問い合わせ、答えは一步も進まずに堂々通りで、どうしようもありません」

膝の上に置いた手が、ぎゅ、と握りこぶしを作る。烈はそれを、好ましくも、痛ましくも思つた。

「この生真面目な娘が抱えた問題は大きく、それを解決する手立てを見つける事は容易ではなく、手助けも出来ない。出来るのはただ、上官として言葉を与える事だけ。

「では、もつと長い休養を取りますか」

「…」

びくつとして、雪音が烈を見た。感情の表れやすい顔に、動搖が

揺らめいている。

「……それは、除隊せよといつ事でしょうか?」

「あなたがそう取るのなら、構いません」

意地悪な言葉。そう自覚して、烈は唇に苦笑が浮かびそうになるのを抑えた。ここで微笑めば、今の言葉が冗談と思つてしまふかもしれない。

「私達は人の命を預かっています。例え親兄弟が目の前で傷つき息絶えようとしても、最後まで命を救う事を躊躇つてはいけません」

「あたしは!」

そんな事はしない、と言いたかったのだろうが、烈は雪音の言葉を遮つた。

「今回の件ではあなたは、親しい人の命が失われる悲しみを、言い換えれば恐怖を知りました。その恐れはあなたの中に根を下ろし、決して消え去ることはないでしょ?」

「この先、今そこに、命を失いそうになつている人を前にした時、あなたは惑つ事なく、手を差し伸べることが出来ますか?」

「……そしてまた、その時自制を無くし、己を失う事は無いと、誓えますか?」

「……っ」

雪音はもう一度視線を落として、眉間にしわを刻んだ。病床でこの事を考えなかつたはずはないが、烈にあらためて突きつけられ、動搖しているのだろう。

烈は語調を荒げるでもなく、穏便な表情のまま、雪音に問つた。恐怖のあまり、自分の手で最期を看取る事を恐れまいが。結果、救えたはずの命を、見捨てる事はしまいか。

そして、命を救う覚悟がないのであれば、雪音が四番隊にいる意味があるのか、と。

重い沈黙が落ちた。

「うららかな日差しが縁側から部屋の中に滑り込み、畳に光を投げかける。

小鳥が飛来し、庭の木に宿つた。小さな足で飛びながら枝を移動し、軽やかな声で歌つている。

どこからか篠笛の音色がかすかに聞こえてきて、それに唱和する。歌は時に合い、時に離れながら、どこまでも続くように思われたが、不意に小鳥が飛び立つて途切れた。篠笛もぴたり、と止まり、痛いほどの静寂が辺りを占める。

「あたしは」

不意に、雪音の声が閑寂を破る。雪音は動搖の色濃い表情のまま、それでもまっすぐ烈を見つめ、言った。

「傷ついた人を見る事が怖いです。いつも、いつも、逃げ出しあなまります。それは今も昔も変わりません。

だけど

雪音の顔が歪む。泣き笑いのよう。

「だけど、逃げても、あたしの願いは変わりません。

怖くて、怖くて、仕方ないけど、でもあたしは、人を救いたいんです。自分の力で人を助ける事が出来るのなら、そうしたいんです。……いえ、そうします。これから先、あたしの掌中で命を失う事があつても、今度は、逃げずに

「そうですか」

烈はやんわり微笑み、立ち上がり、雪音の前に膝をついた。病でこけた頬をそっと包み込み、

「それならば、強くおなりなさい。あなたは弱く、儚い。その手で多くの命を救いたいと願うのであれば、あなたはもつと強くならなければなりません。身も、心も、何もかも。

鑑原五席。

強く、毅くおなりなさい。私は、あなたに期待していますよ」

雪音の目が揺れた。潤み、激しく瞬きをする。辛うじて泣くのをこらえて、雪音は小さく頷いた。

「せー。あつがいへ、いりやこねや」

「えーっと……」「

戸口からひょこつと、中を覗く。部屋の中には男達がたむろしていて、杯を傾けたり、話に興じたり、さっころを転がしたりと思いの時間を過ごしているようだ。黒々とした人波を見渡していると、戸口の近くで笑い声をあげた男が気がついた。げ、と顔が歪む。「四番隊の暴力女じやねえか！ 十一番隊に何の用だ！」

「四番隊？」

「アア？ 鑑原かよ

ざ、と一斉に顔がこぢらに向いて、雪音は思わず「うわ」と呻いてしまった。

「マキマキうるさい。あんた達客が来たくらいで、いきこちがんつけてんじやないわよ」「

「マキマキ言づな！」「

「お前なんか寄じやねえよ！」「

「用がねえなら帰れバカヤロー！」「

キーッと猿のように歯を剥く荒巻達に、雪音はしつ、しつ、と手を振つて、もう一度部屋の中を見渡した。居ないなあ、と口を曲げたところだ、

「何だ、この騒ぎは？ ……つて、雪音じじやねえか」

後ろからぬ、と一角が顔を出した。途端、静かになる隊員たち、ぱつと笑顔になる雪音。

「一角！ 良かつた、あんた探してたのよ。何処行つてもいらないんだもん、ぐるつと歩き回っちゃつた」

「…………おつ」

一角はこころもむり上体を後ろにそらした後、「そりや悪かつたな」と呟いた。何かをこまかすように頭をかいて、

「俺に何の用だよ。お前、今日非番だろ。確か

ぶつきりぱつに問つ。対して雪音は、腰をかがめて足元の荷物を取り、それを一角に差し出した。

「お礼渡そうと思つて。遅くなつちやつたけど」

「礼?」

雪音が差し出しているのは、手漉き和紙に包まれた日本酒だつた。辛口のその酒は確かに一角の好みではあつたが、雪音から貰う筋はない。何の事かと眉根をよせる一角に、雪音はここに微笑んだまま言つ。

「ほひ、あたしが寝込んだ時、お見舞いに来ててくれたじゃない?
あの時お菓子も貰つたから、そのお礼」

「ばつ……」

一角は一瞬言葉に詰まつた後、ギロツと部屋の中をこらみ付けた。息を潜めて成り行きを見守つていた隊員たちが、射殺せそうなその眼光に怯え、慌てて目をそらす。

一角はひとまず戸口から離れた廊下へ、雪音の腕を掴んで移動して、

「ばつかやる。そんなの、わざわざ礼に来るほどの事でもねえだろ。
俺は何にもしてねえ」

語調強く言つが、雪音は首を振つた。

「そんな事ないよ。一角のおかげで元気になつたんだもの、感謝してるんだつて。だから、お礼。

好きよね? 地獄車。それとも雪原のほうが良かつた?」

「だつ、から、そういう事じゃなくてだな……」

「あー! ゆつきーだあ!」

一角の焦りを吹き飛ばす甲高い声が響き渡る。と、雪音の背筋が弦のように伸びて、

「あー! やちる副隊長!」

一角の手に酒瓶を押し付けたと思つたが、あつとこゝ間に田の前から消える。振り返ると、雪音は至極幸せそうな顔で、草鹿やちるを抱きしめていた。

「やーん、お会こしたかつたです、やぢる副隊長!」

「むぐむぐ……ふむ、苦しいよゆつをー。でもゆつをー、元気になつたんだー! 良かつたね」

「はー、おかげさまで!」心配をおかけしました。でも、副隊長に気遣つていただけたなんじ、雪苗はソウル・ソサエティーの幸せ者です!」

あつこれ、やぢる副隊長に食べていただきたこと思つて持つてきました。福田屋の金平糖ですよ!」

「わーい、ふくだせのこソペーとー、おいしこよな。一緒に食べよ、よ、ゆつをー!」

「はー、じ相伴に預かつます! ゆつをー!」

雪苗は、周囲に花を撒き散らすような勢いで恥じらいながら、やぢるじ手をつないでとことこ去つていいく。一人取り残された一角は、しばし硬直した後、手の中の日本酒を見下ろし、

「……ついでかよ。俺は。」

憮然とした。それから、別にそれはかまわねえんだけど、と言つてをする。誰が聞いてくるわけでもないの!」

遠いよつで近いその彼方に

菊の花束を手に、道を進む。

足取りは、重い。

「……ふう」

何度も目になるか分からぬため息をついて、あたしは足を止めた。自分の気持ちを落ち着かせるために見上げた空は、くすんだ青色で、少しも気が晴れなかつた。

『海燕さんのお墓参りに行つて来ます』

職場に復帰してようやく以前のペースがつかめた頃、あたしは思い切つて烈様にそう申し出た。烈様はあたしの気持ちを見透かすように目を細め、送り出してくれた。この花束は、烈様からの手向けだ。隊舎にあつた線香も一束くすねて、あたしは海燕さんの実家へ向かつている。

だけど道のりは遅々として進まなかつた。少し進んでは足を止め、また歩き出しては立ち止まつてしまつ。

（本当は、行きたくないのかな、あたし）

海燕さんは都さんの旦那さんだつたから、一人でいるところに混ぜてもらつて、『ご飯を食べにいつたり、お花見に行つたりと良く遊んでもらつっていた。

大雑把な人だつたけど、気さくで、どんな事にも真つ向から立ち向かうその姿は正直格好よくて、さすが都さんは見る目があるなあ、とちょっとと思つたりもした。その強さが羨ましくて、照れ臭くてあまり言葉にしなかつたけど、あたしは海燕さんが好きだつた。

だから。だから、これから海燕さんのお墓を参つて、あの人の死を現実のものとして見るのが、怖い。

（…………でも、行かなきや）

都さんのお墓には、月命日以外に、一人になりたい時や誰にも聞かせられない悩みを打ち明ける時なんかにちょくちょく行つてゐるの

に、海燕さんにはまだ一度も会いにいったてない。怖いけど、悲しいけど、どこかで海燕さんの事も、もう亡くなつた人として区切りをつけなきやいけないんだから、行かなきや。

「よつしー。」

『気合を吐き出して、あたしは再び歩き出した。

「……何あれ」

もう途中で躊躇わず、ずんずん先を進んでいたけれど、海燕さんの実家近くと思しき場所まで来て、面食らつた。流魂街外れ、といふかもう家の一つもないような郊外に、建物がある。住所と周りの様子からして、多分あそこがそう、なんだと思うけど……

「……何で垂れ幕……つていうか足……？」

家の左右にどでかい足のオブジェが逆さまに立つていて。そしてその指に紐を引っ掛けた垂れ幕には、これまたどでかく『志波空鶴』と達筆な文字が躍つっていた。

「ええと……」

確か海燕さんの妹さんが空鶴つて名前だつたから、実家は間違いなくあれよね……。何ていうか、ある意味芸術作品なのかもしけないけど……うわあ、近寄りたくない。あんな変な家。

ちょっと回れ右して帰りたい気分になつた時、どばん！ と大きな音が聞こえて、家の中から人が出てきた。

離れていても聞こえるくらいの勢いで扉を開けたのは、どうやら女人のひとみたいだ。大柄な男の人一人を連れて、何か話しながら家の裏手に回ろうとしている。

もしかしたらあの人が空鶴さんかも。帰りたい気持ちを無理にねじ伏せて、あたしはあの奇妙な家に走りより、

「あ、あのつ！」

三人が見えなくなる前に、上ずつた声をかけた。

「あん？」

「おや、お客人ですかな」

「どなたですか？」

あたしの声に、女人人が、ついで男の人たちが振り返る。あ、この男の人たち、双子だ。がつちりした体格に反して、ちつちやい目をした顔が二つ並んで、何だか妙な迫力がある。

ええと、と氣後れして言葉に詰まつたら、女人人が前に出てきて、あたしをじろりとにらみ付けた。うわ、この人は双子よりもっと迫力がある。

姉御つぽいつていうのかな、大きい瞳なのに目つきが鋭くて、にらみ付けられると訳もなく謝りたくなつてしまつ。右上腕には「空」の刺青、左はそもそも腕がなくて、背中には刀を背負つてゐる。おまけに、はだけた着物の下には乱菊さん並みに大きい胸がどーんと存在を主張していて、何だかもつむやみやたらに威儀のある女性だつた。

「なんだテメエ。死神が何か用か？」

女人人はあたしを、というかあたしの死霸装をじろじろ見た後、その外見によく似合つべらんめえ口調で問いかけてくる。あたしは慌てて腰を折つて、

「急に押しかけてすみません、空鶴さんですか？ あたし、護廷十三隊四番隊所属の鑑原雪音です。海燕さんのお墓参りに伺いました！」

早口に用件を告げた。

「いかにも俺は空鶴だが……墓参りねえ」

訝る声音に顔をあげると、女人人が眉根をよせ、男の人たちも困つたような顔を見合わせている。

「あの……『都合悪いでしようか』

おそるおそる尋ねたら、女人人が肩をすくめた。

「別に悪かねえがな、アーニキの墓はねえよ」

「え？ ……お墓、こちらじゃないんですか？」

海燕さんが亡くなつたとき、朽木さんがここにつれてきたつて聞いたのに。

「しいてこうなら、あつちだな」

いつて、空鶴さんは人差し指を上に向かた。その指に従つて見上げた先には、細く高くのびる煙突があつた。

「……？？？」

意味わからんない。どう見てもあれ、墓石じゃないし。問いかけるようにもう一度空鶴さんに視線を向けると、

「アニキはあれで空に打ち上げたんだよ」

あつからかんと答えたので、あたしはぽかんとしてしまつた。え、なに？ 今、亡くなつた海燕さんを、あの煙突で、空に打ち上げつて……

「え、えええええ！？う、打ち上げたあああ！？ な、な、なんで！」

「俺あ花火師だからな」

「答えになつてない！ おかしいでしょそれ！」

「ああん？」

力いっぱい突っ込みを入れたら、空鶴さんの目が座つた。いきなりあたしの胸倉を掴んで引き寄せ、

「何だテメエ、俺のやる事に文句あんのか？」

ドスのきいた低い声ですごんでこられたので、

「……いえ、ないです」

思わず引つ込んでしまつた。だ、駄目だ、なんかこの人海燕さんがより強力になつた感じで敵わない。ここは四の五の言わばず、とつと退散したほうがよさそうな気がする。

「あ、あの、じゃあ失礼しました……」

襟を掴む手が離れたのを幸いと頭を下げよつとした時、

「別に急いで帰ることたねえだろ」

空鶴さんがくい、と立てた親指で後ろを指した。示しているのは、さつきの煙突だ。

「あんなもんしかねえが、せつかなんだ、墓参りしてけ。アニキも喜ぶだうさ。金彦、銀彦、案内してやれ」

「「はつー」」

「え？ あ、あの……」

いやもうこいです、と遠慮する暇もなく。あたしは大柄な双子に挟まれるようにして、ずるずる家の裏へと引きずつてつれていかれてしまった。

その煙突は、今まで見たことがないほど高かつた。近くで見ると、大人5・6人でやつと抱えられそうな太い柱がずしん、と鎮座ましていて迫力がある。丸い台座の上に引き上げられ、

「さ、こちらです、鑑原殿」

「存分に参られよ」

「は、はあ……」

びし、とポーズを決めた双子に急かされ、あたしは渋々煙突の前に腰を下ろした。どうしたものかと首をひねつたけれど、とりあえず菊の花を置いてみる。ついで、懐から線香も取り出したけど、火をつけても立てる場所がないので、そつちはしまい込んだ。そして、手を合わせて目を閉じる。

お墓じやない、海燕さんのいないところでお祈りするのは変な感じだ。打ち上げたつて、空鶴さんは何でそんなことしたんだろう。さつきちらつと、花火師だつていつてたつけ？ 花火師つて皆そういう弔いをするのかな？ いやまさか……とかそんな事を考えていたら、不意に風の音が強く響いた。

(……あ)

ふわりと暖かい風が頬をなでる。さわさわと草が揺れて、鳥の鳴き声が微かに聞こえてくる。じつとしていると、日の光で体がじんわり暖かくなつてくる。ゆっくり呼吸してみたら、緑と土の匂いが胸に満ちた。

「……」

目を開けて、あたしは煙突を見上げた。それはさつきと変わらず空に向かって伸びていて、少しも揺るがない。あたしは、脇に控え

てる双子にあの、と声をかけた。

「空鶴さんって、本当にこれで海燕さんを打ち上げたんですか？」

「うむ、その通りですぞ」

「それって、もしかして、海燕さんの体をそのまま……？」

「もしそうなら、相当エグい事になりそんなんだけ。と思つたら、まさか…と双子達が同時に首を振つた。

「じゃあ、どうやつて？」

「それはですね……」

「うむ……」

途端、一人の口が重くなる。何かいいにくいくなんだろうか。

再度問い合わせようとした時、

「アニキは、粉々になつたんだ」

不意に後ろから声がかかつた。振り返ると、家の裏口から、空鶴さんが歩み出てきた。台座の上に上ってずんずん近づいてきて、あたしの隣にすわり、ついで手に持つていた日本酒の瓶をどん、と下ろす。一緒に持つていたぐい呑みを床に置いて、空鶴さんは口を開いた。

「うちに帰ってきてからしばらくなつたら、アニキの体は砂みたいに粉々になつちまつたんだ。指のひとかけらも残さず！」

「こなごなつて……何で、そんな事に」

ソウルソサエティで死んだ魂魄は、その体を構成していたもの全てが、靈子に還る。ひとかけらも残さずに、といえば同じだけど、靈子分解は徐々に、人間が土に還るのと同じくじくつと行われるのが普通だ。

海燕さんが亡くなつてからどれくらい時間がかかったかは知らないけど、少なくとも家に戻つてきて一日一日で起きる事象じやない事は確かだと思つ。

「もしかして、虚と闘つた時の傷が原因とか？」

「さあな、知らねえよ、つと」

結構重要な問題を空鶴さんはあつたり流して、日本酒の蓋を開けた。

もう少し詳しく聞いて、身を乗り出したの」、空鶴さんは瓶を傾けて杯に注ぎ込みながら、話をそらした。

「お前、四番隊の鑑原とかいったな。とすると、あれか。都の後輩か」

「あ……はい、そうです。ご存知でしたか？」

「ご存知ってほどじゃねえがな。都とアニキが時々、お前の話をし

てたのを思い出した」

「え、都さん達が！？ な、何て言つてました？」

二人があたしの事話してたって、どんな事を？ どきどきしながら聞いたら、空鶴さんが口の端を上げて笑う。

「アニキは、くそ生意氣で鬼道ど下手な後輩がいるつて言つてた」

「うつ……」

思わず床に手をついてしまう。そ、そういう評価ですか……。面と向かって、冗談めかして言われたことはあるけど、自分の居ないところでもそんな事言われてたなんて、かなりショックだ。

「そり、持てよ」

「は、はい……」

凹んだまま、ぐい呑みを手にする。透明な水面にはあたしの情けない顔が映り込み、すぐに揺れて歪んだ。空鶴さんがくつくつ、と声を漏らして、同じように杯を持った。

「それと、見所のある奴だとも言つてたぜ」

「え？」

「あいつは根性あるから、ちょっとくらい壁にぶつかつたって止まりやしない。死神になるなら、それくらいの気概がなきゃあな、とか何とか」

「……」

「都は、何つてたかな……。……ああ、気持ちが優しい子だから、自分一人で悩みを抱え込むような事はしないでほしい、とか言つてたか」

「……そ、うですか……」

さつき凹んだ分、余計に感動して、あたしは声に詰まってしまった。「一人が、そんなふうに言ってくれてたなんて。あの一人に、あたしは何も出来なかつた。

共に戦う事も、一人の命を救う事も出来なかつた。心地よい居場所を、優しい温もりを、『えられるばかりで、何も返せなかつた。

それなのに、一人はあたしを認めてくれていた。心配してくれていた。

（都さん……海燕さん）

ぎゅ、と唇をかみしめた時、視界にぐい呑みが入つてきた。顔を上げると、空鶴さんが手を差し伸べている。

「そら、献杯だ。アニキと、都に」

「あ……はい」

ああ、さつきから何でお酒を準備してるんだ？と思つたら、二人に捧げるためだつたのか。

一瞬間をあいてから、意図を理解したあたしは、掌中のぐい呑みを空鶴さんのそれとぶつけた。透明なお酒の表面に小さな波紋が出来て広がっていく。

その波紋にそつと唇をつけたら、口の中にすーっとお酒の味が広がつた。辛口だけど重くなく、喉をするりと滑り落ちる感じで、後にはお米の甘い香りがほんのり残る。思わず目を閉じてじっくり味わい、ほう、とため息をもらす。

「美味しいお酒ですね」

感嘆の声音で呴くと、一息に飲み干した空鶴さんはニッコリと笑つた。「こいつはアニキが好きだつた酒だ。アニキが帰つてくるたまのみには、こいつを呑みながら、朝まで大騒ぎしたもんぞ」

「へえ……」

海燕さんの周りにはいつも人が集まつてくるから、宴会ときた日にはそれはもう大盛り上がりで楽しかつた。ここでもきっと、海燕さんはそんな風に、皆に慕われていたんだろうな。そう思つたら、

何だか肩の力がふ、と抜けた。

空鶴さんは杯を床に置いて瓶をつかみ、それを煙突の根本に振りかけて、ぐいっと見上げた。目を細めてしばらく黙り込む。真摯なその横顔にかけられる言葉がなくて、あたしも口をつぐんだ。ちびちび呑みながら目を閉じると、最初にこの煙突の前に来た時と同じ静寂に包み込まれる。

近くの林から、鳥が飛び立つ。枝の揺れる音。ふわりと通り過ぎる風。青臭い草と、菊の香り。少しきつめの、お酒の匂い。ふう、とため息を聞こえた。目を開けたら、空鶴さんが少し乱暴な手つきで瓶を傾けてくる。あたしはそれを受け止めて、自分の手に持ち、「一献、どうぞ」

口を向けた。空鶴さんは虚を突かれたように目を瞬かせたけど、ああ、と答えてぐい呑みを持つた。差し出されたそれに注ぎ込みながら、言つ。

「ここは良いお墓ですね、空鶴さん

「あン?」

「空と土と太陽と。全部が感じられる、良いところだと思います。それに」

ぐ、と見上げた煙突は、どこか高さを感じさせるほど堂々と、空に向かって伸びてくる。

「あの上からならきっと、ソウル・ソサエティが皆、見えますよね」

「…………」

「間違つてたらすみません。空鶴さんは、海燕さんをソウル・ソサエティの空にかえす為に、打ち上げたんじゃありませんか?」

問いかけると、空鶴さんはじろり、とあたしを睨み付けた。眼光の強さに思わずびくつとしてしまう。ま、間違つてたかな、ついうかちよつと考え方が感傷的過ぎた? びくびくするあたしをじいっと睨みながら、空鶴さんが口を開く。と、

「……ただいまー姉ちゃん! 虎吉の団子、買つてきたぜー!」

家の方から元気の良い子供の声が聞こえてきた。ガンジュー殿、と

言ひながら双子が飛ぶよつに走つていき、空鶴さんがチッと舌打ちする。

「めんじくせえのが来たな。悪いが、今日はもつ帰つてくれねえか。死神のお前がいると、ちょっとややこしい事になる」

「へ？ あ、は、はい」

何だか良くなきにけど、今の子供とあたしを会わせるのはまずい事らしい。でも元々こっちが押しかけてきたんだから、長居するつもりはなかつたので、

「それじゃ、急に訪ねてきたのに、お墓参りさせてもうつて、有り難うございました」

急いで立ち上がりお礼に頭を下げる。空鶴さんがおひつ、と鷹揚に答えてくれたのを潮に身を翻したといひで、

「おひ、鑑原！」

「はいっ！？」

急に名前を呼ばれて、びくつとして振り返ると、空鶴さんがお酒の瓶を軽く振つて、笑つた。

「暇になつたら、また来いよ。今度はお前が俺に、アーチの話を聞かせてくれ」

一瞬きょとんとした後、あたしはほつとして、笑い返す。

「はい。また、絶対来ます！」

「おう。土産を忘れんな」

ちやつかり請求してくるところは、海燕さんに似てる。あたしはもう一度ペこりと頭を下げる、足早に志波家を去つた。

帰る道すがら、振り返つた。志波家はもつ小さく見えるだけで、その背後に立つ煙突が青い空を背景に黒々とした影を落としている。来る時はあの変なオブジェに圧倒されて気づかなかつたけど、離れてみると、煙突の方がより存在感があつた。

(海燕さん)

ここに来る前は怖かつた。海燕さんの死を、現実のものとして受

け入れるのが怖くて、来たくなかった。だけど今、不思議なほど
穏やかな気持ちで、海燕さんの名前を口に出来る。

「海燕さん」

声に出して呼びかけて、あたしはにっこり笑う。
見上げた空は、まだ見た事のない海はこんな色なのかもしれない、
そんな風に思えるほど鮮やかな青で美しかった。

手

手をかざす。雲一つない青い空を、手で覆はれる。あることは、手を伸ばす。

どうして、と言んだ。
何故、と泣いた。
全てが壊れていた。
何もかも、無くなっていた。
自分が知らないうちに。
そんな事がしたかった訳じゃない。
望んだ事は、ただ一つ。
自分自身を消し去る。それだけだったの。』

「ゆつきー、何してんの?』

ひょい、と明るい桃色が視界を覆つ。あまつに近さに思わずおおう、と叫んで、それからやすむの顔を認識する。雪音は慌てて起きあがつた。

「やむひる副隊長…』

「おひるねしてたの?』

「あ、いえ、えっと……休憩です』

休憩は本当だが、少し時間を長く取りすぎている事は直覚している。こんなところでわざつてるなんて、不真面目な隊員だと思われるかもしれない。焦つたが、

「そつかー、じゃあ一緒にあそぼー。剣ちゃんが虚たいじにこっちやつて、ひまなのー』

やむひるはこいつに気にせず、にぱ、と笑つ。天真爛漫なその笑みに、顔が土砂崩れを起こしそうなほど笑み崩れて、雪音は「うん」と頷いた。頷いた後で、仕事を思い出してうなだれる。

「うへ、申し訳ありません、副隊長……。雪音はこれからお仕事にいかないといけないんですね」

「えーーー!? やだやだ、いこつよーあんじゅやが、十人前じりやき作つてくれるつていってたのにてー」

「ああ、やちる副隊長とどら焼きを頂くなんて、至福の時ですが……すみません。病気で休んでいた分、仕事がたまつていて」

「むー」

やちるは不満やうに顎をふくらませた後、じやあにこもん、と背を向けた。

「あつ、副隊長……つー」

呼び止めよつとする間、そあれ、小さな姿はあつとこつ間に飛び去つてしまつ。あああ、といひしがれた雪音は、がつくり地面に頭を落とした。

「仕事が……仕事がなれば、やちる副隊長とー一緒に始めたのにてー」

地面に穴が出来そつなほどまだ雪音だったが、「とつとと終わらせれば、やちる副隊長に随伴できるかもー」、気合いを入れてがばっと立ち上がると、すんずん足音をたてて隊舎に向かつ。

胸によどんでいた遠い記憶は、再び心の奥底へとしまって込まれた。

惚れてねえ。たとえ隊長がそう言つたとしても、俺はあんな奴には惚れてねえんだ。

「一角」

「……」

「ちょっと、一角！」

「うわっ！？」

耳のそばで「デカイ声を出されて、俺は飛び上がつてしまつた。驚きすぎて椅子から落掛けになつて、慌てて体勢を立て直す。

「何してゐのさ、一角」

呆れたように言つのは、書類を手にした弓親だ。

「な、何してゐて、お前のせいでこけそつになつてんぢやん！」？

何、馬鹿な事してゐなあつて顔してんだ、てめえ！ 怒鳴ると、

弓親はふ、とため息をついた。

「僕の呼びかけに全然気づかないのが悪いんぢやないか。何見てたのさ」

「あつ、ちょっと待て！」

慌てて止めようとするも遅かつた。弓親は俺を押しのけて外を見、それからああ、と声をもらす。

「雪音ちゃん、こつち来てたんだ。何だ、また見とれてたの？」

「みつ、見とれてなんかいねえ！ ちょっと思索に耽つてただけだ！」

！」

とにかく心にもねえ事を言い訳に使つたが、我ながら説得力は皆無だ。弓親はふーん、と半眼で俺を見やがる。

「思索じゃなくて妄想じゃないの？ そんな必死になつて否定するといつりを見ると」

「つ、うるせえ！ 違えよ！ あんな奴に何で俺が……」

「あんな奴、だからだろ？」

「親は俺の動搖なんて関係ないとばかりに、机に座って、書類を広げた。

「別に好きなら好きで良いじゃないか、変に誤魔化さなくても「なつ……」

「すばつと言われ、俺は顔に血が上るのを感じた。だん、と椅子を蹴つて立ち上がり、

「だ、誰もそんな事言つてねえだろ！」

詰め寄るが、弓親はしつしつ、とすげなく手を振つた。

「はいはい、分かったから、五月蠅ぐするなら余所へいきなよ。僕はこれから仕事するんだから」

違つ。俺はあんな奴になんて、惚れてねえ。絶対に惚れてなんかねえんだ。

「親に部屋を追い出された俺は、敢えて雪音が居ない方へ足を運びながら思つ。

妙に雪音が田代へひつになつたのは、あの見舞いの時からだ。それまでどうつて事も無かつた雪音の一拳手一投足が、なぜか気になつて、いや関係ねえだろ俺には、と無理矢理視線をはがす事が多くなつた。

そうだ、俺は別にあいつに惚れてなんかいねえ。

言い聞かせるように胸の中で繰り返す。どうして俺が、あんな奴に惚れなきやいけねえんだ。あんな、乱暴で口が悪くて色気が無くて酒癖悪い女、誰が。

* * *

と、思つていたのに。

* * *

「一角、ついでついでー！ どんどんつけー！」

いつも飲み会で、いつも通り酔つ払つて俺に酌を強要してくる雪音。

「つるせえな、ちょっとは黙れこの酔つぱらいが！」

いつの気も知らねえでこの野郎、と苛々した気持ちで怒鳴りつけた、雪音はむつりと眉間にしわを寄せた後、いきなり俺に抱きついてきた。

「つおつ？ー！」

横から、右手だと腰を抱え込まれて、俺はびびって声を上げてしまつた。酔つ払つてゐるせいか、雪音は思いの外強い力でぎゅうっとしがみついてくる。

「な、何しやがるー！」

つい焦つてどもると、雪音は顎で俺の腕をぐりぐり押しながら、「なによーこのハゲ、あたしの酒が飲めないってのーー！？ 文句言わずにとっとと飲めつてのよーー！」

ろれつのはじい口調でぐだぐだと絡んでくる。しかしその口調はともかく、俺にくついたまま上田遣いにいつを見上げる雪音の、顔が。

酒で我を忘れてるせいか、上氣した頬と潤んだ目が、とんでもなく色っぽく見えて、しかも押しつけられる柔らかい感触、が。

「…………ー！」

瞬間、俺はくらつとした。血が逆流する音さえ聞こえそうなほど身体が熱くなつて、腹が疼く。

（やべえつ…………ー）

「うひやあー！」

「あやつー？」

そう思つた次の瞬間、思わず力一杯雪音をはねのけてしまつた。吹つ飛ばされた雪音は、後ろに居た伊勢に勢いよくぶつかる。雪音は仰向けに転がつて悲鳴を上げた。

「いたーーっ！ 何すんのよおーーっ！…」

「な、ど、どうしたんですか、鑑原さんっ！」

すり落ちかけた眼鏡を直して問う伊勢。雪音は唇を尖らせてぐるつと向きをかえ、

「伊勢さん、あほハゲに暴力振るわれたーーー！」

泣き言を言いながら、今度は伊勢にガバッと抱きつぐ。

「さやあっ！ ちょ、ちょっと鑑原さん、しがみつぐの止めてくださいーーー！」

伊勢は焦つて雪音を引きはがそうとしたが、酔っ払いにはその抵抗も楽しげりしく、

「ええー やだあ、伊勢さんいー匂いするもーん。やつぱり女の子つて柔らかくて気持ちいー」

などと言いながら、伊勢に頬ずりしている。

「何を言つてるんですか、は、早く離れて……」

「ああいいなあ、雪音ちゃん。ボクも七緒ちゃんだつこしたいなあ」一人がじやれていると、京楽隊長がだらーん、と鼻の下を伸ばしてこぎりよつていぐ。伊勢は雪音を押しのけようとしたしながら、「却下です！ 隊長はそれ以上近づかないでください！ ま、斑目さん、呆然としてないで、鑑原さんをどうにかしていただけませんか？！」

俺に助けを求めてくる。

「……あっ、ああ」

俺はハツと我に返つて、雪音の襟首を掴んで引きはがした。

「うにゃーー！ はなせつるりんーーー！」

じたばた、と暴れる雪音。いつもならこので説教の一つでも始めるところだが、俺は自分の鼓動が激しくなつてゐる事に動搖して、雪音を見てこられなくて、そのまま投げ捨てるよつて放り出してしまつた。

「つきやーーっ！」

「うわっ？！ ちよ、一角さん何してんスか、雪音さん怪我します

つて！」

ちょうどそこに居た恋次が、一瞬宙を舞つた雪音を受け止めて、俺に抗議の声を上げる。だが俺はつるせえ、と怒鳴つて席を立つた。草履を引っかけて店の中を足早に抜け、廁へ飛び込む。

「……はつ……」

誰もいねえのが幸いだつた。俺はすかずか入り込んで洗面台にバンシと手をつき、息を吐き出した。

口から吐きそうな勢いで、ばくばくと激しい鼓動がする。熱くなつた身体はにじんだ汗のせいで冷えて、熱と冷氣を同時に発して気持ち悪い。

酔つ払つたあいつに、あんな風に抱きつかれる事なんて、これまで何度もあつた。それなのに、今更馬鹿みてえに狼狽えるなんて、どうしたんだ俺。

「はつ……くそつ」

俺は息を荒げたまま顔を上げた。そして息を止めた。

薄汚れた鏡に映つた俺の顔は動搖して、みつともねえくらい赤くなつていた。飢えた顔だ。ねだる顔だ。欲しい欲しい、と呟んでる、そんな顔だ。

こんな顔を、俺はあいつに見られて。

「つ……！」

俺は喉を鳴らして唾を飲み込むと、蛇口をひねり、勢いよくほどばしう出た水を浴びた。火照つた頭は冷たい水をかぶつて、少しづつ冷やされていった。

* * *

「一角」

「……」

「おーい、一角？」

「さつきから何だよ」

後ろからかけられた弓親の声に、振り返らないまま応えたら、弓親は驚いたようだった。

「あれ、今度は気がついたんだ。また、雪音ちゃんに見とれてたのかと思ったのに」

俺は低い声で唸つた。弓親の言つ通り、視線の先には、ファイルを抱えて廊下を歩いていく雪音の姿がある。前と同じ状況だったが、もう否定する気はねえ。

「新」

俺に倣つて木陰に腰を下ろす『親に、俺は言つ。』

「え、何がおい？」

さうとした告白に、母親は俺を振り返り、俺の顔を見て、それ

から、

そう言って、幹にもたれかかる。

七

俺は短く応えた。

弓親とは長い付き合いだ、顔を見れば俺が何を考えてるかくらい、分かるんだろう。余計な事を聞いてこない距離感が心地良くて、こいつになら言つても大丈夫だと思つから、初めてそれを、言葉にした。言葉にしたら、もやもやしてたものが晴れて、すつきりした。

目を閉じ、その微かな靈圧を追いながら、俺は思う。

ショウガネえ。一度でもあいつが女だと意識しちまつたら、もう口先の言葉で誤魔化してなんかいられねえから、認めるしかねえよ。惚れてる。俺の理性がどんだけ否定しちまつしても、俺はあいつに惚れてるんだ。

「勇音、今日何食べる? メーコーもうひてきひやつた」
帰り支度の最中、うきひきとメーコーを広げた雪音の手元を覗き込んで、勇音はそうねえ、と顎に手を当てた。

色鮮やかで、今にも匂いたちそうな料理の数々に思わず田を輝かせ、まだ食べたことのないのつてどれだけ、と楽しく語らついたら、

「雪音」

「うわー! ?」

「きやー!」

「いきなりぬ、と人の顔が田の前にきて、思わず一人して悲鳴をあげた。その反応にむづとしたのか、身を引いて鼻を鳴らしたのは、
「い、一角? びっくりしたあ、急に顔出さないでよ」

十一番隊第三席の斑目一角だった。

「斑目三席、どこか怪我されたんですか?」

四番隊では患者に対してもうた担当といつものはないのだが、この一角は来るたび、雪音をわざわざ指名して治療を受けている。なので、また雪音を指名しに来たのかな、と思つた勇音だったが、一角は首を振つて、雪音を見た。

「あー。お前、じの後空しててるか

「は?」

きょとん、と田を瞬く雪音。

「いや、あのな。飯食いにいかねえか。俺と

「え、いきなりそんな事言われても」

何やら言ごとにくそつこ、ぶつきりぽつな口調で言つ一角と、素で困つたように答える雪音。端で見てすぐ分かる、一角の独特な雰囲気に、勇音の方がぴんと来た。

「あたし達これから、じの飯行くといひで」

「あーーーいやいや！ あたしは良いからー。雪音、三席と一緒に行きなさいって」

「は？ なんで！？ だつてもひ、お店予約したって」

「大丈夫大丈夫、予約は明日じゅらしてもらつから。あたしが連絡しておくから！」

「え、でもそれだとキャンセル料が

「良いからー。ほり行くすぐ行く！ 三席、雪音をよりじくお願ひします！」

“ひひやひひやひひひ雪音をぐーー、と無理やり一角の前に押し出しき笑顔で言つと、一角は少し照れたような表情で「悪いな。借りてくれわ」咳き、雪音の手を掴む。

「ちよ、ちよ、ちよっと、勇音、一角~~~~~？」

“いつてらつしゃーー、と手を振つて見送る勇音は、一人の姿が見えなくなつてから、ほうつとため息をついた。

四番隊に担当というものはないのに、毎度雪音を指名する一角。どれだけその事に文句を言われても、絶対に変えようとしないところからして、一角に何か思つとこりがあるのは間違いないだらう。そして文句を言いつつ、結構楽しそうに一角の相手をしている雪音だつて、悪い気はしていないと思つ。だから、

（斑目三席、頑張つてくださいねー）

勇音はうふふ、と含み笑いをしながら、店に連絡をするため、伝令神機を取り出したのだった。

雪音が引つ張つていかれた先は、少し暗めの照明で、全ての部屋が個室になつてゐる、お洒落な雰囲気の居酒屋だつた。すでに予約を取つていたのか、一角が入口で名前を告げると、すぐ一室に案内された。

成り行きで部屋に入り、腰を落ち着けとりあえずの一杯が来たところで、

「あのー、何かすつこ無理やり連れてこられた気がするんですけど

「何ですかこれ、誘拐？」

よつやく雪音は疑問を口にした。座卓を挟んで向こう側に座つた一角が、悪かつた、と氣の無い返事を返してきたので、むつとする。「勇音と先約あつたのに。あなたが無駄に迫力あるから、びびらせちゃつたじやないの」

「別に、びびらせてやしねえよ

「嘘つけ。あーもつ、せつかく東離あずひなの全品制覇にチャレンジしよう

と思つてたのに……」

「色気より食い気だな」

呆れたような声音に、更にかちんときて声を荒げよつとした時、いきなり田の前に箱が突き出された。

「うわつとー？ な、何？」

「誕生日」

一角は早口に言つた。

「……なんだろ？ 今日。だから、やる」

「……え。ええ？」

ぱりぱり、と瞬きした後、雪音はえーっ、と驚きの声を上げてしまつた。

「え、嘘、何であんたがあたしの誕生日知つてんの？」

「人に聞いた」

「ええええ、嘘。じゃあ何、これプレゼント？」

「そうだよ」

「う、つそお」

「嘘じやねえよ！ 早く受け取れよ！」

嘘、と連発されて腹が立つたのか、一角が雪音の手に箱を押し付けてくる。勢いのまま受け取つた雪音は、まじまじとそれを見つめた。

長方形の箱は黄緑と青の漉き和紙で綺麗に包まれており、造花の椿がちょこんと右上の方にくつついている。箱の地は薄い桃色に、白で桜の花びらが描かれていて、何とも可愛らしき。

「わー、ほんとだ、嘘じゃないんだ」

手の中でひっくり返して見ていくつうに、何だか嬉しくなつてき

て、

「ね、ね、これ開けてもいい?」

うきうき尋ねる。一角が、拗ねたように横を向いたまま、好きにじる、と言つので、丁寧に包装をはがし、ふたを開ける。

「わ、簪?」

箱から出して、行灯の下にかざしてみる。銀の棒にとんぼ玉がついているシンプルな簪で、白色のとんぼ玉の中に描かれた金箔と銀箔の桜文様が、明かりにきらりを光つた。

「すうい、綺麗。一角の趣味とは思えないわー、これ」「親に見立てもらつたんじゃないの? つけてみてもいい?」

「つむせえな、好きにしろひつてんだ!」

「はいはい」

適当に髪をまとめて挿して、鏡が無いので、背を向けて一角に尋ねる。

「どう? 似合つ?」

「…………」

一角は無言だった。ちょっと、感想くらい言ひなさによ、と振り返つたら、一角は雪音をまつすぐに見つめて、

「ああ、似合つ。お前にぴつたりだ」

眩しそうに目を細めて、見たことがないくらい晴れ晴れとした顔で、心底嬉しそうに笑つた。

「う。そ、そつ」

それを見て、雪音は言葉に詰まつた。あんまり真つ向から褒められたので、思わず身を引いてしまつ。多分今、顔が赤くなつていて、その事に慌てて雪音は、一角から目をそらし、

「え、えーと、ありがとう。嬉しいわ」

早口に礼を言つた。どういたしまして、とおかしそうに応える一角。もしかしてからかわれているのだろうか、と思つた矢先に、

「お前もこい年なんだから、簪の一ついひとつつけて、少しほ女らしくじるよ」

ぐい飲みに口をつけながら、こつもの口調で言つてたので、思わず口をとがらせる。

「悪かつたわね、女らしくなくて。だつて仕事中、余計なものつけるわけにはいかないんだもの」

「あん？ 何でだ。つーかお前、化粧もろくにしてないよな」

「うるさいに、しようがないでしょ。はたいた白粉が調合中にまじつたらとか、手術の時、飾り玉が患者の体の中に落ちたら、とか思つたら、飾り物だの化粧だの、してられないわよ」

「ああ、そういう事か。あ？ でも、卯ノ花隊長やら虎徹やら、化粧してないのか？」

「……してるわよ。あーもう、分かってるわよ、その気になれば化粧でも飾り物でも、いぐらでもつけられるわよ、あたしは怠慢なだけです！」

ふん、と雪音は拗ねて膝を抱えた。

雪音だつて常日頃、少しほ化粧をすべきだ、と思つてはいる。しかし、四番隊が他の隊より立場が弱く、また隊員も弱腰の連中が多いため、氣の強い雪音になぜか、本来の業務以外にも他隊との折衝（別名「たごた」）が回つてくる。それこそ毎日、日の回るよつな忙しさなのだ。そのせいでついつい、身の回りのことが疎かになつてしまつのも、仕方ないと思つ。それが言い訳に過ぎないことは、重々承知なのだ。

「分かつた、分かつたからそれ止めろよ」

壁に向かつてぶつぶつ唸つていたら、一角がとつなすよつて言つてきた。

「自分で氣になつてんなら、今日からすりやいこじやねえか。といふえず、その簪つけてよ」

「……うん。まあ、これは邪魔にはならないし」

「だろ？ せつかくの誕生日に、つまんねえ事でキレるなつて。ほ

ら、飲めよ

言いながら、空になつたぐい飲みに酒を注いでくる。それを大人しく受けた雪音は、まあそうよね、と気を取り直した。

せつかく一角がわざわざ祝ってくれたのだ、関係のない事でいちいち拗ねるのも申し訳ない。ぐい、と杯をあおつて、皿に酒に、うごろ喉を鳴らしてから、

「あ、そういえば、一角つていつ誕生日? お返ししなきゃね」

ふと尋ねると、一角はげほつとむせた。顔が赤くなる。

「そ、そんなもんいらねえよ。お返し田^たで祝つてるわけじゃねえぞ」

「いや、そうかもしれないけど、お礼したいし。いつ?」

「……十一月、九日」

「了解

心のメモ帳にしつかり書いておく。どんなお返しにしようかなあ、と早くも考えをめぐらせながら、徳利を手にとつて一角に差し向けた。

「その誕生日で、一角が自分で決めたの? あんたも流魂街出身よね」

「あ? 何で知つてんだ」

「何でつて、あんたみたいな貴族の子弟が居てたまるか。『親ならまだしも』

「あいつだつて、俺と同じところの出だぞ」

ぶすっとした顔で言つのがおかしくて、雪音はつに笑つてしまつ。「分かつてゐつて。でも見た田の雰囲気がね、全然違うから。あんたは見るからに野生児だもん」

「野生児つてお前な、俺を何だと……。ああ、もう良い。言つな」
藪をつついて蛇を出したくないと思つたのか、一角がぶちつと話を断ち切つた。そのまま黙るかと思つて、

「そういうお前だつて、流魂街の出だろ。誕生日、どうやつて決めたんだ」

逆に尋ねてきた。店員が持ってきた食事と酒を受け取りながら、雪音は応える。

「あたしのはねー、護廷十三隊に入った日。誕生日なんて知らないつて言つたら、隊長がじやあ今日にしましょつ、つて決めてくださつたの」

「隊長、つて卯ノ花隊長か？」

「そそ。わざわざお祝いしてくれたんだよー、ペーペー隊員のためによ。優しいでしょ、うちの隊長」

「へえ、と言つた後、一角はばつの悪そうな顔になつた。

「もしかして、今日は卯ノ花隊長とも、飯食いに行く約束があつたのか？」

「あ、ううん、それは大丈夫。今日は隊長が外に出る用事があるからつて、先にお祝いしてもらつちゃつたの。でも、勇音には悪い事しちゃつたなあ、お店も予約してくれたのに。あんた、無理やり引つ張つてくるんだもん」

ぐ、と一角が詰まつた。後ろめたげなその顔を見たら、余計勇音に對して申し訳ない気持ちになつてきて、雪音は伝令神機を取り出した。

「どうせだから、勇音とか弓親とか、他の人も呼ばうか。お祝いとか関係なしに、皆で飲むのも樂し「ばつ、よせー」「きやつ！？」いきなり一角が伝令神機」と、手を置に押さえつけたから、雪音はびっくりして悲鳴を上げた。呆気に取られて一角と目をあわせたら、まるで火傷でもしたかのような勢いで手をのけた。一角は逃げるように壁にどん、ともたれかかつて頭をかく。

「いや、あのな。虎徹も弓親も、きっともう部屋に帰つてるだろ。わざわざ呼び出すのも、どうかと思うぜ。虎徹への侘びなら、俺が後で入れとく」

「え、でも」

「この個室は一人限定なんだよ！」

反論しようとしたら、かみつくような勢いで返された。が、視線

が合図と、一角の顔が赤く色づき、田が泳ぐ。

「その……他の奴呼んだら、大騒ぎになつて店に迷惑かかんだろ。

今日のところは、やめとけ。絶対」

「えー……つと」

何だろ? 一角のこの動搖ぶりは。事態が良く分からず、ハテナマークで眩いた雪音だったが、しかし一角がここまで言つからには、何か理由があるのかもしれない。

そうか、もしかしたら、女にプレゼントなんて柄でもなに事をしたから、照れているのかも。意外とシャイなところもあるようだし。それなら、ここに人を呼ぶのも嫌だろ?。

「分かった、じゃあやめとく」

勝手に納得して、雪音は伝令神機をしまい、一角にすい、と德利を差し出した。

「それじゃ飲みましょ、とりあえず」

「おう、そうだな」

一角はほつとしたような顔で杯を受けた。互いの手元に酒を注ぎあつた後、

「じゃ、あらためて……お祝いありがと、一角」

「……誕生日おめでとつ、な」

何となく照れくさこ気持ちで、きん、とぐい飲みをぶつけ合つ。

こつものよつに仕事仕事、と廊下を歩いていたら、藍染隊長にくわした。廊下の角でぶつかりそうになつて、お互いたたらを踏んでしまう。

「あつ、藍染隊長。すみません!」

勢いよく衝突するところだったので、あたしは慌てて頭を下げた。藍染隊長は「いや、いいよ」といつものように優しい声で言つた後、「ん? おや珍しいね、鑑原君。簪かんざしをつけてる」

「ひやつ」

す、と何気なく手を伸ばして、あたしの髪に触れる。思いがけず頭を撫でられ、あたしは思わずびくつとして、後ろに下がつてしまつた。

う、うわ、びっくりした。元々人に触られるのは苦手だけど、男の人に髪を触られるのは、抵抗がある。

しかも相手が、そうでもなくとも緊張してしまつ藍染隊長だったり、尚の事。びっくりしすぎて、ちょっとじどきしちまつ。

「はは、すまない。誰かからの贈り物かい?」

思いつきり不審な態度を見せちゃつたのに、藍染隊長は気にせず朗らかに笑う。一人でおたおたしてるのが恥ずかしくて、あたしはつい赤くなつてしまつた。

「あ、えつと、はい。昨日誕生日だったので、貰つたんです」

「も、も、」もじ答えると、藍染隊長は眼鏡の奥で目を丸くする。

「昨日が誕生日だったのかい? それはおめでとう。何だ、そうと知つていたら、僕も何か用意したのに」

「え、ええつ? ! と、とんでもない、お心遣いだけで十分、……」

「僕からのプレゼントは、いらない?」

「や、そ、そんな事は無いですっ。でも、あたし違う隊の人間ですし、藍染隊長にわざわざお祝いしていただくなんて、そんな恐れ多

いです」

「大げさだなあ。誕生日のお祝いくらい、僕だつてするわ。特に君のよつに、仕事熱心で真面目な隊員は好きだからね。贈り物の一つもしたくなるよ」

「すつ……？！」

好きつて好きつて、そんな事言われましても！ 深い意味なんて無いんだろ？けど、わらつと言われてますます顔が熱くなつてしまつ。

あわわ、と言葉を無くしてしまつあたしは、藍染隊長はこいつと笑つて、

「そつだ。これから街へ出るといつだつたんだけど、鑑原君はまだ、昼食を食べてはいなによね？」

「え、は、ま、まあ」

「それなら僕が美味しこ！」飯を箸つてあげるよ。誕生日の贈り物にしては、色氣が無いけど

「え、ええつ？！ そ、そんな、本当に氣にならないで下せ、無理なさらなくとも」

泡食つてばたばた手を振りながらわつ言つた時、
「やつやね、無理強いしたらあかんよ、藍染隊長」

「うわつ…」

真後ろから人の声が降つてきて、あたしはびくつとしてしまつた。すわ何事かと振り返るより先に、冷たい指先が首筋を下から上につけ、とのぼつて、

「雪苗ちゃんに簪やるなんじ、どこの助平男やの？ こんな綺麗なうなじ出しだら、そそるやないの」

「ひ……ひいいいつ？！」

低い声が息とともに耳元にかかつたので、あたしは総毛だつて奇声をあげてしまつた。

「」の口調に「」の声に「」の仕草、こんな事するのはどう考えてもあの人しか……！」

「よせ、市丸」

鳥肌立て硬直するあたしをかばばつよつこ、藍染隊長がきつい口調で咎めた。すると、簪のトンボ玉に触れていた指が、ふつと離れる。ほつとしたのもつかの間、後ろから前に手が伸びてきて、あたしの顎を撫で、つて……、ギヤーーー？！

「何やの、藍染隊長。雪音ひやんの彼氏といひやうんやし、そない怖い顔せんでもええやん」

市丸隊長は、ねこなで声で藍染隊長に喧嘩を売りながら、あたしの顔の輪郭をなぞる。

細長い指が、まるで愛撫するみたいに優しく撫でていくけど、気持ちいいどころか、触れた場所からどんどん熱を奪われていくような不快感だけ積もつっていく。

「こ、この触り方、この冷たさ、心底気持ち悪い、けど全然動けない。蛇に睨まれた蛙ってこんな気分かも、何か全身から脂汗出できた……！」

「市丸」

藍染隊長があからさまにむつとした表情になつて、市丸隊長の手を掴んだ。力任せに剥がして、あたしと市丸隊長の間に割り込んでくる。

「止める、と言つているんだ。鑑原君が嫌がつてんだ」

「ややなあ、ボクはただ助けてやつて、思うただけやのに。雪音ちゃん、藍染隊長どじ飯なんか、行きたないんやろ？」

市丸隊長は袖の下で腕を組み、身体をかがめて、あたしの顔をのぞき込んでくる。

いつも笑つていて、かえつて表情の読めない市丸隊長の笑顔は、怖い。あたしは思わず藍染隊長の羽織を掴んで、ぶるぶるっと勢いよく首を横に振る。

「そ、そ、そんなことないです！ 嘉んでじー緒するつもりです！」

すると市丸隊長はあらま、と口を曲げた。

「何や、そやの。せつかくボクがご馳走してあげよ思つたのに。

まあええわ、せやつたらここは藍染隊長に譲るわ。今度あらためて、ボクと一緒に居るのは嫌だそうだ。諦めたまえ

「彼女は君と居るのは嫌だそうだ。諦めたまえ」

「藍染隊長が冷たく言うと、市丸隊長は肩をすくめて、

「藍染隊長には聞いてへんよ。ま、ここは大人しく退散しましょ。また今度な、雪音ちゃん」

そういうて、足音も立てずにすたすた廊下を歩いていつてしまつ。その姿が角を曲がつて見えなくなつて初めて、あたしは硬直から脱して盛大に息を吐き出した。

「うああ……！」怖かった……

思わず本音をぽろりとこぼしたら、藍染隊長がふつと笑つて、あたしの背中をぽんぽん、と叩いた。

「大丈夫だよ。口では色々言つているが、あの男が本当に何かしてくるような事はないわ。

だが、危険を感じたらすぐ離れて、誰かに助けを求めるんだね。その場に僕がいればどうにでも出来るが、流石に四六時中、目を光らせていられないからね

「は……はい、つづうわ、じ、じめんなさい…」

あたしはそこでようやく我に返つて、愛染隊長からばつと離れた。市丸隊長に対する恐怖のあまり、つこついすがりついてしまつた、は、恥ずかしい！ 脂汗とはまた違う汗がぶわっと出て、顔がぼつぼと熱くなる。

藍染隊長はきょとんと目を瞬いた後、あつはつは、と軽やかに笑い出した。

「いやいや、これは役得だ。それじゃ、これからお皿を奢らせてもららえるね？」 鑑原君

「……」一瞬言葉に詰まつたけど、さつき思い切り「一緒にしますつて言つたやつたし、大体ただの食事のお誘いなんだし、あたし意識しそぎなのかも。」とで断るのつて相当失礼、よね。

「……は、はい。あの、有難うござります……」

あたしが熱い頬を手で覆いながら頷くと、藍染隊長はもう一度笑つて、

「どういたしまして。『いらっしゃ』君と食事が出来て、光栄だよ。さ、
行こうか」

こいつの背中を軽く押して、歩き出したのだった。

詰まらない書類仕事に忙殺され、ようやく執務室から開放された俺は、げんなりため息をつきながら家に向かっていた。

十一番隊の事務を取りまとめて、つーか全部押し付けてる下っ端が休んだせいで、俺や隊長まで、慣れない仕事をやる羽目になっちまつた（まあ隊長は途中でどつかいつちまつたけど）。

普段さぼってるからさ、と鼻で笑う「親を巻き込んで、終わつたのが丑の刻も回つてからだから、そりや疲れも溜まる。こんな日はゆつくり一杯ひっかけて寝よう、と顔を上げた俺は、そこで驚いた。垣根越しに見える部屋に、明かりが灯つていいのだ。

（「親……なわけねえか）

俺の部屋に時々無断で入りやがる「親は、今日は自室に戻つたはずだ。他に俺の家に入り込みそうな奴、と考えを巡らせてみるが、思い当たらない。まさか俺に不意打ち食らわそうつて奴が、行灯をつけるわけもない。

考へても分からなかつたので、俺は庭に入る木戸を開けた。しゅ、と足を滑らせて忍び寄り、中の靈圧を探る。

……ほとんど感じねえ。ちらりちらりと障子に人影が映るので、中に誰かいるのは確かだが、靈圧が驚くほど低い。こいつによほど弱いか、あるいは故意に靈圧を抑えて潜んでるかのどっちかだろう。なんにしても、勝手に人の家に入るたあ、いい度胸だ。少し痛い目にあわせてやる。俺は斬魄刀の鯉口を切ると、一息で障子を開いた。

「てめえ、俺の家で……何、を……」

「あー。おかへりー」

怒号にも似た俺の誰何に、氣の抜けた声が返つてくる。俺はひく、と顔がひきつらせた。俺の部屋の中で、飯の膳やらつまみやらを広げ、酒瓶を振つてみせたのは、

「 ゆ、雪音！？」

の、馬鹿だつた……。

「 ……つたぐ、お前は勝手に何してんだよ」

ひとまず腰を落ち着けた俺は、まず雪音に聞いただした。

こいつと飲み歩く事はよくあるが、こいつして俺の家まで入つたことはこれまで一度も無かつた。俺も入れたくなかったから、誘つた事がない。

それが何で、我が家のじとく賣いであるんだか、文句の一つもつけたくなつて当然だろ？

対して雪音は、ずいぶん飲んでいるらしく、じんじん転がる酒瓶の中で、だつてー、とへらへら笑つた。

「 あのねー、雪原をねー、風弦洞のおじさんがかくやすで売つてくれたのー。美味しいからー、一角と飲もうと思つたら、仕事で忙しそうだつたからー、邪魔しちゃ悪いと思つてー。

そしたら『親が一角の家、教えてくれたからー、待つてよーと思つてー。あたし明日お休みだしー』

『親、殺す。何勝手に俺の家バラシつてんだ、あの野郎。

「 そーかよ……」

仕事とはまた違つ疲労を感じてため息をつく俺と、雪音はぐい飲みを持たせて、雪原を開けた。

「 ほらほらー、早く飲もうよー。一角が帰るまで一めぢやへぢや待つたんだからー、待ちくたびれたー！」

「 知るかよ、そんなの。お前が勝手に待つてたんだろうが。あーくそつ、だいたい何でこんなに散らかしてんだつ、酒臭えしー。」

別に綺麗好きつてわけじやねえが、そこいらに酒瓶やら、酒のつまみやら散らばつてるのは気になる。つーか、俺があくせく働いてる間、こいつが俺の部屋で勝手に盛り上がりつてたのが、心底むかつく。

「 まーまー、気にしない気にしない。後で片付けるよー

注ぎ終わつて瓶を抱えた雪音を、俺は睨みつける。

「お前、出入り禁止。もう絶対来んな」

我ながら険悪な表情をしてたと思うが、雪音は、

「えー、やだー、つまんなーい。そんなことより一角、あたしにも
ちょーだいー」

ぐい、と瓶を俺に押し付けて、得意げに盃を差し出して、ほらほら、
と催促する。

そんなことつて何だよこの酔っ払い、もう十分べろべろじやねえ
か。ぶつぶつ言いながら、俺は嫌々、雪音の盃に酒を注いだ。

透明な酒が、さらさら音を立てて、注がれていく。その様を嬉し
そうに見つめる雪音は、今気づいたが、浴衣姿だった。こいつ、仕
事終わつてから、いつぺん部屋に戻つて着替えてきやがつたな。寛
ぐ気満々かよ。

……つーか、寛ぎすぎだろお前。帯が緩んでんのか、ふとした拍
子に胸元が動いて、こつちが思わずびくつとするほど襟ぐりが深く
なる。下手すりや、胸のふくらみをえ見えそつな……いやいや、そ
れはやべえだろ、また妙な気になつちまつ。

「いただきまーす」

顔が熱くなつたのに慌てて、目をそらした俺の様子なんぞ全く気
がつかず、雪音はつまづきでぐー、と盃をあおつた。喉を鳴らして
飲み干した後、満足した様子で、うつとりため息をつく。

「んー、幸せ……やっぱあれだね、あたしと一緒に雪がつ
くものは良じねー。わこーだーあ……」

「あほか。雪の字がつこても、お前は全然さいーーじやねえよ」

強いて雪音を視界から閉め出して、立てひざで雪原を飲む。俺にはちょっと上品すぎる味だが、良い酒だとは思つ。が、普段なら舌
鼓を打つて飲むそれが、何でか今日は味がしない。

何だ、味もわからんねえほど疲れてんのか、俺は。雪音から瓶を奪
う。ぐい飲みに注ごうとして面倒になつた。一升瓶に口をつけて一
気に煽る。よしやくじんわり、と雪原の味が口になじんだ。美味い。

「あー！ 一角、飲みすぎー！」

雪音が声高に叫んで、俺の手から瓶を奪った。半分ほどに減った中身を見て、いやー、と悲鳴をあげる。

「もーしんじらんない！ そこいらの安酒じやあるまいし、あんな飲み方するなー！ 勿体無いー！」

「つるつせえな。文句あんなら帰れ、馬鹿」

「やだ」

「あ？」

「一角嫌いだから帰んじゃない。言つ事きかなーい」

「ああ？」

ガキかお前は。なに天邪鬼してんだよ。しかも意味わからんねえ、嫌いならなおさら帰れっての。

雪音は瓶を抱えたまま、逃げるよつて後ろへ下がる。酔つてゐせいか動きが乱雑で、ずり、と浴衣が動いた。裾がめくれて、ふくらはぎが外に出る。

(うつ)

どつ、と鼓動が鳴る。

不意打ちで、しかも素足なんて普段見る機会が無いから、思わず息を飲んだ。

焦点がぶれた、ぼんやりした目。のぼせた顔。袖から出た肘。緩んだ胸元から覗く鎖骨。意外なほど白くて細い足。急に雪音の色んなところが、はつきり見えるようになる。

やばい、と思った。

疲れてるせいか。酒を煽つたせいか。それとも、今更一人きりだという事に気づいたせいか。腹の底が熱くなつて、蠢く。喉が渴く。こめかみで血が鳴る。手に汗がにじむ。

やばい。本気でやばい。

「……帰れ、お前」

俺は目を手で覆い、唾を飲み込んで言つた。急に、部屋にこもつた酒臭さに混じる、かすかな匂いが気になりだした。雪音の香か。

俺の部屋はない、わずかに甘い匂いが、脳を刺激する。

「泊めるわけにや、いかねえんだから」

精一杯感情を抑えて、俺は言い捨てる。だが、

「えー、へや遠いからやだー、泊めてよー。明日こいつから帰るからさー、いいじゃーん一角ー」

雪音は頓着しない。雪原を脇に置いて言い放つた。至極明るい声で、何の心配もなく。

血管の切れる音が聞こえた。ぶち、ってのが。

「お前、いい加減にしろよ」

俺は、へらへら上機嫌で笑っている雪音の肩をつかんだ。

「ほ?」

雪音が間の抜けた声をあげた。きょとん、と皿を瞬く間に押し倒す。

「え?」

床に倒されたのに、まだ状況が掴めていないらしい。雪音はぼんやりと俺を見上げる。そのぶれた視線が、妙に腹立たしかった。雪音に乗つたまま、俺は死霸装の上をばつと脱ぐ。

「ハ?」

意味が分からぬ、そう言いたげに雪音の目が点になる。だが俺は雪音の困惑を一切無視して、

「な、ンつー?」

顎をガツと掴んで、口を塞いだ。

酔いが飛ぶ。問いかけようと開きかけた口が、こじ開けられて舌に侵入される。無理矢理舌をすくい上げられて、吸われる。

「つ

ぬるりとした感触に強烈な違和感を覚えて、逃げようとしたけど、一角の手が顎をとらえて離さない。絡み合つた唾液が口の端からこ

ぼれる。長いか短いか、それさえも分からぬ時間、口の中をかきまわされた後、ようやく唇が離れる。

な、何？ 今、一体何が起きたの？

あたしは思考停止状態のまま、呼吸困難でせわしなく息をつく。繋がつて伸びた唾を舌で舐め取つて、一角はこつちを睨み付けた。

「男の部屋に気安く入つてんじゃねえよ。馬鹿が」
低い声で言つ。

その声が、掛け值なしに本気だと悟つて、あたしはようやくこの後の展開に思い至つた。もしかして、これは……もしかしなくとも、アレですか！？

「い、かく、ちょ……つとお？！」

つばを飲み込み、「冗談でしょ」と顔をひきつらせるが、一角はあたしの襟をひつぱつて、首筋にかみつくような勢いで唇を寄せた。一角の手が浴衣の裾を割り、足をつかむ。一角の吐く息が、荒くなる。

「や……ちょ、一角、やめ！」

（男）

手で一角の体を押し戻そうとしても、びくともしない。

（男）

力が、体格が違すぎる、抵抗出来ない。

（男、だ）

一角は、男だ。

まるで今初めて知つたかのように、その事実が目の前にたたきつけられる。

まるで一角が、知らない男になつてしまつたようで、恐怖に近い感情がこみ上げてくる。

怖い、嫌だ、と叫ぼうとしたその時。

チリッ。

耳の奥で、微かな音がした。

あたしは目を見開いた。体がこわばる。亀裂の入つた時に鳴るそ

の音は、内と外両方からの圧力でチリチリチリチリ、とすぐに連続して鳴り響きはじめ、突然ど、と上からのしかかつてききた重力で、更に高まる。

「ぐ

耳を聾するほど音が、喉をつまらせるほどの酒の匂いが、目がつぶれるほど灯台の光が、口の中に残る唾液の味が、全てが殴りかかってくるような強さで襲いかかってくる。

でも、いつもの状態であれば気にかからぬほど些細なそれよりも、更に密着した一角の存在は、膨大といって良かつた。

一角の靈圧が、息が、体の音が、匂いが、その全てがあたしの感覚を覆う。とたん、足先から脳天まで突き抜けるような感覚が走つて、

「あつ……！」

つい唇から、息を含んだ声をもらしてしまった。

その声を耳の間近で聞き、俺は心臓が飛び出しそうなほど驚いた。雪音はさつきまで必死で抵抗し、俺の腕から逃れようとしていた。俺は、多分最後までそんな状態のまま、自分は雪音を犯すんだろう、こつなつたらなるようになつちまえ、と思つてた。

それなのに、思いがけず良い反応が返つてきた。それが自分にとって望むべき状況だったにも関わらず、俺は心底ぎょっとして、凍り付いてしまつた。

「……！」

その機会を逃すまいと、雪音は勢いよく俺を突き飛ばした。あつけなく転げ落ちた俺を振り向きもせず、部屋を飛び出していく。

あ、と思つた時にはもう遅い。雪音の足音はすぐに聞こえなくなつてしまつた。

床に投げ出された俺は、雪音を捕まえようつと前につきだした手が格好悪くて、下に落とした。その手を見下ろし、掴んだ雪音の胸の柔らかさを思い出して、思わずわきわきと指を動かし、

「……何やつてんだ、俺……！」

次の瞬間怒濤のごとく押し寄せてきた後悔の波に、拳で床板をたたき割つた。

* * *

「は、は、は」

短く息をつきながら走る。深夜で人と会わるのが助かつた。もし今誰かと出くわしたら、明らかに襲われたと分かる着衣の乱れを指摘されて、答えに窮したろう。

いや、それよりも、もし今誰かと出くわしたら、相手がもたらす「音」や「匂い」に圧倒されて、倒れてしまつ。

あたしは自分の感覚を襲う全てのものを、聞くまい見るまい感じるまいとしながら走り、走り、走つて、ようやく自室へ飛び込んだ。バン、と音を立てて扉を閉め、その音と衝撃に押されて、床に倒れ込む。息がつけない。汗が滝のように流れていく、その一つ一つの感触さえはつきり分かつて煩わしい。このままでは遠からず、何も出来ないまま意識を手放してしまつ。

「つ、く」

自分の中で鳴り響く声にさえたじろぎながら、あたしは腕で上体を支えて起こした。もう一方の手で、机の上に置いてある銀の棒を取り、握り込み、

「……戒つ……揺るがす世界を、掌握し、押しつぶし、新たなる一を爆ぜろ……縛道の三十二、過墜天！」

叫ぶ。と、あたしの周りで白の光が小さな爆発を起こして舞い散り、降り注いだ。光が爆ぜるほど、チリチリと鳴つていた音が止んでいき、開きかけていた口が閉じていき、それまであたしに覆い被さっていた世界の存在が退いていく。

跳ねる鼓動が、通常の脈拍に戻るまで、長いことじつとしていた

あたしは、やがてのろのろと起きあがつた。

「はあ……びっくり、し、た」

久しぶりに縛道がゆるんで、世界に「襲われた」事にも驚いたが、何が一番の驚きだったかつて、一角だ。

「あいつ、あんなに、靈圧、強かつた、の・ね……」

十一番隊三席なのだから、当然その靈圧も高いに決まってる。けど、これまで知覚してこなかつたから、まさかあたしの縛道を搖るがすほどとは思わなかつた。

というか、そもそも、酒を飲んで油断して、さらに一角があんなふうに押し倒してこなければ、ゆるむはずもなかつたけど……

「つて、う、わ、」

急に先ほどの事を思い出して、血の氣が引き、つこで上がつてくる。あたしは慌てて衣服の乱れを直し、真つ赤になつた頬を押さえた。

「ちよ、も、びひしょー、何であんな事になるのー、つて、いうか、あたしー！」

そんな気なかつたのに、縛道がゆるんだせいで、一瞬かなり感じちゃつたし！ 普通、あれくらいであんな声出さないつて！

「あああああああああああああ、もーありえないつて！！」

まさかまさかと快感の瞬間を思い出し、あたしは床につづぶして、絶叫をあげてしまつた。

「本つ当に、雪音はいねえのか?」

苛々しながら問うと、四番隊の女は怯えた様子でおどおどと俺を見上げた。

「は、はい、先ほど外へ出て行きました……どうしてくるかは、ちよつと……あの、もしあ急ぎでしたら、探しにこきますけど」

「……いや、良い。邪魔したな」

チッと舌打ちして隊舎を後にする。

たまたまそこにいただけの隊員に当たつたといひで、意味が無いのは分かつてたが、どうにも気分が収まらない。

(ちくしょう、雪音の奴。絶対、俺の事避けてやがる)

あの夜以来、俺は雪音と顔を合わせる機会が無かつた。

俺は仕事の合間を縫つて、あるいは怪我をして、四番隊隊舎と綜合救護詰所に何度も足を運んだが、いつ行つても雪音は居なかつた。どつかで仕事をしてゐには違ひないんだが、どうも俺が来るとい、逃げるらしい。

隊員の連中もきつく口止めをされてゐるのか、あるいは本当に知らないのか、俺が雪音の行方を聞くと、決まって「知らない、どこかへ行つてしまつた」と答えるだけで、役にも立たねえ。

俺は怒りのままに、ドンドンと床板を踏みしめながら、廊下を歩いていく。

(少しくらい、話をさせりつてんだ)

胸中でそう愚痴るが、雪音が逃げるのもしようがない、とも思つ。そりや、自分を力尽くで犯そうとした男の話なんざ、聞く価値もねえ、顔を合わせるのも御免だつてんなら、そう言われて当然だろう。

だが俺だつて、自分でああいつ展開を望んだわけじやなかつた。雪音に惚れるとほつきり自覚しちまつた今、あんな事をやらかし

た自分に心底嫌気がさしていた。

俺は土下座しても、雪音に許して欲しいと思つてゐる。いや、もし許してもらえないとも、とにかくあいつに謝りてえ。

一時の感情にまかせて襲つたりしなきや、今頃いつも通り、あいつと口喧嘩でもしてただろう。情けない話だが、顔見られねえのが嫌だ。すつげー怒つてもいいから、あいつの顔が見てえ。なのに、あいつは話さえさせてくれない。顔を合わせる事も出来ない。それが、腹立たしい。

(やっぱり手紙の方がいいのか?)

文机に座つては、白い紙を前に何を書いたらいいか、言葉が思いつかず、結局挫折してゐるんだが。そういうやこないだ硯を割つてそのままだつたか、と視線を何気なく動かした時、

「あつ

俺は思わず呟いた。庭を挟んで向こう側の通路に雪音が居た。手に持つた書類に目を落としているので、俺に気づいた様子はない。今なら、捕まえられる。

「おー、雪音!」

そう思つた俺は、すぐさま雪音の名を呼んだ。静かな空間に俺の声が響き渡り、木に止まつっていた鳥がばさばさと飛び立つ。

そんなどでかい声を出したつもりは無かつたが、雪音はびくつと背筋を伸ばした。

一瞬、こっちを向くか、と思わせる間があいた後、しかしあいつは、いきなりダッシュで建物の中に逃げ込んだ。

「あつ、こら雪音、待ちやがれ!」

俺は手すりを飛び越え、反対側の廊下へ走つた。

床板が割れそうな勢いで廊下に踏み込み、方向転換して雪音を追う。たまたま通りかかった連中が何事か、と驚いた顔で道を空ける中、雪音は一瞬だけ後ろを振り返り、スピードを上げた。

野郎、この俺から逃げ切れると思つてんのか!

あくまでも俺から逃げようとするその態度にムカムカして、俺も

足を速めた。瞬歩まではいかないが、かなりの速さで走り、どんどん雪音との距離を縮めていく。

雪音はダンツ、と床を蹴つて、角を曲がった。俺もその後に続いて、向こう側へ飛び出す。と、

「きやあつー？」

「つわつー！」

ちょうど行き会つた奴と思い切りぶつかつた。吹つ飛ばされて後ろの壁にぶつかり、目の前が衝撃でぶれる。相手は俺の勢いで弾き飛ばされ、床を『ぐるぐる』・三回転はしてやつと止まつた。

そしてしばらく沈没した後、ぐるぐる皿を回したまま顔を上げる。

「あ、あいたたた……あ、ああ……、ま、斑田さん、せき？」

「おま……、虎徹、か？」

俺とぶつかつたのは、四番隊の虎徹だつた。女にしては背が高くてわりとがつちつしてゐるから、俺とぶつかつてもさほど飛ばされなかつたらしい。

「悪い、怪我ないか？」

ひとまず近寄つて、立つの手を貸す。虎徹はくらくらするのか、頭をおさえたまま、大丈夫ですと答えた。

「び、びっくりしました……。どうしたんですか、三席。何か凄い勢いで走つてたみたいですけど、何かあつたんですか？」

そう言われ、慌てて周囲を見渡すが、どこにも雪音の姿が無い。耳を澄ましても、足音はしなかつた。

「お前、今雪音を見なかつたか？」 じつに来たはずなんだけどよ
念のため聞いてみたが、虎徹はあ、と頼りない様子で首を傾げた。

「私は向こうから来ましたけど、誰ともすれ違ひませんでしたよ

「そうか……」

この廊下はまた壁がなくなつて、両側に庭が広がつてゐるから、虎徹とぶつかつてゐる間に、そつちのほうへ逃げちまつたのかもしれない。あと少しで捕まえられたつての、くそつ。

「悪かつたな、虎徹。俺急いでるから、行くわ」

俺は虎徹に謝つて、廊下の先へ歩き出した。もしかしたらそつちで、雪音が捕まえられるかも、そつ思いながら。

* * *

ペーり、と下げた頭を上げた私は、斑目三席が遠ざかってこべの黙つて見送つた。

角を曲がつて、足音がもう十分遠くなつた、ヒコヒコヒコで声を出す。

「行つちやつたわよ、雪音」

と、屋根から影がドンッ、と落ちてきた。地面に着地した雪音はすぐに立ち上がつて、

「勇音、ありがと。助かつたわ」

顔の前に手を立てて感謝してくる。私は思わずため息をついてしまつた。

「もう、びつくつした。どうしたの？ いきなり、斑目三席が来ても、あなたの事は言わないで、なんて。喧嘩でもした？」

前までは、喧嘩するほど仲が良いつて、雪音と斑目三席のようないいふん気持ちが良かつたんだけど、はぐらかされたのは嬉しくない。

でも雪音は、

「別に何でも。あ、せつを頭打つてたでしょ、たんじぶできてる。お礼に治すわ」

私の頭に手をかざして、術をかけた。すうー、と痛みがひいて、ずいぶん気持ちが良かつたんだけど、はぐらかされたのは嬉しくない。

「雪音」

私にくらい相談してよ、そういう気持ちを雪音に込めて言つた。

けれど雪音は、

「ほんとになんでもないから。じゃつ、またね」

斑目三席が向かつた先とは反対方向へ歩いていつてしまつ。

「もう、ゆきねえ……」

私は転がつたせいで緩んだ襟を正して、もう一度ため息をついた。
雪音はいつも自分がだけで悩みを抱え込んで、頼ってくれないから、
悲しくなる。本当に、水臭いんだから。

夜。自宅に帰つたあたしは、庭に面した居室に腰を落ち着けた。手に、滅多に抜くことの無い斬魄刀が持つて。

「あ。何か今日は疲れた……」

思わず独り言を言いながら、縁側に座る。

仕事が忙しかつたからじゃない。むしろ珍しく緩やかな日で、花君とのんびりお茶をしていたくらいで、非常に落ち着いた時間を過ごしたのだ。それなのにこれほど疲れているのは、やっぱりあの追いかけっこせいだらう。

（まさか、追っかけてくるとは思わないもんなあ……）

あたしはあの一件以来、一角を避け続けている。

彼が四番隊に来る気配がある時は必ず他の場所へ行くが、隊員にきつく口止めをして、隊舎内に隠れたりして、かなりあからさまに避けているので、一角も良い気分はしていないうだろ。今日だつて、廊下で声をかけられて、とっさに逃げたのは悪かつたと思う。

でも、そこで諦めてくれるならともかく、鬼気迫る雰囲気で追いかけてこられると、はつきり言つて怖い。

何しろ相手は戦闘部隊・十一番隊の第三席だ。身体能力はあたしのそれを遙かに凌駕している。その一角に殺氣だつて迫つてこられれば、あたしが何としても逃げたいと思つてしまつたのも、仕方ないだらう。

「……」

あたしは座布団の上に正座をし、鞘を払つて斬魄刀を眼前に掲げた。久方ぶりに抜いた刀は露を帶びて、まつすぐな刀身が月の光に白々と輝く。我ながら綺麗な刀だと思い、そう思つからひこせ、申し訳なさに胸が詰まる。

（ごめんね。いつも、使ってあげられなくて）

心中でそつと謝る。と、答えるように刃が僅かに振動した後、緩

やかな湾曲に変形する。そして、あたしの正面に白い獅子が姿を現していた。中空に座し、紅のつぶらな瞳でじっと見つめてくる。

「寒椿」

名を呼ぶと、寒椿は軽く尾を振った。そして、

『わしの事は良い。だが、このまま逃げ続けて、良いのか』これまで話を続けていたかのように、ごく自然な調子で語りかけてくる。

「う、ん」

あたしは視線を落とした。良いとは思つていなかつた。思つていなかつたけど、

「……だつて、怖いんだもの」

寒椿の静かで、確かな存在を感じながら、小さく呟いた。

『男だからか』

寒椿の問いに、首を振る。

「違う。『うん、それもある。だけど、それだけじゃないの』

これまで一角を男として見ていなかつたから、あの時は本当に驚いたし、本気で怖いとも思つた。けれど、あたしが一角から逃げてしまつるのは、それ故ではない。

『力が、怖いか』

「……うん」

あたしは小さく震えて目を閉じた。

そう。襲われたあの時に初めて知つた、一角の靈圧の強大さが、恐ろしい。

靈力の強さは、すなわち戦鬪力の高さを意味する。護廷十三隊最強の十一番隊で上位に位置する一角が、それに相応しい高い靈圧を備えているのは当然の事だ。

けどあたしは、知つてはいても、理解していなかつた。

自分の靈圧を極端に制限し、靈圧知覚も鈍つてゐるあたしには、どれだけ側にいても、一角の靈圧を感じ取る事が出来なかつた。だからこれまで安心して、彼と付き合つてきたのだ。

『安心。油断、だな』

寒椿がこちらの思いを読み取つて、否定していく。あたしは情けない気持ちで、力なく頷いた。

「そうね。油断しすぎだつた」

靈圧を制限する縛道は、あたしが自分でかけている。となれば、術の硬軟はあたしの精神力に依存する事になる。

普段の生活を送つているときは、それでいいのだ。多少気を緩めたところで、縛道を搖るがすような靈圧に触れる事などないから、問題はない。

だけど、一角の靈圧は、普通のそれではなかつた。ただ単純に靈圧が高い、というだけではない。

戦闘を好む故か、生来のものかは分からぬが、一角のそれは、触れるものを全て食らい尽くそうとするかのような、とても攻撃的なものだつた。

あたしを押し倒した時、一角も気が高ぶつていたのか、妙に殺気だつていた。また、酒を飲んで油断していたあたしも、自然、縛道を緩めてしまつていた。

それゆえに、常より鋭く発した一角の靈圧は、縛道にひびをいれ、その封印を解きかけてしまつた。

あたしが魂の奥底に沈めてしまうほど遠い昔、世界に襲われ、その恐怖故に命を落としかけた、あの時の記憶を、まさまでよみがえらせた。

「もしさまた一角に近づいたら。もしさまた、あんなことが起きたら。今度は、縛道が壊れてしまうかもしれない。そうしたら、あたしは

……

きつと、ここには居られなくなる。

言葉を飲み込み、あたしは俯いた。その事を思つと、背筋に冷たいものが走る。

数々の苦労と人々への迷惑を積み上げて、やつと手に入れた、自分の居場所。悩む事もあるけれど、自分が自分として存在

していられる今。

失いたくはない。手放したくない。切にそう願っているから、それを壊しかねない一角の存在が、恐ろしい。

『だが、このままで良いのか』

寒椿が再度、同じ質問を口にした。赤い瞳があたしの、困惑した表情を映し出す。あたしは逃げるようになその視線を避けた。

『良くないよ。一角は、良い奴で。……友達、だもの』

一角のそばは、居心地が良かつた。

あんな風に余計な気遣いなく、言いたい事を言い合える関係は、他に無かつた。

ああいう事になつた以上、一角がどう思つているか、もう分からぬ。だけど、少なくともあたしにとつて、一角は大事な、大切な友人だ。

失いたくはない。手放したくない。彼のそばにいる事が、自分の中に恐怖を宿らせるとしても。

『なれば、選ぶが良い』

寒椿は静かに言った。

『己を選ぶか、かの男を選ぶか。何を選ぶにせよ、後は主の心の問題だ』

「心の問題?」

『左様。心が揺らぎば枷は緩み、奔流となつて溢れ出す。だが心が堅固なれば、主は主のまま生くるも出来る』

寒椿の視線は揺るがない。まつすぐな目は、何もかもを見通すようにな深遠で、穏やかだ。

「寒椿」

名を呼ぶと、獅子は獣の顔を和らげて笑つた。立ち上がりつてあたしの前に頭を垂れ、

『信ずる事だ。主は主が思つてゐるほど、柔弱ではない。儂の主であるが故に』

そのままふ、とかき消えた。後には、掌中で凜とした輝きを放つ斬

魄刀のみが残される。

「寒椿……」

その弓なりの刀身を見つめて、あたしは、ぐ、と唇をかみしめた。
寒椿の言葉は、泣きたくなるほど優しく体に染みいったが、胸中にはまだ不安が渦巻いて、苦しかった。

全部、欲しい。だから、壊せない。

* * *

田が傾き、仕事を終えた連中が帰り支度を始める頃。飲み仲間達とわいわい騒ぎながら、道を歩いていた松本が、道の向こう側を走つていく雪音の姿に気がつき、

「あ、雪音ー！ これから飲みにいくんだけど、一緒に行かなーい？」

口の横に手をあてて、声をかける。雪音は立ち止まるも、大きく手を横に振った。

「すみません、あたし宿直なんで！」

大声で返事を返して、走り去つていく。

「忙しそうっすね、雪音さん」

その姿を見送った檜佐木が言つと、松本は不満そうに唇を尖らせた。

「最近、付き合つ悪いのよねー。前は残業の後でも飲みに来たのにさ」

「やうじいやうだねえ」

同意した京楽隊長が、後ろを歩く『親を振り返つた。

「雪音ちゃん、三度の飯より酒が好きつて感じだつたのに、どうじちゃつたの？ 何か知つてる？」

問われた『親は、髪を指すきながら、ちらり、と自分の隣に連れ立つ俺を見やつた。

「さあ、知りませんよ。僕達も四六時中、彼女と一緒にいるわけじゃないですし。ね、一角？」

「…………

声をかけられて、俺は眉間のしわを更に深くした。あからさまに不機嫌な俺の様子に、松本が「なによつ、雪音が来ないからつて、そう怒る事ないじやない」とからかい半分に言つてきたが、返事に出了のは唸り声だけだった。

俺と氣まずくなつてからといつもの、雪音は飲み会に顔を出さなくなつた。飲むのも、皆で集まるのも好きだと言つていた雪音だから、急に参加しなくなつたのは、やはり自分との事があつたせいか、と思つ。

（くわつ。あくまで、顔合わさねえつもりかよ）

どんちゃん騒ぎを端で見ながら酒を煽り、俺は鋭く舌打ちする。隣に座つた「親が、嫌そうに顔をしかめた。

「一角、そんな不景気な飲み方しないでくれる?」こいつの酒までまづくなるよ」

「つるせえな。嫌なら向こうに行きやいいだろ」

「向こうは静かに飲めないから、嫌なんだよ。醜いものまで見なきゃいけないし」

興に乗つてか松本に乗せられてか、脱ぎ始めた檜佐木を拒絕するよつに、視線をそらす「親。そつかよ、とそつけなく言い捨てた俺を見て、言つ。

「そんなに氣になるなら、会いに行けば?」

俺は、焼き魚を箸でほじくつた。

「……あいつは会わねえよ。どんだけ避けられてると思つてんだ」

頭から尻尾まで、綺麗に骨を持ち上げると、口の中に放り込んでぱりぱり噛み碎く。

「だからつて、いつまでもこのままじや、お互にすつさりしないだろ? 今回の件はどう考へても一角が悪いんだから、土下座でも何でもして、謝りなよ」

「だから、そうしたくとも、あいつが俺に会つたがらねえつて言つてんだろ?」

こりひとして噛み付くと、母親はとんだ骨の欠片を手で撒き散らして、

「そんなの、一角が本当に雪音ちゃんに会いたい、謝りたいって思つてゐるなら、どうにでも出来るじゃないか。部屋に押しかけるなり、何なりや。こんなとこでうらやましくじるなんて、らしくないよ」

「…………」

俺は顔を背けて、箸を握り締めた。らしくないのは分かつてゐる。普段の自分なら、さつき雪音を見た時に追いかけてつて、捕まえて、何が何でも話をしようとしていたはずだ。

だが。

これ以上避けられ続けるより、面と向かつて罵られた方がましだ、と思う気持ち。

会つて雪音に弓導を叩きつけられるくらいなら、今のよひに避けられ続ける方がまだ、ましだ、と思う気持ち。

その二つが心中で、激しくぶつかり合つてゐる。

会いたい。けれど、会えば拒絶されるかもしれない。それが怖い。惚れた女であり、気の合ひダチでもあるあいつを、俺は手放したくなかった。失いたくなかった。だから、今一步、踏み出せない。

「…………まあ、僕には関係ないけどね」

黙りこんだ俺の様子に、弓親はため息をついた。猪口を傾け、すいと飲み干し、

「でも、何もしないより何かした方が、後の悔いは少ないと思つよ。お互いに、や」

静かな声で呟つ。

「…………おひ」

俺は呟いて、魚を食べた。肝の苦い味が口の中に広がる。

* * *

時間は、苛々するほどひくつ流れていった。

昨日の飲み会から明けて、今日こそ雪音と話をしようと決めた俺は、朝から落ち着きがなかつた。気晴らしにと始めた部下との手合わせも、全員叩きのめして終わつただけで、一向に気分が晴れねえ。（何いらついてやがる、斑目一角。たかだか女一人に会いに行くだけじゃねえか、もつとドーナンと構えてろ）

心中でそう自分を叱咤するも、そう簡単に落ち着ける訳もない。みつともねえと思しながら、道場の上座に腰を下ろして箕^{くじ}をゆすりをしていろと、

「あ……あのう、三席……」

責^せられた顔をした隊員が、ぶるぶる震えながら声をかけてきた。田を向けたら、そいつはびくつと大きく震えて後ずさる。俺の顔がよほど凶悪に見えたらしい。震え上がって声も出せない様子なので、俺は舌打ちして、

「何だよ。用があんなら言え」

ぶつきあはうに命令する。隊員は床板に額をこすりつけるようにして叫んだ。

「あ、あああああ、よ、四番隊の鑑原が、三席にお会いしたいと来てるんですけどっ！」

「…………。あ、ああ？！」

雪音は、道から外れた木の陰の下に立つていた。地面をえぐるようじくつて、足早に近づく俺に気づくと、改まつた様子で向き直る。「いめん、急に呼び出したりして。今、大丈夫だつた？」「…………おつ！」

俺は言葉すくなに答えて、雪音の前で立ち止まる。

久しぶりに間近で見る雪音は、以前とは違つて見えた。

憔悴しているとか、俺に対して嫌悪の表情を浮かべているとか、そういうマイナスの意味ではない。例えば、髪を軽く払うとか、躊躇つように目を伏せるとか、そういう何気ない振る舞いが、妙に女らしく見えて仕方がない。

雪音が変わったのか、自分の見方が変わったのか。どちらがどうかと考えて、まず後者だらうな、と思ひ。

雪音がそこそこ、とこうだけで、体の靈子ひとつひとつがざわめき、鼓動が早くなる。落ち着け、と言い聞かせながら、あの夜奪つた唇に田が吸い寄せられて、釘付けになる。

やべえ、今すぐ抱きてえ。

こんな時に、毎日中、野外で考えるような事じゃねえのは分かつてたが、これまで我慢してきた分、鞆たがが外れちまつたみてえだ。俺は雪音へ手を伸ばしそうになつて、慌てて止めた。ここで手を出したら、本氣で止められなくなる。

中途半端なところで固まつた腕を、何とか下へ下へと四苦八苦していいたところで、突然、

「ごめん…」

雪音が勢い良く頭を下げる。

「…………は？」

虚を突かれて、思考が停止した。凍りついた俺の前で、雪音は頭を下げたまま、早口にまくしたてる。

「あの時の事、部屋上がり込んだり、無茶言つたり、その後避けまくつたり、その……色々、すつごく無神経だった。

こんな事、謝つて許されることじやないかもしれないけど、どうしてもちゃんと言つたかったの。本当に、ごめんなさい」

「…………おま……ちよ、待て雪音、お前何言つてんだ？！」

立ち直つた俺はぎょっとして、雪音の肩を掴み、上体をぐいと押し上げた。だが、手の下でびく、と雪音の体が震えるのを感じ、間近に迫つた顔が強張るのを見て、慌てて離れる。

「な、何でお前が謝るんだ、悪いのは全部俺だろ？！ 部屋上がり込むとか、そんなんどうでもいいつづーか、気にしてねえよ。あれはとにかく俺が、その何だ、あつと、機嫌悪くてキレただけで、お前は全然悪かねえよ」

一部嘘だと思いながら言つと、雪音はでも、と俯いた。強張つた

頬がすう、と赤くなる。

「でもあたしもお酒入つてたとはい、無用心だつたから。その……、ああいう事になつても、仕方ない状況ではあつたと想ひ、し」

「……」

頬を紅潮させ、もじもじ、と指を絡ませる雪音は、いつもよりかなり可愛らしく見えて、かなりやばい。しかも、見とれて言葉を失う俺を、とじめとばかりに上目遣いに見上げ、

「あの……でもね、あたし、いつまでもこんな風に、ぎくしゃくしてゐる嫌なの。またあんたと喧嘩したり、飲んだり、遊びに行つたり、色々したいから、だから……仲直り、したいなつて」などと言い出したので、思わず俺は後ずさつた。腹から胸にかけて、熱いものが駆け抜けて焦る。

（こいつ、わざとやつてんのか？ 色々つてなんだ、色々つて！ つかこれはあれか、告白か告白じやねえのかどっちなんだ！）

感情的にはこのまま雪音を押し倒したいくらいだが、理性的に考えて言葉だけ汲み取ると、単純に仲直りをしよう、というだけで、他の意図が無いみてえだ。

雪音がその気になつて、付き合おうとしたこいつもりで言つてているのならともかく、そうでない場合、ここで手を出したら、永遠に絶縁しかねねえ。

だとしたら、どう答えれば良い。ただのダチになんて、今更戻れるわけがない。だが、それ以下になるのはごめんだ。だが、だが。

「……」

進退窮まり、ぐるぐる考え込む俺をしばらく見上げた後、雪音は小さくため息をついて俯いた。

「……そうだよね、虫が良すぎるよね、こんな事」

そして顔を上げると、無理に明るい笑みを浮かべて、

「これからはもう、一角に迷惑かけないようにするね。仕事中にお邪魔してごめんなさい。じゃあ」

そのまま身を翻した。その後ろ姿を見た途端、俺の胸にズキ、と鋭

い痛みが走る。

誕生日にやつて以来、雪音がいつもつけている簪が、今日は無い。

雪音が、離れていく。手を伸ばしても、届かない場所まで。

「ばつ……ま、待て、行くな！」

「雪音、俺が悪かった！」

「い、一角、ちょっと…？」

驚いた雪音が駆け寄つて、起き上がりせようと服を掴んだが、俺は頑として動かなかつた。

「許してくれなんて、都合の良い事はいわねえ。けど俺は、お前を傷つけるつもりは無かつたんだ。あの時のことは何もかも、俺が悪かつた。もう一度と、あんな事しねえ！ 済まなかつた！」

「一角……」

気持ちのまま言葉を迸らせると、こじこじばらく胸に居座つていたつかえが軽くなつた気がした。許されなくてもいい、やつと謝れた、と息を吐くと、

「……いこよ、もう。顔上げて」

雪音が優しい手つきで触れてきたので、どきりとして起き上がる。雪音は俺の前に膝をつき、穏やかな表情で俺を見ていた。視線が合ふと、目を細めて笑い、

「これでお互い謝つたから、もう帳消しつて事にしようよ。全部忘れてさ、今日からまた友達になろう。ね？」

「雪音」

許して、くれるのか。あんな事した俺を。柔らかい笑顔に見惚れて、湧き上がる喜びに顔が緩みそうになる。が、雪音の言葉が引っかかって、今度は頬がひきつった。

（ちょっと待てお前、友達つてそれは結局もとの木阿弥つて事か？）
（いつからお付き合い始めましょうとか、そういう話にはならねえのか？！）

盛大に突つ込みを入れたがつたがしかし、嬉しそうに一ノ二ノ笑

「雪面に」これ以上ひつひつと並べるのはあらわもなく、
「む……む、ぬ。そりだな」
甚だ不本意なまま、そつぬく。軽くなつたはずのつかえが、再び
重みを増して、とのしかかつてきただよくな気がして、俺は心底
ひそやうした。

あたしは、ちゃんと笑えただろうか。和解の言葉を口にして、あの人を拒絶しながら。

* * *

「雪音ー！」

「うわー！」

後ろからいきなり首に手を回され、悲鳴が出た。わざ、と金髪が耳にかかる。

「ら、乱菊さん？！ ぐ、首締めてる締めてるー！」

「んつふつふつ、きょ・う・こ・そ、飲みに行くわよー！」

そのままざるざる引つ張つていかれそうになつて、あたしは慌てて踏ん張つた。

「ちょっと、あ、あたしまだ仕事がつ

「明日明日！ 仕事は逃げないからー！」

「い、いやー？！」

というわけで、強制的に飲み会参加になつてしまつた……。

「うーん……」

とりあえず隅っこの方に座つたあたしは、お酒がなみなみつがれた杯を見下ろす。久しぶりの匂いに喉が早くも乾き始めてるけど、しかし、飲み干すには躊躇してしまう。

そもそもあの時、縛道がゆるんだのは、際限なく飲んで、気をゆるみまくつたせいだ。だからあれから、飲み会参加を自主的に禁止して、部屋でも飲まないよう我慢してる。

まあこれまでガンガン飲みまくつてた分、禁酒は相当きついんだけど、あたしは一度飲み始めたら、ぱーつと盛り上がりしかねうから

なあ。途中で止められるならともかく、そんなの絶対無理だし。
だからどうしようこれ、飲みたいけど、飲んだらぐだぐだになる

ט' ע"ה כ"ה ע"ג ע"ה

「うーん、向こうでNANAの？」

四

悩んでるところに急に声をかけられて顔を上けると、己の親があたしを見下ろしていた。前を横切り、とんつと横に座つて、

「飲まないの？ それ

こちらの手元を指さしていく。ええと、とあたしは曖昧に首を傾げた。縛道の事は話せないけど、飲んべえのあたしが飲めない理由で自然なのって、何があるかな。

卷之三

不自然は落ちた沈黙の間に
し
とあたしを見ていた言葉は
猪口

「今日は一角が居ないから、酔つても他の人が送つてくれるよ。そ

用心しなくても良いくらいだった。「調で言ひ。

一瞬意味が分からなくて目を瞬いたあたしは、間を置いてから気がついて、慌てた。

「え、違う、違う違う！ 一角関係ないし！」

「親ばく」とあわてて、息を吐き切った。

かと思つたけど

う。まあ。それは……全くの無関係、ではない。縛道がゆるんだ
もう一つの原因是、一角だし。だけど、さつき考えてた事の方が主

な理由たったから あたしは手を振った

「違うわよ。このところ仕事忙しかったし……それに、ほら、あたし前から飲みすぎだったから、隊長に控えなさいって怒られちゃつ

てね

うん、これは本当に、嘘じゃない。建前としては十分と思わず息をついたら、弓親は流し目で弓に視線を送ってきて、

「雪音ちゃん。一角の気持ち、分かってるよね

辺りをはばかるように低い声で呟く。

「！」

不意の言葉に、思わず背筋が伸びてしまった。見返したら、弓親は無表情だ。

「一角から仲直りの話聞いたけど、狡いと悪いよ。一角の気持ち無視して、友達のままにいよう、なんてさ」「

弓の心の中まで全部見通すような鋭い目が、あたしを見ている。あたしは凍り付いたように、その目を見つめ返す。

「分かって、いつまではぐらかすのかな。それとも、この男は自分に惚れてるって、優越感に浸つていたいの？ 何を言つても何をしても、一角なら傷つかないし、裏切らないと思つてる？」

「……違う、わよ」

ぐ、と歯を食いしばって、あたしは弓親の視線から逃げた。杯を握りしめると、手の震えでさざ波が起きる。

『親の言つ事は当たってる。

押し倒された上、あんな目で見られれば、一角があたしの事をどう思つてるかなんて、すぐ分かる。一角が土下座した時、どれだけ真剣に向き合つてくれてるのかも伝わってきて、正直嬉しいと思う気持ちもあつた。

「だけど、だけど、あたしは。

「……怖いの」

言葉を落とすと、弓親は猪口を持った手を下ろして、

「一角が？」

問い合わせてくる。ああ、寒椿がしてきた問いを、またそれでいる。なら、同じ答えを返すしかない。あたしは顔を歪めて笑つた。

「違う、自分が」

一角がどうこう、じゃない。

「一角がいい男だと思うから。だから、駄目な」

ただ、あたしが。こんなに弱くて、自分の事さえどうにも出来なくて、あがいているだけのあたしが、
「あたしが、一角に相応しくないの」

弓親は、あたしの足りない言葉から何か察してくれたのか、それ以上何も言わず、そばから離れていった。

あたしは壁にもたれかかり、深く息を吸い込み、はき出した。ざわざわと騒がしい店の中、一人だけ音のない世界に迷い込んだように、耳が遠くなる。

手放したくなくて、近づきたくもなくて、だから友達でいようなんて、都合の良い申し出。やつぱりあのまま、会わずに縁が切れるのを待っていたほうが良かつたのかもしれない。

もう、誰の手にもすがらず、生きていけると思つていたのに。あたしは手の中の杯を見下ろし、それを静かに卓の上に置いた。もう、飲む気分では無くなっていた。

カレイドスコープ

日々忙しい仕事の合間、たまたま空いた時間があったので、雪音は休憩がてら、救護鞄の整理をする事にした。

鞄の中身を机の上に並べ、量や質のチェックをしながら、足りないものを足し、古くなつたもの・交換する必要があるものを脇にわけておく。

そうして手を動かしながら、しかし思考はいつしか別のところへ飛んでいってしまう。

『分かつて、いつまではぐらかすのかな』

『この男は自分に惚れてるって、優越感に浸つていたいの?』

（そんな事、ない）

一角が自分に惚れてるとか、惚れていないと、そういう事が問題なのではない。

（ただ、怖いだけ）

自分の枷が外れた時、何が起こるか分からぬ、それが恐ろしい。寒椿は雪音の恐れに対し、心の有り様だ、と言つた。心が強ければ、雪音は雪音の思うように生きていけるのだと、その強さを持つ己を信じよ、と。

だが、どうして自分を信じることなど出来るだらう。あの記憶を思い返すだけで、恐怖のあまり震えてしまうような、こんな弱い自分を。

『何を言つても何をしても、一角なら傷つかないし、裏切らないと思つてゐる?』

『そんなふうに思つていいない。

友達になろう、と言つた時、ありありと失望の表情を浮かべた一角の顔が忘れられない。一度でも、男と女になつて対峙した以上、

一角が雪音に惚れているのなら、そこから先の展開を望むのも当然だと思つ。

だが、雪音には出来ない。

いつまた、一角の靈圧を受けて縛道が外れるかと怯える雪音に、一角の好意を受ける覚悟など無い。

（やつぱり、駄目だ。こんな半端な気持ちで、一角と友達付き合いでいるわけがないよ。一角に、悪い）

報いる気がないのに、側に居て欲しいなんて、我が儘だ。仲直りはしたけれど、これまでとは距離を置かなければ。そう思つたところで、

「……ん。鑑原さん！」

「きやあつ！」

不意に大きな声をかけられたので、雪音は飛び上がつてしまつた。

「な、なに？！」

がばつと振り返つた先には、雪音以上に驚いた顔で硬直した花太郎がいる。

「は、花君？ 何、急に声かけないでよ」

「え、あ、す、すみません。あの、何度も声かけたんですけど、鑑原さん、気づかれなかつたので、つい……」

花太郎は申し訳なさそうに肩をすぼめた。名を呼ばれている事など少しも気づかなかつた。雪音は、しまつたと慌てて手を振る。

「い、良いわよ。あたしがぼーっとしてたのが悪いんだから。何？ 仕事？」

「はい、あの、患者さんがいらっしゃつてるので、診療室へ出て頂けませんか？」

「あ、はい、了解。ちょっと待つてもらひつて」

雪音は急いで救護用品を鞄に詰めなおし、それを手に持つて足早に診療室へ向かつた。がらつ、と扉を開け、

「すみません、お待たせし

まで言つて、固まる。

救護室の椅子に座つて待つていたのは、一角だった。

「……お、」「う、」

雪音を見ると、一瞬虚をつかれて田を見開き、それからぱつが悪そうに視線をそらす。

そのそらし方があまりにも露骨だったの、雪音はどうした。この間の、友達宣言で傷つけたせいで、機嫌を損ねたか。

居たたまれない気持ちになりながら、しかし一度跳ねた鼓動が、ど、ど、ど、と早いテンポで鳴り始める。

「あ、と」

顔が熱くなってきた事に焦つて、雪音もまた視線を外した。急くようすに部屋の中に足を踏み入れ、

「け、怪我したの？」

早口に問いかける。一角は無言で頷いて、手を差し出した。

死霸装の袖を捲り上げた腕には、斜めに引っかき傷が走つていて、じんわりと血をにじんでいる。雪音が躊躇いながら一角の腕を取つて、

「虚に、やられたの？ 浅いけど、長いわね」

問いかけたら、一角はお、と短く答えたが、まだそっぽを向いていた。

やはり、怒つてはいるのかもしない。しかし怒るのも当然だ。雪音はきゅ、と唇をかみしめて、消毒液の蓋を開けた。脱脂綿にしみこませて、丁寧に傷を拭き始める。

「…………」

「…………」

部屋の中に、緊迫した沈黙が落ちた。雪音も一角も一言も話せないまま、治療だけがてきぱきと進み、

「……はい。これで終わり。帰つていいわよ」

雪音の声を漸に、どちらともなく離れる。一角は居心地悪げに椅子の上でもぞつと身じろぎした。雪音は逃げるよつて背を向けて、片づけをしてくるふりをする。が、

「……あー、雪音」

「は、はい？」

びくつとして振り返つたら、まともに田が合つて、雪音は軽く息を

飲んだ。

細めた一角の田は、どこか切なげで、熱を帯びていて、言葉より雄弁に一角の気持ちを表しているように思えた。見つめていると、また鼓動が激しくなってきたので、狼狽して視線を落とす。

と、一角は短く息を吐いた。

「……もうしねえって言つたわ。そ、うびくびくするなよ」

「え」

「だから。もう、お前を怯えさせるような真似しねえっての顔を上げると、一角は頭をぼり、とかいて立ち上がつた。苦笑いに近い表情で雪音を見下ろし、

「友達、なんだろ？ 賴むから、普段通りにしてくれよ。ンな大人しいお前なんか、気持ち悪くて仕方がねえよ」

請うように言つ。田は変わらず、優しげでさえあるのに、言葉はそれを裏切つてこるようだつた。どちらを信じればいいのかと困惑つた雪音が、辛うじて「う、うん。ごめん」と答えると、一角は手を伸ばして、雪音の頭をくしゃくしゃつと撫でた。

「うわー」

びくびくして声をあげる。一角はぐ、と笑つて手を離した。

「今日、風弦洞に毎飯食いに行くけど、お前も来いよ

「は？」

「たまにや、毎に行くのもいいだる。親父が、最近お前の顔見ないつて寂しがつてたぞ」

「あ……う、うん。分かった」

断る理由は無いので、小さく頷く。

「おう。じゃ、後で弓親と一緒に来るわ

一角はそういうて手を振り、さつさと部屋を出て行つてしまつ。

その背中を見送つた雪音は、ぐしゃぐしゃにされた頭を無意識に

手で梳かし、しかしその指が簪に触れたので、動きを止めた。血の音が聞こえそうな勢いで顔が赤くなる。

（や、やだ、何で？）

距離を置かなければ。そう思つたばかりなのに、どうしてこんなにどきどきしているのだろう。こんな間違つてゐる。勘違いだ。あの田で見つめられると、胸が苦しくなるような気がするなんて、気のせいだ。

雪音は違う、違うんだってば、と呪文のように何度も言いながら、頭を抱えた。胸の動悸は、まだおさまらない。

廊下をどすどす歩いていた一角は、曲がり角で出てきた小柄な人間とぶつかりそうになつた。

「あ？」

「あつ、わつ、す、すみません！」

手に持つてゐた包帯をいくつか落としながら謝つたのは、一角がここに来た時応対にあつた少年、確か花太郎という奴だ。一角はびき、と額に青筋を浮かべると、

「てめえ！」

がつ、と花太郎の胸倉を掴んだ。

「ひいつ？！」

包帯を押しのけて突進してきた腕をよける事も出来ず、花太郎はそのまま上に吊り上げられた。力任せに引き寄せられた先には、背後に炎をえ背負つて、いそなほど凶悪な一角の顔。

「ひつ、ひつ、ひつ、めんなさい——？！」

花太郎は意味も分からぬまま、とりあえず謝つたが、一角はドスのきいた声で、

「てめえ……さつきの俺の話聞いてなかつたのか？ 俺は雪音以外の奴を連れてこいつつたろうが……」

ぎりぎり、と締め付けてくる。ひいい、と声にならない悲鳴をあげる花太郎。

「す、す、すみま、で、でも、他に出られる人が、いなくてつ
「そんならそつと言え！ 今日といつ今日は、あいつの治療なんて
受けたくなかったんだぞ俺は…」

「きや―――つ！」

そのまま勢いよく壁に叩きつけられる。恐怖のあまり少女のよつ
な悲鳴をあげる花太郎を、
「てめえのおかげで、俺あ心底居心地悪かつたんだぞ」いら、失神し
てんじやねえ！」

まだ足りないとばかりに、がくがく揺さぶつた一角だつたが、
「ま、斑田三席！ 何をなさつてんのです！」

騒ぎを聞きつけた伊江村三席が部屋から飛び出してきた。叱責しよ
うとして、しかし一角のただならぬ様子にたじろぎ、

「う、うちの隊員が何か、失礼をしましたか？」

思わず低姿勢で尋ねてしまう伊江村。一角はじり、と底冷えするよ
うな眼差しで伊江村を見た。

「けつ。何でもねえよ

吐き捨てるように言つと、花太郎を放り出し、苛々した荒い足音
を立てながら詰所を出て行く。取り残された伊江村は、
「や、山田！ 貴様一体、斑田三席に何をしたんだ！」

花太郎に鋭く問いかけたが、花太郎はくらくらする頭をよつやく持
ち上げたところで、答えるどころではなかつた。うへ、と頭を抱え
たところで、

「……あれ？ 香の匂い……？」

不意に香つた匂いに、鼻を動かした。微かでも、詰所に似合わない
きつい香りに、一体どこから来たものだらう、と首を傾げたが、

「山田――」

「ひいつ、すみません！」

伊江村の怒声が降りかかってきたので、そんなことはすぐ忘れてし
ました。

* * *

隊舎に戻ってきた一角の話を聞いた『親は、深々と嘆息した。
「馬鹿だね一角、他の女につけられた傷を、雪面ちゃんに治しても
らうなんて。だから、憂さ晴らしに遊郭行くのなんてやめたら、つ
ていつたのに。」

「う・る・せ・えつ！ 雪面こはぜつたに言つたじやねえぞー。
「言えないくらいなら、行かなきや良いだろ」
青筋立てて念を押す一角に呆れて、『親はもう一度、しみじみし
た口調で馬鹿だね、と呟いたのだった。

十一番隊隊舎に戻ってきた弓親は、入り口近くをうろついている不審な人影に気がつき、足を止めた。

その人物は出入り口の前を行ったりきたりして、時折覗き込んで、入るかと思いきや、くると身を翻して帰る素振りを見せ、しかしやつぱり足を止めて、未練がましい仕草で隊舎を振り返る。

(……雪音ちゃん?)

田をこらして人影を見分けた弓親は、何事かと眉を上げた。

このところ十一番隊に姿を全く見せなかつた雪音が、隊舎前にいるだけでも珍しいのに、あんなに拳動不審では、いずれ柄の悪い隊員に絡まれてしまうだろつ。

それでどうこうされるような彼女でない事は分かつてゐるが、放つておいたら、ややこしい事になる。それにどうせ隊舎に入る入り口は、そこしかない。弓親は雪音の拳動に疑問を感じながら近づき、「雪音ちゃん。そんなところで、何してるのさ」

声をかけた。途端、

「ぎやつ」

蛙をつぶしたような悲鳴をあげて、雪音が飛び上がつた。必死の形相でこちらを振り返り、

「……ああ、弓親か。びっくりした……」

心底安堵して、大きなため息を吐き出す。ますます怪しい。

「話しかけただけで、随分な反応だね。何、うちに用があるの? それなら中に入ればいいじゃないか」

「う、あ、いや、その……」

雪音は赤くなつたり青くなつたり、首や手を振つたと、ぱたぱた忙しなく動いてから、

「……そ、そうだ、弓親お願ひ!」

こきなりずい、と何か差し出してきた。

「？ 何、これ」

受け取つたそれは、和紙の袋に包まれた、手のひら大の包みだつた。持つた感じはかなり軽い。

「それ、一角に渡しておいてほしいの」

「いぶかしげな」「親へ、雪音が顔の前で手を合わせて言った。

「一角に？」

その名前が出てきた途端、なぜ雪音がああも逡巡して、理解した。

雪音と一角はこのところ、かなりややこしい事になつてゐる。

そのきっかけは一角が思い余つて雪音を押し倒した事で、その後「友達として」仲直りをしたはいいが、お互の意識してしまい、以前のように気軽に話すことが出来ないらしい。

「一角に用なら、雪音ちゃんが直接行けばいいじゃないか。今なら昼寝でもしておる時分だよ」

ためしにそういうてみたが、雪音はやつぱり、ぶるぶると首を横に振つた。白い頬にぱ、と朱が散る。

「い、いいの！ それ渡してくれるだけでいいから、よろしく！」

「あ、ちょっと！」

止める間もない。雪音は言いたい事だけ言つて、脱兎の如く逃げ出した。瞬歩まで使っての、鮮やかな逃げっぷりだ。中途半端に上げた手を下ろして、弓親はふ、と息を漏らした。手の中の包みを見下ろす。

（何だか知らないけど、直接渡したほうが、喜ぶと思うけどな）

だがそれさえも、今の雪音には相当難儀な事なのだ。やれやれと呆れながら、『親は隊舎に入った。

すれ違う隊員達の会釈を鷹揚に受けて廊下を歩いてこき、一角の部屋へたどり着く。一角、と呼びかけて障子を開けると、畳の上に座布団を枕にして、一角が横になつていた。

「……ああん？」「親？」

ちゅうど寝入りばなだつたらしこ。とふとふと閉じかけた目が、
ぽんやりと「親を見上げる。」親はその腹の上に、雪音から預かつた包みをぽんと投げ置いた。

「？ 何だ……こりや」

「一角に渡してくれつて頼まれたんだよ。雪音ちゃん」

「ああ？！」

雪音の名を聞いて、弾かれたよひに一角が起き上がつた。包みを掴んで凝視し、口親と見比べる。

「ほ、本当か？ あいつがお前に渡せつて？」

「嘘ついてじうするのを」

隊舎の前まで来たが、中に入ろうとした事は言わないほう
がよさそうだ、と口親はすました顔で答えた。

一角はその表情を半信半疑で見据えた後、包みを開き始めた。綺麗な千代紙が無骨な手でびりびりに破かれていくのを、美しくない開け方だ、と顔をしかめる口親の視線に全く気づかないまま、一角は中身を引きずり出す。

ふらん、と垂れ下がつたのは、綿を編んだ紐だつた。幾重にも束ねた、かなり長い紐だ。落ち着いたえんじ色を地に、白い龍が空を飛ぶようにのびのびと身体を伸ばしているのが見える。

「下げ緒、かい？」

手元を覗き込んで言うと、らしいな、と一角は手の中で紐をくるくる回した。ためつすがめつ眺めた後、にやつき始める。

「うわ、何だいその顔。気持ち悪いな」

いきなりの変貌に、口親は思わず身をひいてしまう。しかし一角は気を悪くする様子もなく、指に紐を絡めた。

「あいつ、ちゃんと覚えてたのか」

「は？ 何を」

「誕生日」

「…………。あ、そつか。今日一角、誕生日だつたね」

本気で忘れきつていたので、口親は間の抜けた声を上げてしまつ

た。一角がじろつ、とじからを見上げたが、強面もすぐ緩んでしまう。

「あいつの誕生日に簪やつた時、礼するとか言つてたからよ、多分それだろ、じれ。もう忘れてるかと思つたけどな」

「へえ……」

雪音の誕生日といえば、確か半年以上前ではなかつたか。長年一緒にいる自分さえ忘れていた一角の誕生日を覚えていて、きちんと贈り物をするあたり、律儀な雪音らしい。

……いや、ただ単に律儀なだけ、ではないか。

「意味深だね、下げ緒なんて」

「あ？ 意味深つて、どこが」

「親が言つと、一角が疑問符を顔に浮かべてじからを見やる。」
親はに、と口の端を上げた。

「君みたいにいつも刀を持ち歩いてる人間に、刀につける下げ緒を寄越すのは、意味ありげだと思わないかい？」

まるで、いつも一緒にいたい、と言つてゐるかのようじやないか。言外にそう告げると、目を丸くした一角の顔が、すう、と赤くなつた。まじまじと下げ緒を見つめると、改まつた様子で正座をして、刀を引き寄せる。

「さつそくつけるのかい？」

「まあ……そりやな」

「まあ……そりやな」
もじもじと曖昧に答えるのは、照れているせいかもしれない。」
親は一角の様子に、くつと笑つてしまつた。それを聞きどがめた一角が鋭い視線を向けてきたので、明後日の方向を向いて誤魔化す。
(ま、雪音ちゃんの真意なんて分からなから、単なる推測だけどね)

だが、雪音のあの様子からして、全く何の意味がないとも思えな
いし、さほど外れでもあるまい。
(これで一人が、結び付けられれば良いんだけど。……でも素直じ
やないからなあ、両方とも)

「これですねんなり行くくらいなら、とっくに付き合つているだろつ。
『親は縁側に腰掛けて、柱にもたれた。紐がこすれあう微かな音
を後ろに聞きながら、ひつそり嘆息する。男と女は、特に一角と雪
音は、本当に難しい。』

犬もほかす

はあ、とため息が聞こえてくる。それから、連續して十六回目。僕が鏡の中の自分を見て、あまりの美しさにため息をつくのならともかく、一角が窓の外をぼんやり眺めて、物思いに耽るなんて、かなり気持ち悪い。

（まあ、一角がああなたの理由は、大体決まってるけどどうせまた雪音ちゃんがああしたこうした、どうだこうだで悩んでいるんだろ？）

お互い素直じゃないから、一人はしおつかう衝突しては離れ、衝突しては離れを繰り返していて、一向に進展しない。それを端から見ている分には、犬も食わない喧嘩だなと笑っていられるだろうけど、何があるたび、一角が僕に相談してくるから、とても面倒くさいのだ。

またその内何か言い出すだらうな、と思いながら雑誌をめくつていたら、十七回目のため息を吐いたところで、ようやく一角が口を開いた。

「なあ、弓親。雪音の奴、今好きな奴いると思つた

「何？他の男のことでも話し始めたの？」

予想外の質問にびっくりして問い合わせ返すと、じつに向き直った一角は、曖昧な表情で顎を撫でた。

「せうじやねえんだけどよ。なんつーか……お前の田から見て、どう思つよ」

一角らしくない、妙に回りくどい言い方だ。何を聞きたいんだろうと思いながら、僕は答えた。

「特にそういうのは居ないと思つたけど。と、こうよつ、雪音ちゃんは一角が好きなんぢやないの？」

「そ……、そうか！お前もそう思うか！」

うわ、思いつきり身を乗り出してきた。暑苦しいよ、といつたら

一角はすぐ後ろに引いたけど、顔を赤くして、落ち着きなくもぞもぞ動いてる。

「いや、なんかよ、俺の勘違いかと思つてたんだけどよ。ほり、あいつを押し倒して以来、なんかこう、前より距離があるなってーか、避けられてるってーか」

「しばらくの間、思いつきり警戒されてたよね」

「すばつといつたら、一角がぐつさり傷ついた顔をした。しちうがないじゃないか、本当の事なんだから」

「いくら思い余つたからって、友達と思つてた男に襲われかけたら普通、女の子の方は注意するよつになるよ」

「……まあ、何だ。一応仲直りさせてもらつたとはいえ、もう希望はねえなと思ってたんだけど、よ」

あぐらをかいて一角はぽりぽり、と頭をかいた。顔の赤みが増してきてるから、見た目、気持ち悪い。男が赤面する様なんて、美しくないな。

「それがどうもこの頃、雪音の俺に対する態度が、変わってきた気がしてならねえんだよな。いづ、もしかしてこいつ、俺の事好きなんじやねえか、と思わせられるつーか」

「あー、そう」

何だか脱力しちゃうよ。今更こんな事言つ出すなんて、一角も相当抜けてる。恋をすると皿田になるつてこつのはこうこう事だつけ。ちよつと違うか。とにかくもつ馬鹿馬鹿しくて、笑つ氣にもなれない。

呆れる僕の様子に気づいているのかいないのか、一角は真剣な様子で、

「俺が期待してるからさつ見えんのかと思つたけど、お前がそう言うなら、間違いねえかもな。なら、今度こそ」

「だからつてまた押し倒すのはどうかと思つよ

「ねえよ!」

先んじて念を押したら、耳まで赤くなつて否定してきた。あ、さ

すがにそこは懲りてるんだ。そりやそりや、雪音ちゃんにあからさまに避けられてたから、そりどう苛々してたもんね、あの時。

「やういう事なら、今度はもう少し慎重にアプローチしてみれば？」

まずは、雪音ちゃんの気持ちを確認するところから始めてさ

「おう……そ、だけどよ」

ぱたぱた、と赤い顔を手で仰いで、一角は悩ましげな顔になつた。
「確認つたって、どうすりやいいんだ？ いきなり真っ向から聞いたんじゃ、引かれそうな気がするし」

うわー。何か青い春みたいな事言つてる人がいるよ。別に初恋というわけでもなし、何でこうも弱気なんだろうね。普段の勢いはどこへやらだ。

僕はいい加減にしてくれ、と思いながら、柱にもたれて雑誌のページをめくつた。

「別に言葉にしなくとも、態度で示せばいいんじゃないの。例えばほら、さりげなく手を握つてみるとか、肩抱いてみるとか。ま、いきなり肩抱いたら、びっくりして逃げられるかもしれないから、手からがいいんじゃない？ 触られて嫌じゃなければそのままだろうし、逆に嫌だつたらすぐ逃げるだろ？」

「そうか、手か……。そうだな、それならすぐ分かるよな」

自分の手を見下ろして、開き閉じしてから、一角は気合を入れるみたいにぐつと拳を作つた。

「よし、今度そつしてみるわ。ありがとうな、『親』

「んー」

何だか妙に田をきらきら輝かせている一角から視線を外して、僕はざるざる、と柱をすべり、床に寝転がつた。

本当に、僕はいつまで悩みと称したのろけを聞き続けなきやいけないんだろう。とつと結婚でもして、落ち着いてくれればいいのにな。疲れるよ、本当に。

病氣にでもかかつたみたいだ。自分で自分のことが、どうにも出来ない。

「はい、皆準備はいい?」

騒がしい居酒屋の中で、一際大きな掛け声をあげる乱菊さん。彼女が立つて場を見渡すと、皆手に持つた杯を示して、飲み物がいきわたつている事を示してみせる。

「それじゃ、本日はお忙しい中、お集まりいただき有難うございましたつ。今年もいよいよ終わり、残してきた憂いは今日全部洗い流す事にして、今日は上司部下関係なく、無礼講でいきましょ。では、乾杯っ！」

『乾杯！』

乱菊さんは、仕事中にはとても見られないほどのきいきとした顔で、乾杯の音頭を取つた。皆は杯を掲げて唱和した後、思い思いに話し始める。

忘年会でいつもの飲み会よりメンバーが多い分、騒々しさも増してゐるみたい。あたりの喧噪は誰が何を話してゐるのか、分からなくなる。

杯の半分まで飲んだあたしは、ふうつ、とため息を吐き出した。久しぶりに飲むせいか、少し含んだだけでも、じんわりと体に染み入つていくような感じがして、とても気持ちが良い。と思つていてたのに、

「なによ雪音、その飲み方。もつとぐーっとこきなさいって

「うわ、乱菊さんっ」

乱菊さんが、不満そうに言いながらやつてきた。まずい、このままだとまた、一緒に大酒をかくべらつて管を巻いていた以前と、同じペースで飲む羽目になつてしまつ。

「やー、ちょつと調子悪いんで……」

単純に飲むのを控えると言つても聞かない人なので、曖昧に言つたけれど、乱菊さんは、

「だーいじょうぶ、ちょっとくらい調子悪くても、飲みまくれば吹つ飛びつて！ ほらほら、早く空けて！」

にこにこ笑顔で、ずいずい徳利を押し付けてくる。駄目だ、飲まされる。

しかたないので、あたしは一度だけ乱菊さんから杯を受けると、後は何やかんやと言い訳をして、その場を離れた。徳利と銚子をもつて、隅の目立たない場所に腰を下ろし、一息つく。

「あ」

だけど、田を上げた先で一角と視線があつて、あたしは硬直した。つい顔を背けてしまったのは、一角を見ただけで鼓動が跳ね上がつてしまふからで、やつた後にしまったと思つたけど、もう遅い。少しの間を置いた後、一角はすんずんこつこつ歩いてきた。

「ぐ、あ？」

まさか近づいてくるとは思わなかつたので、あたしは思わず間の抜けた声をあげてしまう。一角は田の前までやつてきて、ちょっと迷うみたいな顔をした後、

「隣、いいか」

ぶつきらぼうに聞いてくる。宴会であたしと一角が席を並べて飲むのは、いつもの事で、あんな事があつたとはいえ、一応仲直りはしたんだし、断る理由も無い。

けど、あたしは言葉に詰まつてしまつた。

嫌、というより、困る。一角を見るだけで落ち着かないのに、隣で飲まれたら、なんといつか、居たたまれなくなつてしまふ。でもそれをそのまま詰つわけにはいかないし…… とぐるぐるしてたら、

「……座るぞ」

むつとした表情の一角がじわつ、と勢いよく隣に座つたので、ついびくつとしました。つわ、ちょ、近い。一角の死霸装の袖が、

「ひの腕に触れてるし。

「…………」

そのまま沈黙。周囲はお酒が進んで騒々しさが増す一方だつてい
うのに、ここだけ切り取られたみたいに静かだ。

お互い口が悪いから、いつも喧嘩ばかりしてたくらいなのに、
何でこんなに居心地悪いんだろう。

いや、だから別に側にいるのが嫌だとか、そういうんじゃないん
だけど、こう、ちょっと離れたいっていうか何ていうか……とか何
とか考えて、距離を置こうと、そもそも落着き無く動いた、その
時。

畳についた手が、ぐっと握られた。

「！」

一瞬、何が起きたのか分からなかつた。ぱっと見たら、一角の手
があたしの手をすっぽり覆つて、握り締めていた。

「え

何を、と一角の顔を見上げたけど、一角は前を向いて杯に口をつ
けたまま、こっちを見ようとしなかつた。でも顔がちょっと、赤く
なつてるように見え……るよう、な。

（う、わ）

あたしも顔に血が上るのを感じて、目をそらした。お酒を初めて
飲んだ時みたいに、急に鼓動が激しくなつてきて、じっとり汗がに
じんでくる。

口の中が乾いて、慌てて猪口を傾けたけど、辛口のお酒は余計に
渴きをとれるばかりで、全然意味が無かつた。

（あ、あほかあたし、たかが手を握られてるだけで、こんなに動搖
してどうする！）

自分を叱咤して、目を閉じて一角の事を意識から締め出そうと
たけど、逆効果だった。かえって、まめのつぶれた固い手のひらと
か、意外と細長くて、力強い指の感触が鮮明になつて、ますます意

識してしまつ。

い、居たたまれない、今すぐここを逃げ出したい！

(……はつ、いやー、違ひー、じゃじゃしてるんじゃないからー、

だから！

そ、そう、だつて一角が手握つてくるなんて思うわけないし、つていうか飲み会で何でこんなことするのかとか、そうか一角酔つてるのね、酔つてるからなんかこうの意味も無くやつてみたつて感じで、特に理由はないつていうか！）

もう完全にハーツケ状態になつて、あたしはたらたら汗をかぎながら、支離滅裂な事を並び立てて、必死に現実逃避に走つてしまつ。このままだと、本気で意識とぶかも、と思つた時、

!

「<」「」

いきなり乱菊さんがドーン！ と抱きついてきたので、あたしは悲鳴をあげて後ろに倒れてしまつた。がん、と思い切り床に頭を打ち付けて、目の前に星が飛び散る。

「ほりあー、まだ寝るには早いわよーつ、あたしと飲み比べしよー
「の、飲み比べつて……いた……お、おも……」

痛む頭に手を当てながら、乱菊さんを押しのけようとしたけど、「重たいですって、このあたしが重たいわけないでしょー！失

礼な子には罰よ～！」

乱菊さんはかえつてきつとしがみついて、しかもあのおつきい胸をぎゅーぎゅー押し付けてくるので、圧迫されて息が出来なくなる。

「ああ……いいなあ……」

それを見ていた檜佐木君が、心底羨ましそうに、代わって欲しいとか思つてそうな顔で呟く。

（あ、あほか！ 檜佐木君助けてよ、とりあえず！）
必死で押し戻しながら、あたしが心中で叫び、もがいてると、騒

ぎを聞きつけた雛森ちゃんと日番谷君がやってきて、

「おー松本、他の隊の奴に迷惑かけるな」

「そうですよ、乱菊さん。ほら、鑑原さんとぶしつぶしてから、起きて」「いやーん、いじわるー！」

身をよじつて暴れる乱菊さんを引き剥がしてくれたので、あたしはどう、と息をついた。窒息して田の前ちかちかしたわよ、今。

「し、死ぬかと思った……」

「鑑原さん、大丈夫ですか？」

雛森ちゃんが心配げにあたしの背中を撫でてくれる。ああ「めんね、と顔を上げて、あたしはまだきりとした。

雛森ちゃんの後ろでは、乱菊さんが今度は日番谷君に絡んで、お酒を飲ませようと、無理強いていたのだけれど、その向こうに倒れる一角が田に入つたのだ。

一角はじ、とあたしを見つめていた。その眼差しは怖いくらい鋭くて、真つ向から受けるには強すぎて、あたしは慌てて視線をそらした。

でも、乱菊さんの襲撃で一瞬忘れかけたけど、我に返つたら、一角の手の感触がまざまざと蘇つてしまつ。

「鑑原さん、もしかして今、すこく酔つてます？ 顔真っ赤……お水、もらつてきましょうか

「ぐ、う、あ」

あたしの顔を覗き込んだ雛森ちゃんに指摘されて、あたしはますます顔が熱くなつた。やばい、駄目だ、落ち着かなきや。

「う、ううん、えつと、その、ちょっとお手洗い行つてくる」

「大丈夫ですか？ 一緒に行きます？」

「いや、平氣だから…」めん、有難う、雛森ちゃん

あたしは自分でもわざとらじいと思うくらい、ぱたぱた手を振つて立ち上がり、足早にお手洗いへ向かつた。背中を向けたのに、まだ一角の視線向けられていくよつに思つたのは、自意識過剰だらうか。

（違う、だから違う、一角は、友達…）

あたしは店の中を駆け抜け、他のお客さんやお店の人ぶつかりそうになりながら、そう強く言い聞かせる。

だけど気がついたら、さつき握られた手を、もう片方の手できつく掴んでいた。手にはまだ、一角の温もりが残つていいよつで、なぜか無性に恥ずかしくて、仕方がなかつた。

新年も過ぎて一ヶ月。

仕事がひと段落ついて窓の外に田をやると、屋内にいるのがもつたいないくらいの青空が広がっていた。

「うーん……」

窓から身を乗り出していたら、勇音がなーに、と後ろから声をかけてくる。

「何見てるの、雪音」

「いや、何かすこしいい良いお天氣だから。お昼、外で食べよつかなあと思つて」

「あらいいわね。今日は暖かいし、きっと気持ち良いわよ」

「勇音は、まだ駄目?」

振り返ると勇音は、机の上にじつさつ乗った書類を示して苦笑した。

「うん、無理ね。だから気にせずこいついらしゃい。いいの手伝いはもう良いから」

「……じゃあ、お言葉に甘えて。また手伝う事あつたら声かけてくださいね、虎徹副隊長」

改まつて退室を申し出ると、雪音はやだ、と身じろぎした。

「からかわないでよ、雪音」

「からかってなんていませんよ。同僚とはいえ上司、しかも副隊長様ですから、公私の別ははつきりしませんとね」

反応が面白くて、真面目なふりをして言つと、勇音は顔を赤らめて、

「もう、良いから、早く行きなさい! ……あ、そういうえば。十番隊舎のあたり、梅が咲き始めてるわよ。じつせならあっちのほうに行つてみれば?」

梅、か。この好天なら、梅見のお弁当つてこいつのも、確かに良い

かもしねない。

「うん、そうするわ。それじゃ、お先に」

「はい、いってらっしゃい」

あたしは勇音と手を振り合って、部屋を出た。

* * *

炊事場に置いていたお弁当を持ち、隊舎を出て、十番隊隊舎の方へ歩き出す。二月にしてはうららかな日差しに誘われてか、外をふらついている人達が多いみたい。

お弁当を広げてお昼にしてる人、特に何をするでもなくぼうっとひなたぼっこをしてる人、芝生に寝転がって高いびきをかいている人……。このところ、詰所にやつてくる患者も少ないし、何だか自分の仕事を忘れてしまいそうなくらい、平和だ。

(平穏つていいなあ……心が和むわ)

しみじみとそんな事を思いながら歩いていたら、不意に後ろからどん！と強い衝撃がきた。

「ひあっ？！」

油断してたところだったので、あたしは思いつきり前につんのめる。

とつさに足を出して、転ぶのは何とかこらえたものの、衝撃で手から滑ったお弁当がどしゃ、と地面に落ちて、しかも結び目がゆるかつたのか、包みがほどけて蓋がはねどび、中身が見事に四散した。

「あ、ああっ…………！」

あたしは慌てて地面にひざをつくも、砂の上にとつ散らかったご飯は如何ともしがたかった。あああ、せつかく早起きして作ったのに……。がっくりと肩を落とした時、

「ゆつせー、おっはよー！」

「へ、や、やぢる副隊長？！」

ひょい、とピンク髪の女の子が後ろから顔を覗かせてきたので、あ

たしづびつくりしてしまった。そ、せつか、飛びついてきたのは、やちる副隊長だったのね。

「あ。……ゆつきー、『じはん駄田になつたやつたの?..」

相変わらずすぱつていなお顔を間近に見ゆことが出来て、あたしは顔が緩みそつになつたけど、でも同時に、彼女のせいでお弁当が口無しになつたといつのも事実なので、困つてしまつ。

「ええつと……」

どうしたものかな、と思つていたら、やちる副隊長はぴょん、とあたしの背中から離れて、ぺこり、と頭を下げた。

「『じめんね、ゆつきー。ゆつきー見つけたから抱つこしてもりおつと思つたんだけど、それで『じはん落としちやつたんだよね。あたしがわるかつたです。ごめんなさい』

「や……い、いえいえいえ!」

眉をハの字にして殊勝に謝る姿もまた可愛くて、あたしは盛大に手を振つた。

「そんな、気になさらないで下せ!.. これ事故だし、ちやんと持つてなかつたあたしも悪いんだし、そんな謝らなくても良こですよ!..」

「でも、それゆつきーのおひる『じはんじょい?.. ゆつきー、『じはんたべられなくなつたやつ』」

「それは……」

まあ、お弁当は駄田になつちやつたけど、お皿なら食堂こけば済む話だし、そつ大した問題では。

落ち込むやちる副隊長を見て、うれなげに、慌てて言葉を継ぎ、足をととしたあたしを、しかしづつと顔を上げたやちる副隊長が遮つた。

「やつだ、ゆつきーうちで食べなこでよ!.. 今田ね、剣ちやんとお外で『じはん食べるんだよ!..』

「ぐ、更木隊長……と、ですか?..」

うわ、速攻『じはん』遠慮申し上げたい。更木隊長と一緒に飯なんて、

全くもつて心和まなこ。やう細つてローリもつたナビ、やう細つて、
はすつかりその氣になつちやつて、

「やれじや早く行け」つゞ、やつれ——。」

「つ、わつ？！」

手をとひて、止める間もなく走り始めてしまつ。ああつむつと待
つてやうる電隊長、お弁当箱落としたままだし、心の準備があー！

……準備が整う前に、現場についてしまった。

あたしはあれよあれよといつ間に、十番隊隊舎近くの土手まで引つ張つてこられた。

勇音が言つていた、大きな梅の木の下で、先に来ていたらしい更木隊長が、どぶろくを抱えてすでに一杯やつてゐる。その周囲には弓親と一角、それから元十一番の射場さんが行楽弁当みたいなのが広げて、じ相伴に預かつてゐたいただ。

「剣ちゃん、ゆつきーね、一緒にじはん食べるのーー。」

やぢる副隊長はぴょーんと身軽にはねて、更木隊長の肩に飛び乗つた。更木隊長はそつか、とさほゞ興味のなさそうな声を漏らしてあたしを見、

「一杯やるか、雪音」

杯をすい、と差し出してくる。

「ええつと、その、ちょっと都合が悪いつていうか……」

心底」遠慮したいんですけど。そう思つてあたしは口元もつたけど、「何じや鑑原、らしゅうない、遠慮すな。弁当特別に作らせたけえ、うまいぞ」

射場さんが、強面の外見とは裏腹に、気さくな調子で誘つてくれる。弓親も、

「やうだよ、雪音ちゃん。ここから見る梅は、とても美しいよ」

そういうつうつうとつと梅の木を見上げる。でも一角だけは、

「……」

無言だった。杯に口をつけたまま、そのふち越しに、またあの鋭い視線をじぢりへ向けてくる。

「え……つと」

その眼差しに困惑して、あたしはふいつと顔を背けた。本當は、更木隊長や一角がいるこの場から、一刻も逃げ出したかった。

特に一角を見ると、以前強く手を握られた時の事を思い出して、かつと顔が熱くなつて、落ち着かなくなつてしまつ。

だけど、ここまで誘われては断るに断れない。しかも悪い事に、特別に作らせたつていうお弁当は本当においしそうで、お昼を駄目にしてしまつた身としては、ぜひありつきたいと思つてしまつ。

「……じゃ、じゃあ、ちょっとだけ、お邪魔します」

逡巡した後は結局誘惑に負けて、あたしは射場さんの隣に腰を下ろしたのだった。

そんな風に、どうなる事かと危惧しながら始まつたお昼は、しかし意外と平穏に過ぎ去つた。

更木隊長とお昼なんて、苛々して駄田なんじやないかと思つたけど、隊長はほとんど口を利かずにお酒を飲んでただけ。

「」飯を次々食べながら、終始途切れる事なく話をしていたのはやちる副隊長くらいで、弓親も射場さんもそう騒ぐタイプではないし、一角も口を挟まなかつたので、予想外に落ち着いた観梅の集いとなつた。

「……それじゃ、そろそろ失礼しますね」

何事も起きなかつたのにほつとして、あたしは食後のお茶を飲み干すと、それを潮に立ち上がつた。

「ええー、もういつちゃうの、ゆつきー！」

「」いちに背を向けてごろん、と横になつた更木隊長に寄りかかつていたやちる副隊長が、甲高い不満の声を上げる。うつ……そりや出来ることならあたしだつて、やちる副隊長と穂やかな午後を過ごしたいけど……

「駄田だよ、副隊長。雷音ちりんは忙しいんだから」

「そうじゃ、わがままをいつちりあいけんよ」

後ろ髪引かれて足をすくませるあたしを見かねてか、弓親と射場さんが口ぞえしてくれる。でもやちる副隊長はふーっと顔を膨らませて、

「えー やだやだ、ゆつきーと一緒に遊びたーい！」

「わつ、危ないつ！」

ぽーんと跳んで突っ込んできたので、あたしは慌てて受けとめた。
からうの隊長は「一、二、三、ゲ、ゲ、ゲ、

「あー、またおまわり」としおりよ、あれ楽しかった！ あたし

が剣ちやんで、ゆつせーはあたしで、ざしざしたおすのーー」

それどんな遊びしてたの？

子供の遊びこじて、モテルこなつてゐる人とか、ちよつと笑えな

レ 1

でも、やちる副隊長、おれはけんぱちだー、そこきょりのしにが
みだー、とか言いながら刀振り回して、かなり楽しそうだったなあ。
ちなみにあたしが、やちる副隊長の肩に手を乗せて、背中に乗っか
るふりしてました。

「\?！」

あたしが弓親に説明していたら、やかの副隊長がとんでもない事を言い出した。

あたしのままなの！」

「まあ、一と劍ちゃんとあたしで、おまわりとするの、」んじは、
ぱぱまわいこがいいな。剣ちゃんがあたしのぱぱで、ゆつきーが
あたしのままなの！」

「な……な、なななな何言つてるんですか、やむる副隊長！　お
まま」とはともかく、何でその配役？！　いくら何でもその夫婦、
おかしいから！　ありえないから！」

恐ろしい想像力から発したやちる副隊長の言葉に、あたしはつい焦つて大声を出してしまつた。すると、

「……………」

寝ていたはずの更木隊長が起き上がつて、じりりとこしあわせにらみつけてくる。うわ、人相悪。普通の子供なら、一発で泣くわ。だけどやうる副隊長は、勿論慣れてるんだろうつ、むしろ嬉しそうに笑つ

て、

「剣ちゃん、これからぬつせーと一緒に遊びついねー」

弾んだ声で呼びかけてしまひ。『」せー』せーと首を鳴らして、更木隊長は胡座をかいだ足に右肘をついた。馬鹿か、とか一言のもとに却下するか、と思こきや、

「そのままじや、雪音が俺の女の役をするのか

「は、はあつ?!

せらつとまたあり得ない事を言つたので、あたしは素つ頗狂な悲鳴をあげてしまった。

「いやいやいやいや、そんな身がもたなさそな役、絶対『』めんです! 断固拒否します!」

「まあ、一度見てみたくはなるね、そのおままじ」と

「ある意味、おもろい家族になりそうじやの」

「そこ」、他人事だと思つて無責任なこと言わない!

適当な事をいつ『親と射場さんにビシッ、と突つ込みを入れるたし。しかし、やちる副隊長がよじよじと上にのぼってきて、

「ええー、ゆつきーまま嫌? やりたくない?』

息がかかるほど間近であたしの顔を覗き込んだから、あたしはつい口『』もつてしまつた。うひ、ちょっとこれは反則だ、やちる副隊長可愛すぎきて、断りの言葉が引っ込んでしまひ。

「え、ええつと、ですね……」

それでも何とか抵抗しようと、も『』も『』してたら、不意にぐい、とやちる副隊長が後ろに退けた。

「え?」

「う?」

あたしとやちる副隊長、一人の声がかぶる。二つの間に近づいてきたのが、一角がやちる副隊長の襟首をつかんで、猫の子みたいにぶらん、と手にぶらさげていた。眉間にしわを寄せたその顔には、くつきりと不機嫌の色が浮かんでいて、思わずぞきりとする。一瞬間を置いてから事態に気づいたやちる副隊長が、

「いやー、離せハゲピカー！…」

やたらめつたら手足を振り回して暴れ出したけど、一角はまるで意に介さず、

「いい加減にしろよ、ビチビ。」いつが帰るって言つてんだ、いつまでも駄々こねてんじゃねえ」

低い声でそういうた後、あたしにしつ、しつ、と手を振る。

「ほら、行けよ。仕事あんだろ」

「あ……う、うん。有難う」

そつけない素振りに虚を衝かれて、あたしはぎこちなくお礼を言つた。

「そ、それじゃ、失礼します。」馳走様でした！

ペコッと頭を下げて、そそくさとその場を辞す。

びっくり、した。

並木道を一人歩きつつ、あたしはほつゝとため息をもらした。
やちる副隊長が、更木隊長と一緒におままでことをしよう、なんて
言い出したのも大概驚いたけど、あそこで一角が手助けしてくれる
なんて、思いもしなかった。あの怒り顔を思い返すと、訳もなく居
たたまれない気持ちになつてしまつ。

年末の飲み会以来、一角とは特に何も無かつた。だけど会うたび
に、あの何か言いたげな強い眼差しを向けられるから、あたしはま
た少し、一角を避けてる。

一角が嫌いなわけじゃない。だけど、気詰まりだ。一角とはあく
までも友達でなきやいけないのに、側にいるといつもとしたことで
気が動転してしまう。それじゃ、駄目なのに。

「何でよ、もう、一角の、あほ」

歩きながら、ぽろ、と独り言が口からこぼれる。ほとんど無意識
のうちに発していたその言葉に、

「人をあほ呼ばわりすんな」

まさか、返事があるなんて思わなかつた。

「?！」

ぎょっとして顔を上げると、青々とした葉を茂らせた並木道の中、
一角が幹に寄りかかって立つていた。

「え……え、え？　な、何してんの、一角。何で、こんなところに

あたしが後にしてきた花見の席に、当然残つてるものと思つてい
たのに、何で道の先にいるんだろう。一角は驚いて立ち止まつたあ
たしを見、幹から体を離して、ずんずん近寄つてきた。たじろぐあ
たしの前までやってきて、

「話があるから、先回りした

きつぱり、言い切る。

「は……なし？」

何の事だろう。ただ鸚鵡返しをするあたしに、一角は田を細めた。ためらうように視線をさまよわせ、ぼり、と頭をかいだ後、ふーっと息を吐き出す。そしてようやく目線をあたしに戻して、一角は言った。

「お前が俺の事を今どう思つてんのか、知りてえ」

「えつ」

ぞきつとして体が震えた。

どう、思つてるか、なんて、そんな事。息を飲んで凝視していたら、一角の瞳にまた、あの鋭い光が浮かぶ。

「ここのお前見ると、俺は、……勘違いしそうになんだよふ、と手が自然に伸びて、反射的に身をひこうとしたあたしの両腕をゆるく掴んだ。

「つ……」

「なあ、教えるよ。俺はお前にとつてまだ、『友達』か？」

「そ、れは」

そうだ、と一言肯定すればいい。それでこの話は終わる。そう思つたけれど、声が出てこなかつた。その言葉が、きつと一角をまた傷つけると思つたら、口にする事が出来なかつた。

「……雪音」

「！」

凍りついたあたしを、一角はぐい、と引っ張つた。前に引かれたあたしは一角の胸にどん、とぶつかつて、そのまま腕の中に閉じ込められてしまつ。

「い、一角つ……」

声を上げると、一角の腕に力がこもる。逃げられないほどじやない、だけど心が締め付けられるような、強さ。

ど、と大きな鼓動の音を立てたのが、あたしか一角か、分からない。筋肉の引き締まつた胸にしつかりと抱きしめられて、全身火に包まれたように、かあつと熱くなる。

雪音

一角の低い声があたしの名を呼ぶ、それだけでくらりとめまいがして、鼓動が激しくなつていく。多分真っ赤になつてゐるだろう顔を見られたくない、必死に俯いたけど、一角はあたしの顎に手をかけて、くい、と持ち上げた。

— あ —

すぐ間近、さつきのやむる副隊長と同じくらい近くに、一角の顔がある。やちる副隊長の時は、可愛くて可愛くて抱きしめたくなつたけど、今は、息が詰まりそうなくらい、どきどきしてしまつ。一角の口から漏れる吐息が、顔に触れた。顎を捕らえる指に微かに力がこもつて、一角の目が細まる。

まずい。このままじや、キスされる。逃げなきや。この手を振り
払つて逃げなきや。頭の中を駆け巡るその思いとは裏腹に、体は微
動だにしない。

卷之三

「……だ、駄目……」

あたしは弱々しい制止をしながら、つい、目を閉じてしまつた。

ああ、もう駄目だ。唇に一角が触れる。

六

……心の迷ひたとき、

不意に少女の声が響き渡って、エリック、と何だかやたら重だけな衝突音が響いた。

「え？！」

びっくりして目を開くと、今まで眼前にあつた一角の顔がのけぞ

り、その上に足が乗っている。それを見上げて、あたしはあんぐり口を開いてしまった。

一角の上に乗つたやぢる副隊長は、その

一角の上は乗ったやつは、福原は、その場でとかとかとかとかと足踏みをした。一角は顔を何度も足蹴にされた衝撃で、そのまま後ろにばたーん、と倒れてしまう。

「わ、わわつ！」

一角の頭が地面につくより前に、その顔を蹴って跳んだやぢる副隊長が、じつちの肩に乗つかつてきたので、あたしはよろめいてしまつた。

「や、やぢる副隊長、な、何ですかこれ……」

事態が理解できなくて尋ねると、やぢる副隊長はあたしの背中にささり、得意げに言った。

「いやんかは、わーにいたすひでたから
せいにいしたの！」

ひく、と顔をひきつらせる。と、

地面に倒れ伏して、一瞬が、足跡を一歩つかひながら顔を上げ、

スのきいた低い声で唸つた。

今いいところだつたのに、邪魔してんじやねえ！」

「うふせえ、然ひ、つぶつぶふうぶ

「べーだ、できるもんならやつてみなー、だよ。パチンコ玉になん

かつかもならないもんっ

「あつこら、待ちやがれ！」

べーっと舌を出したやちる副隊長は、木に飛び乗ると、枝から枝へすゞい勢いで移動し始めた。額に青筋を浮かべた一角は刀を抜き放ち、怒氣をまとつてその後を追う。

「……」

取り残されたあたしは、呆然と一人を見送った。一角の罵声と、やちる副隊長の挑発が聞こえないほどに遠くなつた頃、ようやく我に返つて、

「あ……」

いつの間にか唇に指をあてていた事に気がつき、ぼ、と音が出そうなくらい赤くなつた。

後少し、もしあそこでやちる副隊長の飛び入りが無かつたら、あたしは、確実に、……一角とキスしてた。

（や、だ。駄目、なのに）

顔が、熱い。自分を抱きしめるように手を回したら、一角の太い腕の感触が蘇つて、身体も熱くなる。

（だ……だ、め）

ぎゅ、と目を閉じて、胸の中にわき上がりつつある思いに、必死で抗つた。

認めない。この気持ちを認めるわけには、いかない。認めたら、あたしは、あたしは……！

「つ……」

身を焦がすような思いは、冷たい恐怖に蝕まれていく。

あたしは瞳を開いて、唇をかみしめる。暖かな日差しが降り注ぐ中、指先が氷のように冷え、腕にしつく食い込んだ。

「あ
「お

廊下の角を曲がつたら、雪音と鉢合わせた。

「お……おお」

「う……うん」

顔を見合わせて、お互に、意味のない言葉を交わし合ひ。俺は何を言つていいか分からなくて、それ以上声を出せなかつたし、雪音も視線を下げて、無言で立ちつくした。

前までなら、そのそぶりを見て、まだ俺の事避けてるのかと思つただろう。だが、今は違つ。俯いた雪音の顔が少し赤らんでるのだつて、ちやんと見えてる。

(雪音……)

顔を見たら、つい唇に目が引き寄せられた。

この間、あのチビの邪魔がなけりや、本当に後もつ少しで触れるところだつた脣。

あの時、嫌なら振り払えるくらいの余裕は残したのに、雪音は逃げなかつた。どころか目を閉じて、受け入れるそぶりさえ見せた。

(つてことは、あれだよな。雪音はもう俺の事、ダチじゃなくて、ちやんと男だと思つてんだよな。むしろ好きなんだよな?)

そう思つたら、俺は途端に顔が緩みそうになつた。やべ、今すぐ一間抜け面してやるぞ俺。

「あー……雪音、これから昼飯、食いにいかねえか? その。……

一人で」

口の辺りを手で隠しながら、とりあえず誘つてみる。

「えつ」

雪音はぱつと顔を上げた。が、俺と視線を合わせた途端、きよときよと落ち着きなく目をさまよわせた。

「あの……えつと」

言いたい事は何でもいいことが、こんな風にロリもるなんて、らしくねえ。つーか、眉をハの字にして困った顔は赤らんでいるせいで、嫌がつてるとこつよつ、照れてるよつに見える。俺の希望かもしけねえけど。とにかく、もう一押しすればいけそつな感じだ。

「……行こうぜ」

「あつ」

だから俺は強引に腕を掴んで、軽く引っ張つて、歩き出す。雪音は一瞬足をもつらせたが、そのまま大人しくついてきた。ちひつと振り返つたら、まだ困惑した表情のままだ。

でも……嫌じや、ねえんだよな？ その証拠に、草履を履く時に手を離しても、隊舎を出て店に向かいつよつになつても、素直についてきてんだから。

「時真で、いいよな。近えし」

「つ……ん」

「……」

（いけるか。いける、よな？）

俺は首の後ろをぱりぱりかいた後、思い切つてその手をそのまま、雪音の肩に回した。

「ー」

ぐつと肩を抱いて引き寄せると、雪音がびくつと震えて、身体を強ばらせた。目だけ動かして見下ろしたら、雪音は柔らかそうな頬をぱあつと赤らめて、恥じらつよつまつげを伏せた。それを見て、俺の顔も熱くなる。

（うわやばこつてお前、何だその顔、すっげー可愛いんだけど）

何だよ、普段あんだけ口つるせえくせに、どうしてこんな初々しい反応すんだよ、意識しちまつじやねえか、つーかこの間の続きしてえだらうが。

「雪音」

「ひやつ……ちょ、つと、近い……」

ぴた、と足を止めて前に回り込むと、赤面した雪音は顔を背けた。その顎を掴んでこっちを向かせて、

「……いい、よな?」

「……つ」

目をのぞき込んで問うと、雪音は更に赤くなつて縮こまつた。口が微かに開いて何か言おうとしたが、声が出ないのか、何も言葉にならない。

(よし、これならいける!)

心の中でガツツポーズしながら、ぐ、と顔を近づけよつとした……時、

「あ、一角さん! けよひど良かつた、聞いて下さこよ!」

「うおつ!」

背後からでけえ声がかかつて、俺はがくつとけた。がしがし足音をたてて近づいてきたのは、恋次の奴だ。

「へへつ、俺、六番隊にいく事になつ……恋次イヽヽヽヽ……」

「……」「おわつ? !」

振り返つた俺を見て、へらへら笑つていた恋次が顔を引きつらせて後ずさつた。どいつもこいつも、何でいつも良いといふで邪魔しごきやがるんだ!

「な、なんすか、俺なんかしましたか?」

その通りだ馬鹿野郎! と怒鳴りつけよつとしたら、雪音がするつと俺から離れて、恋次のほうへ駆け寄つた。

「いやつ、阿散井君、何でもないわよつ!」

「あ、あれ、居たんすか、雪音さん」

俺の影になつて見えなかつたのか、恋次は雪音を見下ろす。雪音はぱたぱた、とせわしなく手を振つた。

「う、うん、居たの。えつと、何? さつき六番隊がびつつて言つてなかつた?」

「え、ああ。あの俺、今度の異動で六番隊に行く事になつたんス。

正式な任官はまだなんすけど……なんか、副隊長とかで

「えつ……副隊長？！ うわ、大出世じやない、すごい！ 良かつ

たね、おめでとつ…」

「あ、有り難うござりますフ」

「いつも頑張つてたもんね、阿散井君。 そうだ、これからおじつてあげようか」

「ああ？！」

雪音が妙な事を言い出したので、俺は思わず苛立ちの声をあげてしまつた。 ちょっと待て、俺あたつき『一人で』つて言つただろうが！

「え、それは……ええと、それは……その」

俺の思いつきり不機嫌な顔を見たせいか、恋次が顔を引きつらせる。 だが、俺に背を向けた雪音はそんな事に気づいてないのか、恋次の腕に触つて……つて、何だよその妙に親しげな態度は…

「時貞行くところだつたの。 お魚大丈夫だよね、阿散井君」

「え、ええ、まあそれは……。 ……あの、一角さんと一緒に、なんですかね？」

どす黒い殺氣を放つ俺が気になるのか、若干青ざめた恋次が俺と雪音を見比べる。 雪音はちらりと俺を見て、何とも言えない表情をしてから、

「うん、そう。 ……行こうよ、一角。 後輩の栄進なんだから、お祝いしなきや」

普段通りの声を装つて俺に声をかけてくる。

「……おう

俺は心中で不満の声を盛大に上げながら、それでも渋々、喉の奥から同意のうなり声を漏らした。

「……ああつ、わっかんねえな、畜生」

どつ、と勢いよく道場の床に座り、手ぬぐいで汗をぬぐいながら唸ると、

「どうしたの、一角」

書類を手にした弓親が入ってきて、声をかけてきた。俺にぶつたおされて、救護室へ運ばれていく隊員どもを横目に見て、

「何か今日はいやに荒れてるね。嫌な事でもあつた?」

少し距離を置いた場所に座る（汗くせえから近くは嫌だとか思つてやがるな、こいつ）。どうもこつも、と俺は木刀で苛々と床を叩きながら、脛の一件を弓親に話した。

「ふーん……それで? 何が気にくわないのさ?」

「ああ? ンなもん決まつてんだろ、雪音だよ。あいつ絶対俺に惚れてんのに、何で他の奴に愛想ふりまきやがるんだ?」

「愛想ふりまくつて、恋次相手でしょ? 雪音ちゃんは元々、恋次の事を結構可愛がつてたじやないか?」

「だからつてよ! 一度もちゅーしかけた俺の前で、なれなれしく男の腕さわつたりするか?!!」

「するんじゃないの、別に。……うわ、その顔不細工だよ、一角」
ほつとけ、くそつ。惚れた女が他の男にべたつくな、黙つて見過げさせるか。

「……まあ、前後の関係から考えてみたらあれかな。雪音ちゃん、照れてたんじやないの?」

むすつとして黙り込んだ俺を宥めるよつて、弓親は言つ。

「一角の話聞いてると、雪音ちゃん、結構シャイみたいだからさ。キスしかけたところに恋次が来たから、恥ずかしくて、一角から敢えて離れたんじゃないのかな」

「……どうしてもよ、恋次まで飯に誘う事ねえだろ」

結局あの後、三人で食う羽目になつて、俺は心底がつかりしたんだぞ。つーか、多分怒り丸出しだつたろつな、恋次の奴、飯が喉を通らないつて面で食つてたから。

「うーん」

弓親は首を傾げ、顎に手を当てて考え込んだ。

「……もしかして雪音ちゃん、段階踏んで付き合いたいと思つてゐる

んじやないの？」

「あ？ 段階？」

「うん。ほり、一角と雪音ひやさりで、付き合こましょひつて皆田して、始まつたわけじやないだろ。一疋飛びで」

「……まあな」

最初は友達、次は俺があいつを押し倒して、ぎくしゃくしちまつたからな。

「だから一度リセットして、今度は一からやり直そうって思つてゐんじやないかな。今日のも、いきなりキスされそうになつたから警戒して、間に恋次を入れたとかさ、ありそつうだと思ひたが」

「今更、警戒なんてする必要ねえだろ。何だよ、一からやり直すつて」

「がつこでキスするのは、まだ早いこと

「何でだよ、あいつだつて嫌とは……」

「言つてないかもしれないけど、良いとも言つてないんだろ？」

「ぐつ……」

それは、確かに。今日だつて言葉に詰まつて、固まつてたしな。「雪音ひやさん、あれで真面目だから。いくら好きでも、そういうところは、きちんとしたいんじやないの。だから、一角も雪音ひやさんと付き合こたいなら、もう少し相手に会わせてみたら」

「……何すりやいいんだよ」

あいつに会わせてつて言つたつて、雪音が何してえかなんて、わからねえ。困惑して尋ねると、『親は髪をさらりとかきあげて、そんなん自分で考えなよ。ま、たまには健全なデートから始めるつてのも、いいんじやないかな』

すつと立ち上がつた。

「おい、『親……』

「ああそつだ、忘れるといつた。この書類、字間違つてゐるから、提出し直して。今日の定時までだよ」

『親は俺が呼びかけるのを無視して、ずい、といひの鼻先に、

持っていた書類を差し出してくる。げつ、何かすげー赤入ってるや、これ。

「何だよ、どうせチェックするなら、お前が直して出しゃいいだろ。いつもそうしてんだし」「駄目。いい加減書類の書き方くらい覚えてもらわないと、僕の負担がちつとも減らないんだよ。それに、仕事も女も、手を抜くところがちつともならないよ」

「うつ……」

そんな風に言われたら、ぐつぐつの音も出ねえ。

「じゃ、宣しく」

「親はひらひら手を振つて、すたすた道場を出て行つた。書類を両手で持つた俺は、

「……ちつ、しじうがねえな」

深々とため息をつくと、腰を上げる。

「親の指摘はいつも目的を射て、逆らいたい。特に雪音の事に関しては、第三者の視点で為になる意見を相当聞かせてもらつてゐる。あいつが、段階を踏んで行けといつたら、それは間違いじゃねえんだろう。

なら面倒くせえけど、もう一度と雪音を傷つけないと約束したのもあるし、ここは慎重にいくか。しつかし……

「健全な、でえとねえ……」

何だよ、健全なってのは。何すりやいいんだかわかりやしねえ。居酒屋行くってのは駄目なのか？

「……はい、地獄蝶の返却、承りました。現世任務、お疲れ様でした。斑目三席」

恋次に似た刺青を額に入れた（流行つてんのか？ あれ）六番隊の奴が、俺の周囲を飛んでいた地獄蝶を紐につなぐ。おう、と應えて手を振り、俺は部屋の出口に足を向けた。

現世での任務を終えた後はいつも、良い酒か良い女が欲しくなる。前までなら、遊郭に行けばそのどちらも事足りたが、今は無性に雪音の顔が見たかった。一週間の短期駐在でも、あいつの顔が見られないのは落ち着かなかつた。

（とりあえず、飯誘つてみるか。そのまま夜まで一緒にいられりや御の字だが、そうはいかねえんだうなあ）

健全な付き合いをしろと引親に忠告された事だし、そこは自重しなきやな、と顎を撫でたところで、何かが視界の隅にひつかかる。何気なくそちらへ視線を向け、俺はあ、と動きを止めた。俺が出てきたばかりの六番隊隊舎に入つていく女、背中しか見えなかつたが、頭にあの簪をつけてる女なんて、一人しかいねえ。雪音だ。（ちょうど良いじやねえか。もしかして俺が帰つてくるの、待つてたか？）

まさかそんな都合のいい事、と思いながら、俺は踵を返した。再び隊舎の敷居をまたいで入ると、部屋から出てきたさつきの六番隊員が、訝しげに俺を見た。

「あれ？ 何かお忘れ物ですか？」

「いや、……ん？」

辺りを見渡し、俺は眉をあげた。雪音が居ない。ついさっきここに入つたばかりなのに、姿が見えなかつた。おかしいな、見間違つて事あ無かつたと思うんだが。

「おい、さつき雪音……鑑原の奴が来なかつたか？」

念のため尋ねてみると、隊員はああ、と頷いて、反対側の戸口を指で示した。

「いらっしゃいましたよ。たつた今あつちの出口から、穿界門へ向かわれました」

「穿界門って、あいつ現世に行つたのか？」

珍しいこともあるもんだ。あいつは瀧靈廷のあちこちで忙しく仕事をしているが、俺の知る限りでは、現世に降りるような仕事はない。

つーかそもそも、四番隊は戦闘より治療がメインの隊だから、単独での現世出向任務なんて、ほとんど無いはずだ。

「何だ、救援にでも行つたのかよ」

虚退治やなんかで現世に降りた連中が、鬼道でも手に負えない怪我をした場合は、四番隊が後から出向く事もある。そう思つて聞いてみたが、隊員は首を振つた。

「いえ、仕事ではなくて、私的なことみたいですよ。鑑原五席、時々ですけど、ふらつと現世に出かける事があるんです。いつも同じ場所ですから、何か思い入れのあるところを訪ねているんじゃないですかね」

「へえ。思い入れ……ねえ」

呟いて、俺は天井を見上げた。雪音が現世にそれほどこだわってるなんて、これまで聞いた事が無い。一人でこつそり出向くくらいだ、よつほど気に入つてるところなんだろ？

……そうと知りや、気になるな。

「おい、地獄蝶をもう一回貸せ」

「え？ でも一度返却されましたし、貸し申請をあらかじめして頂かないと……」

隊員がきょとん、と田を瞬かせて呟つのがじれつたくて、俺は奴の胸倉をつかんで引き寄せ、

「良いから貸せつて言つてんだよ、ぐだぐだつるせえー」

「ヒイツ？！」

カツと怒鳴りつけてやつた。

穿界門をくぐつた先は、森の中だった。鬱蒼と生い茂る木々の合間から、白っぽい陽光がちらちらと瞬き、風が吹き抜けて葉擦れの涼やかな音を立てる。遠くで鳴く鳥の声は暢気なほど明るくて、人のいる気配は微塵も感じられなかつた。

「色氣のねえところに来てんだな、あいつ」

澄んだ靈子は気持ちいいが、若い女ならもつと賑やかなところに遊びにいきやいいものを。松本なら絶対、町に繰り出して大騒ぎするぞ。そう思いながら、田を閉じて雪音の靈圧を探す。

人間が居ない分、あいつの低い靈圧でも探しやすくて、すぐに見当がつく。

「じつちか」

俺は獸道に足を踏み入れ、歩き出した。多分雪音も同じ道を辿つたんだろう、ほんの微かだが、あいつの靈圧の欠片が残つているのが感じられる。

途中、狸に出くわした他はこれという事もなく、しばらく歩を進めていると、前方にきらきら光るものが見えてきた。森はそこで一度途切れている。戦闘の時の癖で、広い場所に入る手前で足を止めた俺は、木の影から前をすかして、へえ、と呟いた。

そこにあつたのは、湖だつた。

かなりでかい湖で、鏡のように澄み切つた湖面には空の色を青々と映し出し、向こう岸は若干霞がかかつて見える。

そつち側にもまた木々が生い茂つているらしいが、奥に行くほどなだらかな坂になつていて、それを田で追つしていくと、森の背後には山がそびえていた。それほど高い山じやないが、上にいくほど急峻で、山の表面にはちらほらと山桜が咲いているのが見える。

雪音は、湖の前に居た。腰に珍しく斬魄刀を差していく、その周りを地獄蝶が、ひらひらとあてどもなく飛んでいるのが見える。

俺は何となく息を潜めて、しばらくの間眺めていたが、雪音は特に何をするわけでもなく、ただじっと眼前的風景を眺めているようだった。

（何してんだ？ あいつ）

風光明媚なといえば聞こえは良いが、いかにも鄙びた光景だ。目を楽しませるほどの絶景というわけでもなし、何をそんなに見入つてるのだろう。

不思議に思いながら、俺は無意識に足を横に動かした。と、草鞋の下にあつた枝がぱきん、と乾いた音を立てて折れる。

（あ）

さほど大きな音じゃなかつたが、静まり返つた森の中じゃ、十分響く。しまつたと思つた時には、雪音がこいつちを振り向き、

「……い、一角？！」

心底驚いた様子で目を丸くした。

「あー……よ、よお」

まずつた、見つかった。今更逃げるわけにもいかず、俺は仕方なく茂みを踏み越えた。ずかずか近づいていくと、雪音は最近お決まりの、少し困ったような顔で向き直る。

「ど、どうしたの。こんなところに、居るなんて。任務でも、あつた？」

「いや……」

一瞬誤魔化そうかと思ったが、そんな事をしても意味が無いばかりか、雪音を警戒させかねないと考え直し、俺は額をかいた。

「現世の駐在任務から戻つた時、お前が六番隊に来たのを見たからよ。現世に行くなんて珍しいと思つて、つい追つて来ちました」

「つー、って……それだけで、わざわざ後ついてきたの？」

雪音は田を瞬き、それからぽつと赤くなつた。俺の視線から逃れるように、慌ててそっぽを向いたが、手が死霸装の袴をつまんで、もじもじしている。

……ああくそ、何でそういう反応しやがるんだお前は、それは俺

が追っかけてきて嬉しいって事かよ畜生、いい加減にしねえと本氣で押し倒すぞ、今度は逃げ無しで。

「あー、なんだ、いいといろだな、こいは。お前、良く来るんだつて？」

照れる雪音があんまりにも可愛くて、自制が利かなくなりそうになつたので、俺もあさつての方向に無理やり顔を向けた。それでもちらつと田線をやると、雪音は赤くなつた顔を手で覆いながら、うん、と頷き、

「……ここに来ると、何だか落ち着くの。綺麗だし、静かだし、人も来ないし」

再び湖に目を轉じた。途端に表情が和らぎ、口元にふわ、と笑みが浮かぶ。……驚いた。こいつがこんなに穏やかな顔してるのを見るのは、初めてだ。

「……何か、良い思い出もあるのか？」

気になつてつい尋ねたら、雪音はもう一度頷き、はにかんだ。うわ、だからよせつてそういう顔、やばいから。赤面して焦る俺に気づかず、雪音は湖に向かつてよいしょ、としゃがむ。斬魄刀の鞘がガチャリ、と鳴つた。

「こ、烈様に初めて、現世へ連れてきもらつた場所なの」「卯ノ花、隊長に？」

「そう」

手で周囲を漠然と示して、

「今はもう残つてないけど、こいは冬になると、雪が積もつてすぐ綺麗なのよ。あたし、自分の名前に雪つてついてるけど、見たことなくて」

「まあ……そりやそりやうな。現世ならともかく、ソウル・ソサエティで天氣が悪くなる事あ、そう無いしな。雪を見られるとすりや、十番隊の……あー、何つたか、今度隊長になつた、あの」

「日番谷君？」

「ああそりやう。あのガキが斬魄刀解放するくらいでしか、見られ

ねえだろ」

「……ふつ」

「あん？ 何笑ってんだよ」

「だつて、雪見たいから解放してなんて言つたら、さつと怒るわよ、田番谷君。俺の斬魄刀は見世物じやねえ、とか何とか言つて」

「いいじやねえか、減るもんじやなし」

「そういう問題じやないでしょ、もう」

俺の前では久しぶりに、くすくすと楽しそうに笑つて、雪面は湖に向けて腕を伸ばした。

指先をぬらしてみて気に入つたのか、袖をおわえ、水の感触を楽しむように湖面に手を滑らせる。

きらきらと輝く水面の光を受けて、細く白い手が輝いて見えて、思わずじきつとしてしまつ。

（あーくせ、あの腕にちゅーしてえ）

汚れのない雪面に、足跡を残したくなる心境と似てるかもしねない。真っ白な肌に赤い跡を山ほどつけてやりたい。そんな事を思い、思つた自分に思わずため息を吐く。

本当にやばいな俺、雪音を見ると、といつ構わず盛つちまつ。女は昔からそれなりに好きだったが、ここまで節操なじやあなかつたよな、本気で惚れるつてのはこつにう事か。理性も糞もあつたもんじやねえ。つーかマジでやばいだろ、こんな調子じや俺、いつまで耐えられるんだ。

「…………」雪景色を見て、初めて自分の名前が好きになつたの、あたし」

自分の衝動を抑えようと深呼吸する俺とは逆に、雪面は至極落ち着いた顔で話を続ける。

「烈様に教えてもらつまで、名前に意味なんて何も無いと思つてた。誰がつけたのかもしれない、無意味な記号でしかなかつた。だから、

…………

「だから、何だよ」

不意に言葉が途切れたので促すと、雪音は手の水を払い、膝頭に顔を伏せた。上から見えるその表情は、どこか物思わしげだった。

「……うん、だからね、こここの名前を貰ったの」

「あん?」

意味が分からぬ。つい、つつけんどんに声を上げたら、雪音は棒を拾つた。鏡原、と地面に書く。

「こここの地名、鏡原つていうのよ。ここの字でかんばらつて読ませるんだけど、昔は鏡原つて言つ名前だつたんだって」

原の上、鏡の横に、鑑を書き足す。

「あたし、こここの名前を貰う時にどっちにしようか迷つて、姓名判断してみたら、鑑のほうが良かつたから、この名前を苗字につけたんだ」

「じゃあお前、昔は名前違つたのか?」

「烈様が卯ノ花家に養子で迎えて下さつたから、卯ノ花雪音つて言つてたわよ。だけど、色々知るつけこ、その名前が重くなつてきちゃつて」

卯ノ花、と書いて、雪音は膝の上に頬杖をついた。短く息を漏らす。

「烈様は気にしないでいいと言つて下さつたけど、あたしは元々貴族じゃないから、分不相応な名前だつたのよ。

それに、いつまでも烈様のご好意に甘えていられないと思つたから、自立の意味もあつて、鏡原雪音に改名したの」

「……へえ」

「こいつの苗字にそんな由来があるとは、知らなかつた。名前につけんぐらいなら、よつぼどこの場所が、気に入つたんだな」

何気なく言つと、雪音は頬杖を外して、俺を見上げた。そして湖に視線を戻し、ふ、と優しく笑う。

「……うん。ここは、特別なの」

「……」

俺はその顔を見て、さつきとは違う意味で、じきりとした。

昔を懐かしむような、慈しむような笑み。

ここじやないどこか、遠い、遠い場所を見つめるような瞳。

それは俺が今まで見てきた雪音の表情の中では、もつとも無防備で、もつとも近寄りがたいものだった。その顔は言葉よりも雄弁に、雪音の気持ちを物語つていた。

「……」

俺はざ、と地面を蹴つて背を向けた。唐突な動きに驚いたのか、

「え、一角？」

雪音が素つ頓狂な声をかけてくる。立ち上がる気配を感じて、俺は背を向けたまま、手を振った。

「そこいらうひつこてくるから、帰る時に声かける」

素つ気なく言い捨てて、足早に森のふちに入つた時、有り難うという言葉が聞こえたような気がした。

俺はそれには応えず、茂みをかきわけ、張り出した木の枝を払い、道なき道を歩いて、湖から遠ざかる。

特別。この場所は、雪音にとって、本当に特別なところなんだろう。

忙しい仕事の合間、時々一人でやつてきて、ぼうっと見つめているだけで、穏やかな気持ちになれる、そういう特別。

あんな雪音を、俺は知らなかつた。俺の知らない雪音がまだ居るのが悔しくて、全部自分のものにしたくて、歯がゆい気持ちになる。だが、思い出に浸るのを邪魔するような野暮はしたくなえ。あいつが一人でいたいってんなら、そうしてやるさ。てめえがそうしたいからつて、遠慮もなしにずかずか相手の懷に踏み込んでいけるほど、俺もガキじやねえし。

俺は腕を上げてぐつと伸びをし、頭上に覆いかぶさる木々を見上げた。

日の光を透かした葉は青々と輝きながら揺らめき、息を吸い込めば草いきれの匂いが、胸いっぱいに広がる。

「……良いところじやねえか」

ついぽろつと呟いてから、俺は苦笑した。あいつの特別な場所だからって、さっきより景色が綺麗に見えてくるなんて、俺も大概單純だな。

一角は急に背を向けて、森の中へ姿を消してしまった。

唐突な退場は、多分あたしに気を遣つてくれた為だろ?と思つたから、「有難う」と言つたけれど、聞こえたかどうかは分からない。草を踏み分けるがさがさといつ音にしばらく耳を澄ましていただけれど、やがて周囲は静寂に戻つた。

「…………」

あたしは棒で地面を削りながら、再びぼうつと考え事に没する。陽光を受けて輝く湖は、空の青と森の緑と山の稜線を見事に映し出して、それは綺麗だつたけれど、今あたしが見ているのは、烈様の凛々しく、そして少し悲しげな顔だけだった。

* * *

『…………では、もう決めたのですね』

前に置いた死霸装を見つめていた烈様が、いつも落ち着いた声で、尋ねてくる。ぐつと顎を引いたあたしは、

『幼き頃から今まで、烈様には大変お世話になり、言葉に恩くせぬほど感謝しております。護廷十三隊の死神となつた今、やつとその御恩に報いる事が出来るようになりました。

本日より私は、卯ノ花家より籍を抜き、新たに鑑原雪音と名乗り、烈様にお仕え致したく存じます』

そう言つて平伏した。烈様は細いため息を漏らす。

『あなたがそうと決めたのなら、仕方ありません。ですが、雪音』

『はい』

『例え卯ノ花家から離れても、あなたは私の子で、私はあなたの母です。それは終生、変わることの無い絆なのですよ。もし何か辛い事があれば、私の元へおいでなさい。私はいつでも、

あなたの味方ですかからね』

『烈様……』

顔を上げたら、烈様はにこり、と笑いかけてくれた。昔から変わらない、包み込むような優しさに満ちたその微笑はとても美しくて、あたしは胸が一杯になってしまった。

卯ノ花家から出て、一人で生きたいなんて我が儘を聞いて下さつただけでなく、傷ついたときの逃げ場所まで引き受けてくださるなんて。

『……有難う、『じぞい』ます』

あまりの嬉しさに、つつかえながらお礼を言つと、烈様は畳の上の死霸装を取り、にじり寄つてあたしの手に渡した。

『死神の職務は決して、生易しいものではありません。時に己の心が張り裂けそうなほど悲しみや苦しみに出会い、苦悩する事もあるでしょう。

ですが、あなたはきっとそれを乗り越えられる。あなたにはその強さがあると、私は信じています』

『烈、様？』

烈様は不意に表情を曇らせた。あたしの姿を焼き付けるように、長い事見つめ続けた後、烈様はぎゅ、とあたしの手を握りしめた。そして躊躇いを消した決意の表情で、告げる。

『一人の死神として立つあなたに、大切な事をお話しします。あなたはこれから先、今から私が語る事を心に刻み、その荷を負つていかねばなりません。

……例えそれが、どれだけ重い荷であつたとしても』

『何、……でしょ、か』

これほど真剣な、それでいて悲しげな烈様の顔は、見たことが無かつた。半ば怖気づき、聞きたくないと思いながら言葉を発したあたしに、烈様は真っ直ぐな視線を向けた。

『骸鴉。あなたが生まれ育つたあの街が何故、滅んでしまったのか

その、真相です』

* * *

ひしゃん、と水が跳ねる音で我に返る。はつと田を向けたけど、湖の上には波紋が広がっているだけで、魚や鳥の姿は見えなかつた。

「……は……あ」

あたしは緊張した身体の力を抜き、いつの間にか折れてしまった棒を、地面に落とした。

(骸鴉、……空骸)

名を思い浮かべるだけで、身体に寒気が走る。心の奥にしまいこんだ過去の記憶が引きずり出され、頭の中に赤い情景が次々と蘇る。仰向けに倒れた身体。闇に塗りつぶされた口。

落ち窪んだ眼窩。

空をむしりとくつとするかのように伸ばされた手。

それらが数え切れないほど折り重なつて、田の前一杯に広がる。

「……つ」

お腹からせりあがつてきた吐き気に、あたしは膝をついた。熱は喉まで駆け上つてきたけれど、

「ぐつ……」

辛うじて飲み下し、口の中に広がる酸っぱい味に顔をしかめる。あの時聞いた烈様の言葉は、一字一句違わず覚えている。いや、それ以前に身体が、あの街の有様を覚えている。

それは、あたしの業だ。

決して逃れらない、一生背負つていかなければならぬ業だ。

しばらく肩で息をついて落ち着かせた後、あたしは顔を上げた。どの季節に来ても、どこか懐かしい、不思議な暖かさで受け入れてくれるこの景色が、あたしは大好きだ。

でも今日、田の前に広がる光景は変わらず美しいままだったけれど、あたしの目には何故か色あせて見える。

（……あの時の事を、思い出したから？）

一角に話をして、思い出してしまうたせいだらうか。あたしは小さく首を振つて、頭の中を駆け巡る暗い情景を振り払おうとする。と、不意に場違いな電子音が鳴り響いた。

「？！」

驚いて懐の伝令神機を取り出すと、画面には虚の出現を知らせるメッセージが書かれていた。ぱつと表示が切り替わり、虚の居場所を示すアイコンが、地図上を移動し始める。

「こんなところに虚が出るなんて……っ」

あたしは鋭く舌打ちして伝令神機をしまい、そちらの方へ走り出した。森に飛び込み、走るところより飛ぶように先を急ぐと、横手から黒い影が飛び出してきて、あたしに並んだ。

「一角！」

一角はあたしをちらりと見、すぐに前方へ視線を戻した。その口元に苦笑いが浮かぶ。

「お前も指令受け取つたのかよ。つたぐ、上の連中は人遣い荒えなお前、非番だらうが

「しようがないでしょ。虚出現時は、直近の死神が対応する事になつてるんだから」

「かーつ、くそ真面目だな、お前は。こいつのはな、俺に任せてもきやいいんだよ」

と言つて、一角はぐんとスピードを上げた。

「う、うわ、さすが十一番隊、速い。あたしだつて全速力で走つてるので、一角が一步進むごとにどんどん距離が開いてしまう。

「一緒に来るつもりならとろとろすんなよ、雪音！」

「う、うるさい……」

息を切らして走りながら、あたしは離れていく一角の背中を追いかけた。広々としたその背中を見つめていたら、胸にすきり、と痛みがよぎる。

（もし、一角があの事を知つたら、どう思つだらう）

烈様があたしに告げたあの事を知つたら、一角はどんな田であったしを見るだろ？

恐れるだらうか、軽蔑するだらうか、それとも今みたいに、離れていいつてしまふだらうか。

「……つ」

それを想像したら、胸の痛みが激しくなつていぐ。あたしは唇をかみ締めて、下を向いた。想像するだけでこんなに苦しいのに、それが現実になつたらと思うと、恐ろしくて身体が震えてしまう。

言えない。とても言えない。言つたら、一角はきつと。

「ボケつとすんな、来るぞ、雪音ー。」

「！」

森を抜けたところで、一角の声が響く。反射的に顔を上げたら、向こうから咆哮をあげてやつてくる小山のような大きさの虚が視界に入ったので、あたしは慌てて鞘を拝つた。

けれど、構えるより早く、黒い影が虚の眼前にこつぜんと現れ、「ひゅうつー！」

一呼吸のうちに白銀の光が走つて、虚の仮面を断ち割つた。虚は悲痛な叫び声をあげて後ろに倒れ、地面が揺れる。悶え苦しみながら、虚の身体は雪のようにならぎ始めた。

「……」

それを見ながら、あたしはぽかん、と口を開いて硬直してしまつた。

何、これ。今何が起つたのか、全然見えなかつた。辛うじて分かつたのは、さつきの影が一角だつたつて事だけ。

身軽く地面に降り立つた一角は、刀を鞘に納めて、不機嫌そうに鼻を鳴らした。伝令神機を取り出し、

「ちつ、手ごたえねえな、あつさり終わつちまつた。追加給金もねえし、雑魚だつたな」

そしてあたしを振り返り、いきなり盛大に噴出す。

「お前、なんだその腑抜けた顔！ すっげー間抜け。俺様の戦いぶ

りに見とれてたのか？」

「うつ……」

悔しいけど、否定できない。間抜けな顔の左半分を手で隠して、あたしは言葉に詰まつた。

靈圧高いのは知つてたけど、一角がこんなに強いなんて、知らなかつた。全然動きが見えなかつたし、虚を切り伏せても息一つ乱れていない。まるで、自分とは全く違う生き物のようになれと思えるほど、一角は強かつた。

だけど、笑う一角の顔は、いつもと同じ、悪ガキみたいな顔だ。そして一角の背後に広がる空が、田にしみるほど青く、澄み渡つて見える。

ああ。空が、一角が綺麗だ。

(……つてえ！ 何それ！ おかしいよその感想！)

自分でツツコミを入れて、あたしは赤くなつてしまつた。

だつておかしい、さつきまで沈んでいた風景が、いつの間にかとても色鮮やかに見える。しかも、その中で一角がとても輝いていて、格好よく見えて、すつごくおかしい。

やだ、もう見ていられない。このままじやあたし、熱があがつて爆発するかも。

「か……帰ろ、一角！」

あたしは焦つて背中を向け、遅れてこちらへ飛んでくる地獄蝶のところへ、刀をしまいながら歩を進めた。でもその仕草が不自然だつたせいか、一角がずんずん近寄つてきて、

「何だよ、もう良いのか？ 雪音」

ぱつと顔を覗き込んできたので、あたしは咄嗟にその顔を押し戻してしまつた。

「ムゲッ！」

「い、い、いいの！ 帰るの！」

「おま、何すんだおい、今首の筋グキッていったぞ、いてえだらつ
が！」

「つ、ひぬせこー！ 急に近づかなこでよー。」

頭がぐるぐるして、胸がどきどきしてくるから、せんと近づく
な！

斯くて

刃は

振り下ろされた

* * *

その事を知ったのは、六番隊から四番隊に伝令が届いた時だつた。机に居座る書類の山から、その伝令を取り上げた雪音は、途端に顔をしかめてしまつた。

「隊舎牢の掃除い？ また下らない雑用を押しつけられて。こんなの断つて……あつ、伊江村三席もう了承印押してるし！

ああもう、こういう細かい仕事をほいほい快諾するから、他の隊になめられるんじゃないの、全く」

書類には、適當な人間を見繕つて掃除夫をやらせろといつような事が書いてあつたので、ぶつぶつ言いながら雪音はそれを脇に避けようとした。

が、ふと何かが意識の片隅にひつかつた。

「……？」

流し読みした書面を手元に戻し、もう一度、最後まで目を通す。

そして、音を立てて息を飲み込んだ。

* * *

「……失礼します！」

六の字が刻まれた扉をぐぐり、押しとどめよつとする隊員を振り切つて、雪音は隊長室へ足を踏み入れた。

「うわっ！ え、あ、雪音さん？」

押し開いた扉が、バーンと壁に衝突する音で、中にいた恋次がびくっと肩を跳ね上げる。

雪音は部屋を見回した。執務室にも、隣の来賓室にも、朽木隊長の気配はない。目的の人物が居ない事にいらつとして、恋次に詰め寄る。

「阿散井君、朽木隊長は？！」

「え、ええ？ 今はちょっと、出払つてますけど。どうしたんすか、血相変えて」

「血相変えてつて……」

何を悠長な事を。六番隊の副隊長にして、ルキアの幼馴染みたる彼がまさか、この事態を知らないなんて、あり得るだろうか。雪音は恋次の胸ぐらを掴んで、

「どうもこうもないでしょ、朽木さんが第一級重禍罪で極刑つて、どういう事！？ 何で朽木さんがそんな処罰受けなきやいけないの！」

声を大にして叫ぶ。と、恋次が顔を強ばらせ、立ちすくんだ。一瞬目が泳ぎ、しかしそうすぐ鋭い光を宿して雪音を見下ろす。続いて発した声は、硬く低い。

「……どうもこうも。そういう事です」

「そういう事つて、朽木さんが何かしたつて事？」

「あいつ。現世出向任務中、人間にテメエの力奪われちまつたんです」

「に、人間に？」

人間への死神能力の譲渡。それは確かに、ソウル・ソサエティで定められた規律の中でも大罪とされている。

もし死神がその力を容易く人間に与えられるようになってしまえば、現世と死後の世界とのバランスが大きく崩れてしまうからだ。発覚すれば、刑罰を逃れる事は出来ない。

「で、でも、もし無理やり力を奪われたようなら、情状酌量の余地が……」

抗弁する雪音に恋次は目を細めて、首を振った。眉間にしわが更に深くなる。

「ルキアはすっかり人間に同情しちまつて、悪いのは自分だと言い続けてるんです。

能力の譲渡が行われた経緯にしても、そこのいらの雑魚虚に人間共々やられそうになつて、仕方なくだつたとかで、あいつの靈圧レベルを考えれば、不自然な状況だった。

人間に肩入れして、テメエの力をほいほいくれてやつたなんて言つてるようじや、裁判官が納得してくれるわけがない」

「裁判官つて……じや、じやあもう、中央四十六室の裁定は下つた、つて事？」

中央四十六室。

それは四十人の賢者と、六人の裁判官で構成されるソウル・ソサエティ最高の司法機関であり、死神の罪に対する裁定は、絶対的な決定権を持つている。既にルキアの罪が中央四十六室で裁かれたというのであれば、その決定を覆す事は難しい。

「という事、は。これから一ヶ月の猶予期間が過ぎてしまえば、ルキアは極刑として。

……殺されて、しまう。

「……！」

冷たいものが頭から足下まで一気に走り抜ける。

雪音はもう一度、恋次の服を掴む手に力を込め、怒鳴つた。

「阿散井君、朽木さんの幼馴染みなんでしょう？ 今でもまだ、好きなんでしょう？ だったら、何で牢に閉じこめて刑の執行を待つてるのよ… どうして助けてあげないの…」

「……」

恋次は鋭く息を吸い込み、ぐつと顎に力を入れる。一瞬、何とも言い様のない悔しそうな顔をした後、恋次は雪音の手を乱暴に外して、後ろへ押しやつた。

「今更どうしようもない。あいつだって、覚悟は決めてます」

「朽木さんが覚悟を決めたら、もう死んじゃつても良いっていつの？」

思わず叫ぶと、恋次はきつと雪音を睨み付け、

「雪音さんには関係ないだろ！ 僕にどうじろつていうんだ！」

びりびり空気を震わすほどの怒声を上げた。

「！」

たたきつけられる怒りに圧倒され、雪音はびくつと身を縮ませる。大きく目を見開いて硬直したその姿に、恋次はハツと我に返った。

「あ……す、スンマセン、俺、そんなつもりじゃ……スンマセン…」

がば、と勢いよく頭を下げる。

「……うつと。」こちこちごめん。言い過ぎた

雪音は細く息を吐き出し、唇をかみ締めた。

そうだ、ルキアが罪人として裁かれる事に一番心を痛めてるのは、きっと恋次だ。自分は彼女と親しいわけではないし、関係ないというのは確かにその通りで、こんな風に恋次を責める謂れも無い。

だが……

「雪音さん、ルキアの事心配して、来てくれたんスよね。それなのに、本当に申し訳ないッス。その……正直言つて、俺もまだ、混乱してるところがあつて」

恋次は頭を上げて、困惑した表情で言つ。

「……もつ、本当に駄目なの？」

「……」

見上げて問いかけると、恋次が傷ついたような顔をした。しかしすぐ、それを隠すように、無理な笑みを浮かべて、

「いや、あいつの事だからきっと、執行前に派手に脱獄しますよ。意外と執念深いツスから大丈夫ですって。雪音さんが心配する事ないですよ」

冗談めいて応えたが、それが嘘だという事はすぐに察せられた。先ほど恋次自身が言っていたではないか、ルキアはすでに覚悟を決めているのだ、と。

「……そんなの、無いよ」

雪音は呟いた。そんなの、無い。ルキアが死ぬなんて、そんな事、嫌だ。

「……雪音さん？」

様子がおかしい事を訝つてか、恋次が顔を覗き込んできた。雪音はそれを睨み返し、

「朽木さんが死ぬなんて、絶対駄目だよ。あたし、総隊長のところ行つてくる。総隊長ならもしかしたら、裁定も覆せるかもしれないから」

「えつ、雪音さん！」

驚いて目を瞬く恋次を置いて、隊長室を飛び出した。

『海燕の身体は完全に虚に乗つ取られて、救いようが無かつた。最後は、斬つたよ』

『……！』

淡々とした浮竹の言葉は、かえつて生々しいほどに現実を突きつけてきた。目の前が一瞬白くなり、眩暈がする。

『鑑原、大丈夫か？』

がくつと足元から崩れそうになつたのを、浮竹が支えてくれた。しかし身体に触れた手は驚くほど冷たく、まるで死人のようだつた。

『海燕、副隊長は……どこへ……？』

掴まれた腕からじわじわ広がつていいく、冷たい感触に震えながら問う。浮竹は、まるで苦痛に耐えるように顔をしかめて囁いた。

『……朽木が、家に連れて帰つた』

* * *

カンツ、と杖が床を叩く。静まり返つた総隊長室の中、その音は思わずびくりとしてしまつほど、大きく響き渡つた。萎縮して肩をすくめる雪音の前に立つた山本は、細い手をつりすら開き、

「ならん」

ただ一言で、雪音の嘆願を切り捨てた。

「！ どうしてですか！」

すがるように叫んだが、山本は顔色一つ変えず、あごひげをしげいた。

「一度下つた裁定は、例え隊長格が異議を唱えようと、覆されぬ。そのくらい、お主も分かつておろつ」

「で、ですが……死神能力の譲渡は重罪です。でも極刑に値するほどの罪では無いでしょう。ましてや、罪人は四大貴族・朽木家の方なのだから、減刑を請われたはずでは？」

「それは無い」

「え……」

「四大貴族の者であるうと、罪は罪。しかるべき罰を受ける事に異存なし、と朽木家当主も申しておる」

「どう、しゅつて……」

雪音は今度こそ絶句した。朽木家の現当主といえば、ルキアの義兄・朽木百哉その人ではないか。

（ど……どうして！ 何で、妹を助けてあげないの？！）

朽木家の兄妹仲がどうかは知らないが、ルキアは百哉に請われて、朽木家に入ったと聞いている。

大貴族の朽木家に、流魂街の平民を入れる事、それは雪音が卯ノ花家に入った事よりも、更に困難なことだつたろうと思つ。そうまでして迎えた義妹を、なぜ見捨てるのだろう。

理解が出来ない。腹立たしい。そんな思いで、きつくな拳を握り締めて俯いていると、山本が問うた。

「雪音。朽木ルキアは、お主の友か？」

「……知り合いです」

友というほど、近しく付き合つた事はない。山本は眉を上げて、「では、どうしてそこまで朽木ルキアにこだわる。単なる知り合いにしては、思い入れが強いように見受けられるが」

恋次にも言われた事だ。ルキアとは仲が良かつた訳でもないから、総隊長にまで減刑を請うほど必死になるのは一見奇異に見えるかもしれない。だが、こだわる理由なら、存在する。

「朽木さん、は……」

雪音は一度ぐつと奥歯をかみ締め、それから顔を上げた。

「朽木さんは、海燕副隊長の最期を看取つてくれた人だからです。

海燕副隊長が家に帰る事が出来たのは、朽木さんのお陰でした。

私は、海燕副隊長を尊敬していましたから、虚に乗つ取られるような悲惨な状態になりながらも、せめて最期は人として、家族の元へ戻れた事が、何よりも嬉しかったんです」

名を口にするだけで、あの時の情景が目に浮かんで、涙が出そうになる。

横たわる都、訃報を告げる浮竹の顔。風にはためく隊葬の旗。「……私は、嫌なんです。もう、知っている人が亡くなるのを見るのは、

きつうまぶたを閉じ、震える声で言つ。ルキアが処刑される様を、その後、彼女が居たはずの場所が完全な空白になつてしまつ事を思うと、恐ろしくて悲しくて、苦しかった。

「……左様か」

山本は聞き取りにくいほど低い声で囁いた。目を開いた時、しかし山本の目には鋭利な光が浮かび、じつと雪音を見据えている。

「お主が人の死を恐れる気持ちは、よう分かる。じゃが、朽木ルキアの極刑は既に決定事項なのじゃ。隊員一人の感傷的な請願で曲がる法は無い」

「お……お爺様！」

最後通告だ。ぞつとして裏返つた声を上げた雪音に、山本は羽織を翻して背を向けた。

「職務へ戻れ、鑑原五席。話は終わりじゃ」

* * *

総隊長室を辞去した雪音は、黙々と廊下を歩いていった。自分でどこへ向かっているのか分からぬまま、ただ規則的に足を動かしていると、徐々に視界がゆがみ始める。

「……また」

雪音はぐいっと天井を見上げた。じぱれそつになるしじすべをこじら
えながら、呻く。

「また、何も出来ない」

人の命が失われようとしているのに、また何も出来ない。無力す
ぎる自分を思い知らされて、息が詰まりそうになる。

悔しい。悲しい。歯がゆい。

その思いが身体を駆け巡って、四肢の力を奪つていくように思え
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7565f/>

十一、四 (BLEACH)

2011年10月10日03時18分発行